THE CENTRAL REVIEW

中央公論

六月號

第三十一年第六號 第三百三十一號



最大の幸福は腦を患はぬ人!!
島村博士證明
健腦丸
腦病良藥
KENNOGWAN
主効
腦充血 腦貧血 腦膜炎 卒中 逆上症 鬱憂 神經痛 頭痛 眩暈 便秘 健忘 癲癇
特長
本劑を少量宛常用せば逆上を引下げ便通を快し恐る可き腦充血を快治し中風卒中を未發に防ぎ記憶力の増進を促す特効あり
價
一日半分 二十錢
半週分 四十錢
一週分 七十錢
二週分 一圓卅錢
五週分 二圓六十錢
十週分 五圓
本舗 丹平商會藥房
大阪 東京
全國海外信用藥店ニ販賣セリ
腦を患はぬ人、健腦丸服む人!!

哲學叢書

文學士 安倍能成著

西洋古代中世哲學史

（第五編）

新刊

四六判四百頁

定價壹圓廿錢送料内地八錢

近代思想の眞知識はその淵源に溯るによつて始めて庶幾すべし。古代中世の思想を知らずして、豈近代思想を知れりといはんや。本者は最新の權威ある研究を基礎として平易明快の叙述になる者、邦文哲學史の世に出づる者多しといへども、本書はその中にありて、優に獨自の位置を占め得ることを信ず。在來の哲學史を讀みし人も讀まざる人も一本を備へて恐らく悔ゆる所なからん。

◎哲學叢書既刊書◎

第一編 紀平正美著 認識論（第五版）

第二編 田邊元著 最近の自然科學（第四版）

第三編 宮本和吉著 哲學概論（第四版）

第四編 速水滉著 論理學（第五版）

發行所 東京神田南神保町 岩波書店 電話本局五四二〇番 振替東京二六二四〇番

東京帝國大學文科大學講師 文學士 紀平正美著

新刊 哲學概論

菊判五百七十六頁 定價貳圓五十錢送料十二錢

著者曩に認識論を著して湧くが如き思想界の歡迎を得たり。今やその五版を重ねんとするに當りて、新にその心血を傾けたる哲學概論を公にせんとす。本書は世間多數の類書の如く、哲學の骸骨を羅列する者にあらずして、實に著者が全人格の流露たる力の哲學の宣傳たり。就中その理想論の如き光焔萬丈意氣最も昂れり。正にこれヘーゲルの理によつてショーペンハウエルの意志を照破する者、天下の生ける哲學に接せんとする士、願くは來つて本書につけ。

◎岩波書店刊行書目◎

法學士 藤井 武著	[illegible]生	(新刊)	五拾五錢
文學士 田村寛貞著	リヒアルト・ワークナー	(既刊)	三圓八十錢
理學士 田邊尚雄著	西洋音樂講話	(既刊)	一圓三十錢
夏目漱石著	小說 道草	(三版)	一圓五十錢
夏目漱石著	小品集 硝子戸の中	(五版)	六十錢
夏目漱石著	小說 こゝろ	(四版)	一圓五十錢
文學士 阿部次郎著	第三太郎の日記	(三版)	一圓三十錢
故文學士 魚住影雄著	折蘆遺稿	(既刊)	實價貳圓

發行所 東京神田南神保町 岩波書店 電話本局五四二〇番 振替東京二六二四〇番

法學博士 花井卓藏氏序

ドクトルメヂチーネ 羽太銳治
日本犯罪學會々員 澤田順次郎 共著

最新刊

最近犯罪の研究

本書は著者が得意の性慾上、文藝上、法醫學上、心理學及教育上等より蘊蓄を竭して成せる快著にして最近に渉り新聞紙に現はれたる實例を蒐め剖判眞に精細を極めたる未曾有の大文字なり。就中花井博士が三十二枚に亘る長文の序言を寄せて激賞せる婦人犯罪不良少年犯罪の二項の如き、その最も時機を得たる點に於て其戰慄すべき犯罪を根本的解剖、究明せる點に於て警務家、教育家及家庭の好資料なるのみならず、何人も三嘆措く能はざる處ならん。蓋し複雜なる社會及人間性を眞によく了解せざるべからざる創作家、文藝鑑賞家、教育家、爲政家、操觚家其他一切の社會事業に參ずるの士必讀の文字なり敢て廣く江湖にすゝむ。

四六大判最上製
總ポイント活字
定價一圓三十錢
郵送料八錢

大住嘯風氏著

自由思想史

本書は現日本思想界の巨星大住氏が蘊蓄を披瀝して遠くギリシャの古代より近代に涉れるあらゆる自由思想家。大哲學者、大宗教家著苟しくも永遠の自由と精神的解放を求めて苦慘なる爭鬪を續けたる巨人の跡を辿り系統を追ふて最も適切剴切なる解明を施せるもの以つて本邦未曾有の系統的哲學研究書とも唱ふべく唯一至高の哲學史とも見るを得べし、敢て系統的哲學の智識と基本的思想の根柢を覓むるの士に薦む。

總クロース箱入
特製頗美本
定價一圓廿錢
郵送料八錢

東京市牛込區神樂町二丁目二十二番地　**天弦堂書房**　振替口座東京二九五五九番

カーペンター著　三浦關造譯

最新刊

生に徹する藝術

古今の永き歴史の中より先づホイツトマンの詩とワグネルの音樂とミレーの畫を選み來りて之が藝術觀を極めて徹底せる筆を以て評論し殊に此の三人が殆んど時代を同うして出で其の藝術觀の酷似から民主主義思想に及びて心地よき月旦を爲し、第二の天使の翼に於て希臘の藝術を引用し近代の思想を引きて藝術的生活を述べ更にレアリズム論及び「人體と藝術との關係」に就き先人未發の快論を試み稀有の天才ベトーベンを評せる邊りは文章思想共に高潮に達し最も力ある筆致と觀察力を示したり近代の好評として推すべし。（中央新聞評）

價壹圓貳拾錢　郵税八錢

最高美術品寫眞十數枚樂譜三十餘挿入

六月上旬發賣

岡田播陽著

明けむとする夜の叫び

これ眞に人心にあけむとする夜の叫び！

價未定

發行所　東京本郷元町二の四七　更新文學社　振替東京二四〇二七番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

五月十日發行

最新版

四百餘州の運命ハ實に暗憺たり隣邦の消長はやがて我日本國の消長也されば一日も早く支那を研究し支那に親しむは我國人刻下の最大要務也吾等は幸にして今茲に支那通諸大家の精細なる專門的新研究を網羅せる世界無比の快著を得たり吾人は支那憂國の志士と本書を携えて亞細亞民族の發展と其の繁榮とを計らればならぬ!!!

部數ニ限アリ至急申込アレ

專門廿餘大家の實證的大研究

支那の現在と未來

支那研究

菊判美裝全一冊　紙數五百頁　正價壹圓　（郵稅八錢）

〔內容〕

- □今日の支那　編輯同人
- ■支那の未來　支那名士　張繼
- □支那の政治　文學博士　內藤虎次郎
- ■支那の法制　參謀本部囑託　稻葉岩吉
- □支那の經濟　高等商業學校講師　根岸佶
- ■支那の地理　理學博士　山崎直方
- □支那哲學精髓　大學助教授　宇野哲人
- ■支那の人種　文學博士　鳥居龍藏
- □支那の史的觀察　文學博士　市村瓚次郎
- ■支那の外交　法學博士　寺尾亨
- □支那の教育　文學士　橫山健堂
- ■支那の陸軍　陸軍中佐　齋藤恒
- □支那の海軍　海軍中佐　八角三郎
- ■支那文學概觀　東洋大學教授　古城貞吉
- □支那の動植物　東京高等師範學校教授　矢部吉禎
- □支那國民性　文學博士　桑原隲藏
- ■支那の通商　農商務省商工課長　鶴見佐吉雄
- □支那利權競爭　高等商業學校講師　根岸佶
- ■滿蒙の利源　三等主計正　旭藤一郎
- □支那觀　善隣書院長　宮島大八
- ■支那の時局觀　同文書院長　根津一
- □對支外交問題　國民黨總理　犬養毅
- ■所感　朝野の諸名士

東京神田區鈴木町十六

同文館雜誌部

電話本局一五三九番　振替東京三一六七七

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

法學博士 吉野作造先生新著

歐洲戰局の現在及將來

（定價一圓三十錢 郵税八錢 菊判總クロース金文字入）

最新刊

製本出來

新進篤學の學者、東京帝國大學法科大學教授、法學博士吉野作造先生は、其高雅なる品性と深遠なる學殖とを以て、今や學生間に於ける欽慕崇拜の焦點たり。其一度出でゝ、時事を論ずるや、卓拔の識、透徹の論、識者をして驚倒せしむ。博士茲に世界の懸案たる歐洲戰局の現在及將來を議す、觀察的確、快論縱横、刻下必讀の名著！

好評如溢

內容

歐洲政局の急轉：歐洲戰局の豫想：國際競爭場裡に於ける最後の勝利：戰後に於ける歐洲の新形勢 戰後に於ける歐洲の社會：戰後歐洲の趨勢と日本の態度：歐洲戰局の將來：露西亞の敗戰：日露同盟論：米獨關係の緊張：戰局巴爾幹に擴がる：現戰爭の二大特色：歐洲戰局と波蘭民族の將來 羅馬法皇の媾和運動：猶逸の國民性 佛白の國情其他。

▲第三版 法學博士 吉野作造先生著（定價一圓三十 税十二錢）

現代の政治

▲第五版 法學博士 河上肇先生著（定價一圓稅八 四六總巾）

祖國を顧みて

東京市京橋區南紺屋町十二番地

實業之日本社出版部

振替口座東京三二六番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目每に契約者に分配す
一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす
一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電話長本局一八五六、五一五〇、一二八七番
振替貯金口座東京一七一七番
支店 大阪市東區本町一ノ一二三(電長本局三三一一番

一 當會社は低利なる金融機關の設あり
一 當會社は被保險者の年齢範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す
一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第卅一年六月號目次

▲公論

▲說苑



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

MAURICE DENIS



THE ORCHESTRA

日とのみ競ふ

マツダランプ



■……五拾燭光迄長型壹個金五拾錢……■

東京電氣株式會社

神奈川縣川崎

電話川崎五〇番一〇一番一〇二番一〇三番一〇四番

販賣部

東京出張所　東京市京橋區銀座尾張町一丁目　電話新橋一九三・三二一二　長一〇五九

横濱出張所　横濱市伊勢佐木町一丁目　電話長濱一七一一

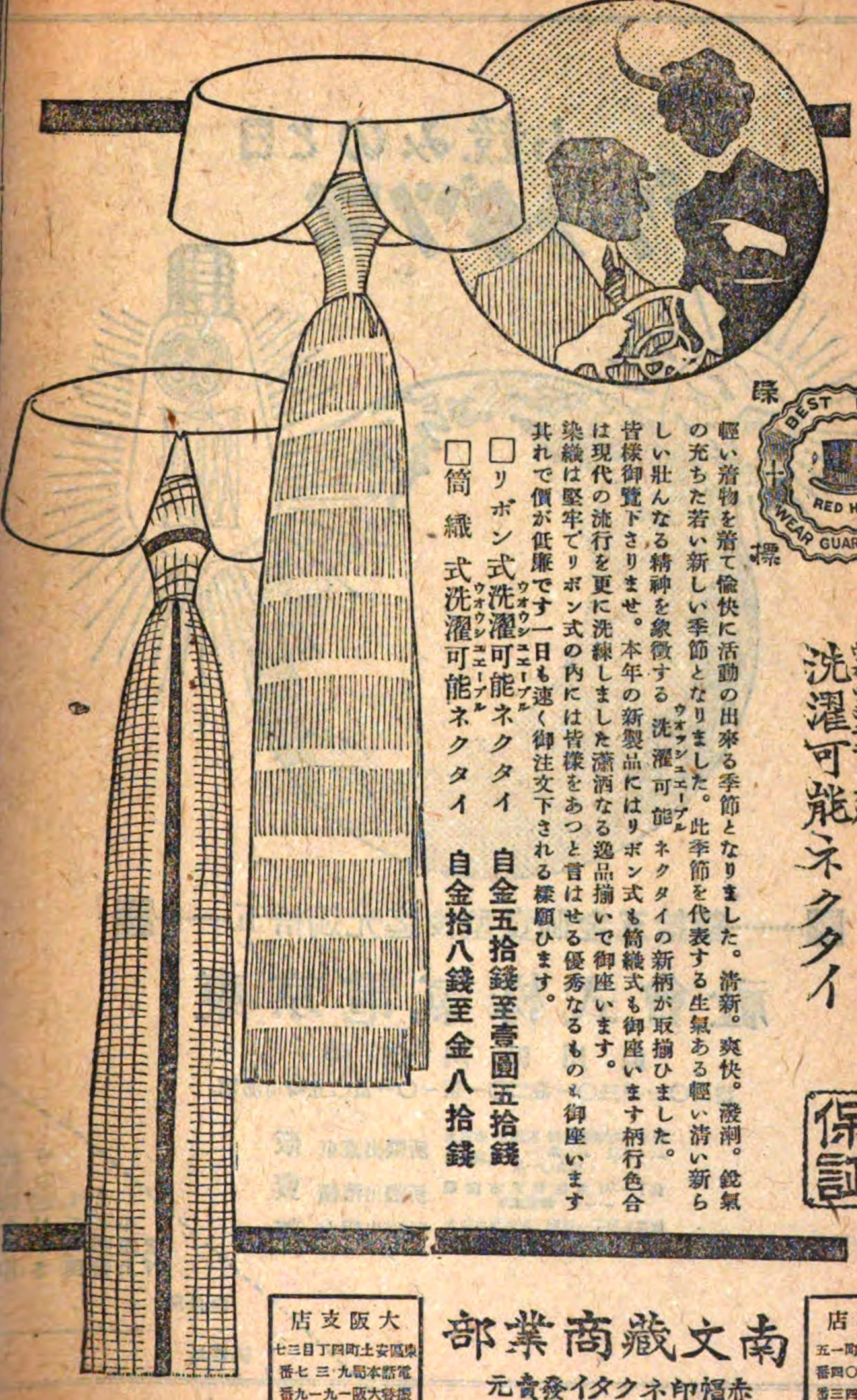
大阪出張所　大阪市西區土佐堀通一丁目五番地　電話長西一〇九五

御照會の節は此點線より切取りお送り下されば詳細なる說明書を差上ます

御住所

御姓名

（前付二の一）



（前付二の二）

中央公論



六月號
第卅一年第六號
第三百三十一號

歐洲戰局を大觀す

（上）獨軍已に優勢の絶頂に達す

開戰以來一年と十月を閲みし獨軍の向ふ所勝たざるなく、其戰線は西は佛國東北各州より東は露國本部に及び、更に東南に於ては巴爾幹を越へ遠く黄金角頭の君府に達し、以て眞に列强を慴服せしむるに足るが如きも、最後にヴエルダンの大攻擊を開始してより三たび月を閲みし兵を損する三十餘萬人に及ふも未だ本城の一角をだに拔くに至らず、獨軍の意氣や毫も衰へざるが如きも、靜かに大局を觀れば流石の獨逸も其努力の限度に達し其精鋭亦た漸く消耗せんとするものの如く、此際卻て聯合諸國は結合益々鞏固にして其兵力亦た愈々充實せんとするが如し、嗚呼獨軍の優勢も終に其絶頂に達したるか。

想ふに英佛露と云はず獨墺と云はず孰れの當局も戰局の長きと損害の多大なるに對しては心竊に後悔の念なき能はざるべく、殊に獨逸は其前例に照らし最意外の感なきことを得ざるべし、一八六五年の丁抹の役は實際の戰爭二三日を過ぎずして、獨逸側の死傷亦言ふに足らず、一八六六年の墺國との戰爭は稱して七週間戰爭と云ふも實際は八日間の戰爭を以て結了し獨軍の死傷二萬七千五十四人のみ、有名なる一八七〇年の獨佛戰爭すらザールブルケンの戰よりセダンに至る迄滿一箇月を費やせる耳にして大勢全く一定し獨軍の損失十二萬九千六百十人に過ぎず、然るに今次の戰爭は大に豫定に反し其死傷の已に三百餘萬人の多きに及べる耳ならず、始め約三週間にして巴里を陷落し一擧に佛國の主軍をミューズ河方面に包圍し第二の更に偉大なるセダン陷落を演出し、佛國をしして勢屈して單獨媾和を乞ふの止むなきに至らしめ、是より一轉して全力を露國方面に傾倒し墺軍と協同して大攻戰を開始し一氣呵成に聖彼得聖城下の盟を强ゆべく期待せし者の如し、即ち前回の獨佛戰の如く一箇月を以て戰局を一定すべからずとするも、三箇月以上を要することなしと豫定したるや殆んど疑を容れず、是れ近年定められし獨逸參謀本部の策戰計畫なり、蓋し老モルトケ將軍の在世中、此公と謀り、露佛を敵とする場合を假定して策戰計畫を一定し置けるは隱れなき事實にして、此計畫に由れば當初佛國に對してはメッツ、ストラスブルグの堅城に依賴し、殊に佛軍の侵入に備ふるはアルサース方面の出兵に止め、先づ獨軍の全力を擧げて露國を攻擊し之に致命傷を與へて後ち直に轉じて佛國方面に向はんとするものにして、是れぞ兩雄が英國の向背を意とし白耳義の中止侵害を敢てするを欲せざりし深謀遠慮に出づるものと知られたり、老モルトケ沒し此公逝きて後ち、現皇帝は輕卒にも先輩の遺策を放棄し、亂暴にも白耳義を通過して北

佛の殆んど防禦なき方面に突出するの策を採用せり、蓋し是れ帝及帝の左右が白國及び英國を輕侮したるの結果にして、彼等思へらく寧ろ白耳義の中立を侵害するも疾風迅雷、一たび北佛の野に出でて巴里を攻落せば英國が未だ戈を執り起つの遑あらざるに先ち戰局を一定すべく、事已に成る英國も亦た遂に口を噤んで止むべしと、蓋し若しも白耳義にして果して彼が如き頑强の抵抗を試みることなかりせば獨逸參謀本部の計畫は或は首尾よく推行し得られたりしやも知る可らず、然れども窮鼠却て猫を嚙む、獨軍は其侮蔑したる小白耳義に通路を遮斷せられ、未だ佛境に達せずして已に三週間の期を經過し、此間英國は數個師團の兵を送るの餘裕を得たる耳ならず、佛國に於ても東北の防備を充たすの機會を得たりき、即ち白耳義を侮り英國を輕んじたるは是れ獨逸の最大遺算にして、是ありしが爲めに巴里の攻城に用ゆべく祕密裡に用意し置ける四十二珊巨砲も先づ之をリエージュに於て用ひ以て其奧の手を世間に爆露するに至りしなり、斯くて開戰後一月の後に北佛の野に現はれし獨軍は巴里攻擊の機を逸し、佛英聯合軍が南を指して退却するや益々之を侮り追跡してマルン河に臨み玆に聯合軍の側面轉回を試みんとするに際し、突如として巴里要塞の間より一團の佛軍現出して直に獨軍の背面を衝かんせしめば、流石の獨軍も乍ち大狼狽をなして退却し改めて防禦陣地を構へて當初の策戰を一變するに至れり（一九一四年九月六日—十日）、斯くてカイゼル及び左右の謀臣等が猥りに先輩の神算鬼謀を改竄したるに對する刑罰は覿面に現はれたりと云ふべきなり、爾來獨軍は到る處獅子奮迅の勢を以て勝ち、ガリシヤ、ポーランドより露軍を掃蕩し、巴爾幹方面に於ては勃牙利と聯合して塞爾維黒山國を蹂躙し、更に最近ヴェルダンの攻擊に移り其大膽不敵の猛襲は鬼神を欺くの概ありと雖も、聯合諸國は中間伊太利の加盟を得、且つ

其結合益々鞏固なるものあり、英國の如き遂に强制的徴兵法を布き以て最後の覺悟を定めたる耳ならず、獨逸の勢援も到底君府以東には及はず高加索の露軍は着々功を收めてエルゼルム、トレビゾンドを奪ひ、バグダッタの北方より小亞細亞の背後を威脅するに至れり、東境の露軍亦た漸く頽勢を挽回して將に攻勢に轉せんとするあり、殊に西方の戰線に於て佛軍は次第に精鋭を加へてヴエルダンを初め一般の守備益々堅固なり、若しも戰局の現狀に就きて觀れば獨逸は白耳義の殆んど全部を包有し佛國の東北諸州の一部を占領し、波蘭を略取し、巴爾幹を風靡すと雖も、英佛海軍封鎖の効驗は漸く著るしく、潛航艇の殘忍なる蠻行よりする威迫亦た米國最後の抗議に屈して其跡を絕たんとす、是と同時に國內糧食の不足は家庭を守る婦女老幼の間に漸く不平を醞釀し到る處の市府に暴動あり、爲めに獨逸政府の柱石たりし內相デリユンブリユヒは責を引きて辭職して別に糧食省の新設ありしを傳ふ、斯くて各種の事情より發する平和の懇求は近時次第に聲を高めんとするに似たり、即ち羅馬法王、西班牙王、米國大統領を煩はして調停の勞を託せんとする獨逸政府側の秘密運動頗る盛なりと云ふもの一概に無根の風說として聞棄てにす可らず。

然らは則ち今日の場合媾和の議容易に成立すべきかと云ふに、容易に成立すべしとは思はれず、蓋し媾和を希望するは多く戰に勝てる獨墺にして、戰敗者の觀ある英佛露白は卻て平和を希望せずして曰く我等は是れ迄多くの戰場に不利を招けるも毫も勢屈せるに非ずと、聯合各國の兵は近來に至り益々精鋭を加へ、人民は負擔の重きに苦しむも糧食の不足を訴ふるに至らず、獨逸に困憊の徵候あるを見れは聯合諸國の團結は卻つて益々固く、其勇氣愈々盛んならんとす、殊に今の媾和は大に獨墺に利にして聯合

諸國に不利なる一事は其決心を堅からしむる主たる動機をなせり、試みに現在の政局を基礎として講和談判の成立する場合を想像せんに、獨逸は開戰の當初に期待せし程の成功を收め能はざるは勿論なれども、佛國に於ける占領地を返還するの代償として多大の償金を要求し、之に由り戰時財政の整理を行ふべき外、白耳義に對しては名義上獨立を回復せしむると共に事實上之を半屬國の位置に立たしむるの方法を講ずべく、波蘭士は之を露國より奪ひ他の舊波蘭領を合して波蘭王國を再興し之を獨逸系君主の下に置き、巴爾幹半島に於ては獨の忠僕たる勃牙利を盟主として羅馬尼、希臘、土耳古を糾合し、之に對して事實上宗主權を握り以て露國の勢力を半島より一掃すべく、而して墺國に對しては其の塞爾維國、黑山國を併合するを許すと同時に從來の政治同盟に加ふるに軍事及ひ財政の同盟を以てすべきは疑を容れず、即ち墺國陸軍は事實上伯林參謀部の節度を奉するに至りて乍ち其實力は從來に比して幾層倍の精鋭を加ふべく、殊に獨墺間に關税同盟の成立するに至らば墺の未製品と獨の精製品と自由に交換せられ、且つ獨の資本と組織的智能を墺匈國に輸入して農工業の發達を謀るに至らば是迄で獨逸の進歩に對して後るゝこと二十年と云はるゝ墺國、四十年と云はるゝ匈牙利（匈國にては耕地一エークルに對し得る處の收獲は僅に獨逸の半額に過ぎず）は乍ち面目を一新すべく、毎年兩國より生活に苦みて外國に移住する幾十萬人は今後本國に留りて其富强に資するに至らんこと想像に難しとせず、勢如斯きに至らば和蘭の如き、丁抹の如きも亦た獨逸系統外に立つこと能はざるべきは識者を待たずして知るべく、殊に和蘭は强ゐて獨逸聯邦中に加盟するを餘儀せらるゝに至るべく、斯くて獨逸の覇權は西北は白耳義、和蘭より東南は巴爾幹、小亞細亞及ひメソポタミヤを經て波斯灣に及び、北はスカーゲル・ラックの海峽より

南はトリエスト、サロニカに及び、其東境は露領波蘭を包有してブレストリトウスク線に達すべく、其面積に於ては優に英、佛、西班牙及歐洲露細亞に比敵すべく、其人口に於て一億五千萬の多きに及ぶべく且つ中歐に割據して巨大の集團をなす地理上の大有利ある耳ならず此の各種民族の上加ふるに獨逸式の訓練を以てし此地域内に藏する富源を開發するに最新の學術を以てするに於ては假令英、佛、露、伊聯合の勢力を以て之に當るも歐洲均勢を保持するの至難なるべきは察するに餘りあり、加ふるに獨逸の海外殖民地の一半は少なくとも之を取戻す耳ならず、新たる和蘭、白耳義の殖民地は事實上獨逸の有に歸することとなるべきなり、若しも斯の如き結果を見ることにも至らば今次の戰爭により獨帝は其當初期待せし程の目的を遂ぐる能はずとするも少なくとも、其一半を遂げ、近き將來に更に其全部を遂ぐべき好個の地歩を占得せるものと謂はざる可らず、若しも更に獨帝に假する十年の歳月を以てせんか、其の陸軍の巨大精鋭なる以て優に世界に號令するの慨あるべき耳ならず、海軍擴張に於て遂に英國を凌駕するに至らんも亦た未た知る可らず、是れ則ち獨逸が今日已に占め得たる地歩に立ちて媾和を希望し、盛に隱密の籌謀を廻せる所以なり、世人往々にして獨逸の媾和希望を疑ふものあり、曰く獨逸は恐らくは平和を切に希望する程に未た窮迫せずと、蓋し其窮迫の程度の未だその極點に達せざるは如何にも論者の云へるが如くならんも、今や方さに幸運の絕頂に立ち是より一歩を進め一日を加ふる毎に戰局不利に陷るべき危險に近づかんとす、即ち媾和を一日繰上れば一日の利ありと云ふべく、獨逸政府が表面大に餘裕を示して内心媾和を急ぐの情寧ろ憐む可らずや。

要するに獨逸が媾和を切望すと云へる近時の報道に幾許の信を置くかと云ふの問題は最近に獨逸が

エルダン攻撃を開始せる意義如何と云ふに歸す、前段已でに云へる如く二月廿日より五月に入り殆んど一百日に垂んとする長期に亘り前代未聞の猛襲を此要塞に加へ來れるもの果して大局に對する策戰上如何に多大の犧牲を拂ふも此要塞を陷落するの必要ありと爲すに由るか、四月末に報道せられし所に由れば今次の攻撃開始以來獨逸の死傷已に二十餘萬人に達せりと云ふを以て推測せば、是より愈々本防禦線の攻撃に取懸り尙ほ數月の後遂に能く其目的を達し得べしとすれば少なくとも更に二十萬人の死傷者を出すを覺悟せざる可らざるは睹易きの道理なり、純然たる大局に對する策戰上ヴエルダンは果して斯の如き莫大な代價を拂ふべき價値あるか、素より比較的容易に之を陷落せしめ得べしとせば戰略上其影響の有利なるは言を待たざる處なれとも、其既に今日迄に經驗せるが如く至難にして殆んど不可能と思惟せらるに對し、獨逸が尙ほ其目的を固執するを見て、我邦の戰略家中には獨逸參謀本部の眞の目的を以てヴエルダンを陷落せんとするよりも、寧ろ此方面に佛軍の主力を牽制集引して他の方面に於ける敵の戰線の虛を狙ひ之を突破せんとするに在りと觀察するものあるが如し、卽ち若しも佛國總司令部がヴエルダンを支持せんが爲めにランス、スワソン方面の守備を怠ることもあらば乍ち其虛に乘じて此方面を突破して英軍と佛軍を中斷し進んで巴里を衝くべく、今其機會を狙ひつゝありと云ふの說是れなり、然れども吾人は此種の觀察に同意すること能はず、是れ蓋し一派の獨逸心醉家の觀測にして、彼等は獨逸が必ず最終の勝者たるべきを信し、其信念已に凝定して大勢の移動を看取するの眼力なきものなり、吾人の觀る所を以てすれば獨逸は昨春に至り已に白耳義の殆んど全部を占領し又佛國東北諸州の要所に據るに關はらず、其戰線より一大部分の兵力を割きて露境に移し該方面の大運動を開始せし時已に佛國攻

略の目的を放棄せりと謂はざる可らず、何となれば若し巴里を陷落すべくは戰期の始めに於てすべし、已に始に於てさへ之を拔くこと困難ならば半年又一年の後に至らば更に幾層の困難を加ふ可ればなり、爾後大に露境に、巴爾幹に勝ちしも畢竟露をして單獨媾和を爲さしめんとするに外ならず、故に今後聯合諸國が能く團結を堅固にし最後迄支持するを得ば獨逸が如何に部分的勝利に誇り得るも遂に屆するの時來るべきは數の免れざる所なり、想ふに現在のカイゼルの位置は恰も莫斯科に於けるナポレオンの狀況と髣髴たり、莫斯科大火に係る佛軍糧食に困じ又た懸軍萬里降雪に苦められて兵力の補充に窮したるは以て獨逸が海上封鎖の爲め漸く糧食の不足に苦しみ又た開戰以來三百萬人に近き精兵を損失して將に其補充の方なきに窮せるに比較すべく、聯合諸國が能く其意思の疏通を謀りて單獨媾和を爲さゞるべきを盟へるは歷山帝が牢乎として那翁の切なる平和提議に耳を傾けざりしに比較すべく、而して最後の運命豈亦た略ぼ同一ならざるを得んや。

吾人の觀る所を以てすれば獨帝が最近にヴェルダン攻擊を企てたるは一種の威嚇を目的となすものにして、此要塞の陷落に由り佛國攻略の當初の志を貫徹せんと欲するには非ず、即ちヴェルダンにして一たび陷落せば敵味方の人心に一種の演劇的大感動を與ふべく必ずや以て媾和の動機を作るに足らんと豫期するならん、然れども是れナポレオン帝が莫斯科一たび陷落せば露國は必ず降服すべしと豫期せしと一般にして、萬一にもヴェルダンの金城湯池遂に獨軍の有に歸するあらんも、聯合軍は之に驚きて媾和を提議することなかるべく、寧ろ此堅城に引懸りて四、五十萬の精兵を失ひし獨逸こそ從前に比し却て與みし易しと思惟するに至るべきなり、然れどもヴェルダンは容易に陷落すべしとは見えず、獨軍が今

次の大攻擊に從事すること已に三月の久しきに及べるは事實なるも、久しく攻擊せられしとて必ずしも不利とならず、若し夫旅順に對する日本軍の如く之を全然包圍して糧食、兵器、人員補充の途を杜絕せる場合に於ては其包圍の久しきに從ひ敵の防禦力は衰弱の一方に傾くべきも、ヴエルダンは全然之と形勢を異にす、獨軍の攻擊を受くる方面は東方のドオーン、ヴオーより西北のマース河西岸三〇四高地に及べる防禦線にして、要塞全防禦線の一半に亘るに過ぎずして、其他の部分は全然佛國內地に向け開放せられ糧食、兵器、人員の補充は殆んど之を無盡藏に受くるを得べく、却て不利は攻勢を取れる爲め每に惡戰苦鬪を餘儀なくせしめられ莫大の人員の損失を招ける獨逸軍に歸するの點多し、尤も開戰當初の如く佛軍の方重砲、彈藥の準備に於て大に獨軍に對し遜色ある場合ならんには佛軍の不利に歸すべき點あるを認むべきも、兵器の不備は既に十二分に補充せられ、假令獨軍が四十二珊砲を攻擊に用ゐんとするも、佛軍に在りては之が据付を妨げ得べき砲力を有する耳ならず、佛砲の精銳は總ての點に於て獨軍に抵抗して遜色なきことと疑ふ可らず、獨軍にして眞にヴエルダンを拔くことを以て戰略上必要事となしたらんには開戰の初め佛の準備今日の如く完全ならざるに際し其全力を玆に傾倒すべかりしなり、素より初めより皇太子統率の大軍此方面の攻擊に從事し頗る力を致さゞるに非ざりしも、獨軍の主力を傾倒すと云ふには非ず、卻て中間西邊の戰線より多數の兵を東邊に移して攻勢力を緩ふせしとさへありて、開戰より一年十箇月後に至り佛軍の防禦準備完成の後に至りて陷落を期して惡戰苦鬪すと云ふに至りては吾人は獨帝が今日果して大體の戰局に決定的解決を與ふるを目的として作戰を指揮し居れるやを疑はざるを得ず、寧ろヴエルダン攻擊の如き之を陷落して以て媾和促進の動機を作り又は國內人心の不穩なる

に對し一時的鎭撫の効あらしめんと欲するに非ざるなきか、而かもヴェルダンは果してカイゼルの注文通り陷落すべきや否や是已に大疑問なる耳ならず、假りに陷落すべしとするも平和促進の動機たり得べきや否や是又た疑問たらずんばあらず。

(下)　獨軍漸く悲運に向はん

今日迄の戰局に於て獨逸軍國主義の長所が十分に發揮せられしが如く今後戰局の推移は蓋し軍國主義の短所缺所を暴露せんとするに非ざるなきか、抑も軍國主義とは一國の政治財政及び思想を擧げて强兵の用に供せんとするものにして、强兵は即ち正義なりと云ふに歸す、ナポレオン之を解說して曰く神は最强の軍隊に與みすと、此主義の前には公法なく、條約なく、人道の神聖なく、自國の欲する所は是れ正義にして、列國皆な其節度を奉ずべきものと爲す、斯くて內外に對し亂暴の振舞少なからざるも、兵力の優勢なる間は其無理非道を推通ふすことを得べしと雖も、一たび鼎の輕重を問はるるに至れば其位置の危きこと累卵も啻ならざるべきは睹易きの道理なり、諺に曰く成功ほど成功するものはあらずと、此の理殊に軍國主義に就きて然りとす、想ふに獨逸の國民中に於ても平生よりカイゼルの政策に感服せざるもの少ならざるべしと雖も多くは成功の光輝に眩惑せられて閉息し來れるのみ、然もなくば一種の專門崇拜の熱に浮かされて獨立の見地を占むるを得ざるのみ、カイゼル曰く外交は外交家に一任せよ、政治は官僚に一任せよ、戰爭は軍人に一任せよ、財政は財政家に一任せよ、世界の形勢に關しては御用紙の指導に一任せよ、立國の國是は朕の命を以て上帝の命なりとせよと、而して國民は柔順なること群羊の牧者に從ふが如く唯々として只た命之れ奉ず、斯の如くして獨帝は能く支那先哲の所謂民は之に由

らしむべし之を知らしむ可らずとの教を實行し、憲法治下に一種の獨裁政治を行ふを得たりき、然れども獨逸人民の柔順なる唯だ國威高く外に揚り內、富力充實して生計の潤澤なるに鼓腹する時に限らんのみ、夫の戰爭の犧牲の如き已に三百萬の死傷を出すも、苟も今次の戰爭を以て列强猜疑の餘に挑發されしものと信じ且つ最終の勝利の必ず獨逸に歸すべきを疑はざる期間に於ては寧ろ甘んじて之を忍ぶべしと雖も、一たび開戰事情の眞相曝露するか左もなくば媾和容易に成らずして獨逸の爲め最終の勝利得て望む可らざること明なるに至らば獨逸國民は果して異議なく犧牲に犧牲を加へ拂ふべきや否や、假令兵員は强制せられて戰線に立つべきも其元氣は果して依然旺盛なるを得べきや否や、獨逸の戰時財政の運轉の如き一に最後の勝利を見込み幾百億の償金を獲て以て十分の整理を爲すべく期待せらるゝが如きも、若しも最後の勝利望む可らず償金は却て此方より支拂ふの危險ありと云ふにも至らば流石の柔順なる人民も果して晏如たるを得べきや否や、ツライツケを初め其流を汲むもの常に敎へて曰く英國人民は老朽して亡滅に瀕し佛國人民は墮落して腐敗の極に達せりと、然るに開戰後の狀態は如何、英國海軍の優に獨逸海軍を封鎖して外に出る能はざらしむる耳ならず、陸戰に於ても遂に强制的徵兵法を採用し今や數月を期し數百萬の精鋭をして最後の決勝戰に參加せしめんとす、佛國に至りては開戰以來擧國一致して軍國の事に當り陸軍に於ては無能の將校を陶汰し兵器を充實し、能く久しく防禦戰の困難に忍耐し獨軍の精英漸く亡びたる時期を待ち、英露と策應して最後の攻勢を執らんとするもの決して墮落せる國民の爲し得る處に非ず、是れ實に往古羅馬人の名將フエビアスの統帥の下にハンニバルの常勝軍を待ちしと一流の兵法にして人民擧げて能く國家の危急を解し挺身國難に當るの覺悟あるに非ざれば實行す可

らざるなり、今の獨逸は半世紀前の佛蘭西と地位を轉倒す、七十年の役比公一日佛國小學校に到り歷史の教課書中、當時天主教僧侶の感化を受けて事實を轉倒せる記事多きを見、斯の如く誤謬なる記事を以て養成せられたる國民の敗亡怪むに足らずと慨歎せりとは有名なる逸話なるが、今日の佛國は政教分離して歷史教科書の如き毫も偏僻の記事あらざるも、獨逸國民は都て專門家崇拜に陷りて誤傳謬見に養成せらる、然れども事實は最後の權威なり、獨逸人民如何に其所謂先覺者に誤られたりと雖も戰局今後の開展は必ず彼等の迷妄を覺破することある可し、殊に南方獨逸のバヴアリヤ國の如き、又たサクソニーの如き從來普魯西の軍國主義の指導に服するを屑しとせざりし諸國に於ては蓋し覺醒の日を見る他の各聯邦に比して最も早かるべきか、現に過日の倫敦電報に由れば英國外務次官ロバート・セシル卿は下院の言明に、予はバヴアリヤとサクソニーの二國王が媾和の目的を以て時局に干渉せんとしたりと公式に言明する能はずと云へりと云ふ、即ち暗默の間該二國王が媾和の爲めに事局に干渉せんとしたる事實を認むるものにして、之を干渉と云ふ以上は同じく媾和を急ぎつゝもカイゼルが急ぐとは動機を同ふせす寧ろバ、サ西王の意は獨逸は大に媾和條件に讓歩して聯合諸邦と速に平和克復をなすべしと云ふに非ざるなきか、別語之を云へば是れ獨逸人民が一般にカイゼルの軍國政治に背かんとする警鐘の第一聲に非ざるなきを得んや、想ふにカイゼルの末路はナポレオン帝の末路と稍々趣を同ふし、莫須科より歸還後那翁が尙ほリユツセン、バウトセン、ドレスデン等の戰に勝ち運星の護り頗る厚きが如くなりしも、幾もなくライプチヒの敗戰ありて遂にウォトルーの沒落に及びしが如く、カイゼル亦た是より幾多の戰に勝ち强威を示すとあらんも、最後の幕に至れば內、人心の離反顯然たるに至り軍隊の節制にも影響する

に至らん、現に先般ポツダム離宮の附近社會主義者の示威運動あり引續きて戰線に立てる將校士卒二十餘人銃殺されしことありと云ふを以て見れば不平憤懣の氣漸く國内に鬱勃たらんとするものある察するに足れり、同時に外、精鋭の聯合軍大擧して獨軍を攻擊するに至らば流石の獨逸も終に力盡き勢屈するの日あるべし、但し獨軍の優勢已に其絶頂を過ぎたりとは云へ其力盡き勢屈するまでには尙ほ幾多頑強の奮闘を試むべきも、最後の運命如何に至りては毫も疑を容れず、嗚呼有史以來の大戰爭も今や漸く其其大半の經過を了せりと云ふべく、ヴェルダン攻擊の結果に徵し前途の望愈々的確たるの感あるは以て大に人意を強ふするに至れり、但た今後聯合諸國の團結益々鞏固にして最後の決戰に至るまで堅忍、自重、奮闘し毫も其努力を緩むることなからんことを希望する耳。

支那益々混亂す

前號吾人が支那統治の前途を論じて以來、內亂の形勢に根本の變化なしと雖も、南方諸省と北京政府の中間に介在して時局を調停せんとする南京將軍馮國璋氏の現出は時局に取り一の著るしき開展と云ふを妨げず、之より先き馮將軍は反袁各首領間に在りて同主義者と見做され、竊かに其公々然反袁の旗幟鮮明にして起つべきを期待せられしが、彼に在りては密々北京なる國務總理段祺瑞氏と協議する處あり、又た張勳倪嗣冲諸將軍と會見して時局解決を協定し、南方革命各派の如く袁氏退位を以て根本條件とな

さず、雲貴兩廣獨立四省を暫く除き、他の十五省の代表者を南京に會し、會議公論により袁氏を退位せしむべきや否やを決定すべきことを發案せり、其提案なりとして報導せられし處左の如し、曰く

一、國家存亡を以て第一の問題とす、

二、袁の退位と否とを以て第二の問題とす、

三、若し袁退きて支那存すべくんば退くを主とす、

四、若し袁俄かに退き支那危しとせば暫く退かざるを主とす、

五、若し袁退位を實行すとせは各地の重要手續を如何に辨理せば完全なるか、

六、袁暫く退位せずと主張せば如何なる方法にて南軍と意見の疏通を計るべきか、

右會議の結果として、自然馮國璋氏は其決議を齎らし上海に於て南方の獨立政府、(即ち雲貴兩廣)の代表者と會見して南北間の調停を試むべしと云ふ、馮氏の此最近の主張に付ては世間の解釋一定せず、或は曰く彼は其反袁の意見を抛擲して段總理と同じく支那多數省の公論の形を以て暫く袁氏の留職を謀らんとするなりと、又一說に曰く彼は圓滿に反袁の目的を貫き南北を調停し其結果袁氏の故智に倣ひ自ら支那實權者たらんとするに在りと、吾人は兩說孰れが果して事の眞相を得たるかを知らずと雖も、兎に角馮氏としては頗る利巧の態度を執れるものと謂ふに躊躇せず、何となれば彼の眞意は果して孰れに在りとするも彼は一躍して時局上中心人物となり、南北調和の大任一に繫りて其双肩に在りと思はるゝに至りたればなり、但し南京會議の結果として萬一袁氏留任と云ふに決定し、此決議を齎らして南方代表者と協議の上其同意を得る能はざる時には果して如何の處置を執らんとするか、又た袁氏退位と決したる場合に於て北京政府の之に同意せざる時には如何にして其決議の趣旨を强行せんとする乎、北方にせ

よ南方にせよ十五省會議の決定に服せざるものは兵力を以て之を討つべしと云はゞ頗る要領を得たりと雖も馮將軍に取り其實力なきは言を待たず、又た十五省の代表者なるものが其決議を強行すべき兵備、財力を支配し能はざるも言を待たず、究竟するに南京會議は空論に終り北京の袁派と南方の反袁派の中間に一の鼠色なる五省（兩湖、兩江、安徽）聯合を作るに終らずんば幸ならん。同時に反袁派に於ては唐、岑、梁啓超諸氏を主腦として廣東省肇慶府に獨立政府を形作れるもの丶如く、浙江省、四川省亦た之に加盟すべく豫期せらる、若し此聯合にして果して首尾よく成立すべしとせば福建の如き自然之に加盟せざるを得ざるに至るべく、而して南方の聯合にして若し能く內部の統一を保つを得ば將來侮るべからざる一團を爲すに至らんこと疑を容れず、例の孫逸仙氏の如き已に上海に密行して反袁の氣勢を揚ぐるに大に努力しつゝありと傳へられ、黃興氏亦た已に米國より歸來し大に南方を援助せんとすと云ふも、南方統一を保つの目的の爲めには兩氏の援助なるもの果して利か不利か、所謂船頭多くして船山に上るの結果に終らんとする憂なきか、蓋し孫、黃、岑孰れも相當の人物なれども其間一人の亭然として儕輩を拔くものあらざるは支那政局に取りての一大不幸なり。

　袁世凱氏に至りては閱歷才幹優に支那第一人たり、故に南北を統一し秩序を回復するには彼を除きて他に人なしと思はれしに關はらず、帝政を提議して以來其反對黨たる革命各派に好箇の反對理由を供呈し、今日の亂麻の如き政局を惹起したるは返へす〲の遺憾なり、彼の人格に付ては其餘りに術數に富み誠意を缺けりと云ふは一般の批評なれども、兎に角今代の支那に袁氏の外殆んど別に全國を統治すべき材幹あるものなし、然れども反袁の勢已に彼の如く熾烈なる今日南方の政客を纒めて袁氏の留職に同意せしめんこと殆んど不可能ならんか、而して勢の馳する處支那は當分南北に二分するか又は中部を加

へて三分して、怪げなる秩序の保持を見んとすべきか、孰れにして落着すべき處まで落着する亦た容易のことに非ざるべきなり。

蓋し支那の一大難は財政難なり、南方各派の間に於ては蔡、岑、黄、遜等各五十萬圓乃至百五十萬圓の資金を用意して運動に着手せし如くなれば茲處二三箇月の間は現形勢を維持するに足らんかなれども、一たび政府を組織し軍隊を飼ひ政務を行はんとせば乍ち政費に缺すべきは火を見るより明白なり、殊に北京政府に至りては曩きに米國ヒギンソン會社より三百萬弗借款の前渡し(百萬弗内外)を受けたるが如きも、其他に於ては内亂の爲め各省の貢賦殆んど納らず關稅鹽稅亦た收入甚だしく減少したれば、官吏月給の支拂遲滯すること多く、其國庫空乏の表徵として見るべきは五月十二日國務院令を以て中國、交通兩銀行の兌換劵引換を禁じたることにして、爲めに天津上海漢口等の市場は將に一大凶荒に襲はれんとするに似たり、其外國貿易に影響する少なからずして、列國の干涉を招かずして止むを得べきか、更に山東省に於ける我邦官民に對する暴狀の如き若しも支那側に於て速に前非を謝し將來を戒しむるの擧に出でざるに於ては如何なる程度に迄事件の擴大を見んも計られず、吾人は支那の内亂に乘じて我權利の擴大を謀るが如きを深く戒めざる可らずと雖も我既得權を擁護するに至りては毫も遠慮すべき所以を見ず。

之を要するに前號既に論じたるが如く、今の政局の狀態を以て見れば袁氏の退位は或は早晩免る能はざるべしと雖も、其退位は毫も支那統治を容易ならしめざるべし、卻て局面の紛糾は退位後に於て益々甚しからんとするの恐なき能はず、又た統一至難にして南北分立の形式に移らんとするにも其の間迂餘曲折の變亦た一言にして盡す能はざるものあらん、吾人は排袁を以て一大快擧なりと叫びし世論の淺慮を笑ふと共に、排袁運動の結果乍ち四百餘州を擧げて亂麻の光景を呈せしめんとするを悲む。

公論

滿韓を視察して

法學博士 吉野作造

はしがき

予は此春三月の末から四月の末にかけて、約三週間餘り朝鮮及び滿洲の各一部を視察した。朝鮮視察の主たる目的は、日本の統治に對する朝鮮人の批評を聞くにあつた。予は或る偶然の事から、相當の教養と見識とを有する二三の朝鮮人を知つて居る。此等の人を通して予は、朝鮮に於ける所謂識者、殊に一般朝鮮人民の上に大なる精神的感化力を有する階級の人々の中に、案外に日本の統治を有り難く思はないものがあり、而かも此等の人は容易に其意見を發表もせず、又決して日本人と接觸することをも欲しないといふことを屢々聞いて居る。果して然らば、親しく此等の人々の意見を叩き、誤解あらば其誤解を解き、又其言ふ所に眞理あらば採つて以て我が殖民政策の參考に供し、更に又若し之等朝鮮人の所謂不平の念が其極に達し、危險なる感情的排日思想とでもなつて居るものならば、其等の人々の隱れたる實際の勢力は如何、又之に對して我々の執るべき態度は如何、といふやうなことを研究するのは、我々に取つて

極めて必要であると考へた。勿論此等の事は、常に朝鮮に在住せらるゝ有力なる官民諸氏の常に研究を怠らざるところであるとは思ふけれども、然しながら常にあんまり日本人などに接することを肯ぜざる朝鮮の故老と會見するに就いては、予に多少便宜ありと信じたるが故に、敢て此視察の行程に上つたのである。さて彼の地に到つて、予は某々二三士の好意により十數名の朝鮮紳士を訪問したのであるが、中には面會を謝絶されて全く其目的を達しなかつたのもあるけれども、尚數名の人とは思ふ存分に談話を交換することを得た。大體に於てこの旅行の徒爾に終らざりしことは予の大に喜ぶところである。然し何分時が足りなかつたので、此等の會談によつて或る結論を概括し得るまでの材料を得ることが出來なかつたのは、又止むを得ない。

滿洲視察の目的は、一つには曾て十年以前、彼地に遊びし以後、今日に至るまでの滿洲の發達を概觀することにあつたけれども、も一つは支那の今次の革命運動に關聯しての滿洲の形勢を見んとするにあつた。此方面は道を異にして滿洲に入つた支那の友人某氏と、或る事情の爲めに行を共にすることが出來なかつたので、十分其目的を達することが出來なかつたけれども、滿洲に對してかね〴〵抱いて居つた考を、一層强める丈けの事實を見聞することを得たのは、是亦視察の目的の一半を達し得たものと言つてよい。

今予はこゝに滿韓見聞によつて得たる感想の一二を述べんとするのであるが、之に關係ある事實中、直接に友人知已から聞いた話に付いては、時に或は其人の迷惑になる事實もあると思ふから、其姓名と具體的の細目の事柄を細かに述べるとは概して省略する事にする。且又短日月の間に予の集め得たる貧弱なる材料丈けでは、固より何等の結論に達し得べき筈もないのであるから、之によつて或は朝鮮統治の方針が何うの、滿洲に對する日本

の政策は如何のと、予にそんな大膽な斷定をなすの意の毫頭ないことは豫め御承知を願ひたい。予は只他日更に細かに研究を集めた上で何等か確定の意見を定め得る時までの一備忘錄として、茲に見聞の一端を切れ〳〵に羅列せんとするのである。

（一）

朝鮮に入つて旅行者の先づ第一に強く感ずるとは、日本國家の威力が朝鮮政府を通して著しく張つて居るといふことである。朝鮮政府の內外一切の在留民に對する、上は總督より下吵たる一小官吏に至るまで、無論幾多の例外はあるが、大體に於て云へば昔時の封建時代の官民の關係に彷彿たるものがある。是れ素より新附の異民族を統治する爲めに必要止むを得ざることであらう。然しながら異民族の統治は威壓丈けで成功するものでないことは固より言ふを俟たない。幸にして朝鮮政府は、斯く一方に於て國家の威嚴を示して居りながら、他方に於て土民に近世文明の恩澤に浴するの機會を與へ、殊に昔の獨立時代に見なかつた色々の生活上の便宜を供して居る。殖產工業も段々に盛になつて居る。交通機關も開けた。殊に道路はどんな田舍に行つても今や立派に造られて居る。病院も設けられた。其上又朝鮮政府は朝鮮民族の精神的滿足幷に其開發を計る事をも怠つては居ない。社會公共の秩序は立派に維持せられて居る。權利の保障には土人と內地人との別を立てぬ。比較的公平なる裁判は確かに土民を滿足せしめて居るやうだ。某朝鮮人は予に自分の父祖の代までは、其蓄積せる多額の財產に眼をつけられて故なくして府の長官から捕縛せられ、其度每に多額の身代金を取られたものだが、斯くの如き不當の侵害は今日は全くなくなつた。是れ全く日本の統治以來のことだと言つた。殊に現在の總督寺內伯は、正義の觀念の極めて强烈な人で、道に合はないことは秋毫の微と雖も之を假借しない。而かも此點について伯は決して土民と內地人とを別たないといはれて居る。此點は朝鮮人は皆伯を德として居るやうだ。斯く一方には國家

の威力を示し、他方に於ては土民に物質上精神上の滿足と及び其發達の機會とを與へて居るのであるから、朝鮮民族の同化は十分に出來ないまでも、其統治の事業に於て決してまごつく譯はない筈である。然るに今一々朝鮮人に親しく會つて其言ふところを聞いて見ると、豈圖らんや今仍ほ日本の統治に對していろ〳〵の不平を言ふ者が案外に少く無いやうである。而して此等の不平は其言ひ分の當否如何は別問題として、我々は決して之を聞き捨てにしてはならぬ。出來るだけ之に耳を假して以て朝鮮統治上の參考に供することは極めて必要であると思ふ。

土民に物質上の利益を與へ又その開發を促す爲めに如何に色々の施設をしても、遣りやうによつては却つて有難迷惑に思はるゝ事もあるものである。此點について最も多く聞いた不平は、各地方に於ける道路の建設である。朝鮮の田舍には支那と同じやうに從來道路らしい道路はなかつた。道路の建設は即ち地方の開發と利便との爲めに最も必要である。故に道路の建設其事には固より朝鮮人に何等の異議はない。只之を建設するに要する土地の收容に、或は報償を與へなかつたり、或は殆んど沒收に近き所置を取たりするといふので土民に文句がある。且又道路の建設の爲には地方の土民は只で使はれ、而かも下級の役人は官權を笠に着て、土民の都合如何に拘らず、命令した日には必ず出て働けと迫ると不平を言ふて居る。彼等は言ふ、夫役といふ事は昔もあつた。けれども昔の官吏は流石に地方産業の繁閑の時期を辨へ、あんまり土民の迷惑にならぬやうな時を擇んで夫役を命じた。今日はそんな斟酌はないと。かくて日本統治の横暴を唱ふるのである。尤も日本側をして言はしめたならば、道路を作るといふことは、結局土民の非常な利益になる。故に地面を只で出さしても、或は地方の土民を只で働かしても、決して不平を言ふべき筈はないと言ふだらう。然し無智なる人民の常としては、將來の永い利益の爲めに今日一時に多くの損失を忍ぶといふことは決して出來ない。相當に物の分つた人間に對すべき理屈を以て無智

の土民に對するるのは、決して悧巧な政治ではあるまい。其趣意目的が非常によい事でも、遣り方に注意を加へざれば、兎角く不平の種になるものである。さういふ土民の考が間違つてゐるといふのは理屈である。理屈で土民の統治は出來ない。殊に一般日本官吏の常として各地方官などは各々功名を急ぎ、已の方では今年度何十里の道路を作つたとか、いや已の方はそれよりも餘計に作つたといふ風に、各々其成績を爭ふ。其結果道路の建設などについても、隨分土民の都合に逆つた事をするやうな場合も多いかと思はるゝ。外形上の仕事の成績で功名を爭ふことの結果、隨分其地方に永遠の迷惑をかけてゐるといふ弊害は、日本内地の地方官の間などにも尠くない。獨り朝鮮に此事なしといふ譯でもあるまいから、以上の如き不平も強ち荒唐無稽の言として排斥すべきではなからうと思ふ。

　前にも一寸述べたやうに、例へば權利の保障といふやうなことについては、內地人も朝鮮人も平等である。此點は實に公平である。けれどもその保障せらるゝ權利其物に至つては、決して兩者平等ではないと言つて不平を言ふ者もある。無論朝鮮人は所謂亡國の民である。表向は彼等の希望によつて我國に併合したのであるけれども、事實上は日本から併呑されたのである。從つて日本人が何かにつけて一段朝鮮人の上に居るといふことは事實已むを得ない。然しながら日本人が一段上に居るといふことは、朝鮮人を輕蔑してもいゝ、壓迫してもいゝといふことではない。此點に於て在留日本人の大多數の考は、殆んど例外なく、其當を失して居りはしないか。弱者として朝鮮人を勞つて遣るといふ態度に出づるが如きものは極めて少いのである。尤も人によつては、それは朝鮮人を知らぬ人の言ふことだ。弱い者を勞はれといふ抽象的の訓言には我々も固より十分に從ふけれども、實際朝鮮人に接して見ると、とても愛想がつきて勞はる氣にはなれないと言ふ。然し乍ら之れまで予も努めて朝鮮の人には接して居るが、予の經驗によれば朝鮮人といふものは決してそんなに素質の劣等なるものではない。尤も彼等は何百年

の永きに亘つて惡政に苦んだ敗殘の民である。此永き惡政は彼等の國民性の上に取り返し難き大いなる疵を與へたことは疑を容れぬ。加之彼等は從來甚だしく近世の文化に遠かつて居つた。從つて其智識も劣等である。そこで我々は動もすれば彼等を輕蔑するのであるが、然しながら智識の劣等なるは、段々に近代の文化に觸るゝと共に改まると思ふ。彼我民族の境遇の差を眼中に置かずして、一足飛びに民智の優劣を比較するは正當でない。今より十餘年前予の初めて支那に行つた頃には、或る師範學校で先生が春夏秋冬の理を說明する爲めに、地球の周りに太陽を四つ書いたのを見て、最も頭のよい生徒の一人が「先生太陽は四つあるのですか」と質問した事があつた。他の多くの學生は四つあるものと初めからきめて之を疑問とさへしなかつた。當時我々は支那人の科學的知識の理解力の極めて乏しいことを斷定したのであつたが、然し今日では斯くの如き愚問を發するやうな者は、最早之を想像することすら出來ない程に進んだ。即ち國民が全體として一般の文化に觸れて來ると、國民全體の科學的理解力といふものも、自ら非常に進むものと見へる。日本でも米提督ペルリの浦賀に來た當時は、我が邦人の知識も至つて低かつたと見へ、米人を眼前に見たといふ或る東北の學者は其著書の中に、米人の畫像をかいて其額の上に二本の角をつけて居つた。即ち當時の日本人の科學的知識といふものは、人と鬼との區別を辨へなかつたのである。是れ專ら皆一般の文化に觸れなかつた結果である。之を以て國民の素質が惡いの、或は科學的能力が國民性として本來缺けて居るのと、速斷することは出來ない。予は朝鮮人の理解力を以て敢て日本人に劣らないなどと斷ずる程の積極的の根據を持つて居る者ではないけれども、只一般の文化に觸れて居ない今日の朝鮮人が著しく日本人に劣つて居るからと言つて、彼等を以て全然日本人とは別種な劣等民であるかの如くに斷定するの論には、甚だ慊焉たるものがある。少くとも予の接して居る某朝鮮人の如きは、何れも高等の敎育を受けた人ではあるが、其能力は實に驚くべ

るものがある。故に予は朝鮮人を初めから日本人とは其本質上一段も二段も低い人類として取扱ひたくはない。然るに朝鮮に於ける日本人は、官民共に朝鮮人を輕蔑し、甚だしきは公開の席上などで、相當の地位にある朝鮮人と言ふ事を、側に居る微々たる日本の一小官吏などが、朝鮮人の言ふ事は何が信用が出來るものかといふ態度で、言下に之を否定し、非常な侮蔑を與ふるといふ樣なことが珍らしくない。一々例を擧げれば際限がないが、こんなことで自然と朝鮮人の反感を買ふことは非常に多いと思ふ。其結果は、固より直接の計數の上に何等表はるゝことはないけれども、然し日本民族の殖民的成功といふ大局から觀れば、如何に此事が、現在は勿論將來に向つても、日本の發展を禍するか解らない。

朝鮮人で朝鮮政府の官吏に採用された者は、日本に對して自ら色々の不平を有つて居るのみならず、彼等は又一部の朝鮮人から裏切者の如くに云ひ做されて非常な窮境に陷つて居る。彼等は日本政府に仕官して居るために、時々同胞の朝鮮人から非常に除外される事があるのであるが、去ればといつて日本政府の側からも優遇されて居ないといふ。彼等は云ふ、自分達は日本内地に行つて日本人と同樣に勉強した。そして例ば帝國大學でも卒業して歸つて朝鮮總督府に奉職したとすると、同格の内地人と比較して第一に我々の月給が違ふ。朝鮮人の受くる本俸は内地人のそれの約三分の一である（之れ朝鮮人のいふ處を其儘に述べたのである。實際朝鮮人の俸給の平均額が同等の地位にある日本人のそれの三分の一に當るや否やは未だ精密に之を調査して居ない）。而かも内地人は其上に多額の在勤俸を受くる。何故に斯く非常な差等を設けらるゝのであるか。せめて本俸丈けは同じやうにして貰ひたいと。彼等はまた言ふ。内地人は一兩年にして高等官になり、更に年數を積むに從つて官等がどん〳〵上る。然るに朝鮮人は——暫く行政官だけを取つていふと——郡守といふ特別階級を除くの外は、殆んど全く高等官になれない。なぜなれば朝鮮で官吏が高等官となるには、矢張り日本

内地に於けると同じやうに高等文官試驗を受けなければならない。然るに高等文官試驗は朝鮮人に之を受くることを許されて居ない。故に朝鮮人のみに適用すべき特別の試驗規則でも作らない以上は、朝鮮人の高等官になる見込は絶對にないと言はねばならぬ。單に之れ許りではない。文官試驗の適用の範圍外に屬する各種の技術官についても、内地人は容易に技師になれるけれども、朝鮮人は殆んど何時までも技手で置かれる。從つて朝鮮人は何年經つても殆んど月給が上らない。爲めに又同僚の日本人から同じ役所に居つて非常に輕蔑される。少くとも區別的待遇を受ける。是れ少しく氣慨ある者の何れも總督府の官吏たるを甘んぜざる所以であると。(大正四年度の職員錄で調べて見ると鮮人の高等官は度支部に一人居る。併し勤務未定とあるから實權はないのであらう。警察部にも居るが全國を通じて五六人に過ぎない。外地方官としては郡守と道の參與官は皆鮮人であり、又道長官にも數名の鮮人がある。其他にはない。鮮人の不平は丸で事實に根據して居ない譯でもない) 彼等はまた言ふ。朝鮮人の官吏は其轉任轉職について殆んど本人の意志を尊重せられない。ある朝鮮人は僅々兩三ヶ月の間に甲より乙、乙より丙に、又更に丙より甲に三度轉職を命ぜられ、而かも一回も豫め其内意を問はれたことはなかつた。是れ我等が常に其地位の不安を感じて止まざる所以である。裁判官などには近頃朝鮮人も多く採用されて居る。(現今鮮人の判事たるもの全國に當りて三十餘名ある。何れも末席を汚して居る。檢事には一人もない) けれども朝鮮人たる裁判官は、鮮人同志の事件のみを取扱ふもので、日本人に關係して居る事件には全く干與せしめられない。而かも朝鮮人間のみの事件は、總て朝鮮人が取扱ふと言ふことならば、まだ諦めも出來るが、必ずしもさうではない。斯ういふ風であるから、朝鮮人にして總督府に使官して居る者は、殆んど其前途に何等の光明を見ず、失望落膽、意氣消沈の極に達して居ると。以上は數多く聞いた不平の中の二三の例である。日本側の高官は、我等の朝鮮を政治する、一視同仁を

根本義とし、朝鮮人をも随分澤山行政官や司法官に採用して居ると誇らるるのであるが、然し朝鮮人は決して之を有難いと思つて居ないやうだ。況んや之を日本の恩恵と感謝して居る者の如きは一人もないやうだ。寧ろ却つて朝鮮政府は朝鮮人たる官吏に對して非常の虐待を加へて居る位に考へて居るらしい。朝鮮滯在中予一度此事を某高官に訊した。其答に曰く、「一體朝鮮人が日本人と同じやうな月給を貰はふなどといふ考が間違つて居る。さういふ生意氣な考を捨てゝ了はなければいけないんだ」と。即ち朝鮮人が一切の慾望を棄て柔順猫の如くなるに非んば、彼等の幸福は永遠に來るものでないといふ立場を取つて居らるゝのである。けれども斯ういふ考で植民地を統治するは果して正當なりや否や。否一歩を進めて斯かる境遇に朝鮮人を甘んぜしむることは、事實上果して可能なりや否やと予は反問したかつた。又該高官は「ナニ、高等官にもなれぬことはない。郡守は皆朝鮮人だ。道の參與官も朝鮮人で又道長官に朝鮮のなつて居る者も三四人はある」と言はれたが、又此郡守に關する朝鮮人側の不平を聞くと斯うである。政府では鮮人懐柔の一つの方法として、郡守には皆鮮人を採用しては居るが、鮮人の長官たる處には、必ず次席に有力な日本人を置いて、此日本人をして實權を握らしめて居る。故に鮮人が長官となつてゐると言つても實は席次たる日本人の傀儡に過ぎない。而して道長官が鮮人たる場合も略ぼ同様であるが、道の方に來て實權を握る日本人の方はまだ相當の教養のある人が來るからよいが、郡になると所謂次席の官吏に餘り立派な人物が來ない。否隨分品格の低い考の至らざる者もあつて、公私いろ／＼の場合に故らに郡守を無視し輕蔑するといふ様なことが甚だ多い。此不謹愼なる次席官吏の專恣横暴に憤慨して、恨み骨髓に徹すると叫んだ郡守も少からずあるといふことを聞いた。之も一々例を擧ぐることが出來ないが、一寸考へてもありさうなことに思ふ。

要するに朝鮮人は大體に於て、現今の日本統治に非常な不平を有つて居る。無智の下層階級の連中の如き

は、自分の接する下級の官吏若くば下層の內地人の横暴虐待を恨んで、只慢然と譯もなく日本人を毛嫌するのであるが、多少教育を受けた識者階級は前段に述べた樣な理由からして、意識的に日本の統治を心中不快に思つて居るのである。而して此等の中流以上の階級が實に一般朝鮮民族の上に非常な潜勢力を有つて居ると いふことを考ふる時に、之に日本としては餘程重大視せねばならぬ問題ではあるまいか。尤も此等の所謂識者階級は一面より觀れば、日本の統治の方法如何に拘らず、一般に新政治に對して餘り好意を表せないといふ本來自然の約束があるやうにも思はるゝ。なぜなれば彼等は昔の朝鮮獨立の時代には、其優勝なる地位を利用して不正の財を下層人民より掠め、袖手して贅澤な生活を送り得たのである。然るに日本統治の時代となつてより、彼等は此傳來的特權を失はねばならぬとになつた。明治維新の際に士族が俸祿を貰つたやうに、彼等も亦新政の當初は若干の金を御上より頂戴したが、朝鮮人の常として金のある間は働かないで遊んで居るのだから、時勢の變を洞察して之に應ずる將來の計を定めるといふことはなく、爲に彼等は貰つた金もソロ〳〵亡くなつて、今や正に困窮の絕頂にあるといふことになつた。されば今や彼等は從來の惰眠より覺めて、いよ〳〵自分の腕で働いて飯を食はねばならぬと覺悟すべき時期にある。心ある者は段々所謂士族の商法の嫌はあらうが、將來の生業を探し當てんと苦心して居る。けれども大多數の者は今仍ほ悟らず、困窮の餘り、遂に其窮迫の根源をば日本の統治に歸するに至つた。即ち時勢の變に基く當然の成行を解せず、漫然日本の統治に歸してから斯んな世の中になつたとて、日本を怨むやうになつた。斯ういふ次第で朝鮮人の不平なるものは、實は餘程割引して考へねばならぬ理由もある。然しされぱと言つて、朝鮮人の言分が皆間違であると一概に之を無視し排斥するのは、決して賢明なる統治者の態度ではない。我々日本人としては何處までも朝鮮人の立場に同情し、彼等が時勢の變を知らずして徒らに日本を怨むだけそれ丈け、我々は朝鮮人を勞はつ

て遣る必要があると思ふ。然るに此着眼點から朝鮮政府の朝鮮人に對する態度を觀るに、其爲す所果して當を得て居るか否かゞ一つの問題である。一般朝鮮人に對する關係のことは暫らく度外に措く。只朝鮮人たる官吏について之を觀るに、彼等は兎も角も高等の教育を受けたる、朝鮮人中の最も優秀なる人材である。此等を指導し、此等を心服せしめ、此等をして眞に朝鮮政府の官吏たるの地位を自ら誇りとするに至らしむることは、是れ單に官吏たる此等少數人士の心を得る所以たるのみならず、又之を通じて朝鮮人一般を日本に引きつくる所以となると思ふ。然るに此等の官吏をして毫も其地位に滿足せしめず、仕方がないから勤續はして居るもの丶事情が許すならば仕官いたしたくないといふ境遇に置き、而かも前途に何等の光明もなく、顧みて同胞の士民に對しては日本政府の飯を食つて居ることが如何にも面目がないと考へねばならぬ樣な地位に在らしむるのは、決して策の得たるものではないと信ずる。朝鮮人を教育して居る或官立學校の校長は、卒業生の勤め先について、「官吏になつても前途に見込みがないからとて、此頃は實業界に入つたり、或は父兄の下に歸つて只居る者が多くなりました。」と言つた。個々官吏になつても、同胞の朝鮮人から如何にも裏切者か賣國奴といふやうな意味で譏られ、而かも政府からは實質上滿足な待遇を與へられて居ない。斯くの如き地位に置くのでは、如何に表向き朝鮮人にも官界に於て、同等の機會を與へて居るの、此通り鮮人懷柔の爲めに盡して居るのと言つても、何の役に立つてあらうか。此等の點は之といふ斷案を下す前に猶ほ十分の材料を擧示するの必要ありとは思ふけれども、數名の朝鮮人の不平を聞いて成程と思つた點もあるので、漠然ながら右述べた樣な考を懷くに至つた次第である。

朝鮮人が日本の統治を、日本側が思ふ程に、有難がつて居ないといふことは、實は當然の話でもある。尤も其程度の問題になれば、日本人の責任に歸すべき點もあらうけれども、只日本の統治を喜ばないといふ事丈けならば、之は致方はない。如何に朝鮮人が無氣力で

あると言つても、彼等は兎も角も永い間獨立して居つた。而して實に獨立の文明を有つて居つた一獨立民族である。彼等は過去に於て一度我國に對して文明の先達であつたといふことを知つて居る。伊藤公以來今日まで所々方々の墳墓などで發掘された色々の古代の美術品は、朝鮮古代の文物の燦然たりし有樣を今や始めて實物を以て目のあたり我々に示すのである。假令今日いかに頽廢衰殘を自覺して居つても、甘んじて他國の支配を受くるといふことは、彼等の決して屑しとする能はざるところである。日本人の間には動もすれば、支那人や朝鮮人などは多年虐政に困んで居つたから、其虐政から救ふて與れるものであれば、一も二もなく之に歸服すると考へて居る人が多い。否日本人許りではない。朝鮮人支那人それ自身の間にすら、現に非常な虐政に苦んで居る際には、困窮のあまり之を救ふて與れるものがあれば、其何人たることを問はざらんとするものがある。現に上海邊に居る商賣人の間には、自分の經濟的利害の打算上、寧ろ支那が大正皇帝の治下に歸した方が滿足だなどゝ言ふ者もあるとて、我國の有力なる某實業が、支那人の所謂日支合併論を以て相當の勢力ある說なるかの如くに說いたのを聞いた事があつた。然し斯くして朝鮮人にしろ支那人にしろ、善政をさへ布いて遣れば、彼等は全然無條件に日本の統治に滿足するものなりと斷定するならば、是れ獨立民族の心理を解せざるの甚しきものである。成る程朝鮮民族は歷史的に觀て日本民族と最も種族的の關係が近い。從つて日韓兩國の接近提携といふことについては非常な便宜があるといふことは疑がない。けれども然し、如何に從來虐政に苦んだとはいへ、一轉して外國の支配を受くるといふことは、獨立國民たるの自尊心と相容れない。一時虐政に苦むの餘り、何人でも來つて我の苦を救へと叫んだ其者自身すら、忽ちにして外部からの支配を咒ふやうになるのが、古來の歷史の示す所である。足元の危げな二つ三つの小供ですら、後ろから大人に襟首を攫まれることは好まない。轉ぶの危險があつても、獨りで自由に活動したいといふのが、

人間の奪ふべからざる本能である。如何に行屆いた世話を受けても、人の厄介には永く滿足の出來るものではない。金殿玉樓の中に山海の珍味を以て侍づかれた浦島太郎でも、久しからずして一竿の風月に一生を托した質朴なる昔の生活に憧れたではないか。是れ皆人類自由の本能に因緣する。如何に滿足を與へても、我等の本能は依然として自由を欲求する。況んや滿足幸福の名目の下に、幾多の拘束、幾多の煩累を與ふるに於てをや。左れば元來甲民族を乙民族が統治するといふ樣な事は、其本來の性質に於て、這般の民族心理と相容れざる道理のものである。是れ民族關係の復雜なる先進諸國に於て、民族問題の常に極めて八釜しき所以である。殊に十九世紀以來は、一般に民族的觀念が勃興して來て居るから、從來從順であつた民族すら、近世に至つて騷ぎ始めたものもある。斯くして最近の歷史は民族の同化といふ事は極めて困難なるものである。否同化といふ事は、言は易きに似て實は不可能なものであるまいかといふ考さへ現れて來て居る。尤も此種の議論の現れて居るのは、主として共に相當の高い文明を有する在歐の各民族間の關係に付てゞあるが、然し同樣の現象は歐米諸國が亞細亞、亞弗利加に有する諸植民地に於ても全く起らぬではない。現に印度や埃及やは英國の統治の下にあれ程よく開發し、統治上には英國も隨分骨を折つて居るのに、土民間の獨立的風潮は益々盛になるではないか。非立賓は米國の施政の下に頗る廣汎なる自由を與へられて居るけれども、獨立思想は依然として衰へない。米國では異民族の同化といふ事は不可能なものと諦めたのか、最近は非島獨立を附與せんとして居る。向ふ二年乃至四年間に非島に獨立を認許するの權能を大統領に附與するといふ所謂クラーク案は議會に容るゝ所とならざりしも、相當の時期に於て之を許すをいふのであるから、獨立を許すといふ主義は、確認されたのである。要するに、異民族を統治して、之より十分の心服を得るといふ事は全然不可能でないとしても、非常に困難なものである。從つて予一個の考としては、異民族統治の理想は其民

族としての獨立を尊重し、且其獨立の完成によりて結局は政治的の自治を與ふるを方針とするに在りと云ひたい。併し之は只一片の抽象的の議論である。具體的の問題としては、政治上就中對外關係上から政治的の自立を許すを得ざる場合もある。但之等の理由よりして已むを得ずして異民族統治の主義を固執せざるべからずとしても、統治者は一面に於て斷じて夫の民族心理を無視してはならない。又いかに此民族心理を尊重するの方針を取るにしても、統治さるゝ民族に不平の絶える筈はないから、其民族の少し位の不平があつたからとて、それを非常に氣にかける必要もない。之を氣にかけて强いて之を壓迫するの暴擧に出で、爲めに無用の力を注ぐが如きは、彼我共に何の益するところがない。

朝鮮に於て政府は土人並びに内地人は勿論、一切の在留民に對し、非常に言論の自由を拘束して居ることは公知の事實である。就中朝鮮人の言論行動に關しては、事實上非常な拘束を加へて居る。そこで、さらでも日本に對して不平なる朝鮮人は、更に反感をそゝられて、遂に一部の鮮人は走つて極端なる危險思想を抱くに至つた。斯かる危險人物の多少でも勢力を有つて存在して居るといふことは、朝鮮統治の成敗を論ずる者の決して看過すべからざる所である。當局者は兎角かう云ふ者に我々の手を染むることを好まざる樣であるけれども、然し此等の連中のもと〳〵何を主張するか、又此等の連中の現に有する勢力は如何といふ樣な事を明かにするは、朝鮮統治上の參考としても極めて必要であると思ふ。尤も朝鮮内部に於ては、其周到にして洩らすところなき嚴しき取締の結果、此等の連中は殆んど鉾を收めて鎭まり返つて居る。否、到底日本の取締には敵し難しと見てか、或は長いものには捲かれろと諦めての結果にや、例へば先年寺内總督暗殺の陰謀を企てた尹知昊の如きまでが、近頃頻りに總督の門に出入して閣下の敎を乞ひ、朝鮮人基督敎青年會の幹事長として餘生を純宗敎事業に捧げんと聲言して居る樣な次第で、概して日本の統治に恭順の意を表して居る。

然らざるも皆世人の目立たぬ所に隱れて、彼等同志の間に於てすら、日本に對する不平は口外しないやうにして居る。予は此種危險思想派に屬すと確かに認むべ**き某氏と會見したとき、初對面匆々朝鮮人間の排日思**想について或る質問を發したのに、彼れは「此節排日思想などゝいふやうなものゝあるべき道理はない。我々は皆日本天皇陛下の徳に服し、又總督閣下の統治に滿足するものである」とムキになつて論爭した。是れ偶々彼等が如何に日本の取締に對して戰々兢々として居るかを反證するものである。そこで朝鮮丈けを素通りして見ると一見極めて穩かである。又一ト通り朝鮮人と話した丈けの判斷では、朝鮮は極めて安全である。然しながら朝鮮に居る者ばかりが朝鮮人ではない。其外に露領にも居れば滿洲にも居る。之等在外の鮮人の無遠慮なる言ひ分をも聞いて見て、サテ朝鮮人の眞意はと考へて見ると、僅に彼等の一部の者の間には極端な危險思想に毒されて居る者がある。その最も極端なるものに至つては、最早我々亡國の民に取つては、朝鮮民族の今後如何にして起つべきやといふが如きは問題ではないと放言し、自暴自棄の餘り、只如何にして日本の勢力を半島外に排けんかといふ事のみを考へて**居る。而して其爲めに若し必要があるならば、露西亞**の下に服するも亦可なり、亞米利加の助を招くも亦辭するところに非ず、支那の强大になつて半島より日本の勢力を驅逐せんことは、其の最も願ふところであると言ふ。近頃支那に革命運動が起つて居るが、之に對して彼等の或る者は非常な空望をかけて居る。そは支那にして若し革命運動に成功せる結果、他日强大な國家となるなれば、即ち彼等はこの新興の支那によつて、日本を追ひのける事が出來るだらうといふのである。予は、日本の勢力を排けんが爲めに支那若くは露西亞に倚るといふのは、所謂前門虎を防いで後門狼を入るゝものであり、又譬へば今日百圓の借金を日本に拂はんが爲めに、百廿圓の新借款を露西亞に起し、他日又露西亞に對する不平が高まり、其借金を返すといふ事になり、爲めに亞米利加から更に百五十圓を借りると

いふやうなもので、日本より露西亞、露西亞から亞米利加と轉々する間に、朝鮮民族の困難は增す許りである。寧ろ陰忍して一意專念民族全般の開發を計り、平和の裡に先づ其實力を養ひ、徐ろに時機の到來を待つて然る後に適當の解決を日本に求むるのが一番得策ではないかと、去る處で說いた事があるけれども、中には容易に納得せざる者もあつた。勿論此種の突飛な考を有する者は、朝鮮人中の極めて少數の部分に過ぎず、且つ此等の連中が日本を排ける爲めに、露西亞と結托すると言つたところで、それが實際の勢力ある思想となり得るまでに、一般の承認を得ることが出來るかどうかは問題である。此種の考を抱いて居る者は、本國では到底事をなすことが出來ぬから、近くは奉天又は浦鹽に、又遠くは亞米利加の西岸諸市に夫れ〳〵中心を作つて、何等かの運動計劃に從事して居るといふことである。何れにしても予の觀るところでは、此等の者の實際の勢力は、其人數の上から言つても、又それが朝鮮人一般の間に得て居る承認の度合から言つても、實は大した勢力ではない。全體としては敢て深く意とするに足らぬと思ふ。けれども、只此等の連中が所謂自暴自棄の徒にして、動もすれば朝鮮民族その者の利益は丸で度外において、只日本に大なる損害を與へさへすれば滿足するといふ連中であることを思ふとき、予輩は彼等の爲すところ往々暗殺などゝいふ極めて隱險なる手段に出づることあるを看逃してはならない。即ち彼等の勢力は甚だ微弱なりと雖も、其爲すところの結果は實に恐るべきものがあるから、我々は此等を全然無視することは出來ないのである。左ればといつて今吾々は之等の連中を手輕に如何か爲るといふことも出來ない。例へば之を懷柔しやうとしても、第一何處に何ういふ人間がこんな思想を抱いて居るのやら明でない。從つて我々として精々爲し得べき事は、今後に於て此派に入る者の一人でも少からんことを計るべきである。此派に流れ入る者は專ら靑年に多い。靑年をして其處を得せしむるといふ事が、朝鮮統治の局に當る者の、最も心すべきことであると思ふ。之等

の點に付て、先般我國に來朝して御札博士として持て囃された米國シカゴ大學教授スタール氏は面白い意見を述べて居る。公平なる第三者の觀察は、我々に對し**て他山の石たる價値ありと思ふから、其中の一句を援**から(五月五日東京朝日新聞による。)「日本が斯樣にいろ〳〵朝鮮を善くしたに拘らず、朝鮮人はまだ深く日本人を嫌つて居る。又日本人も朝鮮人を一段下等の人民の樣に輕侮して居るといふのが事實だ。若し日本人が朝鮮で繁盛しやうと思ふならば、何を措いても朝鮮人ともつと親友になるのが必要だ。他日しみ〴〵日本人が其必要を感ずる時が來ると思ふ。立派な鐵道も、港灣も、學校も、裁判所も、皆日本人の賜ではあるがこんなことには朝鮮人は割合に有難いと思はない。日本人が朝鮮人を實際同胞と思つて親切なる待遇を與へ朝鮮人も其義に感じて日本人として運命を共にするやうにならなくては、日本の朝鮮問題は解決せられては居らぬ。日本が實際朝鮮人の忠誠を望むならば、朝鮮人を同等の同胞と思つて、親切な待遇を與へなければならぬ。日本人が此道理を認むるに至つて、始めて朝鮮問題は解決せられるのである。朝鮮にある日本教育者は、先づ日本人たる小學生を此樣に教育する義務が**ある。」**

要するに、朝鮮は今日のところ十分に安穩であるといふことは出來ない。朝鮮人は決して未だ十分に日本の統治に心服して居ないのみならず、內心却つて不平を抱いて居る者が相當に多いと見ねばならぬ。それにも拘らず朝鮮人をしてグウの音も出させず、內地人が何處へでも內地同樣に入り込んで、些かも危險を感ぜざるを得るのは、一に朝鮮に於ける憲兵制度の賜にして、あれ丈けに憲兵網を全土に張つて、公安の維持に一糸亂るゝ所なからしめたのは、何といつても寺內總督の偉大なる組織的手腕の結果であつて、我々は實に之を見て敬嘆するの外はないのである。只玆に起り得べき一つの問題は、秩序の維持はあり而かも住民の幸福は如何といふことである。朝鮮人にあれ丈けの不平を心の底に植ゑ付けて置けば、これ丈けの憲兵の配置

は必要であらう。然らずんば到底公の秩序が保てるものでない。而してあれ丈けに秩序を維持するといふことは、到底凡庸なる政治家の能くし得るところではない。此點について寺内總督は最も見事に成功を收めたものと言はねばならぬ。然し公安の維持に必要なる憲兵の制度は、又其反面の結果として、住民の幸福を計る上に色々遺憾の多いことも亦掩ふべからざる事實であると思ふ。朝鮮の公安は憲兵制度なくしては或はこれ程よく維持されなかつたらう。けれども山間僻地にあつても、到る處憲兵が萬能の支配者であるといふの結果、如何に住民が此制度のために其幸福を蹂躙されて居るかといふことは、是非共また統治者の注意を乞はねばならぬ點である。憲兵はもと行政官として殊に牧民官として教育されたものではない。彼等の行動殊に住民に對する態度、彼等の中央政府に對する報告殊に人事に關する報告、此等のもの丶往々にして依怙に偏し、其正鵠を得ざるものあることは、多言を要せずして明白である。此等についての不平は朝鮮人並びに內地人より隨分多く聞いた。而して其不平の多くに對して、予は一々同感の意を表せざるを得なかつた。此點は今後朝鮮政府の努めて改革を加へねばならぬ仕事であらうと思ふ。予の觀るところによれば、朝鮮統治の事業は今や先づ半ば成つた。政府の組織、教育の振興、産業の開發、殊に最も人の憂へたるところの秩序公安の維持、此等は殆んど皆立派に出來上つた。然し此等の仕事は多く皆表玄關の修飾にして、之より更に內地人及び朝鮮人の實質的の利益幸福を進めるといふ所謂お勝手元の改良が必要である。日本の政治は內地に於ても兎角表玄關を飾るに急にして、裏口は案外に之を粗末にする。今より十年前予は當時の直隷總督袁世凱の招聘に應じて天津に往つた事がある。その時予は毎日長子袁克定君と本を讀む爲めに總督衙門に通つた。袁克定君の書齋は裏門から入ると玄關の側に在つた。而して門を這入つてから玄關までの途は、何時行つても塵ぱし一つないといふやうに綺麗に掃除されてあり又玄關から書齋に至る間も非常に綺麗に掃除され居る

が、一旦其建物の横の方から裏側の方へ廻つて見ると、驚くべし大小便垂れ流して、其不潔なること言ふばかりなかつた。人の眼につく處は非常に綺麗にして居るけれども、一寸人の眼につかぬ所は全然放任して居るといふ譯である。支那の政治も亦之と同様で、兎角政治家は表面の虚飾にのみ流るゝの弊がある。これ程極端ではないが、日本の政治も亦やゝ之に類するものあるのではあるまいか。外國人の手前を飾るといふ爲ばかりでもあるまいけれども、立憲政治の形式はともかくも之を採用した。然しながら之が運用によつて受くるところの國民の利害關係は、殆んど識者全般から無視されて居るではないか。領事裁判制度の撤廢の爲めに大急ぎで法典は作つたけれども、國民の法律生活の内容は極めて貧弱なものである事も今更言ふを須ゐない。尤も我國は維新後急いで歐羅巴の文物を入れ、之れと步調を合せねばならぬといふ特別の必要があつたから、先づ以て表玄關を大急ぎで飾つて、外國より受くる不當の物質上並びに精神上の壓迫を排除する口實とせねばならなかつた。例へていふならば、夜會に出るには燕尾服が必要であるといふので、急いで之は新調したけれども、下着の垢じみたものまで作りかへるの餘裕がなかつたといふ様な有様である。外國の仲間入りをして無理に大きな顔をしようといふ時代には、それも必要であつたらう。然しながら今日は最早此態度を改めて一歩を進むべき時代となつたのではあるまいか。木綿の表に絹の裏をつけるのが江戸ッ兒の誇りと聞いてをるが、江戸ッ兒に限らず潔癖なる一般の日本人としては、上衣に少しの垢がついても、少くとも褌丈けは毎日洗濯した者を着けべき筈である。何ぞ獨り政治丈けが、表面のみの修飾に急にして實質の充實を計らざると今日の如く甚しきや。今日まで我國の政治家は日本帝國の玄關を飾る爲に從來隨分と骨折つたけれども、派手向き一方の功を急いだ結果、又隨分人民の實益を無視したことも少くないと思ふ。地方官などの中には、徒らに在任中の功績を殘さんとてにや、それ築港だとか、それ公會堂だとか、隨分突飛な大金を不

急の事業に投じて悔なかつた者も少くないと聞いて居る。又中央政府としても、派手な大きい仕事の成績を擧ぐる爲に實際上の人民の利害を無視した事は之れまで決して稀ではない。此頃は餘り問題にならぬ樣だが、かの足尾銅山の鑛毒事件などについても、當局者の中には、被害者の言ひ分には尤もの點もあるけれども、併し其言分を通せば、足尾銅山の事業全般に影響する、而して足尾の事業の盛衰は、卽ち日本の海外貿易に影響すること夥しく、惹いて日本の財政にも少からぬ關係を及ぼす譯になると言つて、云はゞ表玄關の海外貿易といふ派手な仕事の見地から、お勝手向きの鑛毒被害地の人民の利害が平氣で犧牲にされて居つたのである。表玄關を張るに忙殺さるゝといふことは、後進國には兎角あり勝ちの事である。然し同じく表玄關修飾主義の政治家でも流石に獨逸のビスマルクは此點に於て實に敬服すべき達識の政治家であつた。彼は表玄關を張ることに氣を取られて勝手元の不如意を忘れるといふ樣なことは決してなかつた。彼は表玄關も十二分に張つたが、また之と同時に必ずお勝手元を結局に於て充實する所以の途を講ずるとを怠らなかつた。是れ今日の獨逸が斯くも隆々たる勢力を現はせる所以である。我國の政治家の多數は、不幸にしてビスマルクの一面を視て、他の一面を見逃して居るのである。是れ予の常に遺憾として措かざるところである。彼等はなかなか表面派手な施設を企てて以て、世人の耳目を聳動する。輕燥なる國民は之に向つてヤンヤと喝采の聲を浴びせる。然しながら、其結果として國民は其物質的並びに精神的の生活の上に如何なる影響を蒙るかは、深く省みない。偶ゝ之を說く者あれば、消極的退嬰主義者などゝ言つて罵倒さるゝ。之は日本內地の事であるが朝鮮に於ても之と同樣の事は言へぬであらうか。憲兵制度によつて表玄關式の政治は模範的成功を收めて居る。併し之と同時に朝鮮政府は更に一歩を進めて一般在住民の現實の利害に及ぼす其制度影響を如實に研究して、之に應ずる適當の方法を講じ、以て內部充實のジミな方面にも十分手を伸ばして居るや否や。予は

切にビスマクに見るが如き、兩面の施設を兼ね施して圓滿なる効果を擧げられんことを希望する。今日までのところは合併後年なほ淺く、所謂草創の際であるから、**表玄關に全力を注ぐも亦已むを得なかつたらうと**信ずる。けれども今や内外の狀勢は我々に向つて從來の政策の方向の一轉を迫つて居るのではなからうか。

(二)

以上の如く、予は一般在留民、中にも朝鮮人の物質的並びに精神的の生活に對しては、もつと立入つた、親切な、實のある世話をすることを必要と思ふのであるが、されぱとて決して政府の威嚴を保つことを無用と言ふのではない。所謂恩威並び行ふといふことは、陳套の言葉ではあるけれども、常に眞理であると信ずる。故に朝鮮に於て日本帝國の威力が、總督政府を通して十分に張つて居ることを、我々は最も痛快に感ずるものである。が、只其威嚴の表はし方に付ては、多少形式の末に奔るの嫌があるまいかと思はるゝ節もある。餘りに形式の末に走る時は、動もすれば空威張りとなつて、陰で人の誹りを招くといふこともある。此事に付いても予は茲に見たまゝ聞いたまゝを其儘並べて見よう。敢て此れ丈けの事實で輕卒な斷案を作り、以**て當局者を責めんとするの意に出づるのでは無い。**

官憲の威嚴を保つ爲めには、官吏其人をして威嚴を保たしめねばならぬ。朝鮮の官吏が總て金ピカの制服制帽を被り、甚しきは高等女學校の先生までが、男は總て劍を提げて居るなどは、寧ろ些か滑稽の觀なきを得ないが、無智の土民に對する手段としては、或は之も必要であらう。而して官吏の威嚴を土民に對して十分に保つ爲めには、同時に内地人に對しても之を保つて行かねばならぬ。内地人に對していゝ加減にして澄まして居つては、土民に對してのみ獨り十分に威嚴を立てるといふことは出來ない。從つて朝鮮の官吏は朝鮮人に對しても内地人に對しても、一見する所隨分威張つて居ると言はれて居る。從つて中には多少適當の度を超えては居ないかと恐れて居るものもある。例へば總督が一寸日本へでも歸るとか、または日本から歸

任したといふやうな場合には、部下の官吏は大擧して送迎に出る。尤も之は内地でもあることだから致方がないが、其上に公私の學校までが全體みんな課業を休んで停車場まで送迎に出るといふのは、如何なものであらうか。亞米利加人の經營して居る私立學校の様なものまでが皆此例に倣ふのである。別に表向きの命令に出づるのでは固よりあるまいけれども、少くとも道義上之を强制して居るものらしい。斯くまで世間に迷惑を掛くることは、餘所の國では、一國の君主にもないことだ。此事は京城ばかりでない。經過驛の釜山でもある。朝釜山を出て馬關に向ふ連絡船に乗るには前夜京城を發たねばならぬ。而して此汽車の釜山に着くのは朝の五時である。嚴寒の候朝の五時に、總督がお通りになるからと言つて、小學校の生徒までが皆波止場に出て吹き曝しになるのは、如何にも可哀さうで御坐ると、多くの父兄から怨言を聞いた。小學校生徒が規律正しく兵隊のやうに並んで居るのは、見て氣持のよいものだといふ人もあるさうだが官吏の發着毎に小供を引出すのは、些か極端であるやうにも思ふ。一體朝鮮では隨分と送迎の虚禮が烈しい。今では獨り官吏の威嚴を保つといふ意味ばかりではないやうだ。總督ばかりではない、例へば山縣政務總監とか兒玉總務局長とかの發着にまで、相當に盛な送迎が行はれ、其釜山通過の際の如きは、道長官が遥々晋州から挨拶に來るを常とするさうだ。晋州から釜山までの往復は少くとも三日はかゝる。山縣兒玉兩君の一片の送迎の爲めに、道長官が三日間も職務を曠廢するいふことは、出來ることなら廢めた方がよからうとは、局外者間の輿論であると我輩は觀た。

朝鮮では色々の意味に於て官吏萬能である。之も畢竟官吏の威嚴を保つといふ主義から出て來たものであらう。何か社會的の催があるとする。何時でも先に立つ者は官吏である。宴會がある。官吏が何時でも上席で、會社員實業家は如何に其德望見識の高い者でも必ず末席に座るのが通例のやうだ。單にそれ丈けならばまだよい。聞くところによれば、朝鮮政府は會社銀行

等の內規にまで干涉し、其使用人の給料は必ず官吏の俸給の振合により、決してそれを超過するを許さない方針であるといふとである。內地では實業社會の給料は、**同格の官吏の得るところより數層倍多きを常とす**る。然るに收入多ければ自然高等の生活をなし、爲めに其實際の勢力自ら官吏を凌ぐものあるに至るの恐がある。官吏の地位を第一に立つる爲めには、此等の者をして官吏以上の生活の出來ないやうにして置くのが必要である。斯ういふことから會社銀行員の給料に餘計な制限を設けたのであらう。尤も之は總督府と密接の關係あり、且つ直接に其監督を受くるものに限るとの事であるけれども、又以て如何に政府が官吏の威嚴を保つといふとに、餘計の頭を惱して居るかが解る。

之れ程まで官吏の威嚴を保つに苦心するといふことは、新附の殖民地に於ては必要已むを得ざることであらう。只其半面に於て、此事は動もすれば官吏橫暴の弊を來たし、民間の陋劣なる者亦動ゝすれば官吏の意を迎へて其私を計る者を生ずるの恐あることに、眼を蔽ふてはいけない。單にそれ許りではない。總て官吏が主になつて居るから、例へば茲に或民間の事業について規則を作るといふが如き場合にも、其規則は毎に**官廳の取締に都合のよいやうに立案せられ、事業其物**の利便は深く省られないといふ弊もある。且つ又人民の側の發言は割合に聞かれもせず、又十分に許されもせないから、人民の側の利便といふ事は、初めから深く研究されずして法律の立案せらるゝことも稀ではない。要するに官吏萬能の組織の下にあつては、餘程聰明鋭敏なる長官の、上にあつて周密の用意を爲す者あるにあらずんば、假令下級の官吏に惡意あるにあらざる場合でも人民の利便の動もすれば無視せらるゝことは容易に免るゝとは出來ない。況んや朝鮮の如く政治に對する民間の批議を絕對に許さず、內には言論の自由を極端に拘束し、外には內地より入る新聞雜誌等の檢閱を極めて嚴重にするところに於ては、特に此點に顧慮を加ふることを必要とする。敢て深く當局者の一考を煩はしたい。

されば總督政治に對しては、内地人と雖も、實は十分に滿足して居るといふ譯ではない。彼等にも言論の自由はない。新聞雜誌も御用機關紙の外は、殆んど發行を許されてゐない。二三の雜誌は東京に發行所を置いて、辛うじて表面を胡麻化して居る。ウッカリ政治上の露骨な批評でもすれば、直ちに退去を命ぜられるの恐れがある。そこで彼等の或る者は、朝鮮に來て初めて言論の自由なるものの有難さを知つたと言つて居る。固より彼等は、朝鮮に居ることが日本に居るよりも特に不便不利であると考へて居るのではない。事實に就いて表面の生活上の利便を比較すれば、日本內地に居るよりは遙かに優つて居ると人も信じ自らも信じて居る。けれども彼等には時にふれて感ずるところの不平を洩らす機會が供へられてない。彼等は言ふ「朝鮮政府の誅求頗る激しく、我等は殆んど其重きに堪へざるも之を訴ふる所なし」と。予は朝鮮在留者の負擔が內地に居る日本人の夫に比して如何なる割合にあるかを未だ調査してゐない。よし之が調査が出來たところで、富の程度其他一般の事情が同じくないから、直ちに双方の計數を比較して兎角の議論をするの當らざることを知つて居る。けれども朝鮮政府では、臺灣の顰に倣ひたるにや、近き將來に於て會計の獨立を完成せんと期し其爲めに租稅の賦課は隨分辛烈を極めて居るとの事である。獨立會計の完成、從つて本國政府を最早財政上少しも煩はさぬと云ふことは、如何にも華美やかな成功であつて、其局に當つた政治家は、事情を知らぬ日本內地の人からは非常な賞讚の言葉を博するだらう。然しながら獨立の實備はつて後初めて獨立するのならば無論結構であるが。未だ獨立するの實力なくして無理に獨立の虛名を立て通すのは、決して本當の殖民政策上の成功といふことは出來ない。予は朝鮮の現狀が、近き將來に於て財政的獨立を許す程度に達し居るや否やを明白に知らないが、只汽車に乘りて半島を縱斷して得たる一片の感想に基いて論ずるならば利用者が少いからとて食堂車も寢臺車も連結して居ないやうな貧弱な民度では、財政の獨立などゝいふ事は

以ての外の話であるまいかと思はるゝ。朝鮮の鐵道は京城から南するものには、相當にいゝ客もあるので、食堂もついて居り、寝臺の設備もある。けれども之は主として日本の官吏其他の者が日本と京城との間を往復するの結果である。朝鮮其物の富の程度に應じて出來たものではなかりさうだ。されば京城から北新義州に至るの間は、偶々一二の歐羅巴人旅行者の一等車に乘る者の外は、いゝ客種は極めて少く、予の此の區間を通つた場合には、二等車に乘つてをる者だけを算ふるも、歐羅巴の旅行者を除いては、唯だ四人に過ぎなかつた。されば寝臺車は無論のこと、食堂車の設備もないのも無理はない。以て經濟的實力の如何に貧弱なるかを知るべきである。而して斯くの如き貧弱なる民度を基礎として强て獨立會計を完成せんとあせれば、勢ひ苛斂誅求の弊に陥らざるを得ざると火を觀るよりも明白である。是れ多少の見識を有する朝鮮在留者の多數が、此獨立會計の虚名が禍をなして朝鮮政府を促して苛斂誅求厭くなきものたらしめし次第なりと説く

所以である。彼等は朝鮮では關税が過法に高く、地租などの割當も甚だ不當であるといふ。事實日本内地と比較して如何やうの割合になつて居るかは、實は餘り深く研究しては居ないが、併し朝鮮へ這入る時の税關の調べが日本全國の税關中で一番小八釜しいといふ丈は、旅行中屡々聞いたところであつた。地租については京城に於て曾てかういふ話を聞いた。先年市區改正實施の風説盛に起り、爲めに地價の著しく騰貴を來たしたことがあつたが、其際政府は地主に對して其地價を申告せしめた。地主は市區改正のために買上げになるの豫想の下に少し高めに申告したのであるが、焉んぞ知らん其價格は其儘取つて法定の地價として地租算定の基礎とされて仕舞つた。其後間もなく不當に暴騰した地價は段々安くなつた。それでも一旦定められたる法定の地價は依然として居る。故に今日彼等の納めて居る地租の計算の標準たる法定地價は、實際の賣買地價よりも遥に高い。故に例へば地價の百分の七を地租として納むるとしても、實際は百分の八か九を納め

てゐる勘定になる。地所の實買に當つていよ〳〵登記を履むといふ際に、實際の實買價格を標準として登記料を計算しては、官憲で承知しない。法定の價格を標準として、之に相當する丈けの收入印紙を貼付しなければ受け付けないさうだ。こんな不法な所置は又とあらうかと言つて憤慨して居る人も少からずあつた。

斯くの如く金は取られ放題で、之に對して些かも文句を言はれないといふのでは、どんなに金が儲つても、我等は心持よくは思はないと、多くの人は不平を言うて居つた。抑も政治に於て最も根本の要點とする所は善政を布けりや否やの絕對的問題に在る。けれども、之が唯一の問題である譯ではない。之と共に人民をして現に受くるところの政治を以て善政なりと思はしむることも亦非常に必要である。內外在留民の爲めに計つて誠心誠意力を竭せりと言ふ丈けで滿足するのは決して聰明なる政治家の爲す所ではない。更に一步を進めて人民の心を得るに成功せずんば、予は政治家其人の爲めに之を取らず、又國家の爲めに之を悲しむものである。政治家は道學先生と違つて、我一人爲すべきことをなせば如何に天下の非難を受けても俯仰天地に愧ることはないなどと、獨りで濟まし込んで居る譯には行かない。

官吏の威嚴を保つたといふ意味で、一旦發したる官廳の命令にはよかれあしかれ、一切文句を言はせないといふやうな現象も屢々聞いた。之と關連する話であるが、基督敎徒なる朝鮮人に日曜日の勞働を强いたといふ事から、延いて米國宣敎師との困難なる問題を惹き起したこともある。此事は別に後段に於て對米宣敎師關係を論ずる項目の中に尙詳しく說かう。

（三）

日本政府の朝鮮人統治の根本方針は、必ずや彼等の圓滿なる物質的並びに精神的の進步開發を計るにあるに相違ない。然しながら此方針は十分に貫徹せられて居るだらうか。是れ確かに一つの疑問である。而して予の觀る所によれば、朝鮮人開發の根本方針の十分に貫徹されない一つの原因は、我が日本の政治家の間に

「朝鮮人は果して全然我國に同化して日本人となり切つて了ふことの可能るものかどうか」といふ問題がハツキリ解決されて居ないことにあると思ふ。同化といふ事は從來各國の殖民政策の終局の理想であつた。然しながら相當に發達した獨立固有の文明を有する民族に對して、同化は果して可能なりやといふ事は、少くとも最近に至り政治學上の一大疑問となつた。殊に民族的觀念の横溢を極むる現代に於て、異民族の同化混淆は、よし可能であるとしてもそは非常に困難な事業である。假りに同化政策で幾分の効果を收めたる國ありとすれば、そは必ずや非常に永い年數を費したに相違ない。而かも斯の如きは働きかけた方の民族が、受身の民族に比して、之を率ゐて行く丈けの高尚なる品格と優等なる才能とを十分に備へて居る場合に限る現象である。異民族に接觸せる經驗も淺く、殊に動もすれば他の民族を劣等視して徒らに彼等の反抗心を挑發するのみを能とする狹量なる民族が、短日月の間に他の民族を同化するなどと言ふことは、殆んど言ふべくして行ふべからざる事である。予は勿論、朝鮮民族が同化して全然日本民族と一になると言ふ事を必ずしも丸で不可能なりと輕々に斷定する者ではないが、今の日本人の狀態では餘程困難であると云ふことだけは之を認めざるを得ない。少くとも同化の爲めの各般の努力をせず、事毎に朝鮮人を蔑視し虐待して居るやうでは、到底同化の實を擧ぐることは出來ない。官憲も亦鮮民の同化を政府のみの仕事と思ふて民間の態度を傍觀して居るやうでは之も駄目だ。政府は從來同化の大方針を貫徹し完成する爲めに、曾つてどれ丈け内地人の訓練に努め且つ其反省を求めた事があるか。同化は決して政府のみの事業では無い。國民的事業である。官民合同の非常なる努力を以て後初めて成就し得べき事業である。予は先づ第一に内地人の心なき態度を見て、我國同化政策の前途を非常に危ぶむものである。其上官憲の方針に就て見るも、其努力は專ら形式の末に走り、實質に於て幾多の欠陷を見るのは是亦甚だ遺憾に

思ふ所である。政府は法律を以て、總ての學校に日本主義の教育を施さしめて居る。日本語は鮮人の最も重んじて學ばねばならぬ課目である。彼等は日本の皇室を自分達の君として讃へ、君が代の歌を奏し、日の丸の國旗を誇り、日本の歴史、日本の地理を自分達の歴史自分達の地理として教へられて居る。然し乍ら他の一面に於て、彼等は社會的にも又法律的にも日本人と均等の機會を與へられて居ない。公私共に事毎に差別的待遇を與へられ、甚しきは、同化政策の成功に取つて最も肝要なる、或は殆んど唯一の要件とも見るべき雜婚に對してすら、官憲は隱然反對の態度を執つて居ると聞いて居る。之は多く有る例であるか否かを知らないが、予の友人某は、朝鮮の婦人を娶らんとしたが、官吏として不穩當のことなりとの理由で上官の反對を受け、屆出しても受理されなかつたと言ふことである。又之も予の知人たる某鮮人の事であるが、彼は日本留學中、其才徳を見込まれて日本某良家の婿養子となり即ち籍を内地に有することになつたが、彼の職を朝鮮政府に奉ずるや、元の生れが朝鮮人たりしとの故を以て、朝鮮人並の待遇を受け、月給も少く今日尚判任官の低い地位に置かれて居る。一方には汝等は日本國民なりといひ、一方には汝等は普通の日本人と伍する能はざる劣い階級の者なりといふ。斯くの如くにして朝鮮人の同化を求むる、是れ豈木に緣つて魚を求むるが如きものではあるまいか。其處で、朝鮮人の同化といふ事の本來可能なりや否やは暫く別問題として、兎も角目下の狀態では、表面如何に同化の必要を稱へ、或は二千年來の歴史に照して、日鮮兩民族の人種學的近接を高調しても、又政府が如何に公私の學校に於て日本主義の教育を打ち込んでも、決して同化の實の擧らう筈はないではないか。否却つて教育すればする程、彼等は段々反日本的に傾くといふ事實が現にあるではないか。其處で、朝鮮人の開發は表向きは大に之を計ると言ひながら、本當に開發を計つたものか如何かと言ふ事は、段々當局者の間に一の疑問となつたと思はるる。即ち彼等を開發することは、却つて日本に反噬す

る者を養ふ事になりはしないかと疑ふやうになつたのである。此事は獨り官吏社會の疑問である許りでなしに、今では教育者自身の間にすら之を疑問として居る者もあるやうである。現に予の參觀した或公立の朝鮮人學校の校長は、「近頃朝鮮人は段々悧巧になつて困ります、日本の爲めにはあんまり諸種の事を敎へない方がよろしいと思ひます」と言つて居つた。朝鮮人の開發を計ると言ふことは、世間に對する表向きの義理合上之を言ふに止め、其實は彼等を何處までも愚にして置いた方が宜い、と云ふやうな考は僅に一部の有力な人の頭を支配して居ると思はるゝ。

然し右の如きは只一部の人の一時の考に止り、必ずしも日本官憲全體の本當の方針ではあるまい。朝鮮政府の施設經營に往々矛盾不統一あるの結果田舍には政府の趣意を誤り傳へて、學校は開いてもあんまり朝鮮人のエラクなるのは好まないなどゝ考ふるものもあるのであらう。兎に角日本政府そのものの方針としては朝鮮人の開發を計る爲めに現にいろ／＼の學校を設けて居るのである。高等教育の設備は今尚完全ではないけれども、然し之は殊更に不完全にして置くのではなくして、未だ朝鮮人に高等の教育を受けんとする熱望が薄いからである。只高等の教育を授けるとしても、專ら實業的若くは形而下の學問の方に學生を誘導し、法律等の理窟の學問には比較的遠ざからしめやうとの考はあるらしい。若し夫れ政治と言ふ學問に對しては現在の朝鮮政府は滑稽な程に神經過敏であると聞いた。日本に留學して政治法律を學んだ同好の連中が、曾つて京城に於て其研究を績くるの目的を以て一つの學會を作つた。其規則の中に本會は政治學、法律學、經濟學を研究するを以て目的とすと書いたのを、政治の事は君等は研究しなくてもよいと言つて、或高官は政治學の三字を削るべく迫つたと聞いて居る。之れなどは明白に在朝鮮の官吏が、日本政府の對鮮人教育の方針を誤解したものと言はなければならない。朝鮮人も一個の人間である以上、段々教育の進むに從つていろいろの方面に研究心を起す事は免れない。極めて不完全

な蠶業傳習所とか機業講習所とか、或は農事試驗所などで、少し許りの技術を敎へた位で彼等を永久に滿足せしめ得るものと思ふならば、是れ大なる誤りである。全然朝鮮人を敎育しないならば格別、苟くも朝鮮人に相當の敎育を與ふると云ふ以上は、中に政治法律を學んで日本の統治を批判する位のものゝ出來るのは當然である。自分の倅ですら、多少の敎育を與ふれば親爺の行動を批評するに至るではないか。

之と關聯しても一つ述べて置きたいことは、日本に留學する鮮人學生に就ての朝鮮當局者の考である。日本に留學して居るものゝ中には、總督府邊でこれこそ日本の用をなすだらうと眼星を着けて隨分と世話をして寄越したものもある。此等が日本に來ると必ず其結果が惡い。殊に東京に來ると殆んど例外なく惡くなると言ふ。惡くなるとは道樂をするとか放蕩をするとか言ふ意味では無い。朝鮮の政府から見て始末に終へぬ厄介なものになると言ふ意味である。反面に朝鮮人から云はせると、從來は猫の如く柔順で通つたものが、日本に來てより熱烈なる愛國的精神を得て歸ると言ふ意味である。何故に日本に來ると斯う皆熱烈な思想を抱くやうになるのか。之を或は日本に於ける敎育者の不謹愼に歸し、或は既に日本に在る過激なる朝鮮人の煽動によるとなすものもあるが、之れ皆皮相の見解である。弱國のものが强國の眞中に抛り出されると、初めは從來豫想しなかつた新天地の眼前に展開せるに驚き、次には之と故國の衰勢とを對比して一種の愛國的熱情に驅らるゝのは、何れの民族にも共通なる當然の道行である。斯くして土耳古には靑年土耳古黨が起つた。支那今日の年少革命の志士も、皆外國の留學によつて思想の洗禮を受けたものである。知識の開發が必ずそれ自身の地位の自覺を伴ふ事は當然の成行である。獨り不明固陋なる輩は、此自然の成行を覺らずして其原因を他に嫁せんとするのである。曾て慶親王は、支那の在日本留學生が殆んど悉く革命の思想を抱いて歸るのを見て、之を孫逸仙一派の煽動に歸し、其追放を伊藤公に求めた事があると聞いて居る。朝鮮當局者が朝

鮮留學生の態度に就て觀ふるの狀、恰かも慶親王の如きものあるは、予の甚だ奇怪とする所である。朝鮮人が日本統治の恩澤によりて段々立派な教育を受け、段々其知識を進むるに至れば、それ丈け段々悧巧になつて、從來のやうに御し易いものではなく、中には多少手におへないものも出來るのは致方が無い。中には無論革命的獨立思想を抱くものも起るであらう。當局者としては誠に厄介な事ではあるけれども、斯くなるは事物當然の道理として已むを得ないのである。聰明なる政治家は、此等の現象を或特定の原因に基く異常の出來事と見做さず、須らく之を事物當然の成行と初めから覺悟して、其上で之に應ずる適當の策を講ずべきである。之は面倒ではあるけれども、一番確かな道程である。一擧に之等の思想を撲滅せんとするが如きは、一見捷徑の樣ではあるけれども、實は極めて危險なる權道である。若し之を面倒と思ふならば、初めから朝鮮人を教育しなければ可い。初めから朝鮮人の開發を計らなければ可い。

なほ茲に一つどうしても見遁してはならぬのは、朝鮮人の眞の開發を計つて居るものは朝鮮に在つて日本人許りでは無い、其外に外人殊に亞米利加の宣教師が多くあると云ふことである。假りに日本政府が如何に鮮人の開發を不便とし、鮮人の開發を妨ぐる方針を貫徹しようとしても、他方に、假令其人數が僅かでも、鮮人の開發を計ると言ふ人道的目的の外他意なき若干の米國人が居ると言ふ以上は、朝鮮人は到底開發せられずして畢るものでは無い。而して我國政府は、德義上此等人道の戰士を朝鮮から全然放逐すると云ふ事は到底出來ないのである。勿論今日朝鮮の日本に合併せられた以上、彼等は日本の法律に從ひ、又日本官憲の監督の下に服して居る。けれども彼等の意氣込は、日本の領土たる朝鮮に此頃新たに仕事を初めたと言ふ者とは違ふ、自分等の朝鮮人開發の爲めに努力するもの玆に數十年、即ち鮮人教育と言ふ事業に就ては、自分達は遙に日本人の先輩であるといふ自覺を有つて居る。場合に依つては、彼等の多年事に當つて獲たる經驗は

優に日本の朝鮮統治を指導し得るものがある位に信じて居るものもあり、而して彼等の期する所は、只朝鮮民族が朝鮮民族として其天分を自覺し、其本來の才能を發揮せんことであつて、日本と撥を合はして行くやうな人間を造るといふが如きは、固より彼等の問題とする所では無い。此に於て、鮮人敎育の方針に就て確固たる根柢に立たない朝鮮政府の當局者は、段々此等の米國人を厄介視するに至つた。かくて米國宣敎師と言ふ問題は、現に朝鮮統治の前途に横はる一の大問題となつて居るではないか。尤も之が一つの大問題となつたのは、双方の誤解、感情の行違ひ等にも因るけれども、其根本は日本の國家主義と米人の人道主義との衝突なりと見て可いと思ふ。動もすれば偏狹に陷り易き國家主義と動もすれば茫漠として摑み所のなくなる人道主義とは、日本の内地に於て而も日本人同志の間に於てすら從來屢々爭はれた。又現に爭はれても居る。豈獨り朝鮮に於てのみ此爭あるを怪まんや。況んや朝鮮に於ては、一方には夙に米國人に接近して比較的ハイカラな、幾分西洋の自由思想にも觸れて居る士民、從つて日本の偏狹なる武斷主義に嫌焉たる、時には又米人の勢力を籍りて日本に楯を衝かうとする士民があるのに、他方日本の側は、徹頭徹尾日本萬能でヒタ押しに押して行かうと言ふのであるから、茲に兩者の感情の疎隔反目を見るのは實は免れぬ數であつたとも思はれる。只聰明なる政治家として、此場合と雖も之に處する圓滿解決の途は決して無いではないと思ふ。

朝鮮政府と米人との反目の根本の原因に就ては、世にいろ／＼の説があるけれども、予の觀察する所に據れば、主として日本官憲が基督敎徒の感情を尊敬しなかつたと言ふ事に歸する思ふ。日本當局の側では、米人は動もすれば土民を煽動して日本に反抗せしむるとか、或は日本官憲の命に從はざる土民を保護すると言ふ。朝鮮の如き官憲の威嚴を樹つることを最も必要事となし、一にも官吏二にも官吏で、官吏萬能を以て行かうとする處に在つて、些かでも抗命者を保護するが如き態度に出づるのは、善かれ惡かれ、之を日本統治

の妨害者と見做すのは又止むを得ない。併し乍ら米人は事柄の取捨選擇に注意せず、漫然と無賴の鮮民を庇ふものと言ふならば、是れ大に誤りである。然らば如何なる事柄に就て、米人は鮮民保護の名の下に日本官憲の所爲に干入し來るかと言ふに、最も普通の場合は安息日問題である。基督敎徒殊に亞米利加式の基督敎徒に取つて安息日を守るといふことは非常に大切な勤めの一つである。日曜日は之を聖日として專ら精神的修養に之を捧げ、俗事は一切之を執らないと言ふ事に矢釜しくきめられて居る。此點は米國宣敎師の最も矢釜しく朝鮮人の信者に敎へて居る所である。然るに此等の意味合を基督敎の事を全く辨へない日本の官吏は更に了解しない。其處で、例へば前に述べた道路の修築等の如き場合にも、日曜であらうが委細構はず鮮民に勞役を命ずる。すると所謂信仰の固い朝鮮人は、平常は如何に柔順な者でも、日曜日の勞役丈けは官命でも之に從ふ事は出來ないとてかたく拒む。官命に從はないのが不都合だと言つて官吏は矢釜しく叱言を云ふ。

中には官憲の威力を立つる爲めには、無理やりにも出て働かせねば氣が濟まぬといふ者もある。否職務上一旦發した命令は强行せねば濟まぬと善意に考ふるものもあらう。かくて此事を嚴重に迫ると、基督敎信者たる朝鮮人は、然らば一應宣敎師に聞いて見ると言ふ。之が官吏の癪に觸る種となるのである。我は一國の官吏であるのに、國家を代表しての命令に從ふか從はぬかを、宣敎師に聞いて見るとは怪しからぬといふて、先づ遇はぬ先きから宣敎師といふものに不快を感ずる。之も人情として致方はない。其上に宣敎師は「如何に官命でも日曜日に勞役するは神に對する一種の罪なり」と說いたと聞くに及んで、官吏の激昂は其極に達し宣敎師は、即ち日本の統治を妨ぐる厄介な者なりと言ふに至る。而して此憤慨は、宣敎師の土民に對して有する精神的威力が、遙に官吏のそれよりも大なる丈け、嫉妬的にも强くなるのである。つい先き頃も朝鮮政府で各私立學校の敎師の檢定試驗をするとか言ふことで、敎師の招集を命じた事がある。其際に政府の

方では、教師の便宜を考へて日曜日に集まるべき事を命じた。然るに二三の宗教學校の教師は、其招集に應じなかつた。之が段々問題となつて、遂に當局者と宣教師との談判となつたが、當局者の方では、折角仕事の妨げにならぬやうにと先方の爲めを考へて日曜日を選定し、自分達は休日を犧牲にして役所に出て來たのに、其に應じないと言ふのは我儘も甚しいと言つて非常に憤慨して居つた。が、米人の方では又、聖日を守るといふ事の宗教上如何に大切なるかを說いて、招集に應ぜざりし所以を辯じたのであるが、之が官吏の了解に入らない。ソコデ米人中には之れが分らないとは日本官吏の無識頑迷にも呆れ返ると慨嘆して居つた者もある。斯んな事が段々積り積つて結局双方反目の原因となるのである。之は何れにも惡意があるのではない。要するに日本官吏の對宗教觀念乃至政策が根本の禍を爲して居るのである。

一體日本人は概して宗教の民心に及ぼす力と言ふものを餘りに輕視するの弊がある。抑も世の中に宗教の眞理程之を信ぜざるものから觀て愚劣なものは無い。鰯の頭も信心からと言ふ事がある。然し乍らまた宗教の眞理程之を信ずるものから觀て絕對の尊敬を受くるものも無い。之を信ずるものに取つて宗教の眞理は生命にも換へ難い最上無二の尊貴なものである。國家の威嚴を以てするも、場合に依つては之を犯す事は出來ない。國家主義を振り廻して無理やりに信仰の放棄を迫つた結果は、生れ乍ら忠君愛國の念に敦き日本人ですら、曾つて天草の亂を起したではないか。宗教的眞理を以て國家よりも重しと見るのが日本立國の精神に合ふとか合はぬとかいふ議論は、自ら別論である。又日本の國家主義と旨く撥を合はさないやうな宗教の起るのは希望すべき事でないとかあるとかいふのも、亦茲に予輩の論ぜんとする問題ではない。兎に角茲に有力なる一宗教團體が儼存して、其信仰の奪ふ可らざるものある以上は、聰明なる政治家は、其信仰に對して力めて之を國家の目的と相反對する方に激せしめざるやうに注意するのが眼前當面の必要である。されば西洋

各國では、此等の宗教的信仰に對しては、一般に國家の方より大なる讓歩を認めて居るのである。兵器を執らずといふ固い信仰を執つて居るクエーカー宗徒に對しては、現時の如き非常の場合でも英國の新徴兵法は除外例を設けて居る。最も軍國主義の盛なる獨逸帝國に在ても、國中の極めて少數なるメノニーチン派に對しては、同じく其兵器を執らざるの信仰を尊重して、此派の信徒は專ら縫工廚夫等に役する事にして、斷じて銃劍には手を觸れしめない。然るに我國では昔から此等の點に於ては、餘りに亂暴にして、國家主義を眞向に振り翳して最深の信仰を最も露骨に拋棄せしめやうと迫つた事が多い。例へば天草の亂の當時、彼等の最も尊重して措かざる聖像を土足を以て踏ましめたるが如きは、最も拙劣なる宗教政策である。今日に於ても、宗教的信仰に對しては、世人は動もすれば最も信者を激せしめ、果ては棄鉢の暴擧に出でしむる樣な方法に於て、宗教的信仰を蹂躪せんとすることが多い。例へば宗教の命令と　天皇陛下の命令と衝突する時には其の何れに從ふやなどゝ言ふ問題を以て、宗教家を追窮するが如き卽ち之である。斯くして宗教的信仰を尊重するといふ事は、甚だ我國の政治家の間には諒解されて居ない。國家を代表して官憲が命令をすれば、宗教的信仰は何うにでもなるものと思ふて居る。固より宗教的信仰をして國家監督の埒外に跳梁跋扈せしむることの不可なるは論を竢たない。之を不可とするも、之に對しては自ら他に取るべき適當の途はある。只國家の威力を以てしても尙宗教的信仰を奪ふ可からざるを認むる以上、聰明なる政治家は、兎も角も之を激成せしめざることに注意するのが肝要である。國家の威力を弄して無理に宗教的信仰の壓迫を試むるが如きは、獨り平地に波瀾を生ずる所以たるのみならず、實に一時の波瀾を促して遂に永久に國家の禍たらしむる所以である。安息日に關しての困難なる問題は、實は今日まで日本の內地の基督敎會でも時々起つた事がある。只概して日本內地の基督敎會では、此問題を以て朝鮮に於けるほど基督敎の最重要件となさゞるが故に、多くの場合

に於て相當に窮通の途が見出された。然しピューリタンの系統を引ける亞米利加式の基督教に於ては、此問題は非常に重大に考へられて居る。それ丈け朝鮮に於て此事が矢釜しい問題になるのである。朝鮮の統治に成効せんとすれば此種の問題に就てもつと廣い考を有つことが必要である。我國官憲の對宗教方針が今の樣に盲目的である以上は、米人との反目は容易に治まり難いと信ずるのである。

尤も朝鮮に居る米人は多少の例外はあるが、大體に於て今日は最早日本官憲の勢力に屈して居る。近頃は段々に總督府の云ふことを餘り文句を言はずに聞き入れる樣になつた。然し乍ら之を以て日本國家の威力遂に彼等を屈したと思ふならば大なる誤りである。況んや米國人遂に日本官憲の思想に承服したりと爲すならば飛んでもない見當違である。予は身親ら基督教を信ずるものなるが故に、比較的に此等の外人より其本意を聽くの機會を有つて居る。予の觀察する所に據れば、彼等は我國官憲の如何に精神的乃至人道的事業に對する理解の缺如して居るかに實は呆れて居る。國運日に日に勃興して已まざる、而して前途に多大の光明を抱いて居る日東帝國の識者が、斯くも高尚なる精神的事業を理解するの見識の無いことは、世界の最も大なる不思議の一つであると或る宣教師は我輩に言つた。彼等は必ずしも我國の識者に精神的事業に同情するの念が無いとは言はない。只彼等の訴ふる所は理解がないと言ふのである。彼等は私立學校殊に宗教學校に對する朝鮮政府の最近の政策に對しては、內心不平と言はんよりは寧ろ其態度の野蠻なるに呆れて居る有樣である。斯んな事で本氣に朝鮮人の開發を計る積りかと怪んで居る者もある。斯く不服の點が頗る多いのではあるが、何分官憲の態度が餘りに嚴重であるので、初めは隨分反抗して見たけれども、迚も反抗し切れない、然ればと言つて從來の事業を捨てゝ朝鮮を去る譯にも行かぬといふので、遂に心ならずも官憲に屈したのである。彼等の或者はいふ。斯く官憲の干渉が矢釜しくてはトテモやり切れない。去ればとて自分達が事業を

中止すれば實に朝鮮人の前途が思ひ遣られる。朝鮮人の開發には自分達の滯在は絶對的に必要である。我等在らずんば此民を奈何せんと。彼等は自惚れかは知らぬが此位までに考へて居る。從つて如何に不便があつても到底朝鮮を去るに忍びないのである。而して留つて居る以上は不本意でも朝鮮政府の意を迎へない譯には行かない。其處で、彼等は今日外見上全然我國政府と撥を合はして居るのであるが、然し之を以て朝鮮政府が宗教教育の問題に就て全く彼等を壓倒して最後の勝利を得たりと思ふならば、之れ大なる誤りである。宗教教育に對する方針に就ては、日本内地に於ても議す可き事は尠くないと思ふが、朝鮮に於ては、外國宣教師が多年深い根柢を布いて居る丈け、一層此問題の講究が必要であると信ずる。

終りに此問題と關聯して、我々のも一つ甚だ遺憾に堪へないことは、精神的事業に對する理解と興味との缺如は、獨り之を官憲に認むる許りで無く、在留民全體に一層其甚しきを認むることである。抑も純粹なる精神的事業は、純粹なる人道的精神に基くものであつて、一面に於ては國家を超越して居る仕事である。此の國家を超越したる人道的經營に於て、眞に兩國民族の相互的理解と調和とを見るに非ずんば、眞に國民としての調和合同の實は決して擧るものでは無い。國家の目的が超國家的經營の方面から達せらるゝといふとは、一見不思議の如くであつて、實に深長なる意義の存する所である。何故なれば國家的經營は、兎角彼我對立の色彩が鮮明に過ぎて、彼と我との間を釋然融和せしむるに適當なものではない。故に國家の名を以て起せる施設によりて朝鮮人を同化せんとするが如きは、却て寧ろ彼等の反感を挑發するに止ることが稀でない。故に彼我兩民族を根本的に融和せしむるためには、政府の施設國家の經營の外に立つて、更に幾多の人道的運動が此間に起ることを必要とする。然るに此點に就ては日本の政府並びに日本の志士仁人の努力は餘りに行屆いて居ない。是れ日鮮兩民族の關係の改善の上に決して喜ぶべき現象では無い。支那や朝鮮に於て、在留商

民が私利を圖つて土民を困めるの狀は、日本人も外國人もさう著しい差は無いと思ふのであるが、然し外國人の中には時々多年支那や朝鮮の內地に入り込んで、一身を犧牲に供して誠心誠意、土民の爲めに盡くして居るものが尠くないので、土人は即ち殆んど先天的に此等外人の尊敬すべき事實を見聞して居るから、他に少し位惡い奴があつても全體として深く之を意に介しない。日本人側には之がない。故に少しの事でも直にボイコットなどの種になる。予は今度の旅行で吉林に行つて聞いた話であるが、現時吉林の聖者と言はるゝ英人グレーク氏は、福島中佐(今の大將)が單身騎馬に鞭ちて西比利亞を横斷せるに先つこと十年、而かも徒步で英國から吉林へ來た人である。財產も何も無い。漂然として吉林に足を駐め、一方には自分の衣食の途を計り、他方には其學び得たる醫學を應用して土民の爲に盡し、今日では醫者として又先生として此地方に非常な尊敬を博して居る。高大夫(高は同氏の支那流の名前、大夫は醫者の意)と言へば、同地方に於て宛然(まるで)神樣のやうに尊敬されて居る。而して土民の之に心服せる、中には何國の人と言ふを問はずして之に師事して居るものも尠くない。斯ういふ人が偶々一人でも二人でもあれば、他に英人が少し位の亂暴な事をしても、土民は此と彼と差引してそれ程排英の思想に驅られ無い。最も多く入り込んで居る日本人の中には、不幸にして斯かる人道的の戰士は一人も無い。行つて居るものは我利を計る一方の連中である。斯くして土民の心服を得んとする、其不可能事たるは初めより明かなる所ではあるまいか。併し之は滿洲の話である。朝鮮には日本宗敎家の活動するもの絕無ではない。けれども、今日のところ尙未だ米國のそれの如く有力なものではない。而かも我國の官憲は、心から之を尊重し且適當に奬勵するといふよりも、寧ろ之を利用せんとするの態度に出づるが故に、其効果は十分に擧がらない嫌がある。精神的事業の經營者が官憲から補助を貰ひ、官憲の直接間接の指圖を受けて居るやうでは、眞の人道的事業の發達は望まれない。此と彼と全然沒交涉であ

ることを望む意味では無いけれども、少くとも官憲が、讓りて精神的事業の經營者に教を乞ふといふ態度に出づる様にならなければ、眞の成功を見ることは斷じて出來ないと思ふ。

(四)

滿洲に於ける日本の經營については、從來隨分植民學者等より論議されて居る。永井柳太郎君の本誌一月號に於て、三頭政治を批難せられたる議論の如きは、近來最も傾聽に値するもの丶一つであらう。關東都督府と南滿鐵道會社と外務省の監督の下にある領事と、各獨立の管轄區域を持つて居る事は、其間に如何に調和の途を講じて居るとは言へ、幾多の不便と繁雜との種となつて居る事は、爭ふべからざる事實である。然し大體に於て之を大觀するならば、滿洲の經營は着々成功の緒について居る事は、旅行者の直ちに看取し得る所である。而して其功の一半は確かに之を滿鐵の廣大なる組織と、其組織の巧妙なる運用とに歸せざるを得ないと思ふ。只滿洲の經營に於て更に十分の成功を收めんとするには、尚日本の官民両社會に向つて多少の反省を求むる餘地はあると思ふ。

滿洲に於て直接に日本の勢力の及ぶ範圍は、關東州と滿鐵の附屬地とである。此地域内に於ては、絶對に日本の主權が活動するのである。而して支那自身の領内で財產の保護の十分行屆かざることを見た商人、殊に外國貿易に關係ある支那の豪商の中には、却て日本の管轄内に居る事の自己の財產の安全なる所以を見て此處に移り來るものも少くない。然らば問ふ、日本官憲は此等の有力なる支那人來住者に眞に十分の滿足と安心とを與へて居るかどうか。絶對的の比較から言へば、無論彼等は支那官憲の下にあるよりも、日本の勢力の下にあるを以て遙かに安全なりと自認して居るであらう。けれども彼等の心持が、果して十分に滿足して居るかどうか。彼等は日本の支配の下に在つて非常に居心よく感じて居るだらうかどうか。此等の點に日本が十分成功するに非ずんば、未だ以て滿洲經營の成功を談ずることが出來ない。

加之、日本の滿洲經營は、只日本の專管區域たる少許の地域內を、巧く治めたといふだけで終るのではない。卽ち關東州から始まりて北、長春に終る細長い地域ばかりが經營の手を伸ばすべき全部ではなくして、更に其兩側に廣く經濟的に發展して行かなければならぬ。政治的の勢力範圍は極めて微々たるものであるけれども、經濟的の日本の發展すべき範圍は更に大なるものであらねばならぬ。卽ち日本の實力が滿洲全體は勿論蒙古の奧までにも及ぶやうにならなければ、我々の滿洲經營の理想が完全に實現されたものと云ふ事は出來ない。然らば滿洲に於ける日本統治の現狀は、果して此理想を實現するに適應するものなりや否や。之れ予の玆に問はんと欲する要點である。

第一に滿洲經營の大理想を實現せんと欲するが爲めには、我々は支那人をして日本に滿洲を政治的に併呑するの野心ありなどゝの疑念を起さしめざるやうに努むる事が必要である。露骨に日本の利益といふ事のみから判斷を下して、暫らく支那民族の思惑を度外に措くならば、日本は必しも滿洲蒙古の併呑を敢て厭ふものでは無い。然しながら領土の削減は獨立民族の自負心を傷くると大なるものであり、就中支那人は滿洲に就ては極めて神經が過敏になつて居るから、我々は安穩に對岸の大陸に發展せんとするには、先づ此野心を放擲せねばならぬ。支那人自身では滿洲の開發は出來ないとか、又は日本が之を統治した方が實際支那人の幸福になるなどといふやうな議論は、少くとも支那民族の心理を無視した議論であつて、又我國の平和的發展を禍する議論である。政治的獨立とか、國家的體面とかいふ問題は、民族の感情に深き根柢を有するもので、物質的生活の利害の打算には拘らざるものである。殊に最近の支那の民心の傾向は此等の方面については最も神經を過敏ならしめて居る。之れ一つには我日本の勃興に刺戟され、殊に滿洲の地は一方に朝鮮を通じて、一方は關東州滿鐵附屬地によつて、絕えず强力なる日本の壓迫を感じて居るが如き外觀を呈するからであらう。曾て第一革命の當時、南方の革命派は、袁世凱の言

ひふらした日露協約して滿蒙分割の野心ありとの浮說に動いて、敢て北方の妥協に應じて革命の目的を半途にして捨てたことがある。今度の革命でも滿洲に於ける日本の野心といふ流說は、如何に南方革命派の鋭鋒を鈍らしたか分らない。今日南方の革命派は、頻りに日本の好意に便らんとして居りながら、一方に於て彼等の間に、最近殊に韓國痛史とか安重根先生傳なんど云ふ本が盛に讀まれて居るのは、支那の時局を觀察するもの丶見遁してはならぬ面白い現象である。革命運動に熱中するも、朝鮮の運命に同情して同胞を警戒せんとするも、皆之れ愛國の至情より生れ來るものである。安重根の傳を持囃すは必ずしも日本を難ずるの意ではなからうが、只亡び行く故國の爲めに一矢酬ひたる其壯烈の義に同情して、同胞の愛國心を喚び起さんとするのであらう。狂熱的ではあるが、兎も角愛國心の勃興は現代の支那を論ずる者の見遁かし能はざる所である。從つて現代の支那の民心は、一面から言へば領土の保全、主權の獨立を主張し、他の一面から言へば、外權の侵入に對する强烈なる反抗を喚び起すのである。今は革命の騷亂中であるから、ハッキリと現はれては居ないやうであるけれども、現代の支那の愛國者の血管の中には、確かに一轉すれば排外的精神となるべきものが流れて居るに相違ない。而して外權の侵入を受くべき第一の地域は何處かと言へば滿洲である。從つて彼等の排外思想の鋭鋒に第一着に觸れべき運命を有するものは、取りも直さず日本である。其上に、動もすれば日本官民の等閑に附する所にして而かも予輩の頗る重大事と考ふる所の者がも一つある。それは朝鮮人の亡命して今日滿洲に居るもの丶少からざることである。鴨綠江の對岸より間島にかけて、昔から支那人と雜居して居る朝鮮人の事は暫く問題外に措く。近時朝鮮が日本の支配に歸してより、日本の統治に不平であり且つ官憲の壓迫を苦として、滿洲各地に亡命せるもの其數決して少くはない。之に關して精確なる計數を示すことは出來ないけれども、奉天には此等鮮人の過激なる運動の中心點がある。其他各地に散在して流離放

浪の生活を送りつゝ、寄り／＼不穩の企てに頭を惱ましして居るものゝ少からざる事を、予は或事情より知つて居る。想ふに此等のものは、必ずや支那人の間にも朝鮮に於ける日本の横暴といふやうな事を大に誇張して說いて居る事であらう。斯くして無智なる支那人の間には、日本の支配の下に服することの如何に慘めなるものであるかを、迷信的に考ふるやうになりはしないか。現に去年の日支交渉の際、北淸一般に排日心をそそる爲めに、策士は朝鮮に於ける日本の暴狀を說くを以て其最も有効なる手段となした。其爲めに日本官民の暴狀を示す各種の繪を撒き散らし、宣講所などでは盛に之を市民に說明したものである。其繪の中には例へば朝鮮人の女が赤坊を連れて汽車に乘つた。偶々子供が床に大便をした。車掌は大に怒つてサン／＼に母子をなぐり、且つ母親をして手づから大便を浚はしたといふのがある。又朝鮮では人民の反抗を絕對的に禁ずる爲めに、總ての朝鮮人に一切の刄物を持つことを禁じた。其處で朝鮮人は大根や豆腐を買つても之を切ることが出來ない。日本官憲は町の角に大きな爼板を据ゑ着け、其處に一挺の庖丁を備へ、其庖丁を鐵の鎖で繋ぎ、一人の憲兵を監視に付けて置く。附近の妻君達は皆其處へ行つて、大根や豆腐を切るといふ繪もある。然う云つたやうな繪は、固より荒唐無稽ではあるが、無智の人民をして如何に日本憎惡の感念を起さしむるか分らない。若し今度の日支交渉にして日本の要求の如くなれば、即ち我等の運命も亦此朝鮮人と同一であると云つて、いたく民心を激成せしめたのである。斯う言ふ風に、朝鮮を引合に出す丈け、朝鮮の事は支那人の最も氣にかける所である。是れ一には朝鮮人の來りて日本の暴狀を訴ふるものあるにも因るが、又一つには朝鮮と境を接する滿洲の事に就て支那人は非常に神經過敏な爲めでもある。それ丈けまた滿洲に於ける日本官民の態度は、支那の他の地方に於けるよりも一層愼重を要するのである。然るに滿洲に於ける我國官民の態度は如何樣であるか。日本人が多數入り込んで居る丈けそれ丈け、甚だしく不謹愼を極めて居るでは

あるまいか。是れ予の滿洲に於ける我國終局の成功の爲めに深く遺憾とする所である。

尤も無責任なる一部の好事者は、そんなに遠慮せず**に寧ろ一擧に滿洲を取つて仕舞へなど〻放言するもの**もある。然しながら漫りに滿洲に政治的野心を逞うするといふことは、決して滿洲に於て收め得べき實益を十分に收むる所以ではない。滿洲に於て我等の主として得んとするものは、經濟的發展である。而して經濟的發展は支那人と利害感情を一致せしむることによつてのみ、之を遂ぐることが出來る。彼を利し、己を利し、彼と我と心から提携することは、侵略主義者からは白々しいお世辭のみと思はる〻かも知れぬが、之は陳腐ではあるが何時如何なる場合にも動かすべからざる眞理である。而して滿洲に於ては、都督府滿鐵等の努力によつて、今日日本人の經營の歩は着々と進んで居る。今のところ支那人との關係もさう惡い譯ではない。故に予は滿洲に於ける現狀に對しては、固より甚しい不滿を抱く者ではないけれども、然し今後益々大**に發展せんとするが爲めには、一方に又大に警戒して例の政治的野心など〻云ふ疑惑を一掃すべき必要があると思ふのである。之を怠りては今後に於ける日支親善の發展は決して十分に成功するものではない。**然るに今日日本官民の爲す所を見るに、或は時に支那人から日本の不當なる野心を疑はる〻の種となるやうな事を輕卒に行つて居りはしないか。他日若し日本の經濟的發展が、其効果を收むる上に於て九仞の功を一簣に缺くといふやうな事が起れりとすれば、それは必ずや此方面から來るのであらうと思はる〻やうなことが、今日多少行はれては居ないかと思はる〻である。斯く論ずるについては、固より多くの實例の之が證據となるべきものがある。際限がないから一々は擧げない。只其一つ二つを擧ぐれば、日本の勢力範圍と條約で極めて居る地域以外に、日本人の保護を名として警察の派出所を造つたり、又其警察官が偶々土人に襲はれたといふやうな事を名として、直に兵隊を送つて其處に永久の屯在所を造るが如き、是れである。之等は勿論日

本人の生命財産の保護といふ點から言へば是非もないことゝは言へ、條約を無視し、支那の主權を侵害する所以たることは、明白一點の疑を容れない。尤も支那自身には完全に秩序を維持するの實力を備へて居ない爲め致方ないと泣寢入つては居るが、心中では恐らく密かに日本の野心を疑ふて居るだらうと思ふ。尤も支那に實力がないので此處置に出づるも亦已むを得ずとすれば、日本の出やう一つでは、何等支那人の疑惑を挑發する事なくして、便宜上此處置に出づるを承認せしむることも出來ない事ではなからう。けれども從來、例へば日本側で雇つて居る支那人の巡査が、日本人に害を加へた支那人を追跡して、遂に支那の管轄區域に立ち入つて之を捕まへ、其場合支那側の巡査から故障を申込まるゝにも拘らず、日本の權力を笠に被つて、其犯人を日本官憲に引致し、それから犯狀を具して初めて支那側に引渡すといふやうに、公然支那の警察權を蹂躪さして顧みざるが如き、又去年の日支交渉の際に、日本兵士が殊更に支那兵に喧嘩を吹きかけ、如何にも日本が支那より挑戰せられん事を希望するが如き態度を示したるが如き、從來實は色々の機會に於て、支那人をして日本の野心を疑はしむるやうな材料を澤山に供給して居る。從つて今日實は日本の公正なる態度を支那人に信ぜしむることは、餘程困難な事になつて居る。此等は固より我國の中央政府の意思にあらざることは、固より言ふを俟たない。外に居る者の不謹愼なる言動に基くものなりとはいへ、此等を此儘に放任するのは、益々支那人の疑惑を增さしむるのみであつて、遂に日本の經濟的發展の上に、隱然として拔くべからざる障礙を現出するに至る事はあるまいか。

第二に滿洲に於ける日本の成功を見るに必要と思ふのは、支那人をして日本人の經濟的經營の能力を信ぜしむるとであらう。此點についても我官民の態度に甚だ遺憾なことが多い。今日滿洲に入り込んで居る日本人の數は極めて多い。大體に於て彼等は何れも成功してをるといふ可きであらう。けれども滿鐵とか或は三井とか大倉とかいふ、內地でも名のある大事業家を除

[redacted]といふに、甚だ心細い。故に支那人から見ると、滿洲に來てをる日本人の仕事振りは、極めて小規模のものであつて、少しも心服するに足るやうな雄大な計劃がないといふ事になる。斯くして支那人は心中密かに日本人を輕蔑してをると思はるゝ節がある。事業の經營は、露西亞人は成程日本人以上に拙かつた。けれども露西亞時代の滿洲經營の規模は極めて雄大であつた。露西亞が作つた旅順の建物を、今日露西亞人に數層倍の多數を占むる日本人が、みな使ひ切れないで持て餘して居るではないかと笑つてをる支那人もある。此批難の當れるや否やは、予の保證せざるところなれども、支那人は兎角斯んな風に日本の經營振りを見てをる。それに醜業婦が大部入り込んでをる。下層な其日暮しの商賣人も頗る多い。殊に近頃最も厄介な問題になつてをるのは、表看板を賣藥業として裏でモルヒネを密賣して居る連中である。聞くところによれば、最近賣藥業は最も產を興し易い仕事となつて居るさうだ。然し[redacted]にあるとの事である。これについては支那側の故障も隨分矢釜しい。嘗て某市の日本官憲は之を取締る意味で市內の日本人賣藥業の者七十餘人を招集して、不正營業の廢止を謀つたに、此密賣を止めても飯の食へるものは其中僅かに十人しかないといふので、手のつけやうがなかつたといふ事を聞いて居る。之などは啻に日本人の輕蔑さるゝ一因となつて居るに相違ない。又も一つ支那人の言ふところを聞くと、彼等が折角日本專管區域に來て安心して商賣を始めると、直ぐに日本人が來て其利を奪はんとする。働きもしないで、我々の利益の奪取ばかり考へて居るとつぶやいて居る。斯くして支那人は一般に日本人の經營能力を疑ひ、少くとも彼等は共同して事業を經營する相手としては一樣に皆多大の不安を感じて居る。今日彼等は自家單獨の經營では橫暴なる支那官憲に對して其財產を保護するの途がないのと、又最新の學理を應用して經營せらるべき工業等については、不幸にして彼等に技術的能力

を缺いて居る等の理由で、已むを得ず日本人と共同經營するの措置に出づるも、將來此等の不便が除去されるの時期に達せんか、彼等は斯くても尙甘んじて日本人との協同を續くるだらうか。日本人にして眞に滿洲の經營に成功せんとならば、此等の點について大に反省するところなくてはならぬ。利を追うて其日〳〵を送つて居る商賈人其人に、此反省を求むるのは無理としても、滿洲經營の大方針を決める幹部の人々の間に少くとも此邊の用意はあつて然るべきことゝ考ふるのである。

第三には支那人をして日本官民の公正を信ぜしむること亦非常に必要である。利を追ふに急なる者は、動もすれば公正の規度を超える。場合によつては、多少不正な事をしても儲けたいといふのが人情である。此點については實は支那人の方が或は日本人よりも遙に先覺であるかも知れぬ。併し玆に一つ考へねばならぬ事は如何に貪欲な人でも公正なる裁斷の前には結局不平なく服從するものであるといふ事である。ソコで支那人を心服せしむるには、別に當年の露西亞の執れる政策の如く彼等に過分の利便を提供することは必ずしも必要ではない。只日本の官憲並びに商民が、常に彼等に對して公正の態度を執り、均等の機會を與ふれば結局に於て彼等をして安んじて日本の經濟的經營を歡迎せしむることが出來ると思ふ。然るに滿洲に在留する日本人の間には、此點について隨分誤つた考を有つて居る人が少くない。例へば日本の勢力範圍内に在住する支那人について、多くの日本人は、彼等は日本法權の保護の下に在るのだから、少し位日本人よりも割の惡い地位に置いても差支はないといふ考を抱いて居る。之れは滿鐵の附屬地などで絕えず起る問題である。例へば在留支那人には發言權は與へないで、割高の金のみを分擔させるとか、或は支那人の經營して居る事業に無理に割り込んで利益の分配に與るとか、或は或有利なる事業を共同經營する際に、日本人が無理に支那人を壓倒して餘計の株を持つとか此類の事は頻繁に起ると聞いて居る。此等日本人の考を是なりとして裁

[illegible]せば支那人の心中必ず日本當局の不公明なる態度を憤るだらう。偶々官憲が日本人の要求を非として公正なる裁斷をなせば、日本人は或は官憲の態度軟弱なりとか、或は支那人に阿つて同胞の利益を削ぐとか色々の難癖をつけて盛んに攻擊するのが常である。滿洲の領事は外交官にあらずして、口矢釜しい田舍の村の村長の如きものであると言はるゝ所以はこゝにある。

之に類する考は、獨り商人許りではない。時に官憲によつても亦示さるゝ事もある。滿洲では此頃は跡を絕つたが、軍隊の駐屯して居る處では今日でもよく同樣の事を聞く。之は滿洲の事ではないが、夫の青島では、戰後間もない事であるとはいへ無智の兵士は一錢を與へて支那の店から二錢三錢の物を持つて來て、得意氣に仲間に吹聽して居るとの事だ。兵卒が此亂暴を敢てするはまだ仕方がないとして、時には將校迄が兵に物を買はするとゝ安くていゝとて、平氣に支那細民を窘しめて居るものもあるといふ。之などは全體から視て極めて瑣々たることではあるけれども、一事が萬事、此精神が即ち日本の植民的成功を裏切るのである。深き注意を要するのである。之も青島での話であるが、税關に於ける課税上の事に關し、軍政時代には價格廿圓以下のものは無税として取扱つて居つたが、支那側に税關を返してからは、此持例を廢して一般の支那税關の規則に照して相當の税金を徵收することにした。支那の税關としては之は當然である。然るに之に對して商人は勿論、官憲までが、日本人の特殊利益を無視する行動なるかの如くに言ひ觸らして、盛に立花税關長を攻擊をしたと聞いて居る。又軍需品は總て無税なりといふので、普通商民の請托を容れて、ドン／＼軍需品たるの證明を與へた官憲もあるといふ事だ。是れ恐らくは少しでも日本人の利益を計つてやらうといふ善意に出でたものではあらうが、植民地經營の大方針から論ずれば、最も愼むべきことに屬する。日本人を利するが爲めに、相手方に損害を與ふるを省みざるが如きは、其損害の程度が極めて微弱なるものであつても、

相手方の感情に及ぼす影響は極めて大なるものなることを知らねばならぬ。之は青島の例を取つたのであるけれども、之に類する考は滿洲の官吏の間にもないとはいはれぬ。

凡そ植民的經營に成功するものは、一視同仁殆んど同籍の差別を忘れて懸るの心掛がなければならない。我に於て誰彼の差別を忘れゝば、相手方も亦我の外人たることを忘れてかゝる。前にも述べた吉林聖者グレーク氏を、土民がテンデ何國の人なるかを問はざるが如き程度に至らざれば、眞の提携調和は出來難い。此點に於て我同胞は餘りに自己を他と區別するの意識が强烈である。此事自身のいゝか惡いかは別問題である。然し苟も海外發展に成功するを以て、帝國將來の必要の國是なりとする以上、彼我の區別を忘るゝまでに公正なる態度に出るといふことは極めて必要であると信ずる。

次號の本欄には**河津法學博士**の

「我國民經濟生活の暗黑面」

と題する論文掲載せらるべし

歐米最近劇壇の精細なる鳥目観

文人俳優生活の生きたる記録！

坪内士行先生著

最新刊

西洋芝居土産

四六判極美装幀
全一冊五百二十頁
三色版一寫眞版十入
定價壹圓四拾錢
郵税八錢臺樺鮮支十二錢

著者は我が劇壇の泰斗逍遙博士の嗣子として、其半生を演劇の研究に捧げ來つた人である。演劇視察の爲歐米に遊ぶ者は多いが、著者の如き豊富なる蘊蓄を抱いて前後七年の長き劇術の一途に精進し、親しく彼地文壇の名家と交り一流の名優と結んで自ら其の舞臺に立つた經歷を有する人は眞に空前である**本書は著者が此希有な滯歐七年間の見聞を一括**して**歸朝最初の土産**として**提供**されたる者**奇警適切を極めたる三十餘章の記述悉く是れ著者が貴重なる實驗より得來れる活文字ならぬは無い**歐米最近劇壇の精細なる鳥目観、文人俳優の生活の生きたる記録として本書の價値は**今日に於て絶對的**なるべく、東西の演劇を談ずるものは勿論、苟も演劇を愛好するもの、座右必ず本書なかるべからずと信ずる。

（中付一の一）

東京神田 **富山房** 振替五〇一

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

册圓の處特價金壹圓送料拾貳錢頗ぶ高評五版亦如飛

◉山口◉博士◉講述

催眠術秘書

本書は各府縣警部郡長醫學士辯護士師範校長に一人册圓で敎へた秘書也今回特價一圓送料十二錢で何人にも傳授す本書は從來世間ありふれた詐欺的の書と全然異り何人の心をも身體をも自由自在になし得る書也之を惡用する時は婦女等に對し危險なる事をも爲し得るにより本書讀者は之を惡用せず且他人に敎へぬと云ふ契約書を要す書式簡略也▼本書讀者の必爲得可事▼月經不順▼無痛分娩▼ヒステリー▼男女色情變更▼リョーマチス▼齒痛▼胃痛▼肩凝▼不眠症▼神經痛▼テンカン▼有意運動支配▼强直狀態▼感覺變更自在▼精神變更▼禁酒禁煙▼記憶增進▼惡少年矯正等其他數百種類

東京市神田區金澤町四帝國催眠學會

會長 生方賢一郎

振替東京三〇三六二番

史學研究者必携

空文年表

全册一 定價金五拾錢 郵稅金八錢

上下三千歲に亘る各年代に、重要なる史的事件を記述せる外、各年代每に必らず餘白を存して史學研究及び自習の際自ら研究し若くは記臆し置くべき事件を自ら書き入るゝことを得る便を圖れるは本書獨得の特長にして苟も史學に志あるものゝ一日も缺くべからざるもの也

東京市本郷區西片町十番地

中央公論社發行

(中付一の二)

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

最新刊

文學士鈴木暢幸先生著

謠曲講義

正價金壹圓參拾錢
小包送料金八錢

（中付一の四）

四六判特製函入
紙數五百二十六頁

謠曲は近世藝術の精粹なり寶庫なり

●云ふと雖も眞に文辭を正解して其眞味に徹底せる人士幾何かある大和田翁逝いて斯界の唯一人たる鈴木先生學識該博斯道の造詣最も深く特に佛教文學の難關に至りては之が祕鑰を有する者天下先生を措いて他に誰をか求めん本書は實に先生か十餘年潛心研鑽の粹を萃めたるもの講義は叮嚀懇切と簡明平易とを兼ぬるが故に何人も之を繙いて其妙趣を味ふを得べく併も從來學者の誤解を是正し亞流の俗説を啓蒙したる處其數を知らず本書を閲讀せずして誰か謠曲を知れりと高言するを得んや斯道を談ずるの學者教育者は勿論紳士淑女一般藝術家と雖も苟も志ある人は必ず一本を座右に備へて日夕の指導を待たざるべからず

内容目次

回文學博士 井上圓了先生述回

最新刊

哲窓茶話

菊半截形 紙數二百八十六頁
正價金四十錢
郵送料金六錢

本書は博士が朝夕時の宜しきを計つて茶會を開き、道德若くは知識に關する談話をなし、或は遊戲し、或は談笑し、愉快にして且つ親密なる間に、其の德性を函養し、實學の練習にも資することゝしたるものなり。青年學生の以て好伴侶たらん。

回文學士 坂元雪鳥先生著

再版

謠稽古の心得

大和綴中判高雅裝幀
口繪コロタイプ三葉

正價金七十錢
郵送料金六錢

初心者には懇切叮嚀な師範となり老巧者には忠實親愛な好伴侶となる

發行所 東京日本橋區鐵砲町 振替壹五〇五六番 磯部甲陽堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

今後の經濟戰の計畫と我國の態度

法學博士 戸田海市

一

歐洲戰爭は今日までの經過に徴すれば、今後多少の進退はあつても、決定的勝敗を見ずして引分けとなる見込が多い。若し此の大戰爭が此の如く何れの側にも不滿足な結果に了ることゝなれば、双方疲弊して意氣阻喪せざる限りは、更に經濟的戰爭を行ふに至るの危險が多い。近來獨墺の間には多年の宿題とも云ふべき關税同盟の計畫が進行しつゝあると云ふことであるが、獨逸は此同盟に由て戰後の恢復を圖るに必要を感ずるのみならず、今日の機會を逸しては中歐を結束して之を支配すると云ふ年來の志望を達することが容易でなく、また墺匈は戰爭の打撃の甚大なる爲め頗る意氣銷沈し、獨力にて戰後の恢復を圖るに不安を感ずるのみならず、墺國も匈國も共に兼ねてより國内の異種族の闘爭軋轢が激甚な爲めに國運の前途を悲觀して居たから、開戰以來獨逸に依頼するの念力益强まつたやうである。故に此關税同盟の成立は必しも難事ではあるまい。此同盟が成立しなければ近隣の諸小邦と經濟上の團結を爲すことも困難である故、恐らく獨墺間の關税同盟問題は餘程進行して居るであらう。

更に聯合國側に付て見るに其間の政治上及經濟上の結束が日一日に緊密になり、遂に今回巴里に於て經濟同盟會議を開て戰時及戰後の經濟財政上の結束に付き協議することゝになり、我國も其の勸誘に應じ委員を特派して協議に參加することゝなつたが、世上傳ふる所に由れば、此會議の議題の中に戰後聯合國及中立國市場に於て聯合國生産品の地歩を鞏固ならしめ、且此等市場に於て敵國品の侵入を防遏するの手段を講ずる

と云ふ一項目がある。蓋し聯合側の採り得べき經濟的戰爭の方法は一樣ではない。獨墺に對して資本の供給を絕つとや、獨墺人の聯合諸國の領土内に企てる企業を妨げることや、其船舶が聯合國内の港灣に寄航することを妨げて其の海運業を衰退せしめ、以て其の海軍の勢力を減殺するが如きも一の方法であるが、更に重要なるは獨墺輸入品排斥の關稅團體を組織することである。只だ聯合側の諸國は互に政治上經濟上の事情を異にすること頗る大である。故に其の關稅團體は獨墺間の如く之を關稅同盟とし、内に在つては成るべく通商取引を自由にし、外に對しては單一の關稅區域となるが如き方法を採ることは不能であり、之よりも一層結束の疎漫なる關稅聯合となるであらう。即ち聯合各國は略ぼ從來の如き貿易關係を維持し、之に加入することを欲せざる中立國の輸入品にして聯合國相互の間にも多大の輸出入が行はれ、從つて聯合國の或者と中立國とが競爭の地位に立つ所の貨物に限つて或程度まで稅率を高め、之に由つて聯合加入國に特惠を與ふることゝし、更に敵國側よりの輸入品に對して聯合各國に於て一樣に之に重稅を課すると云ふが如く、特惠稅中立國稅及敵國稅の三種の關稅を設けることゝなるであらう。

聯合側に於て此の如き關稅團體の成立する見込ありやと云ふに、元來今回の戰爭は英獨爭覇の結果とも云ふべきものである。故に多年自由貿易を採りし英國も今後は保護主義の採用を必要とする所の關稅團體の組織に付て必しも强き反對は起るまい。現に開戰以來同國は種々の保護政策を行ひ、中には永續の計畫を以て行はれて居るものもあり、又戰爭に由る輸入の杜絕に乘じて新たに起つた事業の中には戰後に保護を要するものも少なくない。加之戰後の財政を維持する爲めにも輸入稅は必要である。此の如く一面保護主義の採用を促がす種々の原因あると同時に、他面には兵力の戰爭と異つて此經濟戰に付て英國は獨逸に比して有利の地位に立つて居る。故に關稅團體の組織に付て有力な反對論の起るとは明かであるが、結果輿論は之を是認

支配權を振ふこと丶なれば、英國の如く世界的植民地を有せざる佛伊の兩國は經濟上の孤立を免るゝ爲め進んで排獨的團體に加入するであらう。只だ露國が之に加入することを欲するやに付ては政治上より見ても疑問がないではないが、特に經濟上より見れば露國は農産物輸出國であつて此輸出に由り莫大なる外債の元利支拂を爲すことが出來るのであるが、其の主たる需要者は獨逸である。併し獨逸が墺匈と關税同盟を結び、更にバルカンの農業國を其の支配下に置くときは此等諸國の農産物が獨逸の市場を占領する故、露國の農産物は獨逸の市場を失ふて他に其販路を求めるの必要を生ずるのであるが、英國を除ては獨逸に代はるべき大市場はない。加之佛英は獨逸よりも既往に於て露國に對する大債權者であるのみならず、戰後に於ても此兩國は露國の恢復に必要なる資本を供給するの餘裕を多く存して居る。故に露國は中立を守つて双方より冷遇せらるゝの不利を免れんとすれば聯合又は同盟の何れ

海に出口を求めんとする露國年來の國是を抛ち、又國防の獨立に必要なる諸般の工業を國内に發達せしむることも餘程困難となることを豫期せねばならぬ。換言すれば獨逸の政治上の勢力に屈從するとに甘んぜねばならぬ。成るほど露國官民の間に今尚は親獨的勢力は侮るべからざるものが殘存するとは云へ、此勢力は主として貴族官僚等の階級の間に存するのであつて、一般民衆は國家の獨立の爲めに獨逸的勢力を排斥することに熱中し、此民衆的勢力が次第に優勢となりつゝある。故に英佛が聯合を組織せんとする確乎たる決心を有するならば、露國も敢て之に加入することを拒まないであらう。

二

従來同盟側の輸出にして聯合側に向へるものは總體の四割餘の大に達せるに反し、聯合側の輸出の同盟國市場に向へるものは僅かに一割六歩位であつた。故に此經濟戰に於て同盟側は甚だ不利の地位に立つのであ

るが、更に中立諸國は積極的にも消極的にも双方より大なる損害を受けねばならぬ。其の積極的損害とは同盟團又は聯合團の内部に於ける特惠税に均霑するを得ずして之よりも更に高率の中立關税を課せられ、從つて購買力の最大なる歐洲諸大國に對する輸出を害せられることである。其消極的損害とは從來互に多大の輸出入を行ひし歐洲諸大國が双方に分れて相排斥することに由り各自に其輸出品の販路を狹められる結果大に中立市場の侵略に力を注ぎ、特に企業合同組織の發達せる獨逸は廉價輸出に由て中立市場を蹂躙することである。故に北米合衆國を初めとして一般中立國は同盟及聯合の双方に對して關税團體が組織することに反對するであらう。特に歐洲の中立國は双方の諸大國と無條件最惠國條款を有する通商條約を締結せる故、之を楯として双方の特惠税に對し無償均霑を主義とし、以て双方の戰爭的關税團體の成立を不能ならしめんとするであらう。

此の如く中立諸國は戰爭的關税團體に反對するであらうが、併し開戰以來交戰諸國は中立の權利を顧みずして國際法を蹂躙し又は之に任意の解釋を下だして戰爭の目的を遂せんとしつゝあり、今後の經濟戰に於ても同樣の事情が起らないとは云はれない。中立諸國は過去に於て仲裁者たるの權威を振ひ交戰國をして兵力の戰爭を停止せしむるを得ざりしが如く、今後も其經濟戰を停止せしむるの力を有たないであらう。兵力の戰爭に於ては獨逸の方が勇者であるが、經濟戰に於ては明かに不利の地位に立たねばならぬ。故に中立國が經濟戰を停止せしめんとすることは即ち獨逸を救ふて英佛露を抑へるの結果となる。或は獨逸が暫く隱忍して中歐を支配することを止める代りに、聯合側の關税團體の成立を妨げんとし、此目的の爲めに中立國就中米國を誘ふて此破壞運動の表面に立たしめんとするかも知れぬ。併し乍ら米國は尙ほ莫大なる未開の富源を有して之が開發に急はしく、一面には極度なる保護税を設けて歐洲品の侵入を防ぐの方法を立てゝ居る故、關税團體の成立に由て損害を蒙むることは比較的に少

なく、特に國際經濟政策上今後は中米及南米に對して發展することに重きを置かんとして居る。故に米國が獨逸救濟運動とも見らるべき如上の破壞運動を斷行すべきやは大なる疑問であり、寧ろ超然中立を守つて其勢力をモンロー主義的發展に注ぐことゝなるであらう。又孤立の悲境に陷ることを恐るゝ所の弱小なる歐洲の中立國の多數は何れかの關稅團體に加入し、其特惠稅の適用を受くるに滿足するの外はあるまい。

三

今後經濟戰就中關稅聯合が實現せられんとする場合に、我國は之に對して如何なる態度を採るべきやの問題に付ては、先づ中立國の權利を主張して此計畫破壞の運動を企つべきや否やを考へ、次に愈關稅聯合が成立する場合には之に對して中立を守るべきや、又は有利の條件を得て之に加入すべきやを決せねばならぬ。

此等の問題を決するには經濟上の考量が重きを爲すとは云へ、同時に政治上の得失をも考へねばならぬ。抑も我國の國際政治上最も急務とする所は東亞に於ける我が特有の地位利益を安固にすることである。亦一に日英同盟の如きも此目的の爲めに外ならぬ。此の同盟に付ては近來頗る不平の聲が高まつて居るが、併し盟約の內容と其運用とに正當な改善を加へて之を繼續することが得策である。然るに我國が聯合側の計畫破壞の運動を爲すときは到底日英同盟を維持することは出來ない。又近來我國が露國と親交を保ち、特に開戰以來大に之に同情援助を與ふる所以も亦、上述の目的を達するが爲めに外ならぬ。元來露國は世界の大國であるが、今日まで自由なる海上の出口を有して國勢を發展せしむることが出來ない。特に一朝有事の日に於て海上の出口に由り自由に外界と交通して其獨立を保つことが出來ない。露國にして苟くも歐洲に於ける獨立の勢力たることを斷念せざる限りは歐洲の海上に又は之に近く此出口を求めねばならぬのであるが、此の如き出口を得るにはダルダーネルスを支配するの外はない。何となれば瑞典諾威を支配して海上に出ることは望み難いからである。然るに獨逸は近來最小抵抗線

を迫つてバルカンに勢力を張り、露國に對して海上の出口を塞ぎつゝある。獨逸は此政策の遂行に付て露國と衝突を免るゝ爲めに之を誘ふて不利不便なる極東の海上に出口を求めさせ、之が爲め日露戰爭を惹起したのである。露國は近き將來に於て無謀なる極東冒險政策の失敗を繰返すことはないであらうが、同時に吾人が露國が再び獨逸の誘惑に陷つて此の如き暴擧を敢てするの危險を防がねばならぬ。現今日露の親善は一に露國が東亞に於ける我國の正當の地位を尊重する代りに、我國が歐洲に於ける露國の當然の國是を尊重するが爲めに發生したるものであつて、今回の露國に對する同情と援助とも此見地よりして初めて有意義となるのである。果して然らば英露兩國が今後斷乎として經濟戰に由り獨逸を壓迫するの決意を有する場合に於て、我國が中立の權利を主張して其計畫を破壞せんとすることは得策であるまい。若し我國が此の如き破壞的態度を採るときは、假令へ之が爲め一方に於て獨逸と結ぶことが出來たり、又米國とも幾分接近し得ることありとするも、此の如き國運を賭する所の冒險政策に由て東亞に於ける特有の地位利益の確立と云へる我が最大の目的を達するに付き別段の利益を期待することは出來まい。故に英露が佛伊と共に是非とも關稅團體を組織せんとするならば、我國は之が破壞を企てるよりも寧ろ之に由て我國の受くる損害を充分に補償するの方法を設けしめ、成るべく有利なる組織にして之に加入することが得策である。

聯合側に於て愈關稅團體が成立するときは一般に中立國は損害を蒙むるのであるが、若し我國にして中立を守れば如何なる結果を生ずべきやを考へねばならぬ。從來國際間に於ける政治關係と經濟關係とは別々に取扱はれ、政治上には敵味方の別があつても經濟上には一視同仁に交際すると云ふ有樣であつたが、若し今後兵力の戰爭と同じ意味を以て經濟戰爭が行はれるものとすれば、最早や政治と經濟とを別々に取扱ふことは困難である。兵力の戰爭に於て我國は聯合側と共同したるも、經濟戰に於ては之と共同することを拒絕

するときは、假令へ關稅團體の成立の際に正面より破壞運動を行はずとも、我國は政治上英露と從來の親交を保つを得ない結果となるの虞がある。更に經濟上に及ぼす中立の影響に付て見るに我が最大の貿易相手は支那と米國とであるとは云へ、我工業に要する重要の原料供給者として聯合國の植民地は頗ぶる大切なるものである。特に我が基本工業たる綿絲紡織業は主に印度の綿花に由て維持せられて居るのであるが、印度の紡織業が我國の競爭の爲めに重大の損害を蒙むるより、其綿花に輸出稅を課して財政上の利益を得ると同時に我が紡織業を不利に陷れんとするの運動が次第に有力となり、若しも日英の親交關係がなかつたならば夙に此輸出稅が實行せられたかも知れないと云ふ有樣である。故に若し我國が經濟戰に於て英國と共同することを拒絶するならば、此輸出稅の成立を防止することは困難となるかも知れぬ。相當の輸出稅が成立しても我紡織業は印度綿を捨てゝ米綿支那綿のみに依賴することは困難である。此外濠洲の羊毛及亞鉛鑛の如き、海峽植民地の護謨の如きも我工業に取つて重要となつて來たが、此等の原料の供給に付ても安心は出來ない。又從來歐洲大國は互に多額の輸出入を行ふて居たが、若し此等の大國が双方に分れて互に相排斥することゝなれば、各國の輸出品の販路が縮められる故、中立國市場に向つて大に販路を擴張することを必要とするのであるが、最大中立國たる米國は世界無比の高率の保護稅を有する故、歐洲の工業品も之に侵入することは容易でなく、南米諸國は人口稀薄で其購買力も割合に少なく、且つ其輸入稅も非常に高率である。故に歐洲諸國は我國と支那とに對して特に激烈なる侵入を企てる危險がある。企業合同組織の發達せる獨逸の侵入は特に危險である。若し此の如き侵入が行はれるとすれば、我國が今後經濟上及政治上の必要よりして國内に發達せしめんと努めつゝある種々の工業は甚だ苦境に陷らざるを得ない。更に我國の輸出に付て見るに、成るほど支那と米國とが今日までは最大得意であり、將來も之に對する輸出を益發達せしめねばならぬが、

併し我國の輸出は此二國に對して餘りに片寄り過ぎてる故、兩國の何れかに對する輸出が經濟上又は政治上の原因より障碍を蒙むるときは、我が經濟全體は忽ち大打撃を蒙むると云ふ危險の狀態を呈し、延ひて此兩國に對する我國の政治上の運動も大なる制限を受ける傾向がある。故に今後は此兩國以外にも成るべく汎く輸出を擴張し、以て危險分散を行はねばならぬのであるが、今後輸出を擴張し得る見込あるは主として印度にあり、之に次で濠洲と露國とも重要である。然るに我國が中立を守るときは此等の國に輸出を發展せしむることが困難となるを免れない。故に米國の如き自給自足的の大國と異り、原料を輸入して製品を輸出することに由り經濟の發達を圖るの必要益々大となりつゝある我國が中立を守ることは甚だ困難である。從つて破壞運動を試みて此聯合を不成立に終らしむるの見込なきか、又は多少其見込あるも此の如き運動を爲すことが有害であるとするならば、正當の對償を得て聯合に加入するの外はあるまい。

四

聯合側に關稅團體が成立した場合に我國が中立を守ることより受くる所の損害は上述の如くであるが、然らば之に加入するときは如何なる結果を生ずべきやと云ふに、之に由て中立より生ずる損害を免るゝことは明かであるが、積極的に經濟上の利益を得ることは全く見込なしと云ふを得ないとしても甚だ困難である。此聯合の組織は既に述べし如く聯合國相互の間の關稅に付ては大體現狀を維持し、中立國の輸入品の中聯合國相互の間にも多大の輸出入の行はる種類の者に付ては更に稅率を高くし、敵國側の輸入品に付ては各聯合國一樣に重稅を課することゝなるであらう。此の如き組織に加入するときは我國の輸入稅制度は敵國及中立國に對する增稅の爲めに保護貿易の程度を高めることとなる。今後經濟の發達及國防の獨立を圖る爲め國內に於て金屬工業及化學工業を初めて種々の工業を發達せしむることを必要とする故、聯合に加入することは此點より見て有利なやうである。併し今後同盟及聯合

側が排他的團體を組織するときは相互の間に行はれた多大の輸出入が停止する故、歐洲各國は先づ自己の屬する關稅團體內の他の諸國に對して大に輸出を行ふの必要が起る。故に我國の聯合に加入することは關稅制度を一層保護的とならしめても、實際に英佛等の聯合國の我が市場に侵入し來る勢は强まり、從つて外國品の侵入競爭の程度は差引きして大體以前と同じであり著しく其退減を見ることはあるまい。故に一面には聯合に加入すれば保護の程度が實際に過大となるの弊を生ずべしと云ふ說は必しも當を得たものでない。

聯合に加入して獨墺品に重稅を課するとは保護の効果を生ずる場合あると同時に、產業の發達に不利を生ずる場合の起ることは爭はれない。特に獨逸の染料は他に低廉有效の代用品を得難き種類のものが多い。只だ染料は綿花羊毛等の普通の原料と異つて補助原料と稱するものであり、之を使用する所の織物其他の貨物生產費の全體の中の一小部分を占めるに過ぎない。故に之に重稅を課しても生產費全體の增加する割合は僅小なものである。又獨逸が報復的に聯合諸國に對して染料の輸出禁止を行ふの危險ありやと云ふに、從來獨逸の染料生產業は世界の需用の大部分を充たし得るが如く大々的の膨脹を遂げた故、購買力の大なる聯合諸國に對する其輸出を停止すれば此重大なる產業は忽ち困難に陷らざるを得ない。特に我國を初めて英佛其の他の諸國も染料生產の發達に付大に努力しつゝある故、獨逸は之を壓倒するが爲めには多々益聯合側に對して廉價輸出を行ふの必要がある。此外に是非とも獨逸品の輸入を必要とする者は比較的に少ない。又之を必要とする場合にも其の貨物全體ではなくて其の一部分を輸入すれば足り、此の部分は國內の生產に由て之を完成し得る場合も多い。獨逸の化學工業は有名なるものであるか、我國に輸入せらるゝ化學工業品及其原料は、彼の千五百萬圓に達する硫酸安母尼亞を初めとして多くは英國其他より輸入せられ、獨逸よりの輸入は金額から見れば比較的に少ない。從來獨逸より多く入り來つた紙料や亞鉛や毛織絲の如きも開戰以來大に

我國に發達しつゝある。要するに今後も獨逸製品を是非入用とするもの、種類は可なり多數にあつても、金額より見れば何れも割合に小額であり、從つて之に重税を課するも左までの損害は生じないであらう。更に聯合諸國が獨逸品を排斥する爲め我國の輸出が之に代つて增進し得る見込は決して多くない。英佛露伊に對する我輸出をば獨逸品排斥に乘じて增加するの見込の極めて少ないことは明かであるが、併し印度濠洲等の植民地に對する輸出は之に由て相當に增進するの見込がないではない。

以上に由て見れば聯合諸國の排獨的關税同盟組織の決心が動かし難きことを發見するならば、我國は充分の對償を得て之に加入することを得策とするが、然らば如何なる對償を要求すべきかと云ふに國際政治の上に我國の最先の急務とする所は東亞に於ける特有の地位利益を安固ならしむることである故、之に付て聯合諸國より充分の保證を得ることが何よりも重要である。更に經濟上要求すべき重なる事項は第一關税聯合國の組織に關する者である。我國は聯合諸國に對しても現行の通商條約を認めた以上の輸入税輕減を承認するを得ない。又聯合國と中立國との輸入に對して税率に輕重を附するは聯合國より我國に多量の輸入を爲す所の有税品に限ることを要する。獨墺側の輸入に對して重税を課することは已むを得ないが、之を禁止し又は禁止に等しき重税を課することには反對すべきである。輸入に關する盟約上特に重要視すべきは聯合諸國及其植民地より輸入しつゝある重要原料品に關するものであつて、今後我國が之を輸入するに付て妨害を加へざるは勿論、我國に供給するよりも有利の條件を以て植民地より母國に之を供給するが如き不公平の取扱を爲さしめざることを要する。更に聯合國及其植民地に對する我輸出に付ては今日よりも一層優遇を要求せねばならぬ。我國は英佛との條約に於て多大の讓歩を爲せしに反し、相手方の我に對する讓歩は甚だ不充分であつた故、我國が聯合組織に加入する上は此の如き不公平を矯正し、加ふるに露國伊國及英佛の植民地とも

條約を結んで稅率の協定を爲すことを要求せねばならぬ。特に植民地の母國品に對する特惠制度は之を全廢せしむることを得ないとしても、今日以上に特惠の度を大にして母國品を他の聯合國品よりも一層多く優遇することには反對せざるを得ない。此の如き種々の條件を提出することは一見過大の要求の如くであるが、併し我國は本來積極的利益を得る爲めに進んで聯合に加入する譯でない。故に曲げて之に加入するに付ては聯合諸國をして充分に我利益を尊重せしむるの權利がある。若し我國が時機を逸せず斷乎たる決心を以て以上の要求を爲すならば之を貫徹することは必しも難事ではあるまい。

五

歐洲交戰諸國は現今に於ても互に敵に對して物資の供給を妨げ、又敵の財力の充實を妨げると云ふ經濟上の戰爭を實行しつゝあるが、是は兵力の戰爭に對する補助手段であり、從つて又兵力の戰爭に同じく一時的のものと考へられて居るのであるが、兵力に代ゆるに經濟力を以て戰ふと云ふときは、其經濟戰は更に大に繼續持久的の性質を帶びて來る。此の如き經濟戰は從來世人が平和の戰爭と稱へた經濟上の競爭とは頗ぶる意義を異にする。從來の經濟上の競爭は相互を利すると云ふ形式を採ることを常とし、自から損失するも敵をして更に大なる損失を受けしめんとするが如き方法を採るものではない。固より今後の經濟戰特に聯合側の企つる關稅團體の計畫には、其內部に於て相互を利すると云ふ要素はあるが、之は寧ろ消極的に相互を害しないと云ふことに重きを置くものであつて、其の重なる目的は敵國を害することである。彼の同盟側に於て計畫せられつゝありと云はるゝ、關稅同盟なるものは政治上の同盟又は併合を前提とするものであるが、以上に由て見れば聯合側の關稅團體組織も純經濟的のものでなくて一種の政治同盟に外ならぬ。故に我國が之に加入すべきや否やは彼の輿論を極度に緊張せしむる所の通商條約改訂の擧よりも遙かに重大の意義を有するものであり、日清日露の二大戰役の場合と同じく我

國民の世界政治に於ける一新紀元を劃する大事件である。

此の如く今後起るべしと豫想せらるゝ經濟戰は我國に取つて重大の意義を有するものであるが、之に對する輿論の有様如何と見れば頗ぶる無頓着の姚なしと云ふを得まい。成るほど今後果して經濟戰が行はるべきや、又如何なる方法に於て行はるべきやは目下の戰局の發展如何に係はる所多く、此戰局の前途が不明である上は更に進んで其後に來るべき事件を豫想し畫策することは餘りに取越苦勞であるとの評を受けるかも知れぬ。特に交戰諸國の經濟戰の計畫として世に傳へらるゝものは目下の戰局を有利に開展せしむる手段として重要視せられて居る傾向もあり、立憲政治に訓練せられたる此等の國民は何れも筆舌の勇者であり、從つて經濟戰の計畫に關する彼等の議論や報道を一々信用することは出來ないであらうが、併し諸般の事情に照して經濟戰の起る危險が頗る大であることは爭はれない。從つて吾人は眞面目に之れに對する用意をせねばならぬ。予等は今回經濟同盟會議に特派せられた委員が如何なる權限を有するかを知らないが、世人の委員に對する注文は成るべく會議の席上に於て傍聽的態度を採ることを欲するやうであり、又加入の不可を論ずる人士も中立を守ることに由て如何に重大の結果を生ずべきやを深く省察せず、漫然として事の成行きに一任せんとするやうであるが、是は實に危險なことではあるまいか。聯合諸國の經濟戰を行はんとするの決意が動かし難いことを見出すときは之に對して斷乎たる反對を爲し、他の中立國と提携して破壞運動に全力を注ぐか、然らざれば進んで種々の條件を提出して我に有利なる組織を成立せしめねばならぬ。漫然傍觀の態度を採つて居る間に我國に對して甚だ不利益なる組織が成立し、後日我國は中立即ち孤立と云ふ如き悲境より脫する爲め已むを得ずして之に加入するが如き結果となつては國運の前途に由々敷大事を生ずる。米國の如きは交戰諸國と何等特別の政治的關係なく、又戰爭の勝敗何れに定まつても直接に國家の地位に影響を蒙

むることもなく、不幸にして激烈なる經濟戰が起つても富源に充てる廣大の領土を有する爲め超然として中立を維持し得るのであり、從つて此問題に關して比較的に冷淡なることも出來るのであるが、我國は全然之と事情を異にして居るのである。予等は此問題を以て此の如き重大の意義を有するものと解するが故に、經濟同盟會議に於て我國を代表すべき者は制度上又は實際上より現內閣と責任を分つべき重要の地位に在る者にあらざれば、其大任を盡すに甚だ困難であると信ずる。

茅原華山先生に

婦人矯風會長　矢島楫子

茅原先生

四月號の中央公論誌上に御掲載下さいました先生の御高説を拜讀いたしました。前號に於て御挨拶をする筈でありましたのが、例の大阪飛田遊廓問題に就いて、何や彼やと餘計な御世話をやいて居りましたので、遂今日まで延々になりました事を深く御詫いたさなければなりません。之と同時に私はこの微力なる者共の働きが、先生の樣な社會に於て最も卓識のある方の御注意を聊かなりとも惹起する事が出來たといふ事を感謝せずにも居られません。

然しながら私は先生の御明論に御答へするのに筆を以てする事が出來ないといふ事を甚だ遺憾に思ひます。

私がこの刑法改正問題を議會に請願しやうといふ決心を起しましたのは、恰ど今より三十年程前即ち明治十九年からの事でムいます。それ以來今日まで一回も

缺かさず年々決行しつゝあるのであります。其間或は握り潰しの運命に逢ひ、或は冷笑皮肉の間に葬り去られて參りましたので、恐らくは先生と雖ども其起因する處を御承知がないといふ事は御尤もな事と思はれます。ケ樣な不愍な生立を持つて來ました婦人矯風會が今日稍社會の一部に存在を認められるまでになりましたので、恰もそれが近年に流行して參りました所謂英米の婦人參政權論者達の尻馬に乘つて忽然に騷ぎ出した者の樣に思召さるゝのも無理の無い事と思ひます。

若し私共婦人矯風會の事業が先生の御說の樣に、直輸入的の女權擴張であると申すものがありましたならば、それば年代から見ましても私共の主義主張は、却つて反對に今日の歐米婦人の主義主張の先驅をなした者ではありますまいか。三十年以前の歐米の議會には未だ婦人參政權論者の呼聲は聽かれなかつたのでムいます。又歐米の刑法は婦人を人間と認めて取扱つて居りますから改正を叫ぶ必要はないのであります。先生

私は前述の通り三十年以來婦人の德を認めるといふ主義の爲めに奮鬪して參りましたが、未だ嘗て我國の姉妹方に向つて、參政權を要求せよと御勸めした事はありません。又其必要を說いた事もムいません。或は時々新聞雜誌記者諸君が、參政權問題の可否を御尋ねになる事がありましても私は唯一言—日本婦人には參政權の必要なし、若し必要の時期ありとすれば、それは我日本婦人が、英米國婦人と同等の地位に立てられた時—と御答へして居ります。若し今日の日本婦人が參政權を要求する必要を說く樣な事がムいましたならば、それこそ先生の御仰の如く、實に口外の非常識で又不徹底極る事でありませう。全く社會は之を相手にしない方が當然であると思ひます。

御說に由れば男子は生活責任者で、女子は貞操責任者であると述べられてあります。抑も物質的の生活といふ者と精神的の貞操といふ者は果して同一視して取扱はるべき者でありませうか。若し先生の御說の如くんば男子が生活責任者として、之に對する責任をつく

し或は其責任範圍内にある凡ての者に十分なる滿足を與へる事が出來なかつた場合には、女子は之に對して當然其責任の貞操な放棄しても差支はない者となるのではありますまいか。若し假りに男子が物質的生活責任を怠つた場合に、女子の貞操放棄を當然の事として默認する佳量が果してあるでせうか。否そんな薄弱な社會制裁が果して人間を向上して行く事が出來るでせうか。私は失禮ながら先生に御尋ねいたして見ます。若し先生が或る不如意の境遇に御立ちなされたと假定して、それが爲めに十分物質的生活責任を全ふする事が出來なかつた場合に、夫人が先生に對して貞操責任をつくす必要なしと主張なされたならば如何なる御處置を取られるでありませうか。

私は若し先生の生活責任問題と、貞操責任問題との要旨が、可樣な淺薄な者であるのでありますならば、今日の男子諸君の爲に全く歎かずには居られません。而して苟くも人間として鷄犬の雌雄に等しい者と見做して取扱はれる事を心から殘念に思ふのであります。

私の主義とする處は徒らに生活上に於ける女權の無意味な擴張を望むのではありません。眞の意義に於ての女德を擴張し、之を涵養し、之を擁護して、日本の女子を男の專横、壓迫、放恣、亂行より救ひ出さうと努めるのであります。

先生

私は、男子がフロックコートを着るからといふて女も亦フロックコートを衣ねばならぬとは背て申しません。若し男子がフロックコートを衣るならば、之と同伴する女も亦、せめては綿服にもせよ相當の禮服を着けさせたいと申すのであります。シルクハットに、フロックコートを召された紳士の御同伴に、若し御襟がけで湯もじを下げたスタイルの夫人でありましたならばそれで男子の方が御滿足が出來るでせうか。

又日本の女權擴張は男子の女權擴張であるといふ御意見が若し眞實の者でありましたならば、今日の問題となつて居る公娼廢止案などはたちどころに可決せらるゝのでありますまいか。

先生
私は婦人のかくれたる潜力が國民としての男子の精神上肉體上に强烈なる感化を及ぼして行くといふ事實の上から考へて、其重大なる責任を持つて居る婦人に眞の力といふ者を認めさせたいといふ希望の下に、三十年來終始一貫殆んど手さぐりに辿りついて今日に至つたといふ事を聊か誇りといたして居ります。
先生の御明論に對しまして、筆を以て御答へする事が出來ない代りに、私の誠意のある處を述べて後れながら御挨拶をした次第でございます。

ウパニシャッドと佛教

木村泰賢

來るとか、來ぬとか久しく問題の樣になつたタゴール氏も彌々本當に來ることになつた。就いてはタゴールに關連して何にか印度思想に就て述べて吳れまいかとの御注文を瀧田詞兄より受けたのは、この月の初旬であつた。乍併、正直に言へば自分のタゴール觀は昨年の本誌上と東亞の光紙上で發表した以上に進みもせねば深まりもせぬ上に、目下大學の學年末で卒業論文の調べやら何やらにて非常に忙しいので特別にタゴールを中心として何か述べて見やうとする思想もなければ餘裕もないので大に閉口した。然るにまた翻つて考ふるに、昨年八月自分は本誌上に印度思想論といふ一小論文を寄せ、尙その續稿を書くつもりで居た所、忙しいので遂、延び〱になつて未だにその約束を果さぬ罪もあるので、この際何にか書かねばならぬ義務もあるやうな心地もし大に弱つたのである。かくて、窮餘の結果、擇び出し

た題目は、表題の「ウパニシヤッドと佛教」とであつて、間接にタゴールにも關連すれば、印度思想論の續稿ともならうといふ問題である。蓋し、自分が昨年書き殘した項目中には「印度思想史上に於ける佛陀の地位」といふ一項目もあつたし、また、ウパニシヤッドと佛陀とはタゴール思想の重なる淵源になつてゐるからである。

昨年も述べた如く、タゴール氏の人生觀中には新古種々の思想要素が混入してゐる。併しながら、その大本となつたのはウパニシヤッドと佛教との思想であつて、この思想が根柢となつてその上に近代風の種々の思想が織り込まれた結果として、氏の愛の哲學が成立したのである。氏に從へばウパニシヤッドの梵は佛陀に到つて初めてその人格的體現を得た譯でウパニシヤッドの解脱觀は佛教の慈悲に來りて初めて、眞の人生的意味を發揮したものである。即ちウパニシヤッドと佛教とは遂に離すべからざるもので、兩者を合して初めて眞に梵我一如の論理が完成するといふが氏の意見である。併しながら氏は通例の意味の學者ではないから、之を學術的に證明もしてゐないければ、文獻的に考證もしてゐないので、果して氏の意見は歷史の眞相を得たものであるか、否かゞ明かではない。そこで自分は、この機會に、この問題に對する自分の平常の意見を述べて、而もタゴール氏の考が或程度までは歷史的事實でもあるといふことを論じて見、兼て「印度思想史上に於ける佛陀の地位」といふ約束の問題の一部をも果したいと思ふ次第である。但し豫め斷つて置かねばならぬことは、かゝる事情の下に執筆したのと、また一つにはこの問題は印度思想史の方面からすれば非常の大問題に屬するから、とても完全な結果を得られぬといふことである。こゝではたゞホンの大體の輪廓を大雜把に述べて、些か方隅を提示し得れば、それで自分の願が足るのである。所論の蕪雜の點は讀者、併に瀧田詞兄に深く謝する所である。

一、ウパニシヤットと佛教との特徴

ウパニシャッドと佛教との間に、いかなる史的關係があつたかといふことは、印度哲學者の最も苦むだ問題である。文獻的に調べて見ると、ウパニシャッドに佛教や佛陀に關する記事なきは仕方がないとしても、確かにウパニシャッド以後に產出した筈の原始佛典にも、明かにウパニシャドを指したと思はるゝ記載が一つも見當らぬ。加ふるに、表面的立場よりするに、ウパニシャッドは宇宙的原理として精神的實在の梵（ブラフマン）を立て、個人的原理として自我（アートマン）を立つるに反し、佛陀の教は無神論、無我論にして、一見、殆ど氷炭相容れざるものがある。然らば兩者は全く無關係かといふに、佛陀も亦、その教に於て、ウパニシャッドにて圓熟した種々の教理を豫想する點に於て到底無關係とはせられぬ。必ずやいかなる筋道を經てか、之を學習したに相違がない。即ち學者の苦むだ所はその連絡の筋道を見出すことである。乍併、今日の所では此問題は未だ解決せられず、多くの學者は止むを得ず、佛陀は確かにウパニシャッドの圓熟期に生れ、而もその影響を受けられたに違ひがないけれども、その接觸たるや可なりに間接なもので、直接の連絡があつたものではあるまいといふ結論を下すべく餘儀なくされてゐるのである。有體に言へば、吾人も、今の所、文獻上よりは之以上に進める斷定を下すに躊躇するものである。然しながら、こは要するに、表面的上の文獻的事實よりの觀察である。もう少し踏み込みてウパニシャッドと佛陀の教との精神に立ち入つて觀察して見ると、面白いことには、表面の障碍を通ふしてウパニシャッドの精神と佛陀の精神との間には溢い一脈の消息の通ずるものがありて、軈てタゴール氏の意見に裏書するの歷史的關連を見出すに難くはない。

今、之を論證するに先ちて、順序として、先づ、兩者の特徵を舉げて置くの必要がある。蓋し吾人の目的はその道の專門家を相手にするのではないから、ウパニシャッドの教とは如何なるもので、佛教、特に根本佛教の教とはいかなるものであるかを、知つてゐてもらはねば立論に不自由を感ずるからである。

先づウパニシャッドから述ぶるに――この事は昨年の八月にも述べた所であるけれども必要な範圍だけ重複を許してもらはねばならぬ。――一口に言へばウパニシャッドの根本立脚地は吾人の自我はその本性に於て宇宙の大我たる梵と同一であるといふ觀念主義である。術語で之を梵我一如說（Brahma-ātma-aikyam）と名つくる。モット具體的に言へばこの大宇宙を作り之を支配してゐる宇宙の大靈と吾人の靈魂とは、恰も地下の水脈と井水との如きもので、表面からすれば別のやうでも根柢に於ては連絡して、畢竟同一のものであるといふのである。ウパニシャッドは種々の方面からこの大思想を建設せんと欲し、或は認識論的に或は形而上學的或は神學的に色々と論議し、而かもこの間に唯心論、汎神論、實在論等の種々の哲學的立場を開發したのが聽てウパニシャッドが印度哲學の源流と稱せらるゝ所以である。然しながらウパニシャッドの大主意とする所は、要するに之に依りて吾人の最高歸趣を確立し、以て絕對不動の境地を建設せんとするの實際的要求にあつたことは、ウパニシャッドを正當に理解する點に於て忘れてはならぬ契機點である。從つてこの思想は單なる思辨的立論の結果のみではなく、ウパニシャッドの哲人が實際に於て悟得した體驗の結果であつたからして、少くも一と度は實現された人生觀であつた。而してその體驗の手續を見るに、ウパニシャッド中には種々の哲學的說明があるけれども、要するに內觀法によつたもので、一步一步感覺的自己を解放して次第に精神の深みに沈潛して生命の核心に進み、遂に、最早、感覺的分裂的相對的生活を解脫して全一、絕對の純靈的生活に入るを以て、彼等は宇宙我たる梵を實現し得たものと感得したのである。昨年述べて置いた我の五藏說といふのも實に此手續を比喩的に述べたものであるが、而もその最終を歡喜（アーナンダ）と名けてゐる處、已に哲學的よりは寧ろ實際的宗敎的であつたことを明示するものである。要之、ウパニシャッドの特徵は macrocosmos=microcosmos の從來の歷史的見地を背景とし、自我を以て宇宙の中心、あらゆる價値の本源

と見做し、この自我の本性を逮得することによつて宇宙の神秘を開き、人類最高の理想的生活を實現し得べしといふ所にあつたのである。

次ぎに佛教の特徴であるが、之を簡單に纒めるとは可なり困難であるから、主としてウパニシャッドと相違する點のみを擧げて置かう。佛教も解脱を理想とする點に於てはウパニシャッドと毫も異る處はないけれども、その説相となれば非常に違つたものになつて來た。こゝに來るとウパニシャッドの梵に相當する原理もなければ、亦、ウパニシャッドがあらゆる價値の本源とした自我の自立をも認めぬ。無神無我にして一切は、たゞ、因縁所生の流動的現象に外ならぬと説いてゐる。即ちウパニシャッドが依て以て思惟の根本とした基本概念を根底から覆へさんとしたのである。佛教の理想はウパニシャッドの如く梵我の同一ではなく、寧ろ我執を離れ、欲望を捨離して流動的現象を解脱するその事であつた。即ち同じ解脱でもウパニシャッドの積極的なるに對して、佛教は何れかといへば消極的であつたのである。乍併、こは要するに理論を主としての觀察である。更に進んで、その實驗的人生觀的意義となると不思議にも、ウパニシャッドの何れかといへば消極的なるに反し、佛教の飽くまで積極的活動的であつたことを忘れてはならぬ。ウパニシャッドにありては種々の聖者があつても、その人格に左程の意味がなかつたの反し、佛教となれば個人の人格の價値が千斤の重さをなすに到つたのがその一例である。殊に佛陀自身の人格は直ちに佛教一貫の生命となり、之を離れては佛教がその價値の大半を失ふべしと思はるゝ程重要の意味を有するが如き、嘗てウパニシャッドになき佛教の積極的特徴である。又、ウパニシャッドには嘗て布教傳道といふことがなかつたのに反し、佛教は成立の初より傳道を以て—而も世界を相手の—必須的事業として、その精神的感化を社會的にしたのもまた佛教特獨の積極的特徴と言はねばならぬ。ウパニシャッドは長らく印度一國、殊に婆羅門族の私有財産たるに止つたのに反して、佛教は夙とに世界的に擴布した最

大の原因も全くこゝにある。その外、佛教はウパニシャッドの比較的に度外視した世間的道德を修行過程に織り入れて肯定したるが如き、ウパニシャッドの未だ到りかねた四姓の區別を、少くも精神的救濟によつて解放せんとしたるが如き、一言以て蔽へば、ウパニシャッドの割合に冷淡であつた慈悲博愛の方面を高調した處に即ち佛教の積極的特性があるのである。

以上、餘りに簡單であつたけれども、かく兩者の特徵を擧げて見ると、先きに述べた如く、一見殆ど正反對の如き感がある。乍併、能く調べて行くと、少くも思想の道行からすれば、この表面上相容れざるが如き諸點は却て兩者の間に密接不離の關係のあつたことを示すの契機點となつてゐるから、試みに二三の方面から之を說いて見やう。

二、ウパシヤッドの梵と佛陀の自覺

佛陀の性格は頗る多方面であるけれども、之を貫く根本的自覺といふべきは、我は世界の救世主、三界の法王といふ確信である。傳に據れば、佛陀は生るゝや直ちに天上天下唯我獨尊と宣言して、その未來の佛陀たるの身分を暗示したといふことになつてゐる。（巴利文所傳は漢譯所傳と稍異なれども殆と同じ意味なり）もとより之は大自覺以後の確信を遡て出生時に及ぼした傳說に相違がないけれども、少くも成道以後の佛陀には、常にこの自覺のあつたことは諸種の記錄に徵して疑なき事實である。「我は最上の師なり、我には師なし。我は天人中の至尊なり、我に及ぶものなし」とは佛陀が屢々宣言した定句である。從て佛陀には、一方に於て貧兒卒童と雖も馴れ親むべき柔孺の方面があつたと同時に、他方に於ては、王侯と雖もその膝下にひれ伏させねば置かぬ至大、至高の權威の方面を具備してゐた。この意味に於て、法華經に「今この三界は我有なり、その中の衆生は皆これ吾が子なり」とあるは、正直に歷史的佛陀の眞意を道破したものと見ることが出來るのである。即ち、簡單に云へば、佛陀は自らの人格に於て、宇宙的權威と宇宙的慈悲とを體現したといふ自覺を持て居たのである。

然らば、佛陀は何を基礎としてこの大自覺を得たか

といふに當面よりすれば、本より佛陀自身の人格の力に外ならぬ。乍併。こゝに吾人は、その後ろには極めて重要なウパニシャッド的背景の存するありて、無意識的ながらもその自覺の根柢となつてゐたといふ事實を見逃してはならぬ。これに關する種々の徴證があるけれども、就中、最も重大の意味を有するは佛陀の自覺と梵天(Brahmā)との關係である。

梵天とは、ウパニシャッドの梵が人格化した神で、娑婆世界の主と稱せられ、佛陀當時の信仰界に於て最高神とせられた神である。然るに面白いことにはこの神はまた佛陀の傳記に於ても種々の場合に見逃すことの出來ぬ重大な役目を演出してゐる。就中、佛陀が未だ修行中にありては、稍々その指導者らしき相で表はれ、次いで佛陀が成道するや、その最初の說法勸請者といふ役を演じたといふことは、最も大切な意味を寓するものである。傳に從へば佛陀は成道の後、樹下に端座してその自内證の法樂に耽り、實際的布敎を稍々躊躇して居た時に、梵天が表はれて摩訶陀國の現狀を述べて其布敎を乞ふたといふ。本より此傳說に對して歷史的事實か否かを問ふの要がない。吾人の求むる所は要するに佛陀の自内證に關する心理的經過の事實を知れば足れるのである。即ち之によればその修道心理の經過に於て、佛陀は初め當時の信仰に從て、梵天を或る程度まで理想としたるも、その成覺に到るや却て梵天以上の自覺に達し、而もその說法は世界の主たる梵天さへも希ふ所であるといふ廣大の自信に達したものと解釋せねばならぬ。こゝに即ち吾人はウパニシャッドの梵と佛陀の自覺との間に密接不離の關係のあつたことを見出さねばならぬ。蓋し、婆羅門哲學者の解釋に從へば、梵天(Brahmā)はもと、ウパニシャッドの絕對的原理たる中性非人格の梵(Brahman)が人格的に垂迹したものであるといふからこの解釋に從へば、佛陀の自覺は軈て我は絕對原理の梵自身の體現であるといふ意味に翻譯せらるゝことになる。何故なれば梵天以上と云へばその本地たる梵に外ならぬからである。もとより之は僕の想像で佛陀時代に果してさる神學的解釋

があつたか、又あつたとしても、佛陀はかゝる解釋をその自覺の中樞に喰ひ込ましめた程重要視したかといふことになれば、文献的には一寸證明し難いけれどもともかく佛陀は梵天を通じてウパニシャッドの梵と密接に接觸したといふ事實は到底疑ふべきの餘地がないのである。佛陀は法を説くことを時に梵輪（Brahma cakra）を轉ずると言つたこともあるが、これも恐らくこの自覺を暗示するの術語であらうと思ふ。蓋し梵輪とは梵の法則又は支配力の意味であるから梵輪を轉ずることは、自ら梵としてその法則を宣示するといふ義になるからである。

又佛教に於て最も重要な概念は涅槃（ニルワーナ）（nirvāṇa）といふ語であるが、この涅槃の意義に關しては種々の解釋もあるけれども矢張もと梵に關連するの術語から來たものであつたらしい。蓋し薄迦梵歌（バガヴァットギーター）などに從へば、梵涅槃（Brahma nirvāṇa）と熟字し、涅槃とは梵に消融することでつまりウパニシャッドの究竟理想の實現を指したものであつたからである。從て佛陀は、たとへ梵の冠辭を去つて單に涅槃と言つても、其背後には暗に梵涅槃の思想を豫想して之を最高理想としたといふことも亦容易に推察し得べき處である。佛陀が、その涅槃界の消息を説明した形容詞的文句中には、能くウパニシャッドに似た説き方の混入してゐるのも、蓋しこれが爲めであらうと思ふ。涅槃といふ語は「吹き消す」といふ意義であるから佛陀の理想は虚無主義であつたと解釋することの非なるは、この一事に徴しても明である。此點はタゴール氏も屢々言てゐる處である。

とにかく、種々の點から考へて見ると、たとへ、表はに明言せぬとしても、佛陀自覺の根柢には「余は梵なり」（aham Brahma asmi）といふウパニシャッドの根本立脚地が豫想されるといふとは到底疑ふべきの餘地がない。從て彼の世界的威令も無緣の大慈悲を實にこの自覺の活きた働として現出したものに外ならないと解釋しても毫も失當ではなからう。否かく解釋するとによりて初めて、その大自覺の根柢が一層能く明にならうと思ふ。この意味に於て、佛教は表面上無神主義

でありながら、實は最も具體的な有神主義で、神格は直ちに佛格として實現したといふ信仰上に立つものと解釋しても宜からう、佛陀の入滅後、間もなく法身常住の思想が起つて、佛陀の肉身は滅しても法身は常住であると考へるやうになつたが、この考察もこの意味に於て已に佛陀の自覺その者に含まつてゐたと見て宜しいのである。而してこの意味に於て吾人は、タゴール氏がウパニシャッドの梵が佛陀に到りて完全に具體的に體現したと考へた見方に學術的根據のあることを認むるものである。

三、ウパシヤツドのtatと佛教のtathā

然るに、かく言はゞ、こゝに一つの疑問が起らう、然らば佛陀は、畢竟するに隱れたるウパニシャッド敎徒に外ならなかつたかと。吾人は之に對して一面に於ては然りといふけれども、他面に於ては然らずと答へる。然りと答へる理由は上に述た通であるが、然らずと答へる理由は、蓋しウパニシャッドの梵觀と佛陀の梵觀とは稍々異るからである。ウパニシャッドはその梵を何れかといへば、形而上的靜的實在と寫象したけれども、佛陀は斯の如きものを認容せぬ。佛陀の認容した梵は寧ろ宇宙の法則(dharmatā)その者としてである。故にウパニシャッドは實在の異名として好んでtat(that)即、ソレといふ据り言葉を用ゐたに反し、佛陀は却てかくの如きこと(tathatā=thusness)といふ動く言葉を用ゐてゐる。即ちウパニシャッドの實在觀は固定的なるに反し、佛陀は飽くまで流動的に觀察したのである。從てウパニシャッドに從て、梵を體現すれば、自己の宇宙的擴大を感得して絕對的歡喜の狀態に至るべきは勿論の事ながら、その結果は遂に敎的となり無活動的となるに反し、佛陀の觀察に從へば實在、眞如の體現は要するに如實に法の如く行ひ法に從つて生活するの動的結果となつて來る。ウパニシャッドの極致は「汝はそれなり」(tat tvam asi) の諦理を悟證する處にあつたが、佛陀の本意は、如實の法に應じて來り且つ去るの、所謂、如去、如來(tathāgata)となる所にあつた。而して佛陀は之を體現したといふ自覺から、自からを如來と號したので

ある。ウパニシャッドの社會的に消極的なるに反し、佛教の積極的であつた理由も全く、この梵觀の相違に基くものと言はねばならぬ。この意味に於て、佛陀も廣義のウパニシャッド教徒でありながら、その表象の仕方に於て、將た實現の仕方に於て、殆ど之を換骨脫體したものと言はねばならぬ。これ即ち佛陀に無師獨悟の自覺あつた所以で、而も梵といふ言葉を表面に推立てざる所以であつたらうと思ふ。

要するに佛陀は、表面上からすれば、ウパニシャッドの實在梵を認めぬけれども、裏面に於ては、之を宇宙的法則の形で之を肯定し、而も自己がその體現たることを信じて居た。所詮佛陀は、ウパニシャッドの梵も人格の上に體現されて而も働きとして表はるゝ處にその意味があるといふ見地からして、その行く所まで至らしめて、三界の法王、萬有の救世主たる如來の自覺を得たものである。而もこの自覺の働こそ、實に理窟と僞善とに飽いたる佛陀當時の民衆に新しき精神運動としてその缺陷を救ひ進んでその教が世界の光となつた根本動力であつたのである。

四、ウパニシャッドの眞我と佛教の無我

tat（タット）と tvam との關係は、亦、眞我と無我との關係にも適用することが出來る。之を一見するとウパニシャッドの眞我と佛教の無我とは到底相容れぬ考察のやうであるけれども、實は相距る一歩の相違に過ぎぬ。所詮動かざると動くとの差異のみである。

一體自我の特徴は何にあるかといふに、その個體的制限的な所にある。即ち他我を豫想して初めて自我の自我たる所以は明になるもので、制限を離れては少しも經驗的意味に於ける自我が成立し得ないのである。然るにウパニシャッドの眞我觀を見るに、先きに述べた如く、身體以上に感覺以上に乃至現識以上に精神の深みに浸到せねば得られぬことになつてゐる。即ち彼等は彼此の相對を絕したる全一の純靈的存在を理想として、制限を脫すれば脫する程、眞我の眞相に近くものと考へたのである。從てその眞我たるや實は無我の異名で、少くも經驗的我執を減却して始めて達せらる

ゝの境地と言つても毫も不可を見ない。現にウパニシャッドは自我を中心としながらも、屢々無我の福音を說き、無我ならざれば眞我に達し得べからずと言つた所も珍らしくはない。試みに一例を擧げて見やう。

五感の作用を停止し、舌端を上顎内に轉じて自我を以て自我を認識せよ、斯くする時遂に無我に到り苦樂の享受なく(眞我の)獨存に達せん(マイトラーヤナ書六、二一)

これは卽ち、眞我實現の方法としての禪定法を說いた句であるが、自我を以て自我を認識して無我に到る時遂に眞我の實現となるといへるもの、正さしくウパニシャッドの實際的眞精神を表示するものと言はねばならぬ。從つてウパニシャッドの眞我とは世界觀的意義からすれば、勿論形而上的原理ではあるけれども、若し之を生活の意義に卽して考へたならば所詮我執を脫した無我の生活狀態に外ならぬと言つても然るべきであらう。

かく考へて來ると、ウパニシャッドの眞我觀と佛教の無我觀との間には幾何の實質的相違もないことが自ら明になつて來る。たゞ異る所はウパニシャッドではその tat 觀に應じて眞我の實現を靜的生活狀態としたるに反し、佛教はその tathā 觀に應じて、無我の生活を慈悲の活動的生活と見た所である。一體佛教の無我論の眞意に關しては、今日の學者許りでなく、已に佛弟子の間にも種々の異論があつたやうであるけれども、吾人を以て見るに要するに二つの根據に基くものである。一つは心理的根據で、他は倫理的根據である。心理的根據とは、佛教は生命を以て常に流動止まざるものと見、精神內に自我とか靈魂とかいふが如き、固定した或物があつてその主體となるのではなく、寧ろ刻々に流動しつゝ、而も過去の經驗(業)を現在に積聚し來つてその運命を創造開拓して無限に繼續するのであると生命を見たその見方である。卽、頑然と固定した自我又は生命を認めぬ點に於て無我說を主張したもので必ずしも生命又は自我を認めぬといふ譯ではない。寧ろ道德の責任者としては無限に個性の連續を認めた

のである。第二に倫理的根據といふのは、即ち解脱生活を資益するための無我論で、つまり自我ありと執するによりて、利己的排他的執見を强めて無縛自由の精神生活に達し得られぬから、寧ろ頭から無我と唱導するの修養に便なるに如くはなしといふ根據である。即ちウパニシャッドの實際的修養法を繼いだ無我觀にして、而も佛陀は何れかといへばこの方面を高調して修養中には煩惱を打破し、解脱後には無我愛の活動の根據としたものである。從て、また、此意味に於て無神主義者たる佛陀の背後に梵が豫想をされると同じくその無我主義の後には常に大我が豫想されてゐることを認めねばならぬ。とにかく、此方面に於ても佛教はウパニシャッドの後繼者として而かも人格の働きとして之を動的に大成したものであつて、決して皮相的に觀察するが如く、その間に超ゆべからざる溝渠が存せぬといふことは呉れ〴〵も忘れてはならぬ。

五、ウパニシャッドの歡喜と佛教の愛

ウパニシャッドはその梵我一如の諦理を實現するために、內觀法をとつたことは、その性質上、もとより然るべきことである。而して彼等はその結果として無我の眞我に到達して純一無雜の宗教的生活に入るや、こゝに絕對無上の歡喜、妙樂(ānanda)を感得した。

これよりは言葉も轉歸し、心も及ばず、梵の歡喜を知るものは何物も恐れず、

誠に深き經驗の結果を歌ひ出した力强き表現と言はざるを得ぬ。こゝを以てか、ウパニシャッドはこの歡喜、妙樂といふことを非常に重要視し、種々に論究して遂に之を以て梵自身の一屬性と見るに到り、梵を實現するといふことは軈て大妙樂を實現するといふ意味であると解釋するに至つたのである。佛教はその涅槃を說いて最上の安樂（paramam sukham nirvāṇam）と言ふたのも蓋し系統をこゝに惹くものであらう。乍併。吾人はこゝでウパニシャッドの梵妙樂と佛教の涅槃との關係を論じて見やうとするのではない。吾人の調べて見たいと思ふのはウパニシャッドの歡喜と佛教の愛即ち慈悲との關係である。

抑々ウパニシャッドの人生觀は、度々言つたやうに誠に深遠なものである。併しながらその一大欠點といふべきは、彼等は更に進んで之を社會的倫理的に實現しなかつたといふことである。換言すればウパニシャッドの哲人は梵我一如の妙理を、主として自内證の法門として享樂するに止まり、その論理的歸結を實際社會に見出さなかつたといふことである。ウパニシャッドには種々の哲人あり、中にはヤーヂニヤワルキヤの如き大哲もあつたけれども、少くもウパニシャッド聖典を通して見る限り、未だ一人として一般社會を相手としてその救濟に從事したものがないと言つても然るべき程であつた。即ちウパニシッッドの哲人は、自己の中には廣大なる天地を開拓して無限の歡喜に溢れてゐながらも、社會的に見れば一種の隱遁的獨善主義者に過ぎぬかの如き觀を免れなかつたのである。併しながら、ウパニシャッドの梵我一如觀は、その性質上、決して自内證の法樂としてのみ止まつて然るべきものではない。こゝに到ると已に理論上、人々平等の結論に到着してゐる許りでなく、その梵我一如の思想中には世界を自我の範圍に收むるの意味を寓するのであるから必然の結果として愛他的運動を起さねば、その意味が完成せぬことになる。これに就て嘗てドイセン敎授は面白い對象を擧げて說明したことがある。氏謂へらく。耶蘇は「汝の隣人を愛せよ」と敎へた。何故に隣人を愛さねばならぬか。ウパニシャッドは之に答へて曰く、「汝はそれなり」と。即ち隣人を愛するの根據は梵我一如の思想によつて始めて充實し、梵我一如の思想は隣人を愛するによつて初めて完成するといふのである。然り。ウパニシャッドには確かに自我として隣人を愛さねばならぬ伏線が充分に備つてゐるのである。併しながら實際上には未だ表はれて居らぬ。タゴール氏は、能くウパニシャッドの句だと言つて「愛より生れ、愛によつて生き、愛へと消え行く」といふ格言を引くけれども、實は氏が然かあらんことを希望しての新解釋で、少くもウパニシャッド自身の意味ではないやうである。若し氏の言へる愛の原語は ānanda 即

ち例の歡喜であつて、ウパニシャッドとしては世界觀的には梵の異名として、人生的には自内證の法樂として用ゐたもので、未だ社會的愛の意味にまで進まなかつたからである。この意味に於て、ウパニシャッドの梵妙樂の悟得は、それ自身としては幽妙でありながらも、未だその到るべき所まで到らなかつたと言つても不可なからうと思ふ。

然らば、これを行く所まで到らしめて、その意味を完成したのは、何人であつたかといふに、言ふまでもなく佛敎の慈悲博愛の福音である。佛心とは慈悲心、これなり。とは大乘佛敎の言ふ所であるけれども、實は已に歷史的佛陀の重要なる一性格であつたことは前に已に述べた所である。誠に佛がその成道後四十五年間の經歷は全くこの慈悲の發動に基く社會的活動に外ならなかつた。成道後、間もなく傳道師を四方に派遣したのも、婆羅門によつて縛りつけられた四姓の區別を解放したのも、正義人道を高調したのも、自ら一生涯を殆ど諸國の遊履に送つたのも、皆この慈悲心に基く世界救濟の大運動であつたのである。即ち率直に云へば、佛陀の理想はその世界的王者の自覺と、無我愛に基く救世主の自覺とを、その人格に結びつけて、法王の資格として精神的王國を此の土に建設せんとした所にあつたと言ひ得る。而して、かくしてこそ、初めてウパニシャッドの梵我一如の世界觀は初めて事實に實現されたものと佛陀は考へたのであらう。佛陀は、この運動の手段たるの說法を梵輪と名けた意味もこゝに來りて益々偶然でなかつたことが分つて來るのである。

要之、ウパニシャッドの梵歡喜の思想の中には、已に自利利他の世界的運動となるべきの種子は充分に備つてゐる。しかし、ウパニシャッドは傳習や何かに拘はれて、未だ發現しかねたのを、或る意味に於て時代の反抗兒たる佛陀は、その傳習の網を破りて正直に大膽に演繹した結果が軈て偉大なる佛淨土の建設となつたものである。即ちこゝにも動かぬ tat と動くtatha の關係が表はれてゐると言はねばならぬ。

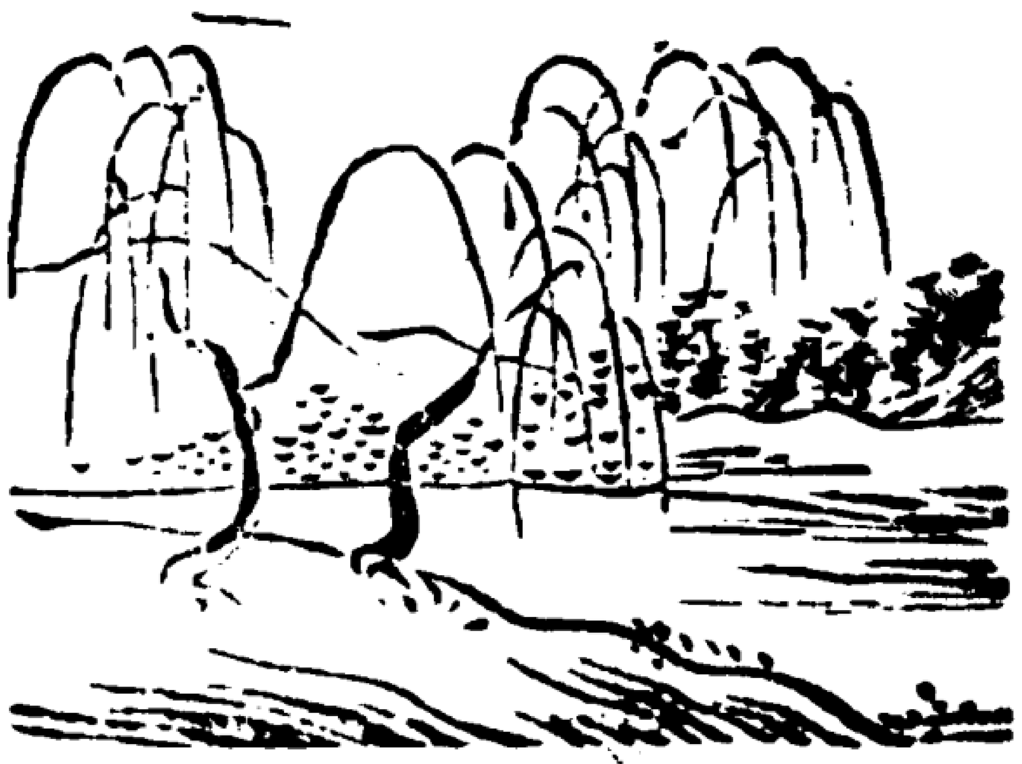
六、結論

以上吾人は、甚だ雜白、且不完全ではあつたけれども、諸方面からウパニシャッドと佛教特に佛陀との關係を述べて見た。かくして、朦げながらも印度思想の二大精華とも言ひうべき、兩思想の間に、極めて重要なる連絡點のあることを見出したのである。本より、その中には、已に先輩によりて、說かれ若しくは暗示された要素も尠くはないけれども、又この中には稍々無理と思はるゝ節もあらうけれども、ともかく、後の正式研究の方針にもと思ひて、些か纒めて見たのである。但し餘り取急いだので、重複したり落したりした所もあるから、モー一遍簡單に上の所論を概括して置かう。

要之、ウパニシャッドと佛教との關係は、たとへその歷史的事實的接觸は間接であつたにせよ、思想の立方としては、極言すれば殆ど表裏をなすと言つても然るべき程のものがある、ウパニシャッドを裏とすれば佛教はその表に當り、前者を理論とすれば後者は實際に當り、前者を基礎とすれば後者はその建築に當ると言つても宜しい程である。たゞ表面上著しく異るやうに見ゆる所以は、ウパニシャッドは人生問題を中心としながらも、形而上的原理の論究に力を盡したるに反し、佛教は、人生の歸趣を直ちに人生その者に即して見出さうとした所にある。

從てこの結果としてウパニシャッドは、梵とか大我といふが如き理體に重きを置き、何れかといへば、之を靜的に寫象したるに反し、佛教は寧ろ之を働きとして動的に寫象し、而も之を端的に人格の上に實現しやうとした。この相違が即ちtatはtathāとなり、tat tvam asi (それは汝なり)は tathāgata (かやうにして來たもの、即ち如來)となり、眞我は無我になり、梵は生きた佛陀となれる所以で之に應じて兩者の間に、種々の方面に於て、色彩の異りを來たしたものである。而も根本に於ては、兩者共に梵涅槃を最高理想として、絕對無限、不死常恒の靈的生活を憧憬した點に於て、全く軌を一にするものである。この意味に於て、ウパニシャ

ッドの梵我は佛教に來りて初めて、その生きた眞義を發揮したことになり、佛教はまたウパニシャッドの梵我を豫想して初めてその解脫的活動に一層深い根柢が見出されると言はねばならぬ。後世に到るに從て佛教の中に次第にウパニシャッド的形而上的方面を開展して所謂大乘佛教となり。同樣にまたウパニシャッドの後身たる吠壇多派は佛教の要素を採り入れて、その社會化を計りて發達するやうになつたのも決して偶然の現象ではない。正さにその然あらねばならぬ所に向つたものに外ならぬと言ふべきであらう。(五月十七日記)



排獨論親獨論の是非（戰後に於ける我對獨態度の研究）

▽國民の眞要求に基いて解決せよ

茅原華山

獨逸に親しむべきか將た獨逸を排すべきかといふだけでは、全く感情論である。

且つ獨逸に親しむべきか將た獨逸を排すべきかといふ問題は二樣にも取られる、思想上の意味と國際政治上即ち普通に所謂外交上の意味とである。

思想上からいへば日本は新に獨逸に學ぶ所あるべきは言ふを俟たない、日本は久しく獨逸の形式を學んだ、然しながら獨逸の精神の何物たるかを知らなんだ、若し知つて居つたならば、開戰後、俄かに獨逸の精神的物質的の用意の周到なるに驚くの必要はない譯だ、日本人は獨逸に遊んで獨逸人の勤儉なるを目撃して、歐洲の猶太人と呼んだものだ、然るに獨逸人の勤儉なるは、自己の爲めにのみ勤儉なのではなく、獨逸國家の爲めに勤儉なのであつた、一切を拋つて國家に奉ずるといふ獨逸精神は日本人の認識看取し得なかつた所であつた。

ロード、ノースクリフといへばタイムスやデイリー、メールの持主で、英國の新聞王と稱へられてゐる、このノースクリフが何といつて獨逸を攻擊するかといふに『獨逸の理想は人民を鍛錬に服せしむるのである、』＝私は此に原語を添へておく＝The German ideal is the subordination of the masses of the people into discipline＝といつて居る、我々日本人には何うもノースクリフ卿の心持が解せられない、日本人からいへばノースクリフ卿は獨逸を攻擊して居るのではなくして

獨逸を讃美してゐるのではないか。然るに英人たるノースクリフ卿は獨逸では人民を鍛錬の中に入れるから惡いといつて攻撃してゐるのである。

其處で獨逸新聞は卿の此言を引用して「それだから獨逸はエライのではないか、それだから百戰百勝するのではないか」と言つてゐる。

借問す、日本人はノースクリフ卿に與みするか將た又獨逸新聞に與みするか。

英國の商議院總裁ランシマン氏は公言すらく「英國人は唯富の爲めに富を造る、決して富以外の目的の爲めに富を使はない、故に英國人は平和の民にしてミリタリズムの民ではない」と、いかにランシマン氏は英國人が富の爲めに富を造るを誇りとしてゐるかゞ解かる、獨逸人は乃ち駁言して曰く「それだから英國人は唯物主義なのではないか、それだから英國は商賣主義の素町人根性なのではないか、我々獨逸人は富を造ることを知つてゐるが、更に富以上の理想の爲めに其富を使ふことを知つてゐる」と。

重ねて讀者に借問す、日本人は英人に與みするか將た又獨逸人に與みするかと。

日本國民が思想上大に獨逸に學び、以て自發創造の用に供せねばならないのは、言ふまでもない、正宗の刀を破碎し分析して强靱なる砲身を造る、日本國民は總てに於て此用意と計畫と徹底と科學とがなければならない、然しながら中央公論の提出された問題は寧ろ國際上日本は獨逸と親むべきか將た之を排すべきかといふのであらうと思ふ、そんならば私はいふ一個の感情論である、國際上最も忌む所のものは受動的の態度である、獨逸と親しむべしと結論して、若し獨逸が我れに親しまずんば如何、獨逸排すべしとして日本にして之を排するの力と策とがなければ、排せんと欲するも得ざるを奈何せん。

要するに國際上の問題として獨逸對日本は先づ日本を中心とし次ぎに獨逸を中心として其世界に於ける位地を觀照せねばならぬ。

第一　日本は世界に於ける位地よりして獨逸と左提

右挈するを利とする乎。

第二　獨逸は世界に於ける位地よりして日本と左提右挈するを利とする乎。

第三　若し日本は獨逸と提挈するを利とし獨逸も亦日本と提挈するを利とすることを自覺すれば、日獨の提挈は筴開いて豆の落つるが如く水到つて渠の成るが如く自然に成就すべし。

第四　日獨共に提挈するを利としながらも獨逸にして自ら悟らずんば、日本は之を悟らしむるの手腕がなければならない、山に往くのではない、又山の來るのを待つてゐるのではない、山をして我れに來らしめねばならない。

第五　日本と獨逸との利害が根本的に衝突すとすれば、是に始めて獨逸を排する有効な方法を案出せねばならない。

私は之を詳論する前に一言して置かねばならないことがある、抑も所謂外交とは何ぞ、最近日本の外交とは何ぞ、と、外交とは讀んで字の如く外に交はるのだといふであらう、それだから外交論國際論といへば、日露佛英同盟論を提唱するものもあれば、日獨露三帝國同盟論を提唱するものもある、日米戰爭論を書き立てるものもあるのである、知らず日本は何故に露佛英と同盟せざるべからざるか、知らず日本は何故に獨露と同盟せざるべからざるか、知らず日本は何故に米國と戰はざるべからざるか、條約改正を中心とする外交の時代は既に過ぎた、支那、露國を戰爭の相手とする時代も亦既に過ぎた、知らず現代の日本は何を中心として外交の經綸を立つべきか。

一問此に及べば、現代の外交家を以て任ずる石井菊次郎氏でも加藤高明氏でも牧野伸顯氏でも內田康哉氏でも珍田捨己氏でも若くは恒河の砂よりも多き民間の外交家でも必ず茫然として自失するに相違ない、現代の日本の外交家若くは國際論者なるものは發想すべき中心と焦點となくして唯肉眼を外に放つてゐるだけであるから、國論の當然歸一されねばならぬ外交政策までが多岐に分裂してゐる所以である。

日英同盟論も分裂してゐる、日露同盟論も分裂してゐる、日米戰爭論も分裂してゐる、日獨同盟論の亦從つて分裂してゐるのは、國際上に於ける日本の最大利害を自覺して後、肉眼を外に放たないで、始めから外交は讀んで字の如くで唯肉眼を外に放つからである、外交が一の技巧と爲つて經國の大業たり得ざる所以である。

日本の最大利害なるものは何處に在るのだ、日本の外に在るのかそれとも日本の内に在るのか、若し日本の外に在りとすれば、それは最早日本の利害ではないではないか、故に日本の利害は日本の内に在らねばならぬ、此日本の内に在る利害、日本の内に在る問題を解決するに方つて、之を内にて解決する能はざる場合、之を外に於て解決するの大業を定むるのが、眞の外交ではないか、紛々たる小利害は姑く置く、然らば則ち日本國民の最大利害とは何ぞ。

日本の外交は田舍に在り田園に在り村落に在る、私は地方に赴く毎に農村問題を何う解決して呉れると肉迫される、私は答へる、技術上の問題に至つては請ふ之を學者技師に質せ、若し夫れ農村の生活問題人口問題に至つては日本の經國家、日本の外交家が外交は内に在り、内の問題を外に解決するのだといふことを深切に悟了するまでは到底解決するの見込みはない、避妊するものが殖えても、墮胎するものが殖えて、都會に流浪するものが殖えて、餓死して溝壑に轉ずるものが殖えても何とも以て致し方がない、縱しんば人口漸減の形勢が迫出されても致し方がないと。

内務省では人口が漸く減少に就きはしないかと心配してゐる、老人が多く死ぬとて心配してゐる、幼兒が多く死ぬとて心配してゐる、若い娘が多く死ぬとて心配してゐる、人間の健康が衰へて行くといふので、保健調査會とかいふものを造へて調査すると稱してゐる、すると惟物主義の醫者共はやれ帽子を冠つてはならない、やれ洋服を着てはならない、やれ何、やれ何と世話してゐる、社會學者はそれだから新マルサス主義は何うだと飜譯をしてゐる、此人口問題、此生活問

題、此保健問題と外交家とは全で沒交渉である、內務省ではこれが日本國民の最大利害問題で、そして此問題は國際的に解決せねばならぬとは推及し得ない、外務省では又これが日本國民の最大利害問題で、これを外交上の最善を盡くして國際的に解決せねばならぬとは夢にも念ひ得ない、日本の外交に中心なく、日本の外交論に焦點のないのは、外交が國民生活と全く結び附かないからである。

日本の外交の中心は日本國民の最大利害問題たる人口問題生活問題を解決するに在るとすれば、移民地を見出すか、將た新に植民地を取るか、此二つより外はない、世界は隨處に人口を移植すべきものでないといふことは漸く識者から瞭解されて來たやうだ、世界には自ら移植民圈なるものがある、この圈內でなければ、多數の移植民は事實不可能である、この移植民圈に入るものは、北米合衆國である、加奈陀である、南阿米利加である、南阿非利加である、濠洲である、ニユー、ジーランドである、凡そ此等だけである、朝鮮でも支那でも印度でもマレー半島でも、南洋諸島でも決してこの日本の人口問題生活問題を解決することが可能ないのだ。

南米の外は移民を拒絕されてゐる、その南米さへ果して多數の日本人を歡迎するや否やは疑問である、日本政府は米國に對してはゼントルマンス、アグリーメントで滿足してゐる、英國との同盟を維持せんが爲めに、日本政府は英國の領土に移民することを全く遠慮してゐる。

日本國民の最大利害問題は解決されずに殘つてゐる、さうして朝野共に解決しやうともしない。

この日本國民の最大利害問題を解決するには、米國をして無理推しに日本の移民を承諾せしむるか、それとも英國の一領土に向つて新境地を開くか、これより外に策はないではないか、然しながら米國をして日本の移民を承諾せしめた所で、經濟上、民種上の紛爭は斷絕しないのみか、日本はその米國に移した日本人を米國に呉れて遣らねばならぬ、二重の國籍を有たしめ、

無事の日は米國人たれ、有事の日は日本人たれ、外形に於ては米國人たれ、內心に於ては日本人たれといふのは、是れ實は日本を以て世界の表面に橫暴を縱にするのである、故に詮じ詰むれば日本の最大利害問題即ち人口問題生活問題は唯英領に發展することに依つてのみ決せらるるのである。

內に內部的統一なくして外交のあり得る筈はない、そして內部的統一は日本國民の最大利害問題に自覺するより始まるのである、苟もこの最大利害問題を自覺すれば、而して之を解決するの途は唯將さに土崩瓦壞せんとする大英帝國の領土に在りとすれば、日獨は勢ひ左提右挈せずには居られないではないか、日獨が左提右挈して露國も米國も亦之に誘ひ入れ、列國をして各滿足する所あらしめて此大策を決行することが可能るのではないか、獨逸若し此の世界的大經綸に自覺せずんば、我れ自ら進んで獨逸の蒙を啓かねばならない。

獨逸よ、汝は阿非利加の大部分を領せよ、或交換條件の下に和蘭を其聯邦に入れて、以て自衛的に南洋諸島を其範疇に歸するも亦可、チグリスを堺として其以南亞細亞土耳格は盡く汝の勢力範圍たらんといへば、獨逸は滿足すべきにあらずや、露西亞よ、汝は南して英國を排して自由の海波斯灣に出づべし、機に乘じて印度に入るも亦可なりといへば、露西亞の滿足此上なきにあらずや、米國よ、汝は加奈陀を其聯邦の中に投ぜよ、ヒリッピンの如きは之を放棄するも亦惜しいことはないではないかといへば、米國も亦開いた口に牡丹餅の感あるべし。

佛國に南阿非利加一帶の地を與へ、ジブラルタルを西班牙に還へし、マルタを伊太利に還へし、埃及を土耳格に還へし、香港を支那に還へせば、世界の列國皆齊しく大に得る箇所がある、そして日本は人口少くとも二億を容るゝに足る濠洲を以て日本の植民地と爲さば、全五千餘萬を移しても尙足らず、日本の人口問題生活問題は瞬息に國家的國民的に解決されるではないか。

墮胎も避妊も神經衰弱も精神病も人口問題も生活問題も事業難も造職難も就職難も瞬息に消滅するではないか。

日本は世界に於ける位地よりして獨逸と左提右挈するの必要があるではないか、獨逸も亦世界に於ける位地よりして日本と左提右挈するの必要があるではないか、唯奈何せん、日本が未だ達觀して此に至らないことである、或は獨逸の方から日本と左提右挈するの利を悟り、日本をして來らしむるの策を講ずるかも知れない、或は獨逸は日本なくして大英帝國を破壞する方法を案出するかも知れない、さすれば日本は世界の地圖改造の外に取殘される。

近ごろ外國から傳へらるゝ獨逸の媾和條件なるものを見るに、獨逸は露國が波斯を領有するに異議がないやうである、日本と獨逸とが接近されなかつたのは、獨逸が英國と同じく露國を極東に驅逐し、長く日本と滿洲の野に對抗せしめんとしたからである、故に若し獨逸にして露國の南波斯灣に出づるを許せば、日露再戰の虞は全く去り、從つて日本は獨逸と左提右挈して以て世界の地圖を改造するに與ることが可能る譯ではないか。

此日本國民の最大利害問題を地球の表面に於て解決するの大策なくしては、親獨も無用である、排獨も無用である、日露同盟論も無意味である、日英同盟維持論も無意味である、日米戰爭論も無意味である、日本人の間には亞細亞モンロー主義を力說するものがあるが、支那を何の爲めに何とする積りか、印度を何の爲めに何とする積りか、支那や印度は唯我商業市場とすれば可いのではないか、支那印度を經營するは唯我原料を得我製造品を賣れば可いのではないか、これが爲めに或種の利權を獲得するの必要はあらうが、要するに我商工業の對象たるだけであつて、所謂日本國民の最大利害問題は人口四億を有する支那、人口二億を有する印度では決して解決が出來ないではないか。

我外交家よ請ふ先づ外より內に戻れ、而して日本國民の眞要求は何處に在るかを研究せよ、之を研究して

日本の外交の中心點焦點の安くに在るかを忘却し、更に眼を外に放つたならば、同じく廬山の煙雨でも同じく浙江の潮でも、その光景は截然として別物ならんことは請け合ひである。

▽排獨か親獨か

松井柏軒

(一)

今は獨逸に宣戰中にして、彼れ正さしく我が敵なるを以て、親和若くば排斥は全く問題とならず、唯だ平和克復の後に至つて、彼れ親しむべき乎、將た排すべき乎、始めて切實なる問題たるべし、然り、是れ我が帝國の將來に於て、極めて重大なる問題也。

(二)

此の問題を解決するには、歐洲媾和の條件を前提とし、殊に最も露國の向背に重きを措かざる可らず。

最近の歐電は、頻りに獨逸和意の切なることを傳ふ、獨逸が既に大正八年度までの壯丁を召集したるは事實にして、且つ戰線中より二十五萬人を選抜して新軍隊を組織したるも亦事實らしく、或は大正九年度の壯丁(十六歲)をも召集すべき緊急法令の制定中なりともいふ、物價騰貴の著るしくして、財政上聊か難色あるとも、隨處は多少の騷擾あるとも、多少事實として承認せざる可らず、即ち現在は獨逸國力の緊張せる最大限度にして、此の上更に曠日彌久せば戰後の恢復を困難ならしむる程に國力の涸渇を來さんとす、故に獨逸としては、白耳義の幾んど九割以上、佛國の東北部、露國の波蘭及びクールランド地方を合せて、約十七萬方哩を確實に占領し、而して塞耳維、黑山國を平げ、完全に漢堡、伯林、コンスタンチノープルを聯繫し、遠くバグダットに亘りて、歐亞兩大洲を南北に縦斷し得、幾んどパン・ゲルマニズムを實現したる現在の狀態を以て、玆に媾和談判を開始するこそ、最良至便の機會とすべく、其の媾和に鋭意するの當然なる多言を俟たずとす。

（三）

我が與國たる英露佛等にして、若し獨逸の國力に鑑みて、倘ほ媾和を肯んぜずんば、獨逸果して屈伏すべき乎、否、獨逸若し自から曠日彌久の策を執り、其の卓越せる化學的智力を應用して有らゆる防禦手段を盡し、消極的に守備專門に努めば、我が聯合軍が進んで之を擊破するを得るや否や、恐らくば疑問ならん。

斯くして互に曠日彌久する間、獨逸の困憊すると共に、聯合軍先づ自から窮迫して、却つて和を欲するが如きに至らざるや否や。

若し斯くして交綏的和平の外なきに至らん乎、其の結果如何と熟考せよ、白耳義の恢復と、佛國侵地の回復とは多分事實ならん、去れど獨逸の下風に置かるべき波蘭王國の出現を看ざるや否や、白耳義は獨逸より賠償金を得ると能はざるがため、果して眞に戰前の地位を完全に占め得るや否や、恐らくば疑問ならん。

（四）

然れども際限なく疑問を擧ぐるは事に益なし、唯だ確實にして疑ひなきは、獨、墺、土の三國彌よ同盟を鞏固ならしむるの一事にして、茲に中歐の一大雄邦を實現すべく、其の結果として、露國及び和蘭の向背は最も注目すべき問題とならん。

和蘭の皇婿は獨逸王室の出にして、和蘭の官民が現在戰時中より、獨逸の意を迎ふるに孜々たるは人の知る所也、其の決然起て獨逸に與せざるは、宣戰に依て聯合軍側より其の宏大なる殖民地（殊に瓜哇、ボルネオ等所謂蘭領印度）を奪取せられんことを恐るゝ故のみ、戰後獨逸を盟主とする一大雄邦出現せば和蘭は假令折れて獨逸の一聯邦とならざるまでも、經濟的に其の下風に立つや推定に難からずとす。

果して然らば彼の我が南進の門戶に當る蘭領印度諸島の如きは、總て獨逸の勢力圈内に入るものと觀るを以て萬全とすべきや贅說を須ゐずとす。

（五）

露國經濟の中心は殆んど南部露西亞に在りとするも過當に非ず、露國が世界穀物の倉庫といはるゝも、南

露地方の麥穀あるがためにして、其の黒海地方の鑛物及び石油の如き、共に主としてボスフォラス、ダーダネルス海峡に由りて輸出するの外あらず、然るに獨逸堅く土耳其をして其の關門開閉の鎖鑰を握らしめんか、露國は勢い殆んど其の死命を獨逸に制せらるゝものと稱して可也、何ぞ況んや陸上には波蘭王國の成立ありて、獨逸に對する一の緩衝地帶たるあらんとするをや。

露國の帝室及び皇族貴紳の間に、獨逸との姻戚關係深きは人の知る所の如し、獨逸の有する露國證劵は概算十七億圓に過ぎずと雖も、獨逸人が露國に放資して商工農業を營める關係また極めて宏く且つ深く、現に獨逸人中「露國は獨逸と離れて經濟的に獨立する能はず」とまで傲語する者あり、此等の關係に視て、露國は戰後却つて獨逸と握手し、竟に進んで露獨同盟を締するに至るなきや否や、是れ實に問題にして、而して我が帝國の將來に取て、極めて重大なる問題也。

（六）

試みに獨露同盟成りたりとせよ、兩國の大兵陸上より印度の背面を擣く時、日本は果して日英同盟に由て印度防衛の責務を盡し得るや如何、殊に印度洋と太平洋との通路を扼する爪哇、ボルネオ等の諸島が獨逸の勢力圏内に屬する時、我れ果して安全に印度に送兵し得るや如何。

且つ露獨一致して、支那方面に南下し來る時、我れ英國の力に由て、果して何を成し得るぞ、苟くも一念茲に及ばゞ、我が國運民命の關する所、殆んど測る可らざる也。

佛國と雖も、露國との同盟を失ふ時は、殆んど自から保つ能はざるを以て、假令欲するも欲せざるも、必らず英國と分れて獨露に與みせざる可らず、即ち英國は勢ひ歐洲に於て孤立せざるを得ざる也。

故に露國の向背は、全く世界の大勢を左右すべく、英佛の如きは、當さに何物を犧牲としても、必らず永く其の味方として、以て獨逸と對抗せんことを努むべし、否、努めざるを得ざるのみ。

（七）

我が聯合與國にして、假令武力を以てするにせよ、將た武力以外の力を以てするにせよ、兎にも角にも獨逸をして將來少くも半世紀の間再起する能はざるまでに屈伏せしめ得ば知らず、若し然らずして、獨逸をして墺、土、勃を連ねて中歐大雄邦の盟主たらしめ、殊に露國をして之に參加せしむる如きあらば、所謂排獨論の如きは、幾んどいふ可くして行ふ可らざるのみ。

故に曰く、排獨と否とを決定せんには、先づ歐洲の媾和條件を前提とし、殊に露國の向背に重きを置かざる可らずと、將來の國際關係を案ずるもの、深く心すべし、歐洲和戰の機に晏如たる者、將た聯合國の必勝を夢想する者の如き、最も戒むる所を知るべき也。

▽我が對獨態度の研究

慶應大學教授　向軍治

國の交も亦個人の交の如き者である。互に友情を盡すべきである。個人の交には敵なきことを努めながら、國の交に於ては、特定の國を友として、特定の國を敵とすると云ふは、是れ野蠻時代の習慣其物で、文明の世界には通用しない事である。今は世界萬國團結して一家となるべき時で、兄弟牆に鬩ぐべき時ではない。世界萬國は實に兄弟同樣の關係を有つて居る。眞理の研究の上から言つても、人類の衞生の上から言つても、利益の交換、有無の相通、一として世界萬國の協同一致を必要とせざる者はない。野蠻時代の陋習を脫せざる現在の世界を根據として立論し、平和論者の希望を以て空想なりと爲す者は、世界文明の趨勢を洞察し能はざる近眼者である。

外から敵對の行爲を以て我に臨む者に對しては、權利の上に於て一歩も假さゞると同時に、道德上に於ては七十回七度忍耐するの勇氣がなくてはならぬ、斯くして彌々勘忍袋の緒の切れた時勇往直進すること日淸戰爭當時の如く、又日露戰爭當時の如くするのが日本武士の本性である。

今回の戰爭に於ける北米合衆國の偉大なる態度を觀よ。就て學ぶべきもの決して少くない。

國も個人と同じく、常に獨立の精神を養つて置くべきものである。獨立とは孤立の謂ではない。併しいざと云ふ場合には孤立しても其節を曲げないと云ふ處に獨立の眞價はある。不屈不撓、向ふ所敵なき驍勇無比の獨逸を觀よ。同じく二千年來の歷史を有し、同じく武士道を尊ぶ國にして、一は驍名を世界に轟き、一は宛然屬國の觀。是れ決して唯西と東と相隔つるが故ではない。其歷史、其武士道が唯外觀に於て似て居る丈で、內容に於て大に異つて居るからである。

獨立の實力のない國は、對手の獨逸たると英國たるとを問はず、唯其の命を奉ずるより外はないのである。宛然屬國たる觀を呈するの外爲せんすべのない國には、態度もヘツタクレもあつたものではない。御都合次第に任するより外はないのである。十年前に於ける吾輩の警告に國民が耳を傾けて呉れさへしたら、假令今日我國の實力が十分出來上らないにしても、今更狼狽して對獨の態度なんか研究する必要はないのである。濟度し難きは斯國民である。

我國に實力さへあれば獨逸は我國の無二の友たるべき國である。獨逸も我に賴りて利益を受け、我も獨逸に賴りて利益が得られる。實力のない我國に取りては獨逸は敵にしても、友にしても、餘り利益にはならない。又敵にしても、友にしても、獨逸から受ける我國の損害は決して少しでは濟まない。獨逸を敵に廻して、英國との親しみを續けて見た處で、英國は自國の利益のためにこそ日本を利用しても、日本の利益は英國人の眼中には無いのである。若し此戰爭の結果が英露の接近にでもならうものなら、日本は露英の對獨對支政策の道具に利用せられる丈で、自分には何等得る所はない。且つ經濟上に於ては、東洋に於ける獨逸の發展を妨げ得る代りに、米國のそれを助けるに止まるのみである。此戰爭中に獨鬼の留守の間に米國が太平洋上に大仕掛の茶ひきを始めて、日本の海外發展が著しく米國のために妨げられつゝあることは、ぼんやりかん

の日本人は大抵知らないのである。戰後に於ける米國の大飛躍が我國の商工業を、手の出し樣のなくなるまで壓迫し去ることは、火を睹るよりも明な趨勢である。聯合國の經濟會議に加はつたと云へばエライ事の樣であるが、其實唯彼等に愚弄せられる丈である。獨逸へ賣込むことは出來ないで、唯獨逸から買入れる必要のみを持つて居る我國に取つて、對獨ボイコットの仲間入をした處で何の利益がある。戰爭中でさへ、獨逸の品物の輸入がないので大困難を感じて居るではないか。若し戰爭の結果が露獨同盟にでもならうものなら、獨露支の大團結が出來て、我國の極東に於ける地位は、現在の歐洲に於ける英國の地位よりも危くなる。獨逸を友にすれば極東に於ける經濟の實權を日獨兩國で握る事は困難ではあるまい。併し其曉に實權が盡く獨逸の手に歸りて、日本が屬國然たる模樣を呈するに至ることは、今日よりも甚しからう。英國は外交上空威張りをする丈で、實力のない國である。故に日英同盟は日本の實力發展の上に効能が少くない。實力の熾んな獨逸と同盟した處で、御先に使はれることは現在の英國との關係よりも甚しくなつて、利益は少しも我國の手には歸せない。且つ日獨の接近は英國及び米國を敵にすると云ふ結果を生じて來る。是れは我國の存在を危くする恐がある。

戰爭の起つた當時であるなら、日獨聯合の艦隊を以て當れば、東洋に於ける聯合軍の艦隊を粉碎することは譯はなかつたのである。倫敦も巴里も無くなつたこと我輩の預言の通になつたのである。今日は否でも應でも聯合軍と步調を揃へるより外はないことになつて居る。對獨問題も何もあつたものではない。時勢に暗い、學問のない政治家が國政を誤ること夥しい。我國は財政上英國と離るべからざる關係を持つて居る。他日我國が大に飛躍しやうと云ふには、斯の如き厄介な關係は、一日も早く之を斷つて置くべきである。今回は之を爲すの好時機である。併し之を爲さうと云ふには、全く國家の安危を賭して掛らねばならないのである。それ程の勇氣があれば何んで滅び行きつゝある英

國の反感を買ひ、且我國數十年來の無二の友である米國を敵にする必要があるのであらうか。米國は自營上益々英國と結托する必要がある。英國を手先に用ひて獨逸に當る必要がある。米國は外交上我國の敵になる計りではない、經濟上に於ても日獨同盟を粉碎する方針に出るであらう。日米戰爭の起る心配はない。併し經濟上に於ける日米の競爭は强食弱肉の結果に至ること請合である。

已に獨逸を敵に廻した以上、何處までも之と戰ふのが日本男子の意氣地である。獨逸書の翻譯をして自說であるかの如くに吹聽して居る淺薄な學者こそ、獨逸を敵にしては困るかも知れない。斯の如き無學の徒は日獨國交斷絕と與に滅びるのが當然である。獨逸品の輸入で露命を繫いで居る賣國奴的商工業者は獨逸を敵にしては困るかも知れない。彼等の盛衰と我國の盛衰とは相背馳するのが當然である。意氣地なしの徒の亡びるのは國家の利益である。之を要するに、戰後に於ける我國の地位は、獨逸の向背如何に拘らず、今日已に定まつて居るのである。之に雷同せんと欲すれば、我國民全體が擧つて臥薪嘗膽を遣るより外はない。此頃ベルギー人に出逢つたら「日本人は明治の初年佛國に謳歌し、英國が强くなつたら日英同盟と出掛、今度の戰爭には事によると洞ヶ峠を遣り兼ねない輿論の傾向である」と謂つて笑つて居た。今になつて對獨の態度抔と騷ぐ樣な時勢後れの國民であるから、國の運命は日々に縮まるのである。十年前我輩が「獨逸に鑑みよ」と大聲疾呼した時に、賣國奴呼はりをして我輩に喰つて掛つた連中は、意氣地があれば今日は我輩の前に低頭平身して陳謝すべきである。

今日の急を救ふの道は自國の開發にある。我國で今日研究すべき問題は對獨關係よりも對米關係である。獨逸は支那に由りて我國と境を接して居る國ではあるけれども、若し支那が早く覺醒しさへすれば、獨逸と我とは、遠く東西に離れた國である。之に反して米國は一葦帶水の國である。而して米國の戰爭以來の覺醒は凄じい勢である。米國は我國に取つて怖るべき經濟

上の敵になるべき國である。今の時に當つて早く米國の經濟家と結び、外交上は無論の事、經濟上に於ても亦常に相携へて、兩國の間に永遠の平和の成立つ樣に努めることが、我國目下の急務である。貧乏人が立身したいと思へば、富豪の助力を仰いで、他日獨立した暖簾が下げられる樣に心掛けるのが一番の捷徑である。米國は由來我國を文明に導いて呉れた國である。今日已に本店と支店位の關係はある。此關係を永く維持することが我國に取つて目下の急務であり、又國家千萬年の計である。米國の進歩した曉には、獨逸書は讀まなくても、世界の文明には後れない、と云ふ時代が來る。戰後我國に於ける獨逸熱の高度今日から思遣られるのであるが、數十年の後を慮る人士は、今日から宜しく米國熱を高めることに盡力すべきである。我輩は現在の米國の學者の極めて淺薄なるを知る。然れども其れと同時に、其の進歩の當に著大なるべきを信じて疑はざるものである。幾ら御國自慢の强い男でも、今日となつては獨逸には一目置いて居るであらう。進歩すべき國は、獨逸を除いては日本の外にない、と思ふのが、始末に行かない我國人の高慢心である。日本が進み得れば、米國は一層大なる力を以て進み得ると云ふことを考へねばならぬ。十年前に我輩の言に耳を傾けないで、今更の如く獨逸の强いのに驚いた時勢後れの日本人は、宜しく十年後に復米國の進歩に眼の子玉を飛び出させない樣に、今から善く準備して置くべきである。「天は自ら助くる者を助く」と知れ。

時勢の要求に應じたる

婦人公論

定價金廿三錢 郵税一錢五厘

東京本郷區西片町十
中央公論社
振替東京五十四番

愈々其特色を發揮せる六月號の壯觀

中央公論の愛讀者は貴下の最も親愛なる家庭に一本の『婦人公論』を献ずることを忘れ給ふな!!!

- 日本婦人の美德……福本日南
- 爪を美しくする法……マリー・ルイズ
- 女子の肉體美……富士川博士
- 歐洲戰爭に現はれたる偉大なる婦人の力……穗積重遠
- 娘を何の女學校に入れるか……宮田校長
- 女中の使ひ方……安部磯雄
- 支那情話 燕と貞操……田村松魚

- 西洋の妻と臺所……中根環堂
- 泥棒の這入る家……某警部
- 支那は今何を騷いでゐるか……吉野博士
- カチューシャの話……島村抱月
- 夫婦和合家列傳……鈴木秋風
- 大正新女大學(その六)……井上博士
- 女子職業調べ—女店員……一記者

女の運命

- 夫の乘れる飛行機墜落の報を聞て……頓宮歌子
- 獨り寢の枕元を賊に襲はれた夜……下山京子
- 夫の不意に拘引されて行つた後……日向欣子
- 三人の子を遺して夫に先立たれ……國木田治子
- 夫と別居して訴訟するまでの事……岩野清子
- 眞の同情者たる弟、自殺に遭ひて……森律子

《小說》五大雄篇

(新短篇小說)

- 母から母へ……德田秋聲
- 爪紅……長谷川時雨

(長編小說)

- 情炎……長田幹彥
- 舞殿……笹川臨風
- 若妻……小栗風葉

苟も今後の婦人はこれ位の程度の雜誌を毎月讀んで其智識と趣味の高上を圖ることを怠り給ふな!!!

(中付二の一)

文學博士 上田萬年 文學士 橋本進吉 共著

東京帝國大學紀要第二 古本節用集の研究

四六倍判全壹册
定價金參圓
郵税金拾貳錢

節用集は、足利時代より徳川時代を經て明治の世に到る迄も、世俗用の辭書として一般世間に弘く行はれ、爲に其異本も極めて多く、研究すべき問題も亦尠からず。而も之に關する學者の研究は甚乏し。本書は慶長以前の版本、及び徳川時代の初期迄に成り又は書寫せられたる諸本に就きて、類別解題し、諸本の系統的關係、著者著述年代等の諸問題に入り、併せて本邦に於ける辭書變遷の跡を繹ね、以て節用集の辭書發達史上に於ける位置を明かにせられたるものなり

發行所

東京市日本橋區新右衞門町（振替東京三三九六番）
國定教科書共同販賣所

大阪市西區阿波座上通一丁目（振替東京一五〇三五番）
同 大阪出張所

■別所梅之助先生著

霧の王國へ

山岳會所藏の印畫廿枚挿入

常世の雪、下界の知らぬ花、霞の奥、霧のあなたの其浄き王國を慕ひゆく山岳巡禮者の、敬虔な旅日記と、大自然に捧ぐる心からの愛の書こそ實にこの文集である。

総洋布製美本
定價壹圓
郵税金八錢

■海軍大佐 保坂彦太郎先生著

南洋通覽

珍らしき寫眞版二十二個挿入

本書は、南洋研究者の指導的且つ戒飾的文字にして、材料豐富、精細を極めたれば、以て類書中の權威たるべく、苟も「南洋の眞相」を究めんとする人々の坐右缺くべからざるの書なり。

菊判九百頁餘
定價四圓五十錢
郵税金十六錢

（中付二の三）

□發兌 東京京橋尾張町 **警醒社書店** 振替東京五五參番□

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

(中付二の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

京阪見物印象記



田村俊子

大阪

二週間ほど、豫定した旅行の日數の內、大半は奈良と京都の美術を觀るのに費すつもりであつたのが、行つて見るとその豫定が崩れて大概は大坂と宇治で遊んでしまつたので、今度の旅は主に大坂ばかりで過ごしたやうなものになりました。殊に奈良は一日半の僅かな日時の間に東大寺や法隆寺を駈け廻つて、見られる限り三月堂や興福寺內の彫刻を不眠と遊びに疲れた頭の中に詰め込んだりしたので、何だか遠い昔にそこい

ら辿りを索ねたやうに奈良の自然の印象が模糊としてゐます。然し今度私の歩いた範圍内では矢っ張り奈良が一番なつかしかつたのです。大阪に滯まつてゐた一週間ほどの間は毎日天氣快晴で、いら／＼と大阪の市中は熱氣に照り、乾いた埃が立つてゐましたが、京都の二日は雨が降り、奈良の一日は新綠に雨がぱら／＼と降つたり又止んだり、時には千年前の建築の瓦にぽうと薄日が射して來たりしました。この自然の氣象が、それ／＼の土地に對する私の嫌惡や親しみの感情を余ほど鹽梅したには違ひありません。奈良は最も私には懷かしく、京都は私に靜な印象を與へ、大阪は騷々しく燥ぎ切つた印象を殘してゐます。私は今度の旅の内で自分の嫌ひな日光と一所に、ある動機からこの狹ま苦しい喧騷な大阪でばかり遊んでしまつた事を憾みにしてゐるのです。

機があつたらもう一度近い内に京都と奈良へ行きたいと思つてゐます。私が最初に足を入れたのは大阪だから先づ大阪の見物記から書きます。

大阪の市中。

大阪の町を歩いてゐると何所から何所まで萬遍なく廣告ばかりで埋まつてゐるのに驚きます。町の美觀、又は町の體裁と云ふやうな觀念なしに、唯けば／＼した惡毒い彩色や、大きな文字を塗つた看板が家根と云はず柱と云はず揭げてあるのです。市の中心に行くほど、其の狹い町の中が現代の文明や、大阪式の商法や事業や、大阪人の貪婪な遊色やがごつた返してゐた、其の中を露骨な傍若無人な——いゝ意味で一面から云へば開放的な——大阪人が、のつぺりとした丸こい顏をしながら忙しさうに往來してるやうな觀があります。心齋橋筋を行くと、其所では又、派出な裝りをした大阪の女が大きな風呂敷を持つて彼方の店に立ち此方の店に立つて買物に混雜してるのに驚きます。丁度東京の師走頃に、賣出しの店の前に女たちが群がつてるやうな樣子です。小間物や、呉服や、半襟や、下駄や、簪や、——何の店も／＼一帶に女がうよ／＼と立

ちはだかつてゐます。大阪の女は大層買物が好きだと見えます。町で見る大阪の女はみんなけばけばと華美な装りをしてゐて堪りませんが、娘たちの粧りは奇麗ですし、非常に美しい娘が大阪には多いやうに思ひました。其の美しい娘が公園に行くと盛にブランコをして遊んでゐます。住吉の公園では二十ばかりの高髷に結つた上品な娘が面白さうに高く飛んでゐました。これは東京では見られないことです。若し東京で十九や二十の娘がブランコなどをして居たら忽ち其の周圍は人の山を築くでせう。それと、千日前の十二時一時の夜更けを、大人に手を曳かれながら小供がぞろぞろと遊んで歩いてるのにも驚きます。色町へ入れば夜通し弦歌の聲が絶えないやうに、大阪人が遊びの上にまるで制限をおかない事が、こんな小供の上にまでも窺はれるやうです。よく淺草の公園と比較される千日前の夜の賑やかさは、東京の淺草のやうに池の水や山の樹などを背景にして明るい灯を望むのとは違つて、まるで少しの情味もなく、見世物小屋が目白押しに幟の旗と一所に並んでゐるばかりです。一[illegible]なのは天王寺公園です。淺草の銘酒店や射的店の並んでる或る一郭に似たやうな所を過ぎると、見合橋と云ふ名稱のある八ッ橋などの掛つてゐる池の方に出ますが、唯散漫と廣いばかりでこの公園には何の風情も風趣も備はつてゐません。恐らく樹木のない公園と云つたならこの天王寺公園の外にはあるまいかと云はれる位です。

大阪で心持の好い事は電車のよく走る事です。郊外を行く電車などは身體の浮くやうに走ります。大阪から各地へ四通八達の電車の停車場毎に「京都ゆき」とか「奈良ゆき」とか云ふ文字が、停車場の正面いつぱいの大きな看板に記して掲げてあるのも大阪式です。

浪花の色町情調

大阪では丁度浪花踊りが初まつてる最中でした。北陽演舞場と云ふ新らしい大きな建物は、天平式の建築に型どつて出來たもので、これに三十萬圓かゝつたと云ふ様な事を案内した人が云つてゐましたが、見掛け

は少し仰山だが内部の装飾などは思ひ切つて結構に出來てゐました。舞臺や花道のフートライトの上を艶消し硝子の板で張り詰めてあるのも珍らしい式です。此所は藝妓たちの踊りの催しに限つて用ひられる演舞場だと聞いて、浪花踊りが大阪藝妓の名物とは云ひながら、こんな單な娛樂場に數十萬金を投じて惜しまないところに大阪人の遊びの意氣があるのかと思ひました。東京の新橋や柳橋の藝妓たちが時々催す舞踊や音曲の浚ひに有樂座や歌舞伎座を借りて濟ますのとは大した相違です。こんな大きな建築物を所有してゐられる大阪の花柳界はまつたく威張つてものだと思ひました。私の見た番は生憎二度とも同じ藝妓たちの日で、北で有名な秀奴を見ることの出來なかつたのは殘念でした。其の代り一番聲の美いと云ふ呂之助の立唄を聞きました。冬の立方の内で梶川豆力と云ふのがゐました。これが大層遊びの客に好かれる流行つ兒だと云ふ評判などを聞いたりしたのは最初の夜です。二度目の見物の時にはこの藝妓とも南の菱富で馴染になつてゐて、その歸りには又松糸でこの藝妓に逢ひました。演舞場内よりも風情のあるのは「浪花をどり」と墨で書き、紅で縞を出した灯が軒毎に吊るしてある新地の夜です。薄暗い道巾の廣い通りで、行きずりに逢つたのでは一寸はつきりとは顏も分らないやうな仄のりとした遠い灯の影で、踊りの歸りの藝妓が客に聲をかけたりしてゐます。東京で見る色町よりも、其の薄暗い巷の夜の氣分に、何となく色〻頽廢した疲れた情緒があつてそゞろに心を惹かれます。新地を歩いてゐる時豆千代と云ふ舞妓が後を追ひかけて來て中途で車を下りたのも二度目の夜でした。その時は黑繻子の襟のかゝつた友禪を着て、高い木履を穿いてゐました。この舞妓は芝居で逢つた時に、役者の總見の櫻のかんざしを左の前髮の脇に挿してゐたので、もう一本その右に挿してやりましたら、その晩茶屋で逢つた時にもちやんと二本挿した儘でゐました。私はこれが大阪の女の素

直に優しい云ふなりな氣質を代表してゐるやうに思つて可愛らしく思ひました。いつたいに大阪の女はのつぺりとした顔をしてゐながら肉が豊で表情に富んでゐます。挑發的な唇を持つてゐます。眼が綺麗ではつきりとしてゐます。そうして眼を使ふことが非常に巧みです。然し、濃い口紅の口許、ひら〳〵と灯影に動く金簪、前髪を結んだ緋の布れ、赤地錦のだらりの帶、すぼめて曳いた裾――大阪の藝妓は牡丹の花のやうに濃艶ですが、藝妓たちは甚く皮膚が荒んでゐてどんな一流の藝妓たちでも、又美貌を唄はれてゐる藝妓でも汚い顔をしてゐます。富田屋の八千代には、私が一日遲れて行つた爲に富田屋の稲荷祭りの間に合はず逢ふことが出來ませんでしたが、私より先きに行かれた〇さんは稲荷祭に招かれて圖らず八千代に逢はれたさうですが、ちつとも美しくなく、殊に年齢の老つてる故か、荒んだ汚い顔をしてゐたと云つてゐました。八千代の妹の小八千代には、一と晩秋琴亭へ招かれた時に逢ひました。小八千代、三代鶴など、目の醒めるやうに麗やかな美しい藝妓でした。

秋琴亭の二階の一と間に、古びた御簾の下がつた古めかしい感じとは反對に、南の菱富の周圍の情景は、全く大阪式で賑やかな中に味な情調のあつた事は忘れられません。前を流れる道頓堀の暗い堀の水に、彼方側の芝居小屋の灯がところ〳〵に點々と落ちて、其の水の上を舳に提灯をつけた遊びのボートが行つたり來たりしてゐます。かき船の障子に灯が内からぱつと射してゐて、其のかき船の邊りの岸の外れに、一と本ゆつさりと枝を垂れてゐる若柳が、芝居小屋の方の灯の光りを受けて青々とした色を見せながら、暗い堀の水に靡いてゐます。堀の暗い水、柳のいろ――其れがごた〳〵とした喧騷な周圍に反照して却つて靜な風情を作り、さうして石のゑびす橋が高く反りを描いて、書き割りのやうに薄黒く月の蔭に浮んでゐるのです。私は此所で扇子に「戀の手ならひ」と豆千代に書いて貰

ひ、豆力に「ほんにしんきなしんき樓」と書いて貰つたりしました。大阪の女は肉的の魅力があつて、其れで人間には意地も張りもなく、全く自我と云ふものゝないところが遊び相手にしてゐて面白さうです。金さへあれば何うにでもなるのは大阪の女だと或人は云はれましたが、其れもはつきりとした打算的な意識があつて金に買はれるのではなく、金によらず情によらず、無知の間に男の手に曳きずられ、自分の肉に自分で溺れて行くやうなところが大阪の女にはあるのでせう。自分の肉から燃えてくる情熱に自分を亡ぼすのは大阪の女だと思ひます。大阪の女の性慾が近松にあれだけの作をさせたのだと考へると、近松の作に對して新らしい興の起るのを覺えます。

大阪の郊外

大阪の郊外――と稱して好いか何うか分りませんが、大阪市外の附近では住吉と箕面と寶塚へ行つて見ました。住吉はつまらない所でした。住吉と云ふ名に好い感じがあつたのでわざ／＼行つて見たのですが、丁度、住吉と云ふ所は住吉踊りの玩具のやうな感じがあつて、其れを面白く思ひました。ひよろ／＼した松や杉の木の間から、厭に赤い色をした社の朱がけば／＼して、何所にも一片の掬すべき情景もなく、濁つた道池の水に日光がぎら／＼して居るばかりでした。公園の高燈籠へ上ると生駒の連山が紫に霞み、大阪灣の水が帶のやうに細く流れてゐるのが見える。住吉の傍に丸太がうしと云ふ家があります。東京で云へば花屋か、駒形のどぜう屋と比べたいやうな家です。いゝにしんと住吉名物の蛤で、丸太がうしと書いた面白い京燒の徳利で酒を飮ませ、蒟蒻の田樂で御飯を食べさせるのですが、其の家へ上つて見ました。家の前に大きな丸太の組んだのが建つてゐます。この家は古るくからある家で、二三年前に建て直す前までは天井が紫檀か黑檀のやうに煤けて光澤を持つてゐたものだと客人の一人が

話してゐました。私は其家で丸太がうしの德利を讓つて貰ひました。

箕面はさすがに樹や水に富んでゐます。こんもりとした大きな楓の樹や、谷を流れる奇麗な水、水際に咲いてる黄色い山吹、河鹿の音など、初めて旅らしい游々とした氣持になつてやゝ傾斜した一と筋の道を上つて行きました。大阪へ來てから新緑に目が觸れたのはこの時が初めてゞす。頂上までは行かずに、夏目先生が書かれたので有名になつたとか云ふ大阪朝日の倶樂部へ寄つてサイダーなどを飲みました。山には蟬が鳴いてゐて、殆んど鶸色をしてゐる楓の新緑に日光が薄衣のやうに落ちてゐます。谷を覗くと小魚が澤山に澄んだ水の中に泳いでゐるのも懷かしい氣持です。こゝに辨財天が祀つてあります。

箕面へ行つた歸途に寶塚へ廻つたのですが、噂に聞いてゐたのよりも、もつと厭なところだと思ひました。然しパラダイスと云ふ娯樂場は中々よく出來てゐます。私が行つた時には其所に芝居博覽會がありました。少女歌劇團の劇場は小さく簡單に調和よく出來てゐて、東京の藝術倶樂部などよりは遙に勝つたものだと思つて感心しました。少女歌劇の連中もみんな巧者に演つてゐます。ダンスを教へてから日本の舞踊の振りを其の所作に應じて付けると云ふ話だが、みんな形が能く付いてゐてそうして非常に足が輕く上るのが目に付きます。この娯樂場を出て寶塚の料理店で休みましたが、周圍の風景が蕪雜で、何となく詩味乾燥したところです。夜に入つて月が上つてから、道傍にかけつらねた芝居博覽會の細長い提灯に情趣をやつと掬つて嬉しく思つただけでした。（次號完結）

最初の講演

厨川白村

日本では男ごころの秋の空、ここ紐育では三月の空模様ほど定めがたいものはない。朝は日の光を見ても午後はまた雨、けふは晴れたかと思つて喜ぶと明日はまた雪嵐だ。室内は日本とちがつて暖氣であたためて、そのうへ僕の書齋には瓦斯暖爐があるからいつも春のやうであるが、一歩戸外へ踏み出したが最後、目も鼻もちぎれさうな寒さ。こちらでは男子があまり首卷といふ物を用ゐないから、いかな寒がりの僕も外套の襟を立てただけで我慢をしなければならぬ。少し解けかけた雪が歩道に氷りついて鏡のやうになると通行人の滑らない用心に灰を撒いてあつても、なほ且つ六尺ゆたかの大男が仰のけさまに轉倒するの奇觀を見ることがある。現にこの間も、一本足の案山子の化物の僕が、同宿のYさんと連れだつてグリインハットといふでぱあとめんと・すとおあへ買物に行く途中、うつかり踏み過つて尻餅をついた。通りがかりの紳士がYさんと一緒に僕の兩腕を取つて起して呉れた。今度あるいて見るとどうも義足の具合がわるい。變だなと思ひながら宿へ歸つてから檢査に及ぶと、辷つた拍子に義足の紐を通してある穴が一つ裂けて了つたのだ。指先の馬鹿に不器用な僕に引き替へて、之はまた女にもしに見まほしき器用なYさんは、私が修繕して上げませうと云はれる。厚意に甘へてそれでは願ひますと云ふと、自分の部室から早速絲と針とを持つて來て立ちどころに修繕が出來あがつた。皮を縫ふことが巧いからと云つて、私の素性を怪しむではいけませんよとYさんが笑ふ。Yさんは民法の大家でまた檢事である。如何に友人の爲めとは云ひながら、怎んな事まで

して呉れられるのを僕は心から嬉しいと思つた。

或日の午後、またしても雪嵐(スノオストオム)だ。このやうな日に外出は思ひもよらぬ、先日もコラムビア大學のそばの坂道で大風に吹きまくられて、眼鏡を吹き飛ばされて閉口した覺えがある。例の紐育名物の矢鱈滅法(やたらめつぽう)に背の高い建物に風が打(ぶ)つかつて、それが辻の曲り角などで旋風(つむじ)のやうになると、婦人の大きな帽子などは傍(わき)で見てゐてもはら／＼するやうだ。けふはもう危きに近よらずの方針で家に蟄居して、暖爐に脊をあぶりながら本を讀むでゐた。するとこつ／＼と戸(ドア)をノックする者がある。カム・インと答へると、首を出したのはエバといふ宿の女だ。只今電話ですから下へいらつしやいと云ふ。誰からだと訊(き)くと御婦人のかたですと云ふ。變だなと思つて階段を下りて食堂の電話口へ行く。元來僕は俗物と電話とが大嫌ひだ。先づ僕の變挺な長たらしい名前がうまく先方に通じた驗(ためし)なしだ。そこへ生れつきの銅鑼聲と來ては、てれふおん・があるの役目は決して勤まらない。日本語でさへ夫れだのに、英語でやるのだから、なか／＼骨が折れる。そこで入學試驗の書取を讀むやうな心持で話すんだ。こないだ始めて桑港へ着いたとき、パレス・ホテルで電話をかけた。生れて始めて電話で英語を試した。さきからナムバアと云ふのが日本語の「何番？」のやうに聞こえる。ハロオーとやる。フウ・イズ・ジスと來(く)る。僕の名前は西洋人にはキユウリヤガワが都合がよい。胡瓜でも茄子でもいいから、先方へ通じさへすれば目的は遂するので、先づ用向は無事に濟むだが、僅か三四分の談話に全く一汗(ひとあせ)かかされた。それ以後だいぶ電話は上手になつたが、それでも此奴(こいつ)やはり苦手(にがて)だ。大學のぷろふえさあの處なぞから宿へ電話がかかつて來(く)ると、いつも僕は宿の女を電話口に立たせて、自分は離れて戸口のところに居る。女は先方の言ふことを聞き終つてから、電話機の筒のところを右手で蔽ふて、こちらを向いて其言葉を傳へる。それに僕が返事をして、僕のいふ通りを女がまた先方に云ふのだ。けふ電話をかけて來たのはS－夫人といつて畫家の奥さんだ。お名前を他(ほか)から

承つたのですが、實は私どもの倶樂部で日本文學に關するお講話を願ひたいのです、それに就て一度お目にかかつて御相談を致したいのですがと云ふのだ。僕は日本では他人を訪問するとを無闇に億劫がる男だが、こちらに居る間は成るべく種々の方面の人たちに接したいと思つて、無性者の柄にもなくまめになつてゐるので、此時も早速、それでは明日午後の三時ごろに此方から伺ひませうと返事をした。先方で難有うとでも云つたのであらう、宿の女がユウ・アル・エルカムを云つて、グッド・バイで電話を切つた。

翌日ちらつく雪の日に、S―夫人を訪ふた。

僕の宿から二三丁ゆくと地下電車の停留場がある。歩道のわきにある入口から這入つて階段を下りてぶらつとふおむに出る。五仙均一で市中どこ迄でも行けるのだ。眞暗の穴の中を八九臺も連結した大きな電車が、轟々たる響をなして三四分毎に通ほる。徐行の方はよいが、急行に乗ると停留場を四つも五つも飛ばして矢の如くに走るので、うつかりぼんやり車内の廣告を見てゐたり、夕刊を讀むでゐたりすると、途方もない處まで連れて行かれて了ふ。僕はもう此失策を二度や三度はやつた。乗り越したが最後また五仙奮發して、しかも重い義足を引きづつて階段を上がつて一度街上へ出て、更に他の側からまた穴の中へ這入るのだ。恁ういふ時は馬鹿々々しくて僕は獨り苦笑してゐる。しかし地下電車や高架線などはまだよい方で、紐育の街上電車と來たら系統が頗る面倒なものだ。ちやうど京都に市電と京電とがあるやうに、別個の經營で相互の間に乗換も利かない。こないだも僕は美術館への行きがけに乗り損つて中央公園の西側へ出て了ひ、吹雪の中を犬の子一匹居ない大荒原のやうな公園の中を迷ひ迷ふて閉口した揚句、その歸り道にまたもや街上電車で乗換をあやまり、とんだ處に引つぱつて行かれて、車掌が、こゝは終點で all out ! だと來た。いま〳〵しいが仕方がないから、降りてそこにゐる男に乗換切符を見せて行先を云ふと、This transfer is no good here と云ひ居る。そしてマディスン・アヱニュウまで後戻を

してそこから乗れと云ふ。目の前に外の色の異ふ電車がいくらも通つてゐるのに此始末だ。どんな事があつても、數字の表と地圖といふ殺風景な物だけは見る氣のしない僕は、旅行中にいつも恁んな失策をする。失策をすればするほど癪に障るから、地圖だの時間表なぞは斷然見てやらないと定めてゐる。そして困つた時には辻に立つてゐる巡査に訊くのだ。巡査は實に親切だ。みなどれも之も見あげるやうな大男で、木の棒を一本控え込んで、街角に立つて自働車電車の通行を差圖をする。夕方の込み合ひ時間などに大通の通行でもこの巡査さんが指一本上げると、二三十臺の自働車電車がぴたと止る。僕のやうな足もとの覺束ない人間でも、悠々としてそこを横行濶歩する事の出來るのは全く巡査どののおかげだ。大きくて可愛いこの巡査といふ者を、殺風景な紐育市に於て最も愛すべく親しむべく難有いものだと僕は思つてゐる。それにつけても思ひ出すは日本の電車の旗振りだ。電車の方に都合のよい事ばかり考へ居つて、通行人の利害を考へないのが多い。こちらでは巡査が指揮するのだから、電車と通行人との利害の中立者であるだけに頗る公平なものだ。殊に日本では電車や人力車が人を追ひ除けて走るのだが、こちらのは例の所謂 "Safety First" で通行者の安全が主なのだから、自働車電車の方から避けて行く。日本のやうに人力車夫が後から來て、人間を犬畜生のやうにはい／＼などと云つて追ひ拂ふやうな馬鹿な眞似は決してしないから嬉しい。

だいぶ話が脱線した。大通りで地下電車を出てから二三町あるく。むかふから吹く川風が烈しいところに雪は益々降りしきる。僕の後から歩るいて來た誰だか見も知らない老人が、Fine weather, nice day! Isn't it? と洒落を云つて行く。僕が Oh, Yes. Very と云ふと、笑つて通り過ぎた。夫人の住居は大川端で、この邊一帶は先づ上流に屬する人の住宅地である。番地を捜し當てて其家へ這入る。日本では二階いふさと特殊な場合を除いては各戸みな横に列むでゐるのだが、紐育では十階も二十階もある家のなかに、幾十軒

の家が上下に重りあつて縦に列むでゐる所謂アパアトメントが多い。それを昇降機で出入するのだから、紐育の人は横に地上をあるくよりも、どうかすると上下に空中を旅行する距離の方が長い場合があるのだらう。這入ると直ぐそこに居る黒人に、九階目のS——夫人の處へといふと、Is she expecting you? と訊く。先生一度先づ取次をする必要があるかとでも思つたのだらう。僕がイエスと答へると、オーライと云つてすぐ昇降機の中へ案内した。乳母車に小供を乗せた婦人がひとり其處へ這入つて來た。謹しむで僕は帽子を取る。事務所や商店などでは構はないのだが、恁うした處では昇降機のなかに婦人がゐる場合、男子は必づ先づ脱帽しなければならぬとは厄介なことだ。そのくせ女は大學の講堂ですら、あのでこ／＼の大きな帽子を冠つたまま澄まして聽講してゐる。

九階目で、戸口のべるを押すと出て來た女中に名刺を渡す。すぐにあとから夫人が出てくる。おゝぶろふえさあこの天氣によくこそお出で下さいました、と云つて握手する愛想のよい上品な奥さんだ。ちよとそこに椅子がなかつたので僕は壁に背をもたせて先づ上靴をはづす、一本足は恁ういふ時ちよと困る。どうぞ此方へと、云はれるままに次の室へ這入つて柔い椅子に腰を卸すとやれ／＼と思つた。初對面の話が一つ二つ濟むと、早速用談だ。日本なら世間話が出てよほど經つてから用向を話す人が多いが、こちらの人は男でも女でも先づいきなり用談を持ち出すのだから甚だ始末がいい。私どもの倶樂部はマクドエル倶樂部と云つて御存知でしよう名高い作曲家でコラムビア大學の音樂の講座を持つてゐたエドワアド・マクドエル氏の紀念に出來たものです。時々演奏會や繪畫展覽會の外に、文學美術に關する講話會がムいますが、今度その方の委員があなたに何か日本の文學に關するお講話を願ひたいと申すのです。御都合がよろしければ來週水曜日の晩に一時間ばかり御講演が願へませうか。集る人はみな紐育の上流の人たちですから、必ず入らつしやる甲斐はあります（夫人は worth while と云つた）。今ま

でまだ一度も日本人のかたに會つた事はないので、皆も興味を持つてゐますから、おいで下さいませんかと云ふ話だ。

日本でなら僕は講演を頼まれた場合、大抵は出かけて行く。少し氣分の惡い時でも、大勢の人を相手に銅鑼聲を上げてゐると、つい我を忘れて面白くなる位だ。しかしこいつは英語でやるのだ、そこへ聽く人が多數は女で、それが上流の婦人と來ては、面白さうな話をして、所謂 delightful evening にしなければならぬので、そんな藝當は學究たる僕には聊か閉口だ。そこで私は英語が下手ですからと云つて辭退ると、いやその唯今お話しになつてゐる通りの英語で結構なのですからと、夫人なかなかに拔目がない。太い金の首飾りを掛けてきちんと椅子に腰を卸して正面にこちらを向いてゐる。上靴のうへから美しい絹の靴下が少し見える。如何でしやうと、躊躇ふ僕に更に疊みかけられたので僕は弱つた。よろしい夫れでは一つ試つて見ませうと、奮發を餘儀なくされて、話は落着したのである。それからはラフカディオ・ヘルン先生の話や、沙翁三百年祭に名優トリイがこの地で演る『顯理八世』の芝居、支那の袁世凱のことなど、色々な世間話が出て、四五十分ばかりしてから僕は au revoir を云つて歸つた。

歸途は高架電車（Elevated Railroad を紐育では略して普通に、L と云ふ）に乘る。街上七八間もあらうと云ふ空中を、八九臺連結した電車が耳を聾する如き響をなして矢の如くに飛ぶのはたしかに此市の壯觀だ。夕かた人ごみの時間などに、街上幾百臺の自働車と普通の電車のほかに、頭の上を此「エル」が、星の光に飾られた蜿蜒たる長蛇のごとくになつて走る時は、何人も現代文明の特色たる都會美を讚嘆せずにはゐられない。リチャアド・ハヴイといふ詩人が此高架線を詠じて、

Look, how the overhead trains at the Morningside
curve.
Loops like a sea-born dragon its sinuous flight,
Loops in the night in and out, high up in the air

Like a serpent of stars with the coil and undulant reach of waves.

と云つたのは決して誇張ではないと思ふ。街から高い〳〵階段をのぼつて停留場に這入るのが、足のわるい僕には一寸骨折りだ。車内で込み合つてる時など覺束ない足もとを見て婦人までが席を讓つて呉れるのは嬉しいが、先日も之で一つ滑稽を演じた。こちらの人は背が高いから電車の釣革でも無闇に高いところにあつて、僕なぞは右手でそれにつかまると左足は浮いて了ふ。婦人から席を讓られたので、サンキユウを云ふと共に右手で帽子を取る。その拍子にちやうど列車が鋭い曲角へ來たので、僕はよろけて、あはや其婦人の膝に倒れかからうとした。わきの人たちが皆僕の顏を見るやうで、少々きまりが惡かつた。

それから二三日してから夫人は手紙で、今度の日曜の午後倶樂部のお茶にお遊びかた〴〵入らつしやい。晝の展覽會もありますし、お講話をなさる室も其時に御案内致しますからと云つて來た。封じてある聽講劵と講演豫告の印刷物はお知合ひの方にあげて下さいとある。

日曜の午后約束の時間に倶樂部へ行くと、階下の室には大勢がいくつもの卓子を圍むで茶を飮むでゐる。男子もあるが多數は婦人で、日曜だから皆着飾つてゐる。S——夫人が僕を紹介して呉れて澤山の人と握手をしたが、若い人もあれば年寄もある。ミス何とか、ミセス何とか、名は一つも覺えてゐない。茶を啜つてさんどゐつちをむしや〳〵やりながら、色々の話をする。しばらくして夫人は僕を晝の展覽會のある室へ案内して呉れたあとで、今度はまたお茶の室へ歸つて、珍らしく割木を無雜作にくべてある煖爐の前の長椅子に腰を卸した。御主人のSさんにお目に懸りたいのですがと僕が云ふと、いま一寸二階の方へ參りましたと云はれる。その邊には男子が澤山煙草を吹かしてゐる。婦人の前では禁煙を強ゐられるこの國でも、恁ういふ場合は構はないものかなと僕は思ふ。講演の晩に着て來る服裝に就て、僕は先づ夫人に相談した。講演者た

る僕は無論禮裝して來なければならぬが、燕尾服にあのペンギン鳥のやうな堅い白襯衣(ボイルドシャアト)を着て高い襟をかけては、いくら御馳走だつてまるで美味(うま)くも何ともない。それに僕が禮帽(シルクハット)を冠ると、いつも何だか沐猴にして冠する類のやうな氣がするので、之を何とかして斷りたいのである。殊に英語と來ては演説をする方に骨が折れるのだから、窮屈な服裝だけは先づ御免を蒙りたいと、云ふと、夫人は笑ひながら、それでは日本のキモノを着て入らつしやい、そしたらきつと皆も喜びますから、と云ふ。なるほど之は名案だが、僕は生憎日本の衣服は一切持つて來てゐない。かねて恁ういふ必要もあらうかと思つて日本を出立のとき外遊の經驗ある或る友人に日本服の事を相談したら、そんなものを着て外へ出たら西洋では犬が吠え付くよと云つたので、浴衣一枚のほか何も持つて來なかつた。そこで僕も考へた。之はまた同宿のYさんに貸して貰ふに限る、いつもたしなみの好いYさんは去年の夏にこちらへ來るとき、船中の食堂で着る用意に、絽の紋付とお召の袴を持つて來たとかねて話してゐるから、この夏中に黒絽の羽織も少々奇拔だが、とにかくこの借衣をするに限るわいと思つて、その思ひ付きを夫人に話すと、笑ひながら夫れはまことに結構ですと賛成する。紐育で公會の席に日本服を着て出た日本人は、僕を以て嚆矢とするかどうかは知らぬが、とにかく餘り類のない事だらうと僕も思つた。但し當夜の幹事が豫め僕を聽衆に紹介するとき、わざ〳〵僕が特に日本風の禮裝をして來たことを附加へて貰ひたいと賴むで置いた。

この折に僕の會つた色々の人たちの中にP——といふ一人の青年紳士がある。話をしてゐるとその人の英語がどうしても外國人らしいから、お郷國(くに)は?と訊くと瑞典だと云ふ。今僕の居る宿の主婦も瑞典人であることを語つて、それからストリンドベルグの劇や小説は日本にも澤山飜譯が出來たと云ふ話をしたり、イブセン劇の流行のことなどを語ると、ひどく興味を催ふして僕と二人で北歐文學がはづんだ。そのうちにS—

夫人も、では失禮ながら私はお先きに、と云つて歸つて行かれた。P――さんをつかまへてまた瑞典文學の英譯の可否優劣を論じ、セルマ・ラゲルレフ女史の短篇も一つ二つは日本譯が出來てゐますと云ふと、それでは女史の作品の英譯者であるハワアド女史にあなたを御紹介しませうと云つて名刺を呉れた。それから今週の土曜の晩にはコズモポリタン倶樂部でScandinavian Nightをやつてイブセンの「ブランド」三幕目に私が出演するのですから是非見に來て下さいと云ふ。僕は日本で友人の高橋君がイブセンのこの劇を飜譯中だと告げるとひどく喜むで、あれの英譯は新しいドオソン氏の譯が一番好いのです、土曜の晩の試演にも此新譯を使ふのですと語つてゐた。(その後僕はハワアド夫人を訪ねた。六十に近い老婦人で、以前は女優であつたさうだが、此人の新しく出したセルマ・ラゲルレフの「ゼルサレム」の英譯は飜譯として實に立派な物である。また土曜の試演會の時にも見物に行つたが、「ブランド」はまことに面白く上出來であつた。英譯者のドオソン氏が出てイブセンに關する一場の講演をした。ハワアド夫人が僕を氏に紹介すると云つてる中に、遲くなつたので僕は歸つた。)

講演をするといふ水曜日の晩に、三月振りではじめて日本服といふものを着て、宿の食堂へ下りて行く。今晩僕と一緒に倶樂部へ行くYさんも、ちやんと半臂服に着換へてもうすうぷを吸つてゐる。序にこの宿の食堂の事をいふが、紐育といふ所はいかにも世界の各人種の寄集りで、この食堂にもhyphenatedが色々と居る。僕の食卓には獨乙種の米人の老婦人がゐて、之は學校で獨乙語の先生をしてゐる。英獨語兩方を同じやうに使ふので、獨乙語で話をされると僕は食物が喉もとに支へて困る。上から嚥下す食物と、下から無理に出やうとする僕の獨乙語の片言とが、咽喉のところで衝突するのだから頗る苦しい。隣を見ると愛蘭人の女がいつも超然として獨り皿の物を喰つてゐる。僕の方から話かけると愛想よく受け答へはするが、大抵は此女だけ孤立だ。そのむかうに純粋の米人がひとり、向

ひには瑞西から來た獨乙人と佛蘭西人の間に生れた若い女が姉妹ふたりゐる。この女たちは英獨佛三つとも同じやうに話す。僕の食卓であまり獨乙語が繁昌して來ると、僕はあちらを向ひて此女たちに佛蘭西語で話す。まづい所は訂正して吳れよと云つてかねて賴むである。時々は食堂に一時間半位も尻を据ゑて、恁うして獨佛語の稽古をするのだ。そこへ食後には宿の主婦さんが出て來て、瑞典訛りの極めて怪しげな英語で喋舌り立てる事もある。僕等はまたYさんやSさんと、お互の間では日本語を使ふ。まるで人種と國語との展覽會みたやうで、之は實際紐育といふコズモポリタンな市の縮圖だと云つて可い。日本では口さきで外國語を話すことを何かよほど偉い事のやうに云つて、たとへば三ヶ國の語を操るといふと、さも手柄のやうに云ふが紐育のやうな所では商店の賣子の女でさへ、それ位な藝當を立派にやるのは澤山ゐる。本なぞは讀めなくても喋舌る事だけは、英語の外に獨佛語ともに出來る者を僕はいくらも知つてゐる。之は全く土地の周圍の事情が然らしめるのだから仕方がない。唯だ日本であの通辯のやうな眞似をする事ばかりを無上に難有がる俗習だけは何かとして止めたいものだと思ふ。

食堂を出てから休息してゐると、やがて約束の迎への自働車が來たのでYさんと同乘して倶樂部へ行く。暫くの間別室で今夜の幹事や肝煎の人たちと話をしてゐる。ひどい雨の夜だつたので定刻より少し遲くまで待たうと云ふのだ。そこへ總領事館のAさんをはじめ三四人來られたので、どうだ僕の和服は奇拔だらうと云ふと皆が笑つてゐる。やがて廣間の方へ案内されて行くとそこには澤山に別々の卓子を圍むで聽衆が集まつてゐる。多數は婦人だ。男子は勿論半禮服を着てゐるが婦人連は何だか知らない皆美しいぴか／＼する着物を着て、頻りに喋舌つてゐる。口數の少いのをよしとする日本の婦人に比べると、恁うした西洋の女の集會は實に賑かな花やかなものであると思ふ。

最初に正裝した白髯の老紳士T――博士が僕を聽衆に紹介した。足が惡くて長くは立て居られないから、中

途から椅子に腰を掛ける事も、豫めことわつて貰つて置く。たゞ其紹介のなかに僕の事を云ふ時に、千九百五年に東京文科大學を卒業したと云はれたのは意外であつたから、あとで如何して夫れを御存知ですと訊くと、此T——博士は二十五六年前にしばらく東京の法科大學に教鞭を執つて居られたさうで、ちやんと英文の大學一覽で繰つて見たのださうだ。道理で日本の昔の事は僕よりもよく知つて居られるらしい。

紹介が濟むで應かれるまゝに僕は演壇のびあののそばに立つた。元來あまり横着者に生れついてゐない僕は、英語でやる講演の初舞臺とあつて、聊か自分でも心配してゐた。少々びく〳〵もので先づ一寸左の方を見て Mr. Chairman, Ladies and Gentlemen と云つて聽衆の方を見ると、さき程まで喋舌つてゐた美しい婦人たちが、皆默つて僕の顏を見てゐる。今更引下がるわけにも行かずとあつていよ〳〵はじめる。

I esteem it a great favour to have been asked to speak before such a la:ge and distinguished audience as that which I see before me this evening, and I can assure you that it is a very great pleasure to me to meet so many ladies and gentlemen here, who are interested more or less in the contemporary literature of my own country. My lecture consists of two parts; in the first half I will speak on the Western influence on contemporary Japanese literature, and in the second half I will talk about some prominent living authors and a *coterie* of female writers, with special reference to the new woman movement, and the heroines of novels. I think the letter part will be more intersting to you.

先づ之だけ前置きを云ふと既う度胸が据わつてくる。實に音吐朗々たるもので夫れが滿堂に響き渡る具合と云へば……なぞと早くも馬鹿々々しい自惚が出て來る。むかし希臘のピグマリオンの話に自分で自分の造つた彫像に惚れたとあるが、僕は僕の聲に惚れ込むで他人にも話せないやうな稚氣滿幅の自惚の虛勢

を借りて、約一時間の講演を終つたのである。意外の喝采を博したときはほつと安心した。

演説のあとには澤山の婦人が來て握手をする。色々な事を云つて皆がお世辭を云ふ。こんな事に慣れない僕は一方ならず閉口だ。それから矢鱈に色々の質問を持ち掛けて來て、なかには途轍もない奇問を發する人がある。姉妹づれの美しいお孃さんが二人で來て、此秋には日本へ遊びに參りますからと云つて色々の事を訊かれる。男子のなかには、眞面目に日本の藝者の事を尋ねる人があつたので、僕は大に返答に窮した。なかにひとり髮の毛の黑い十八九位の目の大きい綺麗な婦人がやつて來て、私の名前に「アリタ」といふ文字が、ついてゐますが日本語では何んな意味ですと云ふから、それは有名な陶器の産地の名でしやうと答へる。それなら其地名の意味はと云ふから、アリは to be でタは rice-filed の事ですと、僕はまた頗る氣の利かない返事をする。おや夫れでは何だか百姓の娘のやうですねと云つて、ちよと横を向いて笑つて行つた。

しばらく質問の應對に忙殺された僕は、先づやれやれと思つて、酌むで出された麥酒のこつぷを一息に飲み干して、くらつかあをかじる。S――夫人が、今晩のお話は實に面白うムいましたと、例によつて愛想のよい事を云ふから、僕は答へた、實はほんとの初舞臺でそれに若しうまく行かないと貴方の責任になるのですから、最初は少し私も nervous になつてゐましたと云つて笑ふと、なに本當に successful debut でしたよと、奥さん益々うまい事をいふ。そこへ賴むでおいた車が來たので、微醺を帶びたからだを心地よく揺られながら雨のなかをYさんと一緒に宿へ歸つた。(終)

滯支十七年

小山田劍南

はしがき

楚の山、呉の水、玉關の月、莫愁の雨、朝に長城の馬に鞭ち、夕に三峽の猿を聽き、古を尋ね、今を探りて、游蹤を四百州の地に留むること、茲に十有七年。今齎らし歸る所の見聞の中に就いて、趣味の印象殊に深甚なる者を、かいつまんで書きつらね、謹んで江湖の同調に獻じまつると申す。

袁の故郷に遊ぶ

河南は支那の中央に位してゐるといふので、昔から華夏の中州若くは中原と誇稱されてゐた。無論此の誇稱の中には文化の中心だといふ意味も含まれてゐる。實に支那帝王の鼻祖ともいふべき、かの伏羲氏が河南の陳州に都を奠めて、始めて中央集權の政を立て、以來、河南が支那の古代並に中世の文化と深い關係を有つてゐるといふことは、其土中から掘り出される古器物にも確證を徴し得る。人若し衛輝の比干廟や、洛陽の龍門山に遊べば、支那の古昔に於ける盛大なる文化を、昔の碑文や彫刻に認めることができるであらう。

然るに近代の河南は著るしく文化の發達に落後して、今日では支那二十一行省中、人文最も幼稚で、而かも地産最も稀乏なことは、甘粛、陝西と並び稱せられてゐる。廣袤六萬七千方哩に彌る今日の河南は蕭凉滿目の平原で、何等天下に傑出したる物を有つて居ない。強いて求むれば崇嵩山と、黄河の鉄橋と、さうして袁世凱、この三者が僅かに河南の荒景を裝飾して、多少の光彩を添えてゐる。崇嵩山は又の名を中嶽といつて、山東の泰山、陝西の華山、湖南の衡山、直隷の恒山と併せて、支那の五大名山と稱せられてゐる。黄河の鉄

橋は京漢鐵道の敷設費の約半分を投ぜられただけあつて、まことに中央支那の一大偉觀たるを失はない。サテ袁世凱は汝南の月旦に上ぼしたら、果して如何なる定評を與へられるか知らぬが、兎に角其事業の分量と容積からいへば、河南の黔首二千五百萬人中に卓絕した一種の人物だと云へる。此人物を產出した土地は陳州府の項城縣といふところだ。袁の生れ故鄕だといふ一事が、いたく僕の好奇心を誘つたので、嘗てコヽに一遊試みた。ソレは恰かも袁が攝政王の逆鱗に觸れて失脚したる後彰德府の別業養壽園に蟄居中の事であつた。

陳州一帶は人事風物すべてが、河南全體のそれと同じく、至つて殺風景であるが、たゞ潁水の上流で、魯河と沙河の會注する所に、水運の便に由つて安徽、江蘇、山東、河南四省の物資を集散する周家口といふ商業地があつて、幾分か附近の殷昌を貢いでゐるので、他の地方に比して多少面目を異にしてゐる。項城は周家口から沙河を下つて約三日行程の僻陬の土地に在つて、支那一般の縣治の所在地と同樣に磚瓦をもつて積んだ城壁が約二十丁四方の市街を圍んでゐる。市街といつてもホンの名ばかりで、ムサ苦しい飮食店や、棚曝し物で店頭を飾つてゐる小賣商が二三十戶あるばかりで、其他は皆貧弱な地主の住宅ばかりだ。城內中を捜してヤット手に入れた銅錢五枚で十本入り一と函紙卷煙草にはスッカリ黴が生えてゐた。市街索寞の光景は此一事に徵してもし推し測られるであらう。まして城外になると、殆んど血の氣の無くなつた老耗者の如うな觀がある。この城外の北の方に張營といふ農家五六十戶の小さな村落がある。南部支那の邊鄙とは違つて、至つて樹木の少ない、空氣が乾燥しきつた、見るからに息ぐるしい、ムセッポい樣な氣のする粗末な村落だ。泥で拵いたウス暗い家の中に起居してゐる住民は粗衣粗食で、一生殆んど米の味などを知らず、年中塵ホコリにまびれて蠢動めいてゐるが、ソレでも一ツの大きな誇りをもつてゐる。ソレは一世の英雄袁宮保は自分達の村から出た人だといふ事なのだ。宮保と

いふのは、袁が失官前に太子大保の位をもつてゐたので之に對する尊稱なのだ。

僕は此地に遊んで、かの李鴻章の生地たる安徽の合肥の地勢を聯想せずにはゐられなかつた。嘗て合肥の縣城の鼓樓に登臨したことがあるが、四望たゞ茫々として際涯なき平地が遠く舖いて雲煙荒洪の間に連り、數綫の河流と一輪の日影の外に目に觸るものはナンにもない。項城の地勢も丁度その通りだ。コンな景物の間に生息する人の思念は自づと尨大になるべき筈だ。例へば動物を聯想するにしても、牛や象の樣なノソリ〱したコセつかない動物しか聯想し得ない。人の事業を聯想するにしても、萬里の長城とか埃及のピラミッドとか雄渾な事業しか聯想し得られない。李鴻章にしても袁世凱にしても、兎に角輪廓の小さくない人物だといへる。ソコで僕はナルホドこういふ樣な土地なればこそ此んな種類の人物が出たのだナと會心し得た。そうして又今日の安徽、江蘇すなはち當年謂ふ所の江淮の間には漢の高祖を筆頭に幾多の豪傑を輩出してゐるが、陳州は此の江淮と土壤を相接してゐて、行政上の名目の外には何等の區分がない。して見ると袁の如うな人物が出たのも、その土地の歴史的感化の力が少からず與つてゐようと思はれる。

袁世凱は受臣公保中の第四子だ。張營で呱々の聲を揚げたのは清朝の咸豐九年八月二十日であつた。保中は老母を奉養する爲めに家に居つて桑梓保衛の任に當り兼ねて郷黨の防務に盡力してゐたが、袁の三十歳の時に世を去つた。袁は幼時その叔父たる篤臣公保慶の嗣子となつた。保慶の養父端敏公甲三といふのは官に仕へて兵部侍郎となり、後ちに雲貴總督に升任して、忠正清廉を以て聞えた。其高祖曾祖も皆仕官して國家に卓著の功勲が有つたといふので、朝廷は特旨を下して袁家四代の忠良を褒賞した。當時項城縣の南門に建てられたる彰功紀念の牌坊は今もなほ巍然として風雨を凌いでゐる。袁の家は確かに河南の名門であつた。

世間概ね甲三を袁の父だと傳へてゐるが、ソレは誤りで甲三は袁の祖父に當つてゐるのだ。此事は袁の自叙傳とも見るべき容庵弟子記を繙

けば直ぐにわかる。

張營の東約三里ばかりの所に袁寨といふのが殘つてゐる。これは袁氏の一族が長髮賊の亂を避ける爲めに立て籠つた城寨の跡だ。支那では地方に匪亂が起つても、官憲の彈壓が十分に行屆かないから、人民は勢各個に自衛の策を講じて、亂形が猖獗になると適宜の地に城寨を築いてこゝに生命財産を移す、之れを寨子（チャイツ）と呼ぶのだ。此寨子は支那到る處に有る。山東の即墨や勞山灣附近にはわが胡蝶軍入寇當時の寨子が有る。四川には明末張獻忠の亂の時の寨子が有る。甘肅、陝西の方には咸豐年間の回々教徒の亂の時の寨子が有る。中央及び南部支那には長髮賊の時の寨子が澤山に有る。其他幾多の變亂の時の寨子が山の上や谷の底又は斷崖絶壁の間などに殘つてゐて、人をして坐ろに當年酸鼻の狀を想繪せしむる。當時安徽、河南の間に出沒してゐた長髮賊は屢ば袁寨の外まで押し寄せて來て附近の村落を焚掠したものだ。父老の談を聞くと、此時タッタ五歲の小孩であつた袁は、時々家人に背負はれて寨壁に登り、寨外で人衆が沸騰してゐる修羅場を目擊したが、少しも懼れる氣色はなく、平氣で嬉笑してゐたとの事で、兩親は其必ず凡庸の兒でないことを深く信じて、末賴もしく思つてゐたそうだ。

(分) 袁の母程氏は名家の女で、淑德の令聞高きに加えて文字の素養深く、平素心を傾けて兒子の教育に手を盡した。けれども袁は幼少のころからして己れの才氣を恃んで人の言に聽かず、兄弟を凌ぎ、長老と爭ひ、顧眄自ら雄として、傍若無人の行爲多く、動もすれば此賢婦人の慈訓を蹂躪した。二十歲の時、小遣錢に不自由したので、窮餘一策を案じ、父が大切に保管してゐた黄金を取り出して之を銅錢に交換して、母に發見されると、狼狽の餘、罪を弟に嫁さうとして、弟の反駁に遭ひ、一家の大紛擾を釀したことがある。思ふに詐術權謀は彼の天性なのだ。此天性は他日彼をして李鴻章を籠蓋し榮祿を籠蓋し、西太后を籠蓋し、孫黄の輩を籠蓋し、やがて天下を籠蓋するに至らしめたのだ。彼も亦た一個の寧馨兒と謂つべしだ。

袁は父の功によつて廩生となり、候補道を取り、十八歳の時、郷里の學校に入り、合格して附生となつた。彼れは讀書子の臭味が大嫌いで、平生好んで武術や兵學ばかり講究してゐた。其後ち秀才の試驗に應じて落第したとき、彼は「大丈夫當さに命を疆場に效たすべし、烏んぞ能く齷齪として久く筆硯の間に困んで、自ら光陰を誤らんや」と豪語して、平生作る所の詩文を擧げて之を一炬に附して快哉を叫んだ。そうして唾手功名の念は此時既に欝勃として此青年の胸中に躍動してゐたのだ。父の喪を終えると直ぐ、母に謀つて仕官榮達の途に就かうとしたが、母は容易に肯諾しなかつた。といふのは子を知るは親に如かずで、母は袁の爲人に考へて、其世に出てから後、祖先以來の家名を傷ける樣な事があつてはならぬとの懸念があつたからなのだ。然し彼れの卓落たる雄心は抑えんと欲して抑ゆる能はず、日毎に母に逼つて其肯諾を求めるので、母も遂に其志を强制しがたくて、さらば汝が意に任かせよ、但し仕官の後は呉れ／＼も忠良を專らとして、苟くも家名を傷くる樣な行爲があつてはならぬ旨言ひ聞かせ、古の比干、龍廷、岳飛、于謙等人臣の龜鑑となるべき人士の事例を引いて諄々乎として訓戒を與へた。母の許しを得た彼れは喜び勇んで墳墓の地を辭した。彼れは當時恰かも韓國駐兵大臣に任ぜられた呉長慶をたよつて往つた。呉長慶は李鴻章の幕下で、以前袁甲三の推擧によつて出身の利便を得たことがある、袁は早くから此等の縁故を知つてゐたのだ。無論呉は袁の依賴に應じて先人の恩に報じた。ソコで袁は呉將軍の幕僚となつて、かの丁汝昌と一所に韓國に往つて、鎭撫總戎といふ武弁の官職を頂戴した。當時韓國は日淸兩國の爭奪で、局面が大に紛糾してゐた。袁が慈母の訓戒に背いてその天賦の辣腕を揮ふべき時節は到來した。彼れが風雲に乘ずべき機會は此時初めて端緒を開いたのだ。

袁は八歲の時、養父の篤臣公が任に山東に赴くのに陪隨して往つた。彼れが初めて故鄕を出たのは此時だ。それ以來時々家事を以て歸省はしたが、概して四方の

遊びの中に時月を送つて、今日では張營の家は全然兄弟に任かせて、家塾を立てゝ一族の子弟を敎育さしてゐる外、自分は殆んど棄てゝ顧みない。一時住宅を衞輝府の城外に移してゐた。失脚當時も彰德府の第宅が落成するまで暫時こゝに逗留して居たことがあつた。コレとてもその後絕えて久しく主人を迎えたことがない。

張營の東に袁家の墳塋がある。さすがに規摸の大きいのに一驚を吃する。今や袁世凱は天下取りの事業に沒頭して、故鄕を思念する餘裕もないまでに心身を勞役してゐるが、其骸骨は果して此墳塋の土となることができるであらうか。彼れが功名場裡に發足の際、慈母から餞別にもらつた切なる訓戒は、モハヤ彼の耳底に全く印象を留めてゐぬのであらうか。

養壽園

養壽園といふのは袁世凱の別墅の雅名だ。河南彰德府城の北約一里半の洹河村に建てられてある。

一たび吳長慶の幕下に加つて、初めて群雄角逐の活舞臺に登場した袁項城は縱橫に方寸の智略を揮つて、運命の神を手玉に取り、思ふ存分は立身出世の途を切り拓いた。鎭撫總戎から按察使衙となり。それから侍郎衙、それから山東巡撫、それから直隷總督、それから外務部尙書、それから軍機大臣となり、而かも夙に英雄學の奧義を究めて人心集攬の呼吸を十分に會得したる彼は普通翰林出身の文雅な官吏とは頗る非撰を異にし、務めて兵馬の實權を双掌に收めて、政治の活機を一身に發すべく腐心して成功した。かくて一時は飛鳥を落し落日を返へすの勢で、威權朝野を傾倒したる一代の風雲兒が、俄然九天の上から失脚して九地の下に墜落したときは、實に天下の視聽を聳動さした。

光緒三十四年十月、淸國の皇室に一大事變が起つた。平素病弱であつた光緒皇帝は同月二十二日を以て遂に北京の宮城に崩御した。翌二十二日には久しく病床に臥してゐたる西太后が晏駕した。國家の統治者たる兩宮を一時に失つた北京の朝廷は上を下への大騒動を極めた。殊に尋常の巾幗には似ず、不世出の英傑を以て稱

せられ、前後五十年間垂簾攝政の局に膺り、國家の命脈を危亡に維持し來つた西太后を俄かに失つた閣上の諸臣は、宛かも暗夜に燈火を失ひ、洋中に舵機を損じたかの如うに、殆んど策の出る所を知らぬといふ狀態であつた。何は兎もあれ皇族及び大臣は皇統の繼承問題を決せんが爲めに大會議を開いた。袁も其席に列した。袁は平素慶親王の眷遇を受けてゐたので、親王の意を迎へんが爲めに其子載振を立てんことを建議した。此時列坐の諸大臣は皆袁の權勢を畏れて、一人として之に抗爭する者がなかつた。獨り大學士張之洞は毅然として堂々たる正論を發して、光緒皇帝の實弟たる醇親王の子溥儀こそ正統の天子たるべき者だと主張した。諸大臣も皆之に力を得て贊同の意を表した。袁の意見は遂に通らなかつた。廟堂に於ける彼の威信はこれよりして頓に失墜した。世間からは私意を挾んで皇統の正を枉げやうとしたとの誹りを受けた。そうして無論攝政王の怨みを買うたに相違ない。已にして溥儀が擁立されて大統を繼ぎ、醇親王は選ばれて攝政の職を執ることとなつたので、さすがの袁世凱も智術を施すに餘地なく、謙つて恭順の意を表し、幸に兩宮の葬儀委員を命ぜられたので、熱心事に當り、以て監國攝政王の歡心を博さうと勤めた。けれども一たび攝政王に其心事を看破されたる袁世凱の地位は頗る危險であつた。のみならず彼は動もすれば先太后の舊例に藉口して朝政を左右せんとしたので益々攝政王の嫌惡を受くるやうになつた。聞く所に據れば袁が戯れに攝政王に向つて、かの幼主を擁立するよりは、自ら立つて帝位に登られては如何と言つたとき、王は盛怒抑へがたく、直ぐさま袁の官職を褫奪しようとしたのだが、張之洞が中にはいつて調停の勞を取つたので、僅かに普通の免職で濟ますことになつたとの事だ。當時袁は足疾を患つてゐて登城の折りはいつも小轎に坐して行つた。そうしてそれが爲めに時々欠勤することもあつた。攝政王は幸に袁の足疾を口實として歸郷療養すべき旨の上諭を發した。攝政王からいふと格外の寛待であつたのだが袁に取つては實に青天の霹靂であつた。彼が

此上諭を手にしたときは顔色見る〳〵死人の如くに變じ、殆んど昏倒せんばかりに茫然自失した。かくて全く政權を奪はれた彼は翼を摧かれた鳥だ、水に離れた魚だ。袁は由來權術を以て身を保ち、德行を以て人を服してゐなかつた。失意の時に同情者を持たないのは當然だ。錫良、梁敦彥、唐紹儀、趙爾巽、張人駿、陳夔龍、徐世昌、楊士驤などをはじめとして袁の眷遇を蒙つて榮達した者は多數にあつたのだが、皆悠々たる行路の人で、誰れ一人としてその危難を救はうとつとめる者がなかつたのみならず、平生怨を彼に挾んで、機會もあらば報復しようと待構へてゐた者が少くなかつた。彼の生命は白刄を蹈んで行くよりも危かつた。彼はウス汚たない田舍漢に變裝して僅かに北京の虎口を脫出し得た。そうして取る物も取りあえず、遽々焉として河南の衛輝に歸棲した。そうして間もなく養壽園の主人公となつた。知らず彼は壺中の天地に閑臥して悠々風月を樂んでゐたであらうか。

僕は袁が北京を逐はれた翌年の夏、漢口からわざわざ此養壽園を音づれた。

彰德府城の北門を出て、護城河の畔に沿ふて行くこと數十歩、折れて閭巷の間に笻を牽くこと約十華里、安陽河といふ小さき野水が路を遮つてゐる。石橋を度つて歩を進むること更に兩三丁、四顧たゞ一面の阡陌の中に出ると、モウ人は全く城市の熱鬧と隔絶する。菜花粟穗風影鮮かにして、柳煙槐蔭凉味掬すべき處に、磚瓦を疊んで築きあげた峻然たる墻壁が廣さおよそ二萬坪ばかりの土地を圍んでゐる。門頭に養壽園と題書してある。これぞ即ち今の中華民國大總統袁慰亭其人の別業だ。舊とは天津の富豪何といふ人の所有であつたのを懇望して讓り受け、更らに修築を加へたものなのだ。此建物の爲めには袁が十八萬銀の巨資を投じただけあつて、第宅の結構人工を極め、輪奐の美、燦然として人の目を眩ぜんばかりだ。蕭洒たる亭榭は假山竹樹の間に點綴して、雄麗なる樓室は砌池楊柳の畔に臨んで立つてゐる。滿檻の滴翠は酒を阿嬌と掛に宜しく、半窓の雨聲は碁を故人と圍むに宜しく、晴林の鳥、

風靡の月、さては香草珍石、見る者聞く者、一として人の心を怡ませぬはない。

袁が此の養壽園に蟄伏後、間もなく國會速開運動や鐵國反對問題などで、國中の大騷騷となり、天下の形勢は益々危殆に陷つたので、袁の手腕を藉るの必要を朝廷に勸める者が澤山あつて、屢次起用の說が行はれたが、彼は容易に草廬を出なかつた。それで人は皆彼を以て政治上の死人と見做し、ひたすら養生保身の計を講ずるの外、再び功名場裡に打つて出るやうな野心は全く灰滅してしまつたものと想像してゐた。

當時袁は侍妾十二人、僮价數十人、繞膝の兒、男七女六、史席多士を擁し、腴田二百頃、鼎を連ねて食ひ、錦を重ねて臥し、天下の素封家と雖も遠く及ばざる贅澤な生活をしてゐた。若し彼にして果して志を當世に絕つたものとすれば、此境遇は人世の至樂事として彼を滿足さしたであらう。實に彼れは足一步も門外の土を踐まず、勉めて交を當世に絕つてゐるやうに裝ふてゐた。けれども其實鬱勃たる龍虎の氣は彼れが胸底に躍動してゐたのだ。彼れは掌中の韜略に辜負して空しく兎裘に老ゆる者ではなかつたのだ。彼れは徒らに蟄居してはゐなかつたのだ。彼が北京を去るときには、十五萬圓の金が露清銀行に預つてあつた。其中二萬圓で借金を返濟し、五萬圓を長子克定に與へ、五萬圓をそのまゝ銀行に托し、自分が河南に持つて歸つたのは僅かに三萬圓であつた。彼れの暮し向きでは三萬圓ぐらいの金は直ぐに無くなつてしまふべき筈だし、又た殘りの五萬圓の利子では彼の一家を支へて尙ほ安心することができるとはいへなかつた。けれども彼れは金には少しも心配をする必要がなかつた。といふのは民間の志士から絕えず附け屆けがあつたからなのだ。逆勢を順用するに妙を得たる彼は早くも捲土重來の秘策を案出してゐたのだ。天下の大勢を察するに敏き彼は早くもかの孫黃一派の民間志士と氣脈を通じてゐたのだ。滿清朝廷撲滅の一齣は、風月の下に鶯を聽き釣を垂れてゐる間に、彼の方寸の中にチャンと段取りができてゐたのだ。僕は彼が養壽園の一室にトヂ籠つて毎日數

十種の内外新聞雜誌を通じて仔細に時勢の推遷に注意してゐたのを探り得た。「時務を知るは其れ俊傑の士に在るか」彼は果して尋常風流の隱士ではなかつたのだ。

好林泉と四名家

彰德府から京漢鐵で南下すること十四哩、路王墳といふ一小驛がある。コヽで車を棄てヽ西北行すること三十華里輝縣の縣城がある。城内に錫良、徐世昌、袁世凱の三人の別莊が一ツづヽあつて幕僚が留守番をしてゐた。徐は此土地で質屋も營んでゐた。僕がコヽへ遊んだときは第一次革命の際、四川で慘殺された端方も土地を購入して家屋建築の準備中であつた。

四名家が揃ひも揃つて、コンな僻陬な土地に休息所を營んだのは、畢竟縣城の西北半里ばかりのところに蘇門山といふのが有つて、ソコに百泉といふ四時の遊覽に至適の勝地があるからなのだ。此地は宋の邵堯夫明の孫夏峯といふ二大學者が隱棲してゐた所で、清朝の乾隆帝も嘗てコヽに遊んだことがあつて、當年の紀念たる清暉閣といふのが今もなほ林泉秀麗の間に巋然として殘存してゐる。

金持の話

福澤桃介

「金」と云ふ事について、多少歷史的に、哲學的に纏つた話をして吳れとの御依賴であるが、今は忙しいので、其暇がないから、一寸思ひ浮んだまゝを話して見よう。

日本で御維新前の金持の富は何の位あつたか判らないが、然し大なるものでは無かつたと思ふ。御維新後

俄かに富が暴騰した。それは金を儲ける組織が出來たからで、昔は其組織が整つて居なかつたので丁度今の支那のやうな有様であつた。明治大正の年間を通じて一番大きな富を爲したものは安田善次郎である。岩崎とか鴻池とか三井とか云ふ大金持は一代で富を造つたのではない。三井、鴻池などは暫く措いて、岩崎家などは彌太郎、彌之助、久彌の三代で鉅大の富を爲したのであつて、安田の如く自分一代で大金持になつたものではない。安田は一代で五千萬圓の富を成した。一代で而かも一番僅かの間で大金持に成つたものには、村井吉兵衞が居る。村井はサンライスやヒーローで儲けた上、政府に買上げられた。安田は何十年掛つて富を致し、村井は僅かの時期で比較的餘計に金儲をした。然しこれは戰爭勃發前の評であつた。今日では安田よりも大なる金持に成ると思はれる人物が出た。それは久原房之助で、十年このかた頭を擡げて居つたが今度の戰爭で一躍一億圓の富を造つた。

此頃「時事新報」に五十萬圓以上の資産家の表が出て居る。これは私に大變面白いインプレッションを與へてくれた。此表に據ると、田舍に祖先傳來の土地や家屋を有つて昔の舊家だと威張つてゐるものは尠なく、一文なしの裸一貫が一躍富限者になつたものが多い。即ち神戸の船成金などがそれた。内田信也は六百萬、成瀨正行は五百萬の資産を持つてゐる。一體金持は自分の財產と他人の財產を比較して、俺は靜岡第一の富豪だ、俺は名古屋第一の富限者だと威張つて居る。其處へ戰爭勃發と共に俄かに五百萬六百萬が飛び出した。然しこれは少ない方で、内田や成瀨にピックリした金持は、久原の一億圓を見たら目を圓くするだらう。舊家と稱して祖先傳來の土地や株劵や家屋を持つて、安閑として居るものは漸次亡びて行つて、新進のものが一躍金持となる事は、戰爭が生んだ良い革命であると思ふ。聞く所によると、某大名華族は財政が逼迫して道具を賣り拂つた。それは收入は昔通りであるのに、物價はます／＼高くなるので遂に祖先の遺した道具を賣却するやうになつたのである。安閑として寐ころん

で居るものは亡びてゆくと云ふ好い教訓である。世の中に成功する人は、大膽に活動するにある。

父の仇

楚人冠

一

明治三年二月二十五日の朝の事――昨夜筋違見附の外で讐討があつたとの噂が、忽ち江戸八百八町中に擴がつた。場處は外神田の旅籠町で、殺されたのは士風の大きな男であつた。殺したのは二十前後の若い兄弟二人で、これは首尾よく本望を遂げた後、尋常に其筋へ名乘り出でたといふ。珍しいこともあるものと、遠く近くから續々見物に出かけた。恰も其頃聖堂脇の昌平黌の寄宿舍に居た今の理學士鮫島晉君も斯くと聞いて現場へ駈けつけた一人であつたが、その人の直話によると、其の頃今の萬世橋と昌平橋との間にあつた河岸の廣場に、首のない死骸が俯して倒れてゐて、その周圍には型ばかりに蓆を竹で支へて垣のやうにしてあつた。黑紋つきの羽織に木綿の小紋の着物を着て、袴は黑白地のゴロフクと稱する地の行燈袴で、足には紺足袋を穿ち、左の足は跣足で右足に駒下駄をつゝかけてゐた。大小は紹色塗りで、鐺には銀金具がついてゐたがその大の方は右手に拔いてもつてゐた。之はその頃流行の無双の業物であつた。刄に血も何もついてゐなかつた所を見ると、尋常に拔き合せずにばつさりとやられたものらしいとの評判であつた。

只殺されてゐた所を見た者の頭に遺つた印象はこれだけであつたが、苟も人一人を生かすの殺すのといふには殺す者の身に取つて、遣る方のない悲憤もあつたし、人には言へぬ永い間の苦心もあつた。これを聞いたまゝに書いて見る。

二

水戸藩に住谷寅之介といふのがあつた。藩では藩公のお側役を勤めてゐたが、維新前後のごたくさに際して彼は兵百五十人の長として京都に出張し、一橋警衛の任に當ることゝなつた。寅之介に二人の男の子がある。長男は七之亟とて、まだ部屋住の身ながら、烈公床几廻りを勤めて京都に詰め、次男の忠次郎は同じく父と共に京都に登つて、寄合隊なるものに附いてゐた。所で慶應三年六月十三日祇園祭の前夜の八時過、寅之介は鴨川の松原河原で何者にか深手を負はされて打ち斃れて居る由報せて呉れる者があつた。七之允は家來を引き連れて、取るものも取り敢へず、飛んで行つて見たが、遺骸はもう見えなくなつてゐた。段々と人に尋ぬれば何でも松本權十郎とか名乘る男自ら人夫を雇つて、水戸藩下陣本國寺近所へ引き取つて行つたとの事が知れた。其處に行つて見ると、無慘に斬り殺された父の遺骸だけあつて、大小も懷中も見當らぬ。誰が何の遺恨でどうして父を殺したものだか、全く手がゝりがつかなかつた。

七之允憤慨やる方なく更に兇行の現場松原河原へ出かけて、其折居合せた人もやと探して見たところ、幸ひと非人何某なるもの現場に居合せて、其の場の始末殘らず見屆けてゐたといふ。其の談に據れば、兇行者は木綿の羽織を着、白の小倉袴を穿ち、紅殻のやうな色の朱鞘の大小を差した大きな背の高い男であつた。今一人之と連れ立つてゐた者があつたが、之も同じやうな羽織袴を着し、同じ色の大小を差してゐたが、背丈はずつと低かつた。この二人は宮川町邊からぶらぶらと出て來て、背の高いのが拔刀を手にしたまゝ、其の前に行く一人の男を尾けて來たが、河原の板橋にさしかゝつた時、突然後から無言で切りつけて、その儘二人は西の方へ逃げた。言語容貌から髮の結び樣迄土州藩のものに相違ないとのことであつた。物も言はずに斬りつけたものの言語が何國人だか分る氣遣ひもないが、件の非人は慥にさう言つたのである。死骸を引き取つて行つた松本權十郎なる者は背高く顏に痘痕があ

つて、袴も穿かず羽織も着ず、言葉は東國訛りで丸で下手人とは違ふ。更に遺骸を本國寺迄持つて行つたといふ人夫に就て聞くと、本國寺の近所へ行く迄は、大小も懐中物もちやんとしてゐたが、其を誰が何時奪つたものか一向分らぬとのことであつた。

父の殺された時弟の忠次郎は所用を帯びて岡山表に出張してゐたが、其途中に變を聞いて急ぎ京都へ立ち歸つたのは十六日であつた。兄弟手に手を取つて悲嘆の涙に暮れた。二人とも年はまだ二十に足らぬ。それでゐて、遠く古里を離れた他國で、杖とも柱とも頼む一人の父は非業の最期を遂げたのである。藩の知合の者が立ち代り入り代り來ては、慰めて呉れるが如何に慰められたとて二人の涙の乾く間はなかつた。之が今の事ならば、萬事を警察に一任して、二人は泣き寢入つて了ふの外ないのであるが、流石に侍氣質の去りやらぬ幕末の日本に生れて水戸武士の血を受けた二人である。子供ながらにも意地はある。何としてもこの儘にはすまされぬ。如何にもして讐を尋ね出して不倶戴天の仇を報じなくては祖先に對しても面目がない。兄弟は期せずして復讐といふ事に一致した。けれども何分相手の名も知れず人も分らず、手がゝりといふは朱鞘の大小を差した背の高い土州人といふばかり、夫こそ雲を掴むやうな尋ね物である。初のほどは兩人手を分つて、晝夜讐の行方を探して見たが皆目知れぬ。迚も仕事片手に出來る事ではないと知つて、兄弟二人は渾身の精力を此の一事に注がんが爲に、七月中旬意を決して藩へは、復讐志願の趣を届け出でゝ、蹶然水戸藩下陣本國寺を出た。

二人は暫く伏見街道邊に身を潜めて日夜捜索に憂身を窶したが、九月中頃に至り、兄七之允は攝津廣瀬村水無瀬家人足部家の雇人となつて宮川町邊に居を卜し、弟忠次郎は土州藩の掃除部屋に入り込んで、身を下賤の召使に落して兩方で手がゝりを索めた。けれども依然として何等の手がゝりも得られない。到頭之にも辛抱しきれなくなつて、二人は翌年四月頃兩家を辭し、其頃から夜となく日となく松原河原を徘徊して讐

の噂もやと、鵜の目鷹の目で附け覘つたが、五月に至り、松原河原は追々納涼の用意が始まる頃になつて、忽ち二人の身に取つては思ひかけぬ天來の福音が聞えた。

宮川町の遊女屋伊勢屋にお熊といふ女が居た。この伊勢屋へは七之允が時々遊びにでも行つたものと見える。或る夜このお熊が鞘町の親類へ遊びに行つたところ、折から來合せてゐた同町の近江屋源三郎といふが世間噺の次手に、昨年祇園祭の前夜に松原河原で人を殺したのは、平生我家へ出入する土州藩士山本旗郎といふ者であつて、本人自ら其時の始末を源三郎に語り聞かせたといふことをお熊に話をした。この話をお熊から聞いた七之允は、天にも昇る心地して、早速源三郎に就いて山本旗郎の樣子を聞くと、背の高い男、木綿の羽織、白の小倉袴、自分で紅殼のやうに塗つたといふ朱鞘の大小など、正しく尋ねる其の人に違はぬことが知れた。尚又奥の棚の刀研師松本定次郎といふものに行き會つて、問はず語りに語る所を聞けば六月十四日に山本から刀の研ぎ方を賴まれ、刀身を一見すると刄がひけて血がついて切先も少し缺けて居た。十二日にも其の刀を見せられたが其の時は全く無疵であつたといふ話があつた。

これでいよ〳〵人間だけは突き留めた。けれども今其奴が何處に居るかこれが分らぬ。何でも京都から直ぐ大阪へ下つた形跡が見えるので、一時大阪迄追つかけて見たが、最早土佐へ歸つた後であつた。尤も遠からず又京都へ上るだらうとの事であつたので、七之允は大阪川口の人足部屋に入り、山本が下阪の都度、下宿してゐた佛具屋及諸津屋の兩家へ時々出入して樣子を探つて居た。この間弟忠次郎は京都に踏み留まつて土州藩邸の附近を警戒してゐたが足かけ三年になつても、一向山本の音信に接しない。之では東京へでも飛び出したのではあるまいかと、兄七之允とも相談の上二人も東京へ出かけようとしてゐる矢先、折惡しく七之允は大病に罹つて、二月から九月にかけてどつかりと床に就いたきり、身動きもならぬ始末となつた。其の間

兄弟のやきもきした樣は推察するに餘りある。如何に親の讐の爲とは言ひながら、兄の大病をふり棄て、己れ一人東京へ出る譯にも行かず、忠次郎も元の通り京都に留まつてゐたが、其のうち兄の病氣も全快したので忠次郎は單身東京に上つた。

初め弟と共に上京すべかりし七之允は考ふる所あつて、弟と別れて土州に下つた。是より前、七之允は信州の材木商人野口庄三郎といふ者土佐の材木切出に出て居る由を聞いたので、彼れは野口の手代と僞りて土佐へ下つたのである。是は明治二年十一月であつた。先づ高知に着いて山本旗郎の樣子を聞くと、十一月十一日急用あつて東京へ上つたといふ。病後を遠路はる〳〵と出掛けた七之允は之でがつくりと力を落したが、機智縱橫の彼は忽ち一計を思ひ浮べ、旗郎の父與惣衛門といふに會つて、一應自分は旗郎の親友でゞもあるかの如く裝つて、近日自分も上京するから何か息子に傳言でもあるまいかといふやうな調子で、旨く父から旗郎へ宛てた書面を書かせた。七之允は此の書面を携へて十二月十七日土州野根浦出帆、一寸京都に寄つて、翌年正月十日東京へ着いた。七之允は旗郎の父の書面の外に、豫て京都鞘町の例の近江屋源三郎の僞書を一通用意して持つてゐた。東京へ着いて後、彼は土州邸に出かけて先づ山本に會つた。念に念の入つた七之允は密談があるとて態々山本を外へ連れ出して父の手紙と源三郎の僞書とを手渡したのである。その僞書なるものを見ると七之允の如何に細心周密の男であつたかゞ知れる。曰く——

內々申上候。卯年祇園祭前夜松原河原の一條六ヶ敷相成り、切り候事よりも紛失の品吟味強く有之、切られ候ふ人の紙入の內に、大阪加島屋より金子取引の證文入れ置き、其儘紛失致候趣にて加島屋迷惑致し居り候由。夫につき切り候ふ人は旦那樣故、紛失の品迄も御存じに候はんとて、私方までも兩度も手先參られ糺し有之候次第、切り候ふ事は心配のあるまじく候得共、萬一紛失の品御手元に有之候やうの事にては此の上心配に候間、右品有無御尋ね申上候。

此段内々御知らせ申上度態々申上候。

人を斬つた一條は態と輕く見て、重きを紛失物に置き是で以て、忌憚なしに山本に殺人一件を自白させようとした所は、七之允も中々考へた。『切り候ふ人は旦那樣故』も隨分切り込んだ書き方だが、『切り候ふ事は心配之あるまじく候得共』と納得させて置いて、『萬一紛失の品御手元に有之候やうの事にては』などゝ、白々しく紛失物の有無ばかりを尋ねるやうな顏してのけた所に、人知れぬ苦心が籠つてゐる。尙七之允はこの書面の返事を二月四日に京都の方に差し出したいから、其の日迄に書いておいて異れと賴んでおいた。二月四日に至り、七之允は再び山本を訪うて、之を外へ連れ出した上、其の返事を受け取つた。相手もさる者うかと人殺しの一件は書面の中に書いて居らぬ。その返事といふは、要領を得たやうな得ぬやうな、丸でこゝと摑まへ所のないものであつた。其の全文に曰く、――

一筆啓上致し候。先々皆々樣御揃ひなされ愈よ御安靜に御暮らし、めで度珍重の御事に候。次に拙者事無事に罷り在り候間御承知下さるべく候。然らば、此度御懇書下され辱く存候。殊に國許へ迄御直持たせ下され候處、折柄拙者東京詰の場合不都合に存候。又々東京迄御持たせ下さるの所、二月朔日東京に於て慥に受け取り拜見仕り候ふ處、御文面の意味逐一承知致し候間、必ず以て御心配下されまじく、御安心なさるべく候。拙儀近來は上京も得致し申さず御尋も申さず候處、眞平御免下さるべく候。承り候へば、此節は御宅替にて商業盛に御暮しの御趣、至極結構千萬の御事と相悦び居り申候。尙千客萬來繁榮に御移し成さるべく存候。先は取り込み右御禮御返答迄書中を以て此の如く御座候。

顧みて他を言ふとは正しく是である。之で見ると、山本は前の書面に對して一言半句も答らしい答をしてゐない。いろ〳〵長々とは書いてあるが、つまり在りの挨拶やら、お世辭やらばかりで、『必ず以て御心配下されまじく、御安心なさるべく候』とある一句だけが、僅に紛失物云々に對する返答と見れば見らるゝ

きりである。斯ういふ返事ならば、何處へ持つて行つて誰に見せても山本に人殺しのやうな大それた積惡があらうとは氣取らるゝ氣づかひがない。人殺しでもするだけあつて、山本も中々考へた。

是で七之允も目算は大に外れた。七之允はこの書面を見た後、旗郎に向ひ、人を斬つた件と紛失物の件とに就て、一向何も書いて居らぬが、別に之に就て書面を認めてはどうかと促して見た。けれども旗郎はそんな證據書類を自ら進んで書いて出す氣はない。何と言つても之には應じない。『書面には認め兼ねるが、この後たとひどんな事が起らうとも、源三郎等へ迷惑をかける事はせぬから、此方から無暗に騷ぎ立てぬやう、又紛失物の事は全く知らぬのである』とのみ答へて、書面は書き直さうと言はなかつた。此處で七之允も方針をかへて自身から松原河原人殺しの始末を、かね〳〵聞いてゐた通り、仔細に世間談のやうに物語つた上、斬つたのは實際噂の如く『日那』かと聞いて見た。すると旗郎もつひこの談につり込まれて、品物のことこそ乃公は知らぬが、松原河原で水戸浮浪の人を斬つたのは慥に乃公だといふ。更につり込んで其の時連れてゐた人といふは誰だつたかと聞くと、いやもう此上此談は止さうぢやないかと言つて、其儘話を切つて了つた。この場合七之允に取つては讐を目の前において、むざ〳〵と一指を加へ得ぬ口惜しさよりも、いよ〳〵此に年來苦心の甲斐あつて讐の正體をつき留めた喜の方が遙に强かつた。ハムレットが叔父に芝居を見せて、いよ〳〵父を殺したのはこの叔父と見極めのついた時、彼はホレシオと顏見合せて、急に浮き立つて『ギヴ、サム、ミユージック』と言つて居る。そんなものと見える。

七之允は此處で素知らぬ振して、九日に再會を約して別れた。相手は大きな男である上に手も利いてゐるらしい。いよ〳〵討ち取る迄に何かの樣子を探れるだけ探つておかぬと、うかとしてゐては、仕損じる恐がある。九日に再會を約したのも是が爲だ。九日に山本を尋ねて見ると、父與惣衛門病死の報に接して、目下

忌引中といふので、其儘會はずに引き取つた。

元來七之允の山本に會つたのは、信州の野口庄三郎の手代の積であつた。夫で、今度大阪から積んで來た土州の材木に就て、色々紛議が起つて埒が明かぬから、是非此際山本に口を聞いて貰ひたいといふ口實で忌引中も構はず、七之允は再三出かけた。到頭二十三日になつて兼々紛議中であつた材木もお蔭様で昨日無事着船したから、明晩は是非野口店迄來て吳れと申し入れた。夫には神田旅籠町三丁目の蛇の目といふ料理屋で待つてゐるから、此處から同道しようといふ約束を整へた。之は前以て弟忠次郎とも打ち合た上のことでいよ／＼二十四日を以て討ち果す積であつた。

二十四日の朝になつて、念の爲に更に書面で今晩の出會の事を確かめてやつたところ、山本はその夜忌中の事だから公然の外出は出來ぬとて、土州屋敷の塀を乘り越えてやつとぬけ出して來たとかで、其夜五つ頃籠で蛇の目へやつて來た。兄弟はまだ二十位の子供上りであるし、腕に格別の覺があるものでない、さりとて暗打にして了ふのも武士らしくないし、二人で色々談合の末、兎も角も兄は蛇の目迄山本を誘き寄せて、此處でしたゝか酒に醉はせた上、然るべき處迄連れ出す、弟は約束の場處に待ち受けて、時を計つて切つてかゝるといふ手筈であつた。

兄が相手になつて山本に酒を强いてゐる間に、弟忠次郎は筋違見附の外の人通りの少い廣場に待つてゐた。今日こそは本望を達する日と思ふと、我知らず武者震ひがする。今にも來るか／＼と待つてゐると、此處へ思ひがけぬ故障が起つた。是より先越前丸岡の藩士で刑部省に勤めてゐる金崎何某といふ武士が、巡邏の途次不圖此處を通りかゝると迂散臭い風體をした若い男が何やらん人待ち顔にうろついてゐる。役目柄捨ておく譯にも行かず、つか／＼と其の側に行つて引つ捕へにかゝつた。その頃は辻斬試し斬なんどの盛に行はるゝ時で、二十四日の夜といへば、そんな事をするに最も都合のよい暗夜である。又その頃の暗夜といへば道行く人の提灯の外は、街燈があるでなし、商店の硝子窓

を透す灯があるでなし、文字通りに烏羽玉の暗であつた。この暗の中に待ち受くる人を見落しもやすると忠次郎は氣が氣でない所へ、今にも程なく兄が讐の山本と共に此處へ出て來やうといふ間際になつて、忽ち思はぬ人に見咎められたのだから、忠次郎ももう我が望も之までかと思つた。實際今日であつたら、その儘交番に引かれて首尾よく言ひ開きが出來た所で、一晩は留めおかれて翌朝でなければ放免にならぬ。若しまご〱して人を殺す積りと知れたら、謀殺未遂で送らるゝは免れぬ所である。所が明治三年の日本は大分事情が違つてゐた。件の武士は忠次郎を捕へて訊問にかゝつては見たものゝ忠次郎が兄と共に足かけ四年千辛萬苦を凌いで附け覗つた甲斐あつて、いよ〱今夜將に親の讐を打たんとするに至つた顚末を涙と共に說き聞かされ、武士は相見互ひといふ事もあらば何分ともにこのまゝお見逃しをと掻き口說かるゝに及んで、彼は咎めどころか、兄弟の苦衷に滿腹の同情を表して、その儘忠次郎を釋放し尙別れ際には激厲の言葉をさへ添へて吳れた。忠次郎は彼と別れて今や遲しと敵の近づくのを待つて居た。

やがて其處へ山本旗郎は七之允に伴はれて、醉步蹣跚としてやつて來た。斯くと見て忠次郎は飛鳥の如く飛びかゝつて、物をも言はず後から切りつけた。切りつけられた旗郎は一たまりもなく其のまゝ其處へばつたりと倒れたのを忠次郎は起しも立てず、其の上へ馬乘になつて、初めて此處に名乘を上げた。松原河原親の讐山本旗郎今こそ思ひ知つたかといふやうな事を言つた。七之允の方は初から野口の手代といふことになつて、町人風に化けてゐたから、大小の用意はない。僅に懷中にのんでゐた短刀を拔き放つて、之で遮二無二旗郎を突きちらして、到頭兄弟二人で讐の首を打つた。この首を打つにも腕の冴えぬ二人には、中々ずばりと一太刀に手際よく切れない。一旦切つて見て首が落ちないので、ごし〱と鋸のやうに刀を引いてやつと切り落したといふ。不意を喰つた旗郎の方では、太刀を拔く隙もなかつた。死骸には大刀が拔いたまゝ右手に持つてゐたさうだが、兄弟は打ち取つた後、敵の太

刀を拔いて、死骸の上に置いたといふから、流石に名聞を憚つて、そつと太刀を手に持たせたのかも知れぬといふ話がある。

この復讐の終始の樣子を物影から目擊してゐた人があつた。卽ち前に忠次郎の擧動不審と見て誰何した有馬藩の武士で、以上のこまぐ\しい話はこの人から傳はつたのである。彼は流石に刑部省の役柄だけに、一旦は忠次郎を釋放したものゝ、尙樣子を見屆けたさに居殘つてゐた。首尾よく復讐がすんだのを見て、二人に其由急ぎ彈正臺へ屆け出よと注意してやつた。この有馬藩の武士といふのは、今の讀賣新聞の主筆法學士金崎賢君の嚴父であつた。

二人は彈正臺へ事の顚末を屆けて、その裁決を待つた。丸岡藩の取締から水戶藩へ照會の上、二人の身許も明白に知れたので、二人は水戶藩へ預けられた。

三

其の後二人の身がどうなつたか、とんと知る人がない。けれども彈正臺の照會に答へて、水戶藩では、二人が水戶藩士族に相違なく、父が暗殺されて後復讐志願で暇を願ひ出た者なる事を認めて、夫となく水戶藩への引渡を請うたらしい書面も口調から察すると、引渡を受けた後、水戶でむざぐ\と殺して了ふ事はなかつたらうと思れる。明治十五年に群馬縣の桐生で七縣聯合共進會といふのを開いた時、栃木縣屬に住谷勝賢といふ人があつて、その邊では之が昔親の讐打をした人だといふ評判であつた。併しその眞僞を本人に就いて聞き合せた者があつたが、本人は談を傍にそらせて一向そんな事は知らぬやうな風を見せたといふ。その後北海道廳にも同じ姓名の人があつたとの說もある。桐生にゐた頃は三十四五歲の篤實らしい人であつた。たとひ之が本人であつたとしても兄の方だつたか夫とも弟だつたのか一向分らぬ。

それよりも尙分らぬのは、山本旗郞が住谷寅之介を殺害するに至つた事情である。見ず知らずの間なら意趣遺恨といふでもあるまい。殺された時大小持物も其儘であつたといへば泥坊をする積では無論なかつたら

しい。察するに友人と宮川町邊で陽氣に遊んでの歸り途、一杯機嫌で慰み半分に出來心でつい通りかゝりの人を斬つたものとしか思はれぬ。思へば、その頃の人の命はやすかつた。

新しい女の末路を弔す

高島米峰

（一）

「新しい女」といふ言葉も、既に頗る舊くなつて來た。否、單に言葉が舊くなつて來たばかりではない、元來多くもなかつた謂はゆる新しい女なるもの、近來、次第に凋落し、今は却つて、曾て彼等が、無自覺、無反省、無智、無力など、その他有ゆる惡罵を浴せかけて居た、謂はゆる舊い女さへ、爲すを耻づるが如き醜態を演じて、自ら滅亡の淵に向つて急ぎつゝあるは、即ち彼等本來の腐敗墮落の曝露にして、今更、如何とも致し方のない事である。氣の毒といへば氣の毒でもあり、又、痛快といへば痛快でもある。

彼等新しい女なるもの丶主張には、主張としては、多少の眞理もある。彼等が、從來事毎に、男性によつて壓迫せられ、凌辱せられて、しかもその壓迫を壓迫とも思はず、凌辱を凌辱と考ふとさへ爲し得ない、舊い女の意氣地なさに憤慨して、少くとも女性の位地を、男性と對等のところまで引き上げやうと努力し、且つ、その目的を遂するために、相當の活動を試み、縦令額面以上の相場ではあつたにせよ、兎も角、一時、日本の思想界評論界の問題として、相當の人氣を呼び得たといふことは、その健氣な態度に、多少の同情を表してやつたこともあつたが、さて、爾來僅に三四年、昨

今に於ける彼等「新しい女」の狀態は、果してどうであるか。或者は笑ふべく、或者は愍むべく、而して或者は眞に唾棄すべき行動を敢てして、恬として毫もこれを耻づることを知らず、却つてこれを以て、その平常の主張に基く、當然の歸結なるかの如く辯護し去らむとするは、その圖々しさ、たゞ〳〵呆れ果てるより外に仕方がない。

(二)

まづ、新しい女の頭目、平塚雷鳥君から取りかゝる。平塚君は、新しい女の群中では、聊か異彩を放つたもので、最も力めて女の獨立を叫んだ人である。女が太陽であつたことのある上古の時代を夢想して、今日以後の女は、必ず月輪の境界を脫して、太陽の位置に返らねばならぬと力說し、到底、良妻賢母主義の人ではなくて、女性中心主義の人であつた。隨つて、母となつて育兒の事などに關係することを嫌ひ、現に共同生活開始の當時、その母に與へた書面の中に、「自分を重じ、自分の仕事に生きて居るものは、さう無暗に、子供なんぞを産むべきものではない。」と明言して、大に愚鈍なる僕等をして、謂はゆる共同生活には、肉の交涉が伴はないものだらうか、それとも避妊を實行するのだらうか、まさか、墮胎するのではなからうがと、頗る氣を揉ませたこともあつたのであるが、彼も亦、畢竟女である。母となるべき可能性を有して居る女であつたのである。遂に或は、太陽にはなり得ずして、月輪で終るべき人ではないのであらうか。果然、今ははや、立派な母親として、授乳の樂を樂んで居るではないか。

男子中心論の不徹底なるが如く、女子中心說も亦不徹底である位は、苟も、女子中心說でも唱へやうといふ位の知識あるものゝ、誰も氣のつくべきことである。しかも、一向これに氣のつかざるが如き風を裝うて、盛に女子中心說を高唱したるは、抑々何のためであるか。その動機は女權の伸張に根ざして居たでもあらう、その目的は、婦人の解放でもあつたであらう、しかし、平塚君の到着點は、己よりも年若く、己よりも知識劣

れる、己の命令頤使に柔順なる愛人を見出して、これに「情夫兼奴僕」といふ辭令を交附したに過ぎないではないか。即ち、己より年多く、己より知識勝りたる男子と結婚しては、思ふ存分、我儘な生活（善く言へば女性中心の生活）を營むことが出來ないことを恐れた、卑怯な態度を曝露したものと見なければならない。

男でも女でも、他に愛せられるといふ境界から、更に一歩進んで、他を愛しやうといふ境界に進むべきものである。乃ち夫に愛せられて居る妻は、早く子を産んで、その子を愛せむとすること、即ち母たらむとする要求が頗る熾烈なもので、たま〳〵子を產み得ざるものは、人形を愛し、猫を愛し、犬を愛し、依つて以て纔に母たらむとする要求を滿足させて居るのである。中には、或は已れの命令頤使に柔順なる藝人――男娼輩を愛するにさへ至るものがある。平塚君は、最初より、弟の如き男を得て、これを愛することによつて、滿足を得て居たのであるが、この弟なるもの、次第に大きくなつて、却つて、平塚君を、妻として愛するに至るや、そこが矢張り女たる所以で、今度は、母として子を愛せむとする要求を、抑へることが出來なくなつて來て、今は、折角の新しい女も、芽出度普通の女に立ち戾つて仕舞つたのである。此くの如きは、畢竟、謂はゆる舊い女が、何等の心配もなく、何等の苦痛もなく、平安に到着して居る港へ、わざ〳〵求めて狂瀾怒濤を捲き起し、命から〴〵到着したと言つたやうなものではなからうか。さて〳〵、人騷がせなことをしたものではあるわいと、言はざるを得ない。

（三）

次は、岩野清子君。

如何なる事情があるにもせよ、自覺せる婦人、「靈肉一致の戀愛」を主張した婦人としての清子君が、某女に夫を竊取られ、夫からも奇麗に打棄られながら、即ち、その主張の靈肉に不一致を生じたるにも拘らず、しかも未練がましくも、離緣せざるのみならず、徒に正妻といふ空名を維持することに依つて、月々の扲扶

持に、細い烟を立てゝ行かうなどゝは、何たる腑甲斐ないことであらう。殊に、自ら正妻などゝいふは、夫の不正妻即ち蓄妾を認容するものであつて、折角對等にまで進め得た女性の位置を、自ら九尋の谷底に蹴落すにも等しい所爲ではないか。それもよいとして、俄に男を失ひたる「靈肉一致の寂寞」に、かてゝ加へて、泡鳴君よりの捨て扶持が來ないとなると、もう矢も楯もたまらないと言つたやうな調子で、同棲の請求だの、扶助料の請求だのと、法律の力まで借りての騒ぎは、何たる醜態ぞ、餘りの馬鹿々々しさが、却つて氣の毒にもなる。苟も婦人界の先覺者を以て任ぜむとする淸子君たるもの、若しその平常の主張が僞りでないならば、何故に、も少し齒切れのよい態度に出で、男が何だと叫ばなかつたであらうか。否、啻に叫ぶばかりでない、實際立派に獨立の生活を營んで、胸を叩いて、「ヘン、どんなもんだい」と威張り得るだけの、實力と用意とが無かつたであらうか。

　元來、新しい女の立場から言へば、女も亦、男と同樣に、獨立すべきものとして居るのではないか。從つて、男から食はせて貰ふといふことは、不見識極ることゝしなければならぬ筈である。食はせて貰へば、奴隷の境界に墮ちざるを得ない。奴隷の境界に墮ちるといふことは、新しい女の、最も耻とする所でなければならぬ。此點から見ると、打棄られた男に對して、扶助料を請求するなどは、やがて、立派な主張をして居た時から、既に、奴隷の境界に墮ちて居たといふことを、表白するものであつて、新しい女の耻辱も、こゝに至つて極つて居る。然るに、淸子君は、敢て自ら進んで、この耻辱を甘受せむとして居る。男に食はせて貰はねば、生きてゆけないものであるといふことを公表して居る。これでは、どこに、新しい女としての特色が、存して居るのであるか、依然としてこれ、舊い女ではないか。かの、亭主に食はせて貰ふことを常規として居る、裏店の嚊左衞門と、何の選ぶところがあるか。殊に、曾て、靑鞜社の公開演説會の時、今後の婦人は、經濟的に獨立しなくてはならぬ、經濟的に獨

立して居らぬために、夫に捨てられることを恐れ、愛のない夫婦關係を持續して居る滔々たる世間の婦人は、憐むべきであると喝破したところの、雄々しげに見えた濟子君としては、甚だ物足らない態度ではないか。否、寧ろ、濟子君自身が、それ自身を憐まなければならないといふやうな滑稽は、誠に噴飯の料である。

（四）

嗚呼、伊藤野枝君。このところ、黑枠ものである。雷鳥君が『青鞜』から引退した後の野枝君の奮闘振りには、君に對して、あまり同情を持つて居ない僕でさへ、眞實、少からざる敬意を表さずには居られなかつた。然るに、底事ぞ、それ、一切、自己が放縱なる生活、寧ろ亂行の辯護をして居たのであらうとは。さて〳〵人は見かけによらぬものではないか。事實は簡單である、辻潤君といふ夫ある野枝君といふ妻が、曾ても一度、他の男と戀愛に落ち、今度再び、大杉榮君といふ妻もあり情婦もある男と、戀愛の實行をしたといふだけのことである。然り、たゞこれだけの事實ではあるが、この事實は、實に日本の國民道德に對する、一大反逆であつて、此くの如きを寛容するならば、何のところに、國民道德の生命が存しやう。簡單なる事實ではあるけれども、その影響するところの廣く且つ大なるを思ふ時、竦然として身の戰ぐを禁じ得ないのである。

言ふまでもなく、夫婦は人倫の端緒である、人間の道德は、すべて此處から出立すると見なければならない。夫婦は即ち、男女兩性の人格的結合であつて、今この男女の關係を醜穢にし、この兩姓の人格的結合を紊亂するものがあるならば、それは、如何に正しい主張の下に行はれるとも、如何に美しい名義を以て爲されるとも、斷じてこれを可とすることは出來ない。

自由は放縱でない、亂倫乖理の行動をも、尚且つ、自由の名を以て寛容せむとすることは不可能である。惟ふに、自由といふことは、惡の束縛を脫するといふことであつて、その事自體が、善でなければならぬ。

從つて戀愛の自由といふことも、亦、性慾を亂暴狼籍に行使するといふことではなくて、性慾に對する、惡の束縛を離れることでなければならぬ。然るに彼等新しい女の行動は、果してこれ眞の自由、眞の解放、眞の獨立を求めむとするの態度であるか。

正直なところ、「新しい女」の集團たる青鞜社の勇將猛卒が、殆ど悉くその主義主張を抛つて、見苦しい戰死を遂げたる中に、最も年少にして、且つ、最も繋累多き伊藤野枝君が、たゞ一人踏みとゞまつて、孤城落日の中、しかも尙、苦戰惡鬪をつゞけて居たのは、薄ノロの僕の眼には、兎に角、見上げたものだ、感心なものだと映じて居たのである。然るに、意馬心猿の狂ふに任せ、煩惱の犬を追はむともせず、墮落したりな、姦通の公行。かくて遂に、青鞜社は全く落城してしまつた。「新しい女」は悉く滅亡して仕舞つた。婦人界覺醒の新運動(？)も、遺憾なく失敗に歸してしまつた。こゝに於て、思想界の衛生掛は、ホッと一息つくところである。

岩野泡鳴君の半獸主義は言ふを要しない、大杉榮君の社會主義やセンヂカリズムから、どうして、姦通是認の結論が得られたであらう、などゝ餘計な詮穿は無用な事かも知れない。妻の外に、妾を蓄へ、藝者狂ひする現代の紳士閥（大杉君等の最も嫌ひな）の爲すところに、チョット輪をかけたまでゝあると言へば、それで盡きて居る。しかし、紳士閥の徒の爲すところは、道德上の罪惡であり、有妻の男の姦通であるが、大杉君野枝君等の爲したところは、道德上の大罪であるばかりでない、實に、有夫の女と、有妻の男との姦通である。これ明に、國風を蹂躙し、習慣を破壞したる最大罪惡ではないか。曾て、岩野君夫妻別居事件の起つた當時、僕は、「文士に姦通の自由ありや」といふ一文を公にして、これに痛擊を加へたことがあつたが、當時、泡鳴君は、法律上、姦通罪を構成せざる旨の陳辯に、頗る力を用ゐて居たことから思ひ合せて見ると、今度の大杉、野枝の兩君も、亦必ず、法律上の姦通にあらざる旨を、陳辯するに相違あるまい。野枝君と辻

君とは、内縁の夫婦にして、大杉君と保子君とも、亦、内縁の夫婦である。内縁の妻は、妾と同様である。二人三人の妾を蓄ふるも、姦通罪は構成せざるを以て、この意義よりすれば、此度の事、成程、法律上の姦通とは言ふことは出來ないであらう。しかし、大杉君にせよ、野枝君にせよ、戀愛の自由を唱へ、結婚制度の背理を説き、自ら好んで、國法を無視して、共同生活といふ新しい結婚法によつて、夫婦關係を結んだのではないか。已に、自ら國法を無視して、夫婦關係を結んで置きながら、他より姦通を以て論ぜらるゝ時のみ、曩に無視し蹂躙し破壞したる國法の陰に隱れて、結婚の手續をして居ないのであるから、法律上姦通罪は構成しないといふは、隨分自分勝手な申條であつて、往生際の惡い、未練な態度ではないか。主義を生命とし、主張に生きむとするもの、も少し、その言動を男らしくすべきではないか。然り、既に、此の如き姦通の大罪を犯しながら、尙これに相當の理由を附會して、辯護せむとするは、縱令、泥棒にも三分の理とは言へ、餘りに厚顔にして、又餘りに無耻の至りではないか。

野枝君は、辻君の妻としてあらむには、生活上の困難を切り拔け難きを慮り、背に腹は代へられぬところより、比較的生活上の保證のありさうな大杉君、しかも妻あり情婦あるを知りながら、これに肉を與へたのはつまり、貧窮にして且つ無知なる女が、身を賣つて、公娼となり、私娼となり、妾奉公に出るといふのと、何等擇ぶところのないものであつて、如何に强辯してこれを庇護しても、畢竟これ、屁理窟であつて、識者は一笑をも與へないであらう、咄、這の風致の賊。

(五)

去つて、靑鞜社以外の婦人團體を一瞥するに、夫の新眞婦人會が、種々なる紛擾を繰返した後、結局、西川文子君の獨舞臺となつたのは、當然の歸結で、怪しむに足らない。その機關雜誌『新眞婦人』も、西川文子君獨りの手によつて經營せられるやうになつてから、全然、浮薄輕佻な態度が無くなつて、頗る眞面目なものになりつゝあるのは、大に慶すべきであると言つて

差支あるまい。この新眞婦人會から出た木村駒子君が、女優心得となつて、所もあらうに、淺草へ御出現とは、觀自在も、あまり自在ではなかつたものか。否、淺草は、由來、觀自在菩薩の根據地であるなどは、隨分皮肉な洒落かも知れない。ところが、別居後の岩野清子君も、女優たらむとするの希望甚だ强しとも傳へられ、日向きむ子君までが、亦、女優たるべき勸誘を受けたといふを聞いた。兎角、新しい女の成れの果は、女優か妾以外には、使ひ道の無きものにや。女優と言へば藝術家である、しかし、藝者も亦藝術家であるといふことである。而して、今日の藝者が、私娼として、識者に指彈せられて居ると同じいやうに、女優の多くも、亦、私娼扱ひにされて居るのである。新しい女＝女優＝藝術家＝藝者＝私娼＝妾＝新しい女、これでは、新しい女の落着く先は、想像するに難くないではないか。

婦人の經濟的獨立といふことも、かういふ方面ばかりを覗はずに、もう少し、何とかならないものであらうか。若し、現代婦人界の先覺者を以て任じて居た新しい女諸君でさへ、潰しにして、職業婦人たらしむれば、これ以上、どうすることも出來ないものであるといふことに、相場がきまつては、無教育にして無恥なる舊い女と、毫も異るところがない。これでは、日本の婦人運動も、一寸幕を下ろして、暫時休憩するより外はあるまい。

（六）

單に、女性としての結婚生活に入るのみに滿足しないで、知識を深め、藝術に憬れ、生活の方便のために、愛のない結婚をすることを恥辱とすると稱して、愛人と共同生活を營むといふまで位にして居たならば、少くとも、眞の意味に於て、日本に於ける婦人問題の提出者としての榮譽を、擔ふことも出來たであらう。勿論、それすら、必ずしも、平塚君の新案でもなければ、靑鞜社の專賣でもない。日本の婦人界、如何に貧弱だと言つても、實は、これしきのことは、多少識見のある婦人の間では、決して珍しい事件ではないのであ

る。たゞ、青鞜社一派の人々は、これを、大功を樹てたるが如くに吹聴し、他の人々は、尋常の事として、靜平に實行して居たといふまでゝある。

今となつては青踏社一派の亂行彼が如く、たゞ舊道徳を破壞することを知つて、新道徳を建設することを知らず、啻に、國民道徳に危害を加へたるのみならず、遂にそれ自身も亦、滅亡せざるを得ないことゝなつたのは、佛者の謂はゆる、自業自得なるもの、誠に當然の結果と言ふべきである。

國風を破壞し、習慣を蹂躙したる、此等、新しくして腐れる變な女共、顏を洗つて出直せと云爾。

（大正五年五月十五日）

「力」の象徴として觀たる太刀山

健堂生

其一

太刀山の將來は如何。

吾輩は、今、大鐵傘の下に於て、土俵上、觀戰の興味に耽りつゝ太刀山論を稿す。譬へば從軍記者が戰場に於て、敵軍統帥の將器を評論するが如く、一種爽快の氣分に打たれる。唯だ從軍記者と異なるところは、彼は廣大なる舞臺の上に馳聘して、自から雄壯なる興味を鼓舞し、背景も種々、變化して、隨つて背景に對する興味が、つねに新になるのであるが、大鐵傘の下に於ては、背景の變化が少しも無い。是が從軍記者に及ばざる一つ。

吾輩が大鐵傘の下に於て、苦痛を感ずるのは棧敷の狹隘なる一事である。國技館の棧敷は如何にも窮屈だ。吾輩の如き短軀者と雖、膝が折れるように思ふ。長く坐して、土俵を凝視して居れば、不知不識の中に、脛も足も痲痺れて仕舞ふ。將來に於ける國技館の改良の

一要件は棧敷の改良である。

其 二

太刀山は第一勢力者の象徵である。吾輩は、彼を象徵として見る時に、深き興味を感ずる。

吾輩は、巍然たる太刀山の魁軀が、土俵の上に現はれ來る時、彼に對して政壇の雄者を聯想する。彼の魁軀には姿態美は少い。然れども如何にも强そうに見ゆ。「强味」といふものを人格化したものは、彼の魁軀である可く思はれる。畢竟、彼は「强味」の象徵である。而して其の强味たる、雄大無敵、彼の魁軀を見れば、其の角力を見ざる前に、早く既に、第一勢力者といふ觀念を起さしめるに足りる。彼の脊中からは力の溶けた膏が流れて光る。世間で影が薄いといふ語があるが、今の太刀山は、影が濃いと謂ふ可きであらう。

凡そ近來、世上、あらゆる方面に、强者雄者が聳出したと雖、强剛無敵なる點に於て、太刀山の如く偉大なる者は恐らく其の比類を見ない。彼こそ、今の世に於て、眞に絶類、拔羣なるものである。其の道に於ける第一雄者の、唯だ當代の雄たるのみに止まらずして、古今に亘りて雄者たるの聲價を失はざる可きものは、元老としての公山縣、能樂に於ける寳生九郎と太刀山との三人を推す可きである。而して此の三人者を比較對照する時、興味津々たるを覺ゆるのである。

其 三

山縣、寳生、太刀山の三人者を對照する時、其の人物に、共通の性格が有るのが先づ人の目に著く。此の三人者がいづれも規律的の人物である事、隨つて行儀の善い人である事、いづれも多少、趣味を解せざるには非るも、ともに趣味の人に非る事、公山縣が棊を樂しむように、太刀山も亦た棊を打つ事、流石に謹嚴な山縣さんも碁に耽る事があるように、極めて規律的な太刀山も取的を相手に、棊を、夜半の十二時までも打つ事畢竟、此の三人者は、ともに眞面目で常識的なる事、謹嚴、努力、節制、攝生的なる事等に於て、此の三人者に共通の興味を發見するのである。勿論、是丈けの點を以て、吾輩は、此の三人者の人格、趣味が相似てると速斷するのでは無い。太刀山を「强者の象徵」として見る時に、吾輩は此の如く考へるのである。

吾輩は此の三人者を對照、考察しつゝあれば、種々の感興が湧いて來る。此の三人者は、悉く、老剛なる事に於て一世を驚かしつゝある者だ。太刀山を老とい

ふは可笑しい。併し力士としては、其の年齡と强味との干係から見れば老剛といふとも差支は無からう。山縣、實生の二人は共に八十歲ばかりである。此の如き老人先輩が、實力實權を以て一世を壓倒するといふ事は、現代の異采であり、全く歷史上の稀有の現象である。抑も五十年前、維新前後は青年の世の中であつた。明治の革新を成就した者は青年であつた。五十年後の今日は則ち老人の世の中である。あらゆる方面の首腦となれる者は皆、老人だ。總理大臣も八十、元老も八十。實業家も、教育家も、其の泰斗も概ね七八十の老人、而して若い者が强かる可き力士社會に於ても、無敵の橫綱は四十歲の太刀山である。太刀山は則ち老人の世の中、强い老人の世の中を象徵しつゝある者である。

其四

太刀山の强味は、遺憾無く、其の魁軀の表に現はれて居る。最近、彼の體格は、身長六尺二寸、體重、三十六貫七百目ある。身長に於ては吾輩より一尺高く、體重は恰も吾輩の二倍である。吾輩の十八貫は魁軀とするには足りないが、日本人としては固より中人以上である。彼は日本人の中人以上の體格の二人分を有する者である。

彼が此の魁軀を維持する所以の攝生法の上に、「氣位として見たる太刀山」の興味が現はれて居る。吾輩が最近、大場所の前日、親しく彼に就いて研究したる所に依れば、彼の日常的生活は極めて規律的、常識的で、豪放の趣味などは少しも見られぬ。定食の外には、一切の間食は決して取らぬ。如何に美味な菓子でも何でも手を出す事は無いといふ。定食といふは一日二食、尤も大概の力士は二食であるが、それでも朝または晩に牛乳鷄卵などを喰べるものもあるけれども彼は、其等の、定食以外のものを絶對に喰べない。食物としては、全然、一日二食、其の外には少しばかり敷島の烟を吹かせるのと、茶を喫むだけである。而して一日の食量、米は約四合ばかりで、副食物も格別、多量に取るといふ事は無いと話して居た。右は太刀山が自から吾輩の質問に答へたところを綜合したのである。

これ丈けの食量を以て、あれ丈けの魁軀を維持するといふ事は、吾輩には殆んど想像が出來かねる位であつた。これでは吾輩の食量よりも多くは無い。或は吾輩よりも少いかも知れぬ。吾輩の二倍の體重を有して、而して其の食量が同じ位である。譬へば、二倍の排水噸數を有する船と、其の半分の船とが、同一量の石炭

を消費して航海しつゝあるといふ理窟になる。其の船は決して高速力を出さない筈である。

力士は大食するものと斷定して居た吾輩は、太刀山の少食に驚かされた。尤も力士が皆案外に少食するのでは無い。若手の力士は、やはり健啖である。普通に太刀山の二倍くらゐ食べる者は珍らしく無い。太刀山と雖、壯年の時は、遙に大食であつた。彼が明治三十八年の夏場所初めて常陸山を破つた時は、彼の語るところに據れば、彼の體重僅に廿三貫餘であつたといふ。今はそれより十三貫ばかり重くなつたのだが、重くなつた丈け、それ丈け強くなつたのでは無いと自から話す。彼は體重が十三貫丈け少かつた時分の方が大食であつたのだ。最も大食した時はと聞けば、それは力士になる前、農業をして居た時で、所謂一升飯を喰つたといふ。彼は其の魁軀に比例して、少食である所以を說明して年を取つたからだといふ。彼の少食は、其の年齡の故と、自から理解して居るらしい。更に、彼は大食するの必要無き事を語りて、盆栽を例に引き、肥料を多く與へれば善いといふ理は無い。肥料が多い過ぎると、或は肥料負けがあるといつた。彼の說は一應有理である。併し此の說明に由つて吾輩は、彼の比較的少食といふのは必ずしも年齡の故ばかりでは無く、彼が攝生の信念にも本づいて居るのでは無い乎と想つた。而して其が則ち太刀山の偉なる所以であると思つた。

其五

太刀山ほどの魁軀を有する大力士すら、あれほどの食量を以て、能く其の力量を保持するを得るといふ事は、一箇の興味ある問題である。食量の多少は、習慣にも依るとはいへ、若し、彼に髣髴たる魁軀、或は彼より小なりとするも、可なり大なる軀幹を有する他方面の、多忙なる生活に從事する人物にして、太刀山ほどの食量を以て、活動を繼續し、體力を維持する事は困難ではあるまい乎。則ち彼の如く角力丈けを專業とする者に比すれば、學問、藝術、政治、實業等腦髓を苦しめ腦漿を絞る者は、割合に多量の滋養分を以て、體力を維持するの必要ある事を考へねばならぬ乎。或は、又た太刀山等が、かく少量の食量を取るといふ方が、本來、衞生的であるので、普通一般人の方が、平生、大食に過ぎて居るといふ事になるのかも知れぬ。

太刀山が少許の食量を取るといふ事には別に理由がある。彼は、壯年時以來、腸胃が强健で無かつた。故

に、十二指腸蟲が全快して、隨つて彼がメキ〳〵と肥滿してから、尤も攝生に注意して居る。彼は極めて多食及び間食の害を恐れて、聊かの多食、間食も其の弱胃を害せん事を慮るの餘り、嚴に、食量を節減するの習慣を養成し、其れが規律的になつて來たといふ事情もあらう。故に、彼の少食は、攝生の爲に減食をしたのが動機であつて、今日となつては年齢の關係上、減食を守つて居るのである。

太刀山が三十七貫に近き魁軀を以てして、一日の飯量、僅に米四合とすれば、吾輩の十八貫は一日、米二合、而して普通十二三貫ぐらゐの成人は、一合許で、十三四歳の普通兒童は一合でも宜い筈であるが、事實に於ては十三四歳の兒童も太刀山も飯量に非常の差は無いのである。這般の事實は、吾輩に、觀察上、二樣の興味を與へる。其の一は若年發達の中程に在る者は其の發達の爲に割合に多量の滋養分を要する事。換言すれば創業の中程に在る者は、比較的多額の力を要すれども、其の成業を守るには少額の力を以て足れりとする事。譬へば新家格を造り上げるには金が掛るけれども、舊家格を維持するには、それより少き金にて出來る事である。其の二は、八九貫の子供も三十六貫の巨人も必要の食量は大差無き事、譬へば富豪も中人も勅任も判任も、必需の生活費は、其の位地の懸隔する丈けの差異は無く、實際に於ては多く差無きが如くである。三井、三菱の主人と雖、生存に必要なる食物は如何に贅澤をするとても、推して知る可きのみ。太刀山と雖、一貫目の乳兒の養分の三十六倍を食べない。

其 六

彼が精力と强味との持續の盛なるは、近來、稀有の盛觀である。大隈伯は老健といふが、實力は衰へて居る。元老としての山縣公及び寶生九郎の外、第一勢力者としての聲望と實力とを兼有して居る事、太刀山に比す可き者は無い。而して彼が實力持續の原因如何はつねに世人の批評に上る。彼が勢力持續の第一因は、其の天分の强味に在る事は勿論である。次には彼が其の天分の强味を擁護し、持續する攝生の賜であらう。或人は、彼が健康なる事、病氣の少き事を以て、彼の弱くならぬ原因に數へて居る。固より無病息災といふは勢力持續の爲に必要條件であらう。殊に力士としては、花柳病に罹らぬ事は、勢力持續の爲には有力なる條件である。太刀山と雖、壯年時に、折花攀柳の風流を解せざるほどの木强漢では無かつた。彼が力士とし

ての位地が進むと共に、彼は總べての點に向つて謹愼家になつた。

彼は、言ふ迄も無く、中年角力である。而して若くて瘠せて持病のあつた頃が、彼としては血氣に任かせて、不養生をして居た。而して三十歳頃、宿痾が癒え健康が增進し、强味が頓に加はると共に、彼は攝生家になつた。彼が攝生の覺悟が出來たのは、他の力士ならば三十六七で目が覺めるところを、彼は夙に目が醒めたのである。是が彼の勢力持續の眞事情であらうと吾輩は考へる。

然れども彼の勢力持續は何といつても、彼の絕大なる天分に本づくのである。故に、彼を讃嘆する者は此の魁力士を生んだ彼の母を讃美す可きである。寧ろ彼よりも彼の母が嘆美を要求する權利があるかも知れぬ。彼自から語るところに據れば、彼の父は今年七十九歳、健在で、其の鄕里に居る、併し身體は普通人で大きくは無い。彼の祖父は約五尺八寸位あつたらうといふ噂だ。彼の母は、彼が三歳の時に亡くなつたのだが、大きな女であつたらしい。而して母の兄弟には五尺七八寸以上が幾人かあるといつた。之に由つて見れば、彼の魁軀は、其の家系の間接遺傳であるかも知れぬが、主として、體格偉大なる母系の賜であるかも知れぬ。兎も角彼の魁軀、隨つて其の强力といふ事に對しては、彼の母が、嘆美を受く可きである。然れども彼が自から其の天分を保全しつゝある攝生的努力は、多とす可きものが有る。

其七

晚成すればとて必ずしも大器に非ず。然れども太刀山は晚成したる大器の象徵である。彼が今日に於ける絕大の强味は、其の晚成たるの賜であるとも言ひ得る。

太刀山に對する常陸部屋の精鋭、大錦、栃木山、九州山、兩國、對馬洋、宇都宮、及び綾川が鋒を並べた壯觀は、恰も太刀山といふ砲壘に向つて、此の七門の砲列を布いたかのよう。而して太刀山は獨逸の誇りとする四十珊の巨砲であるらしく見ゆ。此の七門の砲列から、頻りに發砲して居るが、未だ此の敵たる一巨砲を沈默させる事が出來無い。常陸山が雄者として始めて出現し來つた時、東方萎靡の極に達した時で、常陸山一人を以て、敵の大砲、梅ケ谷、荒岩、國見山、太刀山に對して奮鬪したのは壯觀であつた。今、其の常陸山が勇退して、其の部屋から七强が出現した。此の

七强は常陸山の分身である。機運は推移して、太刀山が、孤軍奮闘、以て、此の七强に當りつゝあるのだ。常陸山が孤軍奮鬪した時は、彼は必ずしも敵の五强よりも先進で無く、後進でも無かつた。然るに、今の太刀山對七强は、一の老雄と七の少壯新鋭との對抗、角逐である。といふ點に於て、單に對抗、奮鬪といふ外に、興味津々たるものが有る。而して少壯新鋭は、此の老雄を制伏するの見込が中々、立たぬ。少壯新鋭必ずしも强からず、老成、必ずしも弱からず。而して此の少壯新鋭の七强は非常に强いに相違無い、老雄太刀山の强は、更に、其の上に出づ。則ち太刀山の天分の、遠く秀出して居る事が想ひやられる。

彼は突張りを以て著はれた。其の突張は堅剛無比なると共に、屢破綻を生んだ。近年は多く突張らぬようになつた。彼の練熟である。彼の角力に對する世評は彼を破るは、突張の鐵條網を潜行して、四ッ身に組むに在りといふ事であつた。然るに近年は、彼は組んでも强い。必ずしも鐵砲で無くとも、危い事も無い。彼が大成せざる前は、組めば、思の外、弱處が見えた。大得意の鐵砲も、すかされ、潜られ、種々な敗軍の目に逢つた。剛勇無比と唄はれつゝ、全勝を得る事は出來無かつた。彼が、此の如く、鍛練されて來たといふ苦い經驗、則ち彼が晩成の内容は、今日の彼をして、離れても組んでも無敵たらしむる所以である。此の意味に於て、彼の七敵は、まだ〳〵彼に及ばない。

常陸部屋の七强は一人の綾川を除き、其の外、悉く若い者ばかりである。大錦、栃木山、兩國の三人の如きは、入幕するまで、殆んど負けなかつた。角力といへば、勝つ事と思つて居た位であつた。故に彼等は力量、智術兼備して居るに係はらず、經歷の少き爲に、鍛練を缺きて居る。何處までも少壯氣鋭で、熟練が乏しい。栃木山が鶴渡に破られ、大錦が浦の濱に負ける如きは、則ち此の缺陷を暴露したものである。則ち此の七强は少壯夙成であり、太刀山は年長晩成である。夙成には生硬の分子がある、晩成の練熟には叶はない。

凡そ夙成者は早衰し、晩成者は持續する傾向が有る。彼は、絶群の天分を以て、練熟して晩成した。今に於ては彼が衰兆は未だ見へぬ。衰兆の見へぬ中は、天分に於て彼に及ばざる夙成者が、彼に勝つは容易ならぬ事である。

其八

太刀山が若し三十歳ごろに廢業して居たら、唯だ一の有望なる强力士があつたといふ評判が、少數の好角家の間に殘るだけであらう。彼は四十才の今日に至つて晩成の精彩を發揮しつゝあるが故、今となつては、彼は不朽の大力士である。此の點に於ては、大錦、栃木山、九州山等は夙成である丈けに、彼と、全く運命を異にする。

元老としての山縣公の實力、態度は難攻不落の躰勢が備つて居る。今に於ては天下第一勢力、而して不朽の人物である。然れども此の人をして、中年の時、或は維新前後に、高杉、久阪、阪本龍馬等の頃に死なしたならば、今日の如き偉大なる勢力家としての彼を想像する事は出來ぬ。山縣公は全く晩成の大家であり、晩成して以て無敵なるは、太刀山と相似て居る。

晩成す可かりし人が、年壽を保ちて、善く晩成したのを見ると、何と無く、吾が心を宿命說に吸收されるような心持がする。吾輩は山縣公と、太刀山とが、晩成者としての光彩、燦爛たるが故に、殊に此の感を深く、且つ切ならしめるのである。世間には吾輩と同感の人も決して少くはあるまい。而してひとり寶生九郎に至つては、夙成して且つ持久する大器であるように見える。

吾輩は、山縣公と太刀山との晩成の運命に對して、人生の聲價、蓋棺して始めて定るの意義を切實に感觸せざるを得ない。而して次に、「命有つての物種」の語を深く味はせられるのである。

其九

太刀山は其の强剛無比なる所以に對して、自から理解を有せぬらしい。吾輩は、彼と角力を語つて見たが彼の强いのは、眞に天分の强であるので、自から理解したる强味では無いといふ結論に到達した。此の意味に於て、彼は、大錦の角力と全く其意義を異にして居る。此の二人者の角力は好箇の對照である。大錦は自から理解を有する强味である。

天分の强に於ては、太刀山は恐らく古今に稀なる者であらう。吾輩は、甞て太刀山を評して草相撲雄者といつた事があるが、彼は草相撲としては、眞に古今獨步であらう。明石志賀之助の事蹟は漠然として分らぬ。近世、拔羣の强者は谷風、小野川、雷電、陣幕、常陸山等であるが、彼は天分の强に於ては、是等の諸豪に秀出するとも、劣る事はあるまい。併し、吾輩は、今此に、是等の諸豪と太刀山の躰格、力量、成績等を比

較評論するの煩を避け度い。兎に角、彼は古今の第一流者である。常陸山は勿論の事、谷風といふも、天分の强力の外、其の强に對する理解を有して居た。或は其の理解が則ち其の强味で有つたかも知れぬ。而して力量の一點に於ては、谷風と雖、或は太刀山ほどでは無かつたかも知れぬ。二人者の力量を精確に比較するは困難であるが、敵の桒力士に秀出する程度に於ては谷風は迚も太刀山には及ばなかつた。當時、谷風は無敵といふ譯には往かなかつた。併し、今の桒力士が昔の桒力士よりも弱くは無いかも分らぬから無敵といふ一點を以て、太刀山の强を測量する事は出來ない。筑波山は中々、高く見える。鳥海山は頗る高く見える。然れども是等よりも「ズット」高くて、左まで高く見えざる高山が、日本アルプスの連峰の中には幾らも有る。

古今一流の大力士の資格は、唯だ其の力量の點だけを以て定める事は出來ぬ。土俵上に於ける其の技術態度及び人格等を加味して考へねばならぬ。吾輩の見るところでは、彼は存外、善い人である。氣質の率直なところも見える。常識も相當に發達して居る。畢竟、彼の人物は其の天分の强味に、精彩を添へるには足らずとも。割引するといふ事は無かろう。

其十

太刀山は常陸山の如く、經營の才を有せず、又た統帥の器でも無い。彼、一人として剛勇無比なのである。彼ほどの强味を有し、また角力も決して下手では無く寧ろ巧者らしく見えるにも係らず、弟子を作る力が少いのを見れば、彼が統帥の器に非るは明かである。彼が常識の發達して居るといふのも、力士相應に、一人前の常識を備へて居るといふので、土俵を離れて、彼を云爲するのでは無い。彼は萬夫の雄に非ず。一夫無敵の大勇である。

彼の角力振は、近年、なか〳〵圓熟して來た。實は、彼位の天分を有すれば、殆んど上手も下手も要らぬ。加之、彼は、力の節用といふ事を覺えて來た。併し彼の立合は上手では無い。彼は、屢、ペテン立ちの評を受ける事が有る。事實に於て、ペテン立ちらしく見える。彼の如き大剛にペテン立ちの必要は無い。吾輩も彼をペテン立ちとは思はぬが、彼が立合の下手なる爲に計らずペテン立ちの形になつて來るのである。最近に宇都宮に對場したときも、ペテン立ちといはれた。彼は、其の魁躯に似合はぬ細心な人である。其の

細心は神經過敏と見えるくらゐに細心である。痩せた人に樂天的なのがあり、肥滿した人に、往々、苦勞性なのがあるが、彼は、苦勞性といふほどで無くとも、少くとも快活には無い。彼は笑ふ時にも、其の天庭には聊か曇を帶びて居る。彼は富士山の晴雪に、日本晴れのしたやうな、晴れやかな顏を見せぬ。彼は越中の人である。裏日本の陰氣な天色が、彼の顏に象徴されて居る。

太刀山は立山であろう。彼の强味、彼の態度は峻偉なる立山を聯想せしめる。試みに橫綱の土俵入を見るに、西ノ海は如何にも茫漠たる、また一面には德の人たる事が想見される。之に反して太刀山は、力の人たる事が、直ちに首肯される。彼の土俵入の巧みなる事は近來無比である、殊に、最近に至つて益練熟して、巧過ぎる位だ。土俵の眞中に彼が正面に向つて、兩手を伸ばして、掌を上に、滿身の力を籠めつゝセリ上げる時、其の巨掌には山を捧げるかと疑はれる。此の刹那彼の脊中からは、力の膏が浸み出でゝ輝く。彼は「力の人」の象徴である。

吾輩は、彼を見ると立山を憶ひ、又た併せて、先年裏日本を歷游し、立山を望んで太刀山を聯想せし事を憶ひ出す。富山市の南に吳羽山といふ公園がある。邱陵である。此の邱上に上ると、越中の全國が双眸の中に集まる。越中は、盥のやうな國で一面に平地で、四壁に山峰壁立して居る。平地から直ぐに山が、崖のやうに聳えて居る。吳羽山は其の壁の中から、瘤の如くに突出して居るから、山は高からざれども、地形を觀望するには十分である。越中の國には、此の山ほど、觀望に好適な景勝地は無かろう。吾輩は、此の山頂に立ちて、俊偉なる立山を、飽くまで眺めて立つた時の事を忘れぬ。太刀山の話に據れば、彼は此の吳羽山の西麓の村の人であるといふ。則ち彼が二十二三才まで魁偉な農夫であつた頃、馬を曳いて、此の山麓を往來し、立山を眺めて舁唄でも歌つたであろう。其の風貌背景が歷々と、吾輩の眼中に浮ぶ。

其十一

彼は、立山の山靈が陶冶した「力の人」である。高山から一塊石を拾つて來て、それを眺めて居ると、高山の風神が見えて來る。石は山の象徴である。太刀山は立山の象徴である。表日本の足柄山から金太郎が生れて來たやうに、裏日本の立山から太刀山が出て來たのだ。彼は、少壯時以來立山に憧憬した事を自覺して

居るか、居ないか、知らないか、山水が人物を陶冶するは、彼と立山との場合に於て、尤も興味ある問題であると吾輩は思ふ。

彼が角界に越中閥を作り、彼が其泰斗である事も亦た面白い事實である。所謂長閥以外には、角界の越中閥ほど顯著なるものは無い。所謂長閥に於ける山縣公の如く、彼は越中閥に聳えて居る。而して山縣公が、本來長州の最大頭目では無かつた如く、太刀山も亦た越中角力の開拓者では無い。然れども此の二人者は大器晩成して、今日に至つては大本尊になつて仕舞つた。吾輩は、吳羽山の上に立ちて、案内者に、高山に圍まれた越中の平面圖を指點されつゝ、越中力士の出身地を展望した。梅ケ谷、綠島、玉椿、黑瀨川から新進の敷島、琴ケ浦に至るまで、其の出身地が一望の中に在る。

彼は立山の象徴であると共に、其の氣質に於ても越中人の一代表者と見られる。堅固な男である。安田善次郎の財に於ける力量を土俵の上に見せるようなのは太刀山の角力である。彼は、强志力行、刻命な越中男の看版男である。彼は一時若年の時は、大酒した事もあるさうだが、近年は減食と共に減酒である。酒を飲むが、醉はぬ前に已めると話して居る。酒を好きで、彼のような飲み方をするのは六つかしい。禁烟した事もあるといふが、近頃は少しぐらゐ吹かす。彼には世帶の上の工面は、中々、行き屆きて居る、理財の才といふよりも勤儉の强行力に富んで居る。

彼の父は郷里に樂隱居をして居る。彼は富山で花角力をした利益で、土地を買つて其を老父の世話料として親類に預けて置く。父の存生中は預り人の作得として置く、父が歿すれば彼が之を引取るといふ約束である。故に、親類の者々彼の父を阿彌陀樣の如くに大切に取扱ふ。其の長壽を祈らざるを得ない。既に高齢の事であるから咳を一つしても一同が大騒ぎするといつて、彼は話した。

其十二

嚴格なる太刀山の體格測定は出來て居ない。先年、時事新報社で試みた事があるが、最近の測定は無い。彼の如き古今稀有の强力士は、其の力と體との生理的物理的關係を、學問上の問題として、十分、精密に測定して置く價値があり、必要もある。昔ならば仕方は無い、今の文明時代に出現した此の大力士に對する醫學的、理學的の研究は、今の中に、彼が全盛の中に、早く研究して置き度い。太刀山會の中には有力なる醫

者もある。吾輩は、其の人々に彼に對する學術的研究を希望する。而して太刀山の如き大力士は、太刀山會の私有といふ譯の者では無い。他方面の人も、進んで種々の方面より彼を研究する丈けの興味は有ると思ふ。

彼は柔道家より見ても、研究の對象たる可き者である。彼くらゐの天分の强味、及び突張りを有する大力士を御するの術如何は、柔道家の宜しく研究、鍛錬を要するところであらう。

彼の全盛は、何時まで續く可き乎。將來の太刀山は如何。始めて彼を破る者は誰ぞ。

太刀山は病氣に罹らざる限り、存外、長く其の全盛を持續するであらう。まだ／＼彼の筋肉質の魁軀は、國技館の土俵を飾るであらう。始めて彼を破る者は誰乎。未だ吾輩にも、豫測は困難である。

若い者は、漸々、强くなるから、早晩、彼を破る者は出現するであらう。乍併、彼の如く、强味を持續する者は、果して出現するであらう乎。彼の魁軀を見ると、吾輩の先づ感嘆するは、其の强剛なる筋肉質の魁軀である。日本の力士中に、彼ほどの魁軀を有して、彼の如く筋肉質なる者は實に得難い。或は空前であるかも知れぬ。谷風でも小野川でも、悉く脂肪質である事は、錦繪で見ても推想せらる。常陸山と雖、彼に比すれば脂肪質であつた。概して筋肉質は脂肪質に比すれば力もあり、持續もある。今の栃木山、大野川、西の伊勢濱の如きは筋肉質の典型、對馬洋、兩國、宇都宮も之に次ぐ。而して筋肉質の强剛、魁偉なる、太刀山に及ぶ者は無い。彼が强くして續く所以である。

大場所初日の前日吾輩は樗陰君の案内に依つて、太刀山を部屋に訪問して、土俵の前と、江亭の畫いた富士山の襖のある客室とで彼と話した。彼と吾輩と、丈け競べをして見たのは痛快であつた。吾輩と雖も角力になつたら、小常陸くらゐには行るといふ、彼は貴下の五尺二寸では玉の川であらうといつて、三人、大笑した。併し玉の川と雖、紅葉川に勝つを見れば侮る可らず。

五月廿日　健堂生再記

此稿を校了するの日、即ち大正五年五月廿五日、本場所第八日目の土俵に於て、天下無敵の大剛太刀山、遂に東方第一の堅實且つ排勁なる栃木山の爲めに敗らる。是れ幾分太刀が左手の指頭を負傷し居るにも因るべしと雖も、栃木山の殊勳は以て相撲史上に傳へて永く好角家の嘆賞を博するに足らん。而して栃木の斯くの如き嘆賞を博するは、即ち其反面に於て益々太刀の偉大を證する所以なるを思へば、太刀たるもの亦以て滿足して可なり。（校正室にて　樗陰生）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

早稻田大學教授 内ヶ崎作三郎序

吉田絃二郎新著

タゴールの哲學と文藝

五版亦々賣切

六版

オイケンベルグソンによりて創造覺醒の第一歩に入りたる我思想界は印度大詩聖大哲人タゴールによりて欣求菩提の究竟裡に法悦光耀の生活と哲理とを發見せざるべからず。本書は實に彼の神幽なる哲學と純眞の文藝と崇敬の生活とを系統的歴史的に批判し紹介したるもの。更に研究資料として戯曲『暗室の王』『郵便局』『チトラ』詩『新月』『園丁』をも加へたれば此の一書以てタゴールの全體を如實に窺ふ事を得。蓋しタゴール研究の權威たるを失はず。將に來朝せんとする大豫言者を迎ふるの準備として敢て本書を江湖に薦む。

四六判上製美本全一册 紙數約六百頁

正價金壹圓貳拾八錢

郵税金十錢

東京帝國大學文科助教授
東京高等師範學校教授 文學士 宇野哲人先生新著

（最新刊）

四書講義 大學

菊判上製美本全壹册 金壹圓廿錢 郵税八錢

大學は儒教の目的を最も善く組織的に叙述せるものなりとは著者の創唱する所。此書は如上の見解によりて平易明晰に講述せるものにして冠するに大學要旨を以てし且つ附するに索引及之と密接の關係ある幾多有益の研究を以てす。苟も儒教の何物たるを知らんと欲せば必ず此書を繙きて著者の圓熟せる講話を聞かざるべからず。敢て讀者の一讀を希ふ。

稻毛詛風著■心の叫 全壹册 正價金六拾五錢 郵税八錢

本間久雄著■エレン・ケイ思想の眞髓 正價九拾錢 郵税金八錢

上司小劍著■小ひさき窓より 全 正價七拾五錢 郵税八錢

吉田絃二郎著■生の悲劇 全 正價金壹圓 郵税金八錢

東京市神田表神保町七 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付三の一）

文學博士 醫學博士 森林太郎譯

悲劇 ギヨッツ

ギヨオテ作

四六版天金總布裝
總紙數三百七拾頁
定價 金壹圓參拾錢
送料金八錢

新刊發行

◉ギヨオテ原作◉五幕物の悲劇なり。◉シユワアベン同盟は、獨逸帝國の法律を擁護し、平和を恢復するてふ美名の下に、その實、硬骨にして正義に據るギヨッツを滅ぼさんとす。諸侯、騎士、自治體の三者は、怯惰、狡猾、無能力にして、私欲を逞うし、帝國の徽號たる鷲の羽の下に隱れて、特立獨行、超然として獨り清節を持するギヨッツに壓迫を加へんとす。社會は墮落腐敗の極に達し、騎士氣質全く衰へたり。◉ギヨオテは斯く感じて、ギヨッツを脚本の主人公とせり。ギヨッツは此墮落腐敗の犧牲となりて、必ず滅亡すべき運命を有せる人物なり。◉善惡多數の人物活躍し、悲壯なる多くの場面轉換す◉戲曲中の大戲曲なり。古典文學中第一流の代表作なり。

發行所 慶應義塾 三田文學會

□賣捌所 東京丸の内 籾山書店 振替東京二四一七□

(中付三の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

ドクトル 尺秀三郎著

向上鼓吹 随感録

昔しは穎才の好少年として稱せられ、今は教育界の耆宿たる尺先生の随感録は、主として世の教職に在る人々に同情を寄與し、精神的に之が友人たらんを期せるものなり、然れども先生の多情多感なると、其の縦横自在なる才筆とは、必然的に材料の範圍を擴大し、眞摯、忠實、教訓、垂戒の外、機智、警抜、滑稽、諧謔百出し、讀んで涙を垂るゝもの、發憤するもの、扼腕するもの、頤を解くもの、連發續出、誠に應接に遑あらざるものあり、此の意味に於て本書は青年家庭の讀物にも適すべく、或は又馬背に、車上に、船内に、若しくは山館浴舍に携へて無二の好伴侶たるべきなり。

四六版總布裝
紙數三二〇頁
價八拾錢
送料八錢

東京京橋區銀座一丁目
大日本圖書株式會社
振替口座 東京二一九番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揚載は謝絶す

新保磐次先生著　全二巻

趣味の日本史

十有餘年苦心の大著

上巻發行
菊判箱入
總クロース製美裝
紙數八百五十頁

定價二圓八十錢
郵税（内地十六錢　臺灣樺太卅五錢　朝鮮四十五錢）

著者は當代の隱れたる一大學者、其學力と文才とは三宅（米吉）博士建部博士等の感嘆する所也

上下三千年の趣味的史談史實

本書　上巻は神代より平家沒落に至り　下巻は源氏勃興より大正の現代に至る

行文流麗にして趣味津々快興如湧

青年及一般國民の最善嗜讀書

軍人界に對しては軍談軍記以上の快著

學校諸先生及學生には國史の絶好參考書

＝本書五千部に限り特價二圓五十錢＝

東京本町　金港堂　振替東京八八一五番

（中付三の四）

人物評論（七十二）

吉野博士論



▽留學中の吉野君

法學博士　牧野英一

吉野は明治三十七年に大學を出た。僕は明治三十六年に出た。一九一〇年から一九一三年へかけて、同じ頃に留學をした。伯林でも一所になつたことがある。一所に猶太教の寺へ參つたことなどを思ひ出す。巴里でも一所になつたことがある。一所に社會黨の婆さんを訪問したことなどがある。倫敦でも一所になつたことがある。一所にイースト、エンドの貧民窟を視察したものである。而して今は同じ大學

に職を奉して居るのである。僕の爲めには仲のいゝ學友である。

留學先では何といつてもゆつたりとして居る時間があつた。東京では私宅を訪問し合ふといふ時間もない位、お互に多忙な身の上であるが、彼地では、こちらからも出掛けた。向うからも來ることがあつた。いろいろ議論をする機會が多かつた。

吉野は實によく勉强した。勉强といへば、通常は讀書といふことを聯想することになる。無論吉野は書物を澤山讀んだ。併し吉野の特色は書物を讀んだり、大學の講義に通つたりするのではなくして、直接に自己の眼と耳とで、彼の國々を了解せやうと努めたことである。諸國の社會黨を比較的に研究するといふやうなとには隨分骨を折つて居たと思ふ。それには、社會黨の中へ入り込んで、親しく彼等の心理や、動作や、事業や、主張やを研究するのであつた。それで、吉野からは社會黨に關して、書物の上では知ることの出來ない種々の咄を聞くとこが出來た。

吉野はクリスチャンである。其の關係からでもあらうが、耶蘇敎のことをよく知つて居る。獨り新敎のことのみならず、舊敎のことにも明るい。而して猶太敎のことなどにも通じて居る。僕の歐洲の旅に於て、耶蘇敎に關する知識がないために殘念な思をしたことが何度あることかしれない。併し、折々吉野から說明を聞くことが出來た。博物館の畫を見ても、公園の立像を見ても、耶蘇敎を知らねば駄目だと思つたとが多い。而して社會や政治を理解するにも、耶蘇敎を知らねば駄目である。歐洲の政治と耶蘇敎との關係に付ては、吉野は研究と觀察とに努めて居た。

僕の專門はいふまでもなく政治でない。僕は法律殊に刑法を社會學的に研究して居る者である。併し、社會學的に研究をして居るといふ點から、吉野とは政治現象に付てゝ議論をすることが少くなかつたのである。一體、吉野のデモクラシー論は其の由來が甚だ遠い。それは吉野が留學餘程以前からの主張である。それには僕は、樣々反對な點が少くなかつたので議論をしたのである。吉野の議會論や政黨論には、今日尙服し兼ねて居る所がある。加之、僕の見解が、兎角法律的であるのを脫し得ないらしいのに對し、吉野は憲法上の議論をするにも、全く政治學的社會學的であるので、其の間に多少の間隔あることを免れかつたやうである。併し、段々議論を重ねるうちに、僕は吉野を誤解して居た點を多く發見した。殊に其の方法論的立場を了解することを得るやうになつた。吉野自身も亦、實際、段々に說明が上手になつたと思ふ。僕は、吉野を以て所謂デモクラシー論者と考へて居ない。吉野は、十九世紀から現代にかけての政治現象をエマンシペーションといふ語で說いて居ると思ふのであるが、僕は最近の法律現象をソシアリゼーションといふ語で說いて居る。吉野が政治史家として現代の政治現象を叙說批評するに方つて抱持して居る理想は、僕が法律學の學究として、現代の法律を分析綜合する

に用ゐて居る標準と同じやうであるので、此の點に於て、僕はいつも吉野の說を傾聽したのであつた。吉野の議論はリベラルである。併し其の實はおだやかである。頑固といふことを嫌ふのであるが、併し過激といふ分子はない。デモクラシーといふ語は、科學的には精確な語であるけれども、其の語が矢張通常は民主主義と飜譯され、其の民主主義といふ語が誤解を招き易い語であるだけに、吉野の思想が往々誤解されて居るやうに思ふ。民本主義などといふ語を用ゐても矢張誤解は免れない。丁度ソシャリスムといふ語が科學的ならざる一種の不快な響きを持つやうに。

吉野とは隨分議論をしたが、吉野は一度も怒つたことがなかつた。僕はいろ〳〵な人と議論をするので、談論好といはれて居るやうであるが、どうも對手がいつも直ぐに怒つて仕舞ふに困るのである。議論を議論として論理的に續けて行く人といふものは少いものだと考へて居る。吉野は其の少い一人であると考へて居る。

吉野が歐洲で調査蒐集した材料だけでも、隨分分業の多いものであつた。此の頃二三の著書を書いたので、追々に小出しをしつゝある哩と考へて居る所である。併し、『歐洲動亂史論』や『現代の政治』などはホンの片鱗である。『ヘーゲルの法律哲學』の著者で且他方には劇通である所の吉野には、モツと深い、モツと廣い思想と觀察とがある筈である。段々に議論を續けて、其のデモクラシー論を一層豐富に一層徹底したものにして貰ひたいと考へて居る。

親切な、俠氣のある人である。金の問題などにはいかにも無頓着であるので、それが吉野の美德であることは勿論であるが、それが爲めに吉野が殃されて居ることも少くない。只其の間に立ちて、吉野のいつもあきらめのよい樂天的な所に敬服して居る。僕は、吉野とは趣味を異にする點もあるに、考へ方を同じくしない點も少くないのであるが、留學中の貧乏生活を共にした記憶はまだ新らしい。

▽法博吉野作造論

鐵拳禪

一

虛名か實名か知らぬが、法博吉野作造の名が一時に高くなつた。彼れの論文や、談話筆記が多くの雜誌に歡迎さるゝに至つた。斯の高名と歡迎とを以て、論壇の寵兒たるを測定するの標準とせば、彼れは確かに論壇の寵兒である。學界の流行兒である。流行兒と云へば、何となく花柳界の流行妓の如く輕薄に聞えるが、正に往年の萬龍か、照葉と云つた所にある。更に其の比を文壇に求むれば、多少生彩は乏しいが、當年の高

山櫻牛と云つた風である。彼れは二高出身で、是れも二高出身、唯其の文科と法科との異なるのみである。さうして、高山は當時論壇の權威であり、雜誌界の麒麟兒たる『太陽』に據りて、其の才筆を揮にし。吉野は現時論壇の權威であり、雜誌界の麒麟兒たる『中央公論』に據りて、其の蘊蓄を傾倒してゐる。其の據る所が好い爲めに、其の名を馳する事も從つて速かである。彼れ高山の實力のあること勿論であるが、『帝國文學』に在りては纔かに其の名を知られ、後『太陽』に據るに至つて嶄然頭角を顯はしたのであつた。吉野も亦十年『新人』に『六合雜誌』に執筆したが、何等世人の視門を惹かなかつたが、一たび『中央公論』に其の雄姿を現はすに及んで、茲に始めて天下の視聽を聳動するに至つたのである。二人者の雜誌に擁されて名を成したのは稍似て居るが、一は洋行前に於て高名となり、洋行に際して凋濟の止むなきに至つたが、一は洋行後數年にして高名となり、今後益々其の實力を發揮するのであるから、彼の一時に燦華爛發せる才人の徑路とは、自ら其の趣を異にするであらう。

二

雜誌によりて名を成すと、往々虛名を賣つたやうに誤解される。法博吉野の如きも、其の誤解を蒙りつゝある一人である。某博士の如きは、少壯學者が雜誌に擁がれ、雜誌に意見を發表するを、嫉妬の眼で以て非難してゐる。又、法博吉野は東大教授たるが故に、其の餘りに雜誌に書き立てる事を大學側から制肘されたが、『書かねばならぬから書くのだ』と云つて、夫れを刎ね付けたやうに聞いて居る。其の『書かねばならぬ』と云ふ言葉の裏には、生活上の理由も隱れて居る事と思ふが、實際書くべき事があるのに書かぬのは實の持ち腐れである。其の實を骨董品か何ぞのやうに秘藏して、他に見せまいとするのは、愚かな事である。價値のある者ならば、夫れを公開して、世間の評價を求めるなり、世人の參考とするなり、趣味の啓發に資するなり、社會民衆の稗益を圖るべきである。帝大の教授は、徒らに帝大の秘藏すべきものでない。帝大の講座を擔當するの餘暇を以て、廣く社會民衆をも教ふべきである。其の定められたる教室內に於て、年々同じやうな口調で、其の專賣の古ノートを繰返しつゝ講義するを以て、能事終れりとすべきでない。若し夫れを以て唯一の善事と心得、事に觸れ時に應じて意見を發表するを以て惡事とするは、己れの空虛を他に窺知されはせぬかと怖るゝ卑怯な振舞である。雜誌によりて虛名を賣るよりも、教室內に在りて虛名を擁するは、より多く非難せざるを得ぬ。雜誌のは、縱令虛名にもせよ、其の書いた物を見れば、直ぐ其の實力の程度が分る。其の分る所の實力を見ずに、雜誌に其の所說の多量に表はるゝを見て、虛名だ虛名だと騷ぐのは、騷ぐ方が間違ひである。幾ら雜誌に多量に發表しても、評判にならぬ者は、決して評判にならぬ。其の問題となり、評判となり、人氣の焦點となる程の物は、そこに實力の潤澤か、はた其の時代に觸れたる何物かを有して居るに相違ない。法博吉野の今日の名聲は、人の人氣を頭痛に病む者の非難だけでは無いやうである。

書かねばならぬから書くのだ――夫れだけでも、彼れは尋常の講義衣

食者と異なつて居る。議壇以外に、更に議會を啓發せんとするの意氣を持つて居る。學界に挑戰し、操觚者を對手とせんとする男氣を持つて居る。己れの估券を落さじらんが爲めに、若くは落さん事を怖るゝが爲めに、古ノート以外に、何等の創見若くは意見を發表せざる者に比すれば其の意氣及び男氣を愛すべきである。

而して其の男氣より生れたるものに、半個年間『中央公論』に連載せる『歐洲動亂史論』があり。其の意氣より出でたるものに、同誌新年號に掲載せる『憲政の本義を説いて其有終の美を濟すの途を論ず』がある。前者は彼れが學者たるの地位を確立するに足るものであつたが、其の反響は識者階級に止つたやうに思はれた。後者に至つては、彼れが得意の産物でなく、寧ろ副産物とも見るべきもので有つたが、問題が問題であつたので、其の刺戟する所は甚大であつた。贊否の論は囂々として起つた。憲法學者を以て任ずる法博上杉愼吉、法博市村光惠等を始め、青年操觚者にまで及んだ。中には、中學生が譯讀の批評をするやうな反對論や、小説拘ひや揚足取りの感情論に過ぎないものも有つたが、兎に角論壇に時ならぬ花を咲かせた。彼れは論壇の花形となつた。其の花形たる彼れは、些の横柄なく、一々其の論難に答へて、無責任の論議に非ざるを裏付けて居た。其の眞摯なる態度、其の敬虔なる論調は、縦令諄々しい講義めいた所があるにせよ、所謂學者の傲岸を鼻先にぶら下げざるを多とすべきである。彼れを以て官僚的偏見を有する者の如く貶するは、彼れの官學に衣食するより來れる反感か、さなくば飜譯思想の色眼鏡を以て見たのではあるまいか。

三

法博吉野は平静な人である。温厚な人である。熱は有るが、其の熱の外に見えぬ人である。彼れの文に生彩がなく、彼れの論難に熱がないやうに見えるのは、彼れの性格の然らしむる所である。彼れの態度の眞摯と論調の敬虔とは、彼れが性格の發露であり、人格の表現である。彼れには男氣あり、意氣あるも、爭氣なく、覇氣がない。譬へば初鰹の新鮮味よりも、甘鯛の滋味の多い方である。若し又、ハイカラとか、蠻カラとか云ふ方面より云へば、殆んど蠻カラに近い中カラである。生眞面目一方かと思へば、ちよい〳〵法螺も吹き、氣焔も揚げるが、才氣縦横の所は見えない。彼れに才氣は無いので無いが、其の才氣が容易に外面に露はれないのである。其の才氣は飽までも内面的に充實して、時ありて閃光的に顯脱するのである。で、一見すると、新進の學者風と云ふよりは、古臭い町長風がある。彼れの親父が町長であつたから、然う云ふのでは無いが、彼れには何となく其の面影がある。屈托してるやうな澁味がある。學者肌と云ふよりは、傳道師の風骨がある。之は彼れが多年本郷教會などに出入し、説教をするに由りて養ひ得たのかも知れぬ。夫れ等は其の容姿と、體質とより來てるのであらう。

黄色な健康の人——斯う云ふ印象は、再覩に附き纒うて離れぬ。そは空ッ風が吹いて、埃の白く立つ日であつた。壹岐殿坂の昭文堂の店先に眼を掛けて、ぼそ〳〵と話をしてる背牛紳士があつた。可なり疲れた背

廣服を着て、汗と埃とによごれた茶色の中折帽を膝に載せて、夫れを弄りながら話をしてる所を見ると、青年の元氣と云ふものを何物かに吸ひ取られたので無いかと思はれた。血の氣が薄さうに見えた。洋行以前の彼れは、夫れ程に疲れ、衰へて居たので、其の健康を危まれた。或は洋行中に冷たくなりはせぬかと、心配した人も有つたやうである。彼れは首尾よく目的を遂げて歸つて來た。健康の保障が得られたやうであるが吾輩には其の時の印象が、一番に深く彫り付けられて居るので、何うしても黄色な健康の人のやうに思はれてならない。彼れには新綠の燃え立つやうな活氣はない。眞紅な血の漲るやうな熱烈はない。其の活氣と生彩との缺けてるのは、矢張り肉體の關係から來てるのだらうと思ふ。

四

法博吉野は、陸前古川の產である。古川學人といふのは、多分產れ故鄕に因んだ彼の雅號ではあるまいか。彼れは明治三十七年七月に、東大の政治科を出て居る。法博上杉は、彼れに對して少壯學者なり、後輩なりとの口吻を洩すやうであるが、上杉よりはたつた一年後れて政治科を出たのである。吉野が少壯學者なら、上杉も亦少壯學者である。實出しの順序から云へば、三四年前に憲法論で花を咲かせた上杉の方が古いのである。夫れだけ上杉の憲法論には黴が生へて、色揚や染返しを要するであらうが、吉野のはまだ然うならないだけが取柄であらう。上杉が三番の卒業で、吉野は翌年の首席の卒業である。彼れは確かに秀才である。鄕里の小學から、一中、二高まで首席を爭うて來た程の才物で、幼少から秀才の名が高かつたのである。『年藏さあの伜も今に大學者にな。ぺえ』とは、古川での評判であつた。夫れが双缶返りもせずに今日に至つたのだから、何處かに確かりした所があるに相違ない。卒業後、袁克定の家庭教師となつて、清國に赴いた。之も生活上からの關係では無かつたかと思ふ。一體彼れの生家は相應の資產家であつたが、伜其の學資を貢いだ爲めと、其他にも諸種の事情が有つたてあらうが、殆んど家產を傾けて了つた。彼れ自身も可なり債を負うてる事と思ふ。で彼れは生活上にも苦勞し、大に働かねばならぬ境遇に立つて居る。此の邊は同じ鄕友でも、資產家の伜で力んで居る內ケ崎作三郎などゝは餘程違ふのである。

法博吉野は、黄色な健康で以て生活難と戰ひ、本職の研究もやつて退けようとするのだから、並大抵の骨折ではない。素より家庭教師と云ふのだから、政府顧問のやうに優待されなかつた事と思ふが、夫れでも袁の家庭に入つたので彼等の內情も知る事が出來、清國に遊んだので彼國の事情に通ずる事が出來たと云ふのは、彼れに取つては好い經驗であり活きた研究であつた。今日彼れが支那問題に就ての批評觀察等を發表して、一廉の支那通となつたのも、其の經驗が有る爲めである。

清國から歸ると、東大の助教授となつた。夫れから政治學及び政治史の研究で、海外留學を命ぜられた。歸つて來れば、一講座を持つべく極つて居たのだから、彼れは大に期待されたのであつた。歸朝すると最う世間では、彼れを博士のやうに扱つて居た。氣の早い雜誌は勿論、出版

の資格にまで法學博士吉野作造となつて居た。彼れはまだ博士にならぬうちに、既に博士なるを認められた。現今の博士が、實際博士となつたのは、彼れが『歐洲動亂史論』が單行本となつて發賣された、暫く後の事であつた。世間では博士になると、格段な人物になつたやうに思つて大騷ぎをするが、彼れは博士以前から既に博士として認めらるゝ實力があつた。

五

法博吉野は又、趣味の人である。智識階級の人々は、何人でも多少の趣味性がある者だから、特に趣味の人と云ふのも變だが、彼れには夫れが豐富にあるやうに思はれるのである。彼れは專攻の政治史以外に、耽讀するのは文藝書類である。洋行中は好んで文藝書類を讀み、ストリンドベルヒの作物は殊に愛讀して居た。歸朝後、『イビセンよりも何よりも面白いのは、ストリンドベルヒの物だから、讀んで見たら何うか』と云つて、其の愛讀書を森武某に與れたさうである。森武が夫れを飜譯して出すと、ストリンドベルヒ熱が起つて、方々で出版されもし、劇にも演ぜられるやうになつた。或意味から云へば、ストリンドベルヒを我邦に紹介したのは彼れである。其の以前にも斷片的に紹介した者は無いでも無かつたが、一種の流行熱を煽つたのは、彼れの旅行鞄を開いてからである。

由來彼れは、文藝の愛好者であつた。彼れは中學時代には、松風琴と號して、確か『䇳戰場』や『少年文庫』の投書家であつた。當時彼れと並んで才藻を並にした者に、菅野三郎があつた。彼れは風丈と號して、『少年文庫』で鳴を鳴して居た。今の文學士若杉三郎、別號茂野梁二と云ふのが其人である。で、松風琴の吉野作造も、將來は文學をやるであらうと思はれて居た。彼れは非常の熱心で、國漢の書類を讀破した。中學を出る時分には、大概の假名や四角文字で書いた文藝物を、自己の智嚢に納めて置いた。夫れが何う云ふ動機であつたか、彼れは政治に志すやうになつたのである。雀百までの譬喩の通り、彼れは今日もなほ文藝を忘れないのである。殊に演劇には深甚の趣味があつて、其批評眼は素人裸足と云ふ噂がある。

けれども、彼れは文藝物の飜譯をやつたり劇評をやつたりするの餘裕はない。自分は飽まで、ストリンドベルヒの無言の紹介者で匿れてゐる。匿れてゐるのは必ずしも可いと云ふのでは無いが、そんな所が矢張り彼れの面白い所である。今日彼れの雜誌に發表するのだけでも、亂作濫發の非難があるのだから、餘技に指を染めないのは怜悧な遣り口である。曾ては翰陽學人の匿名で、『試驗成功法』など云ふ書を作つて、版を重ねた事がある。當時の情義上已むを得なかつた爲めでもあらうが、當時は却々筆豆であつた。今日發表される多くの論文は、大半口述では無いかと思ふ。彼れの最近の著述には、『現代の政治』がある。既に雜誌に發表した論文を、秩序を立てゝ蒐錄したものである。外に對支外交の批評をやつた際物めいた著書もあるが、大した努力の結果になつた物でも無いやうである。彼れの單行本は、何う云ふものか、雜誌に出る論文のやう

にまだ人氣を惹き立てる迄には至らないのである。

六

其の吝嗇の華々しい實行を見ないやうに、彼れの周圍も亦生彩に乏しいのである。彼れ自身は、好んで隱者のやうな淋しい生活をして居る。門戸を開放して、來客を引くと云ふ風では無く、可成來客を避けるやうな態度を取つて居る。面會日を定めて接見するのは、自身にも都合よく他人にも無駄足を運ばせまいとする、規律的な非浪費的な生活であらうが少壯學者の生活としては、餘りに引込思案に過ぎはすまいかと思ふ。其の引込思案の處にも、矢張り黄色な健康の人と云ふ感じが浮んで來る。

彼れが來客を避ける一面の理由は、確かに彼れが研究の時間と、努力の時間とを多く欲するからである。彼れは既に生活の爲めに、人一倍に働かねばならぬ境遇に立つて居る。多くの原稿を書かねばならぬ。縱令口述するにしても、內外の新聞雜誌に目を通さねばならぬ。思想を整理せねばならぬ。之に多くの時間を要するから、來客を引いて駄法螺を吹いてる暇が無いのである。既に人に接する事少く、活字に親しむ事の多い結果、彼れの時事を論ずる多少學者臭い所があるやうだが、然しあれでなか〳〵官邊の秘密消息なども知つて居るらしい。彼れは又子煩惱の人である。家庭の和樂を欲する人である。他の學者は家庭を犧牲にしても、自己の研究に沒頭するが、彼れは家庭の犧牲にも少しは成りつつ自巳の研究に力を盡すと云つた風である。外界に對しては極めて非浪費的で有るが、家庭に對しては極めて浪費的であるやうに思ふ。家庭にある彼れは學者肌はなく、誠に温乎たる好々爺の感がある。細君に荒い言葉一つ使はず、細君に代つて子供も抱き、子供の世話もすると云ふ樣に、家庭の爲めには、其の圓滿と平凡とを遺憾なく發揮して居る。夫れなら子供と一緒に寢て了ふかと云ふに、然うでない。子供の寢靜んでから彼れの世界で、夜遲くまでペンを動かし、ページをめくつて居る。此の努力奮闘を知る彼れの友人等は、彼れの好々爺振を氣の毒がつて居る。

細君の舊姓は阿部、名はたまのと云つて、縣師範の出身である。彼れが二高の學生の時、彼女は教鞭を執つて居た。此の若い女教師と若い[illegible]とは、何時しか相思の仲となつた。彼れが二高卒業の間際に、其の關係を奧羽日々新聞が素破拔いた。彼れは危く處分される所であつたが、特待生ではあり、卒業間際ではあり、仲に立つて夫妻の證言をする者もあつて幸に事なきを得たのであつた。斯樣に秀才の前途を葬るやうな、危い橋を渡つて迄も得た細君であるから、彼れの情の濃かなるもの有るは無理のない話である。大學に入つた時は、最う一人の父となつて居たのだから、可なりの苦勞を嘗めたものであらうと思ふ。

たまの夫人は、外形は然ら派手でも無いが、內面に頗るの派手好きだと云ふ事である。夫れに博士夫人にもなつたので、女教師の澁味がとれて、娛樂の方面には可なり金を投ずるらしい。芝居も一二流の所は、狂言の變り目毎に出掛けるやうに聞いて居る。彼れの服裝は古くくすんで居るが、彼女の服飾は新しく光つて居る。其處に家庭の調和が取れて居るのかも知れぬが、其爲めに博士の負擔が重るやうでは博士に對して氣

の毒である。吾輩は法博吉野の材を愛するが故に、敢て此の苦言を呈するのである。

▽大學講壇に於ける吉野博士

法科大學々生　井口孝親

想へば大正二年九月新らしき希望と大なる期待とを持して大學の新生活に臨んだ吾々は多くの講義中において三つの興味の中心點を見出した其一は上杉博士の憲法であり其二は牧野博士の刑法であり而して其三は實に我吉野先生の政治史であつた。忘れもせぬ同年九月十一日、土方學長の穏やかな新入學生に對する訓辭のあつた後直ちに「これから我憲法の講義を初めます」と言つて「緒論、第一章　國家」……「抑々人性は道德的過程にして國家は最高の道德なり」と呆氣にとられてゐる吾々學生をして否應なしにペンを走らさしめた上杉博士の颯然たる羽織袴の姿は今も尚は我腦裡に鮮かである。又眼中既に世界の法律學者なき牧野博士は其得意の大雄辯を振つて「吾輩は向後一年間自己の專門とする刑法を通して諸君に我世界觀（ウエルトアンシヤウウング）を御傳へする」との有名な開講の辭に於て先づ小胆なる吾々をして私に畏敬の念を生ぜしめた。而して最後に吾々は其年新に歸朝せられた吉野先生を中心として小やかなる政治史の講座に列つた。

實に政治史の講座は憲法刑法のそれに比して如何にもひやゝかである。其教室より言ふも其聽講學生の數より言ふも到底堂々たる二者の敵ではない。それに又此講座を擔當せられる吉野先生自身も至つて無造作な虚飾のない講義ぶりに當時の麻痺せる吾々をして聊か失望せしめた程であつた。併し吾々は此飾りのない率直な先生の講義に對して日に月に執着の念を増した。吾々は結局濃厚な肉の美味よりも淡泊な米の無味に無限の味を見出したのである。

先生は我法科大學において最初に政治史を專攻せられた人である。政治史とはもと單なる記述的歷史の謂ではない。政治と歷史とは結局同一研究の二方面に過ぎぬ。

歷史によつて裏付けられない政治は粗野であると共に實際政治との關係を無視した歷史は單なる物語に終つてしまふと言つたシーリー教授の言をして眞ならしめば政治史は愈々益々生きた學問でなければならぬ。即ち其目的とする所個々の事實の單なる羅列に在らずして精細な歸納的研究の結果による人間の政治的生活の基調の闡明に存しなければならない。我吉野先生は素より政治史に對して深き理解を有してをられた。先生の頭腦は微細なる個々の事實を看過するには餘りに強記明晰であつたけれども先生は努めて此弊に囚へられんことを怖れ個々の事實の探求研鑽に沒頭せられつゝも尚且つ全體を通ずる大思潮を逸するやうな迂儒の愚は學ばれなかつた。斯の如き眞面目な研究者も學問の發達上素より重

要であるけれども少くとも先生は其人ではなかつた。而して此點は先生の特に吾々學生に對して切望せらるゝ所である。先生は吾々に對し決して徴細な年號や事件や人物の無意味な諳誦を強られない。唯此等の歴史的要素の根源を貫流してをる人間の政治的生活の發展の徑路に留意せんことを望まれた。百科辭典や歴史の教科書によつては知るべからざる或大いなる人間生活の流れの痕を辿らしめるといふのが先生の政治史教授の大眼目であつた。「二月革命(一八四八年)だから七月革命(一八三〇年)よりも前にあつたといふやうなのは少々困るが年代なんか大體の見當さへついてをれば四五十年位間違つたつて一向差支ない」試驗前になると先生はよく吾々を誡められた。併し先生自身の講義はそれこそ學生の方で五月蠅いと思ふ位精細なものである。實に當時或學友の言つた如く先生によつて積込主義の我法科大學の講義が根柢から覆さるゝかの概さへあつた。

先生は囚れのない學者である。ドコ迄も自由研究を標榜して立てる學徒である。先生は歸朝早々吾々の爲に「現代政治的進化の概觀」として主に社會主義の過去及現在より各國における社會黨の情勢を詳述せられたかつて其名稱の不穩當に響くといふ點よりしてかの社會政策學會にさへ多少當局の壓迫が加へられたと傳へられてゐる無理解な現代の我社會にあつも兎も角帝國最高學府の講座に堂々社會主義の講義を開講せられた先生の意氣に對し吾々は坐ろ畏敬の念の自ら油然たるものあるを禁じ得ない。先生は自由の爲に職を辭せぬ人であつ感がある。細君に荒い言葉を指彈するに躊躇せられない。其故他日苟も自己の世話もすると云ふ様の精神的抑壓の感ぜらるゝことあらば必ずや先生は敢卑して居る。夫れかしき我法科大學政治史講座を遺棄せらるゝに相違ない。乃寂靜んでかしろ我學界の恥辱として斯の如き不祥事の發生せざらんことを禱め。此して止まぬ次第である。アメリカのイーリー教授は其著「佛獨社會主義」中に於て社會主義に關する多くの著述家の僻見を難じ「彼等は凡ての社會主義的思想に對するに最初から强烈な嫌惡の情を以てしてをる。其故彼等には單に此等の思想を理解するといふことさへ不可能なのだ」と言つてをるが過去乃至現在の我國に於て特に此感を强くせしめられるものがある。吾々は素より道途の所謂社會主義者乃至社會主義的思想に對しては時に官憲の適宜なる高壓手段を要求する。併し少くとも眞摯な學者の眞面目な研究に對してはドコ迄も寛大に宏量に此を過して貰ひ度い。社會主義を以て直に無政府主義なりと速斷する無理解な社會を相手に學者の努力も蓋し容易の業ではない。我吉野先生の如き實に此無智なる社會民衆の迷蒙を啓くと共に頑迷なる爲政者の猛省を促す最初の學者とも云ふべきである。

先生は又現在の我國に於ける固陋な法律論の跋扈を甚だしく慨してをられる。殊に意氣發溂たるべき學生の區々たる法律論の沒頭に少からず氣を落してをられるやうである。惟ふに我法科大學に於ける法律萬能は

見て劃一的たる現行試驗制度の罪である。吾々は歷史に親み政治書を播く前先づ過重なる民法商法の負擔に喘がなければならない。吾々法學生たるもの淺薄なる法律學に食傷して低調なる法律論に口角泡を飛すに到ること亦實に止むを得ざる次第である。此弊を避けんが爲めには法律、政治、經濟商科殊に法律政治兩科の間に截然たる區劃を設け少くとも政治科をして法律科目の負擔を輕減せしめ其補償として一層廣く一層自由に政治史政治學政治學史乃至は現代の政治を攻究せしむべきである。—

曾てマウリスペーリングの「ロシアの原動力」を讀んで其敎育の章に到つた時ロシア生活に於ける大學の地位を想ひ慊然としてノート生活に汲々たる我法科大學の慘目さを長嘆した。其中にはこんな一句があつた。「自由思想は常に學生間に勃興した。… 而して彼等が彼等の理想—政治的自由に對する彼等の要求—の旗を振ふことを止めず又常にあらゆる進步的な政治運動の中心であつたことは寔にロシア大學の光榮である」。

吾々は素より輕浮なる學生の政治運動に與し又淺薄なる學生の政治論を謳歌するものではない。唯其意氣を愛し其自由を熱望する者である。

此意味に於て吾々は吉野先生の如き人格と識見と學識とを兼備せられた新人を我法科大學の敎授として有することを非常に心强く思ふ。又先生によつて吾々靑年學生の政治的心眼開かれ何卒いて我法科大學の學制の上に一層大なる自由と一層偉い大なる新精神の輸入せられん事を衷心より希望して止まない。

終りに先生に對して一言を呈し度い。近時先生が政界に身を投ぜらるゝとの噂學生界に專らである。併し忌憚なく言へば自分は時機尚早の感がする。其は素より先生の政治的才能を疑ふ故ではない。唯現時の我政界は先生の如き高士を迎ふべく餘りに溷濁であり俗惡である。一木何ぞよく、厦の倒るゝを支へんや。

如何に先生の才能豈に識見高邁なるものあるも先生一人の力にては未だ我政界を動かすには足りない。先生の天職は議會に入つて實際政治にたづさはられるよりも局外に特立し不偏不黨の學者的態度を高持し以つて現代の政治を批判し社會民衆を政治的に敎養せらるゝことにあらうと考へられる。かくして徐々に而も大膽に腐敗せる政界の根源に嚴乎たる批評の大斧鉞を振はるゝ事先生に取つては素より、大にしては我日本の爲め殊に吾々後進の爲め翼望に堪へざる所である。

而して斯の如き地位に在るもの現在の日本に於て僅かに先生一人なるを思へば我微意の存する所只管先生の御明察に任ずる次第である。

大正五年五月廿日夜稿

▽吉野作造君に就いて

内ヶ崎　作三郎

法學博士吉野作造君は僕の二十數年來の親友である。中央公論が同君に就いて何か知る所を書けとの依賴をして來たが、書きたい事は山程あ

る。しかし〆切時日が迫つて來たので僅かに半時間の餘裕を以て斷片的の感想を公にする。

吉野君は宮城縣志田郡古川町の人で、家は商業に從事して來たが、父君は中々頭腦明晰の人で、甞て町長の職にあつたこともある。吉野君は古川小學校の秀才として、當時文學博士大槻文彦氏の校長たりし縣立一中に進み五年間首席にて通した。一中の吉野といへば仙臺の學生界に鳴り響いたものである。僕は當時第二高等中學校の補充科より經のぼりて改稱したる二高の文科二年生の頃より友人となりて往復したと記憶する。二高教授の土井晩翠君は僕等の先輩であつて大に後進を刺戟してくれた。同君が仙臺に歸るごとに僕等は同君を中心として會合したことも度々であつた。吉野君は文章家でしかも美文や歌も甘いので、多分國文學をやるのかと思はれてゐた。然るに二高の法科に入つたのは案外であつた。

僕が二高の文科三年の時に、同君は法科一年であつた。僕等が基督敎に接近したのは此時であつた。この事實は吉野君や僕などの生涯に於ては一大事件であつた。吉野君も僕も、また小山東助君の如きもいづれも仙臺の田舍の平民の子である。仙臺藩の士風は維新以前に於て餘り振はなかつたが、士族は矢張士族で、何等かの氣風があつた。しかるに仙臺の平民は東北の平民で、大藩の平民で、二重にのんきな所がある。仙臺藩内には曹洞宗が廣まつてゐるが、僕等が少年時代迄には何等の傳道をしてゐない。故に佛敎の感化もまづゼロといつてよい。かゝる社會的空氣の中より學者として頭角を出すことは容易なことでない。しかるに我等は幸にも基督敎と接近した。その感化と刺戟を受けた。基督敎にも宗派も多い、迷信的分子もないわけではない。しかれどもこれは世界の表面に綱を張り渡したる一種の精神的運動である。僕等は此運動に參じたるために、仙臺の田舍青年は次第に世界的思潮のたゞ中に進むに至つた

吉野君は蒲柳の質である。文部省でも留學を命ずる前に再三體格檢査をやつたのである。吉野君はまた大學時代より妻子の繋累があつた。今も猶多大の責任を有する人である。あの弱い體格であの活動をしてゐるとは二高時代の同窓は驚きの目をみはつてゐるのである。これは信仰の力である。吉野君は攝生家である。しかし自己の使命の自覺を促がしたる基督敎の刺戟は大なる力であらふ。

吉野君の政治論は進歩的、民本的な、大膽な所に異彩を放つてゐる。中學時代の國文志望者が世界の政局の批判家となつたのは一大奇蹟である。臆病な吶辯な僕が演説をする人間となつたともひとしく奇蹟である基督敎にもし奇蹟があるとすれば、吉野君の性格を一變したる所に見出さなければならぬ。吉野君も僕も基督敎思想の傳播のためには多少の努力をしてゐる。何のためである。恩返へしのために外ならぬのである。

吉野君が政治史を專門としたるは此役得のない科目は多くの法科大學の俊秀によりて輕視せられたからである。いはゞ割にあはない學問とみなされたのである。吉野君はそれを引き受けたのである。しかるに天なるかな、支那問題と歐洲大戰亂とは吉野君の專門の學をして最も必要なる科目たらしめ、吉野君は之によりて一躍して日本の指導者たるべき一人

となつたのである。打算的計畫のない處に眞の成功は來るものである。

日露戰爭の最中、旅順口が陷落せざる前、僕は君と共に衆議院の一室に於て一年志願兵の體格檢査を受けた。期せずして兩人共相前後して呼び出され、始終つれ立ちて檢査官の前に立つた。而して結果は君は瘦せ過ぎて、僕は肥え過ぎて共に不合格となつた。もし合格したりしならば僕等は二〇三高地に於て討死する光榮を有したのであるかもしれぬ。

いはゞ僕等は國難に殉じたるべき身の斷片である。吉野君がその弱そうな體軀を提げて論壇に活動するもせめて國恩に報ずると共に天地の化育に參じたいといふ信念の結果であらふ。吉野君には未來がある中央公論もあまり同君を酷使し過ぎぬやうに注意せられんことを瀧田君に希望せざるをえない。

▽政論家としての吉野作造

若宮卯之助

其の文章は到底これ一種の敎員文である。敎員文とは血の運ぐりの如何はしき鼻垂らし上がり即ち天下の英才を一堂に集めて古人の糟粕と今人の唾液とを分析しながら、諄々として廻りくどく說いて聽かすべき職業の人の筵の辭を指すので、其の文たる一の警語無く、一の提醒無く、一の省筆無く、言はんと欲する所は、他人の迷惑などには頓着せず、千言萬語、屋上屋を架して、自ら高く標置したかの如く、飽くまで屑唐で讀ませうとするものである。但し吉野博士には何の定見が無い。其の熱心と、精力と、併せて抱負とは、官吏製造の特殊學校たる赤門法科の先生としては無類に珍しいが、政論家としての彼の價値は、其の造詣より言ふも、其の年齢よりも觀るも寧ろ未來に在るべきである。

彼の識見は未だ徹底の域に達して居ない。彼の物を觀る。直ちに其の根元に看到して、端的に之を把持するは尙ほ其の能くせざる所のやうに思ふ。試みに一例を擧げる。彼は曾て貴族敎育を論じた。其の論は二十番地を搜がして十九番地に到つたやうなもので、其の方向に誤りは無いが、惜しい所で正鵠を逸して居る。

其の論の要旨は彼の語で言へば斯うである。『社會的に又歷史的に國民の尊敬を受くる、即ち歷史的社會的の權威を有する門閥の子弟が、更に敎育の力によつて實際世の尊敬を受くるに足るだけの才識と品格とを備ふることになれば、彼等の社會に於ける精神的指導の效果は極めて深甚にして社會の治りは理想的につく。』

此の要旨を中心として敎員文を馳た彼の說明は大體に要領を失うて居ない。唯だ其の根元に看到して端的に之を把持せざるだけが病である。

我輩の意見に據れば、貴族敎育と貴族外の敎育との根本の區別は已に食へる人の敎育と將に食はんとする人の敎育との區別である。赤門は一種の餓鬼道である。衣食を求めて煩悶する一種の生物が、うよ〳〵しながら滿腹を得べく蠕動して居る巢窟である。此の點に於て日本の敎育は初等と高等とを問はず、一種の職業敎育であるを要するが如く、學校に

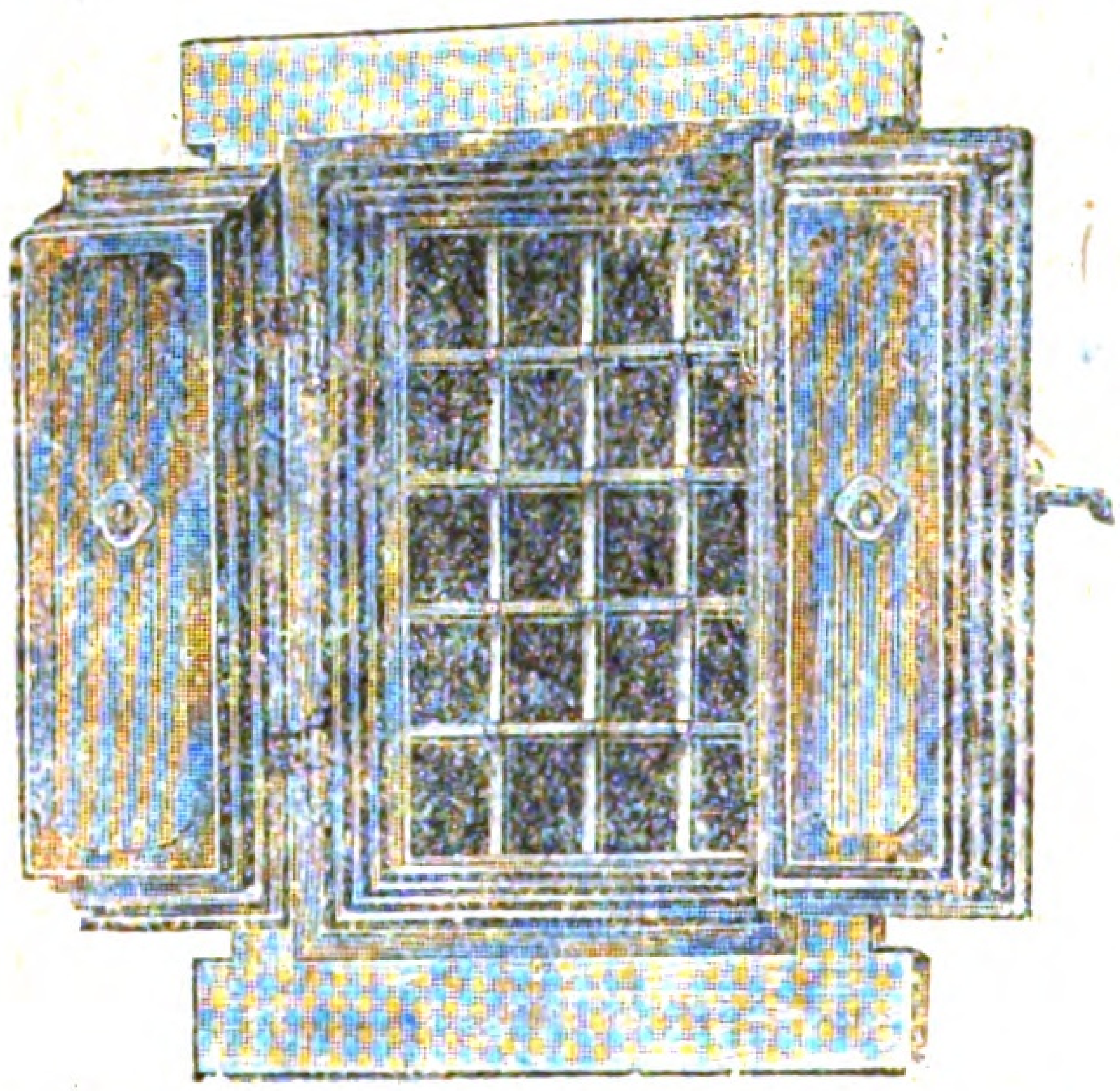
して卒業生買り込みの桂庵業に成功せざるものは存在の權利を失うたものである。

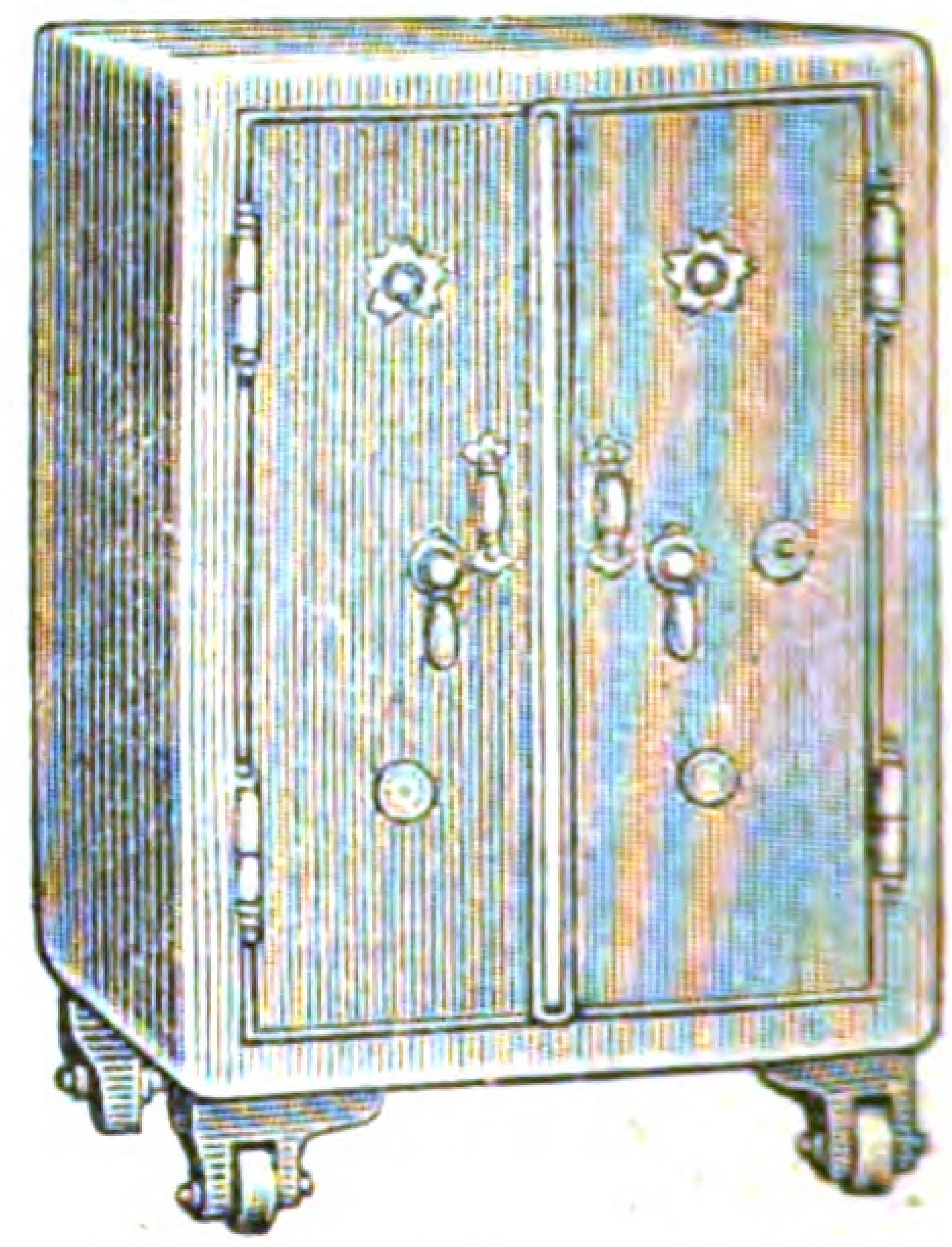
貴族は大體に於て、此の餓鬼道的煩悶教育の呪から免れて居る。貴族の教育は職業的であるを要せざる所に、其の特殊の面目もあれば、存在の權利もある。職業的、餓鬼道的教育は、一先づ人に使はれる者を養成するに在れば自ら一藝的となり、一能的となり、部分的となつて、全體より、大局より物を觀るの視點を得難きに至らしむる虞がある。貴族には此の心配が無くて、却て他の大いなる責任がある。貴族が自然に人の上に立つて大局より物を觀るの地位に置かれて居るとすれば、其の地位に居るに耐えるだけの品格と見識とを養ふの責任を有するは無論である若し貴族にして此の責任を解せざるときは、之貴族で無くて卑族である要するに一般人の教育は職業の色彩を強くすべく、貴族の教育は責任の意義を深くすべく、所謂學習院廢止論の如きは、我儕の見地より觀れば一種の春の淡雪に過ぎ無い。今日の貴族教育の弊害は、恐くは貴族に貧民教育を施した所より來たのであらう。

政論家としての彼の學問は、未だ政論家として傑出するに足るだけの廣さを有して居ないと思ふが、最も善く此の點を立證するものは彼の憲政論であらう乎。彼は貴族人と非貴族人との一般運命の差別から貴族教育の論歩を進めずに、直ちに貴族に即して貴族の教育を論證しやうとし正論を外れたと同樣に、直ちに憲政に依つて憲政を説明しやうとして、其の根元を正觀し得ざるものが彼の憲政論である。彼は其の憲政論の序言に於て、之を赤裸々に圏點附で曝露して曰く、『憲政のよく行はるゝと否とは、一つには制度並びに其の運用の問題であるが、一つには又實に國民一般の智德の問題である。』其の所謂制度と運用との問題は、彼がお手の物として、姑く之を尊敬もすれば、且つ我儕當面の問題に無關係でもあるが、彼が假定せる他の一條件國民智德の問題は、明かに彼がお里を顯したもの、即ち社會現象を全體として觀察するに足るだけの學問の用意の缺けて居ることを示すものである。更に露骨に言へば、彼は現代政治史に枝をさかせたらしき彼の智識を以て複雜なる社會現象を無造作に説明せんとするが如き危險なる傾向の所有者である。

我輩は曾て立憲政治と實業の發達との關係を略論したことがあるが、立憲政治は教育ある人の從事すべき職業が、政府の事務以外に於て政府の事務の如く繁昌するに至るまでは決して無難に行れ得るもので無いと云ふのが、其の論定であつた。此の論定を此に詳論するは餘白の許さぬ所であるが、教育ある人の職業が政權爭奪以外に何等の機會を有せざる時代及び社會に於て、憲政の發達すべき理由が無い。論より證據憲政の發達は產業と共に發達して居るのである。――余は彼と共に憲政を論じやうとするのでは無く、憲政は彼が手輕い想像よりも以上に政治以外の他の複雜なる事情に因つて、盛衰するものであることを指摘して、彼の學問見識が此點に於て尚ほ多少の不足あることを警戒するだけである。彼は未來ある論客、成品として之を評するは恐くは酷である。實つた柿は大きくなれるだけなつた後にも、熟して味を持つまでに時間を要すると謂つて尚ほ彼に青い所があると云ふのでは無い。謹むで赤門の一異彩たる彼の健在と發展とを祈る。

ベント式金庫と防火扉





此ベント式金庫は和洋金庫の長短を取捨し創製せるものにて庫體は長大なる厚き鋼鐵板に強壓力を有する機械を以て壓搾屈撓し包圍形となしたるものなれば防火、防盗、優美、耐久の四要點を最も完全具備せしめたる眞に理想的金庫なり

東京市京橋區松屋町

佐倉金庫店

電話京橋二三三二番

型錄贈呈

弊店製倉庫用防火扉は各建築家に歡迎せられ追年需要を激增し數萬個の多數に達す市內は勿論各地方に取付あり最近御用命を蒙りたる最も著名なる二三を擧ぐれば

●東京市水道部 ●早川邸 ●愛國生命保險
●豐國銀行 ●川崎銀行 ●八十四銀行
●島津侯爵邸 ●古河男爵邸 ●横濱生命保險
●日本勸業銀行 ●德川侯爵邸 ●細川侯爵邸

(中付四の一)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

六月號の內容

早稻田文學

■僕のページ（感想）……島村抱月

■大阪劇壇の現在……國枝史郎

■ポウル・ベルレエン……三富火の鳥

■懷鄉の心……小形青村

■カアペンタアの使命……エリス夫人

■眞理の愛慕……西宮藤朝

■孤獨の底から（感想）……相馬御風

■無明（小說）……三上於菟吉

■昔譚（小說）……山本勇夫

■明日（小說）……ザイチェフ

■詩歌（兒玉花外、中川一政、渡邊吉治、中山雅吉、石川貴堂）

◀附錄▶ エヂポス王（希臘悲劇） ソホクレス作 中村吉藏譯

●風の中（俳句）……井泉水選

最近思潮欄

■戰爭と佛國美術家
■オイケンの時局觀
■人間の問題としての猿の研究
■哲學者キュルペ逝く
■我が哲學界の新傾向
■ソログープと近代劇
■綠春の展覽會
■英語教師と修身教師
■五月の小說と評論
■菊五郎の銅像

六月號 定價二十八錢 郵稅一錢五厘 ■ 東京神田表神保町 振替東京二七〇番 合資會社 東京堂

（中付四の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



黄い小さな花

田山花袋

一

産褥にゐるお蔦は、傍に小さな呼吸をしてすやすやと寐てゐる赤兒の方ををりをり見た。夏の近づいて來たのを思はせるやうな蒸々した日で、田舍の畠の麥の穗の上を渡つて來る風が、軒に下つてゐる風鈴を靜かに鳴した。

赤兒の最初の泣聲を耳にした時、「まアこれでやつと身二つになつた！」かう思つてお蔦はホッと呼吸を吐いて安心したが、がつかりしたと見えて、それからは他でもあやしむほど毎日寐てばかり過した。母家から粥などを拵へて運んで來て呉れる婆さんは、いつも髮を無造作に束ねたまゝ向ふむきになつて寐てゐるお蔦の姿を見た。

「よく、寐られやすな。……でも、休める方が好いだよ。唯な、赤兒は抱いて

寢ないやうにする方が好いだな。乳で押すとわりいでな」
から言つて、傍に敷いてある小さい床をのぞいて見て、「お、起きてる、起きてる。大きな目を明いてゐるがな。可愛いもんだな」
「さう？　起きてゐて？」
お蔦は身を起して傍に寄つて來たが、その小さい瞳がまじまじと何處を見るでもなくあたりを見廻してゐるのを見ると、今までに經驗したことのない愛情が漲るやうに胸に押寄せて來た。
「見えるのかしら？　もう？」
「まだ、見えやしねえよ。お宮參りにでもならなけりやな……。けどもな、今時の子は、智慧が早いでな。昔の子は十日位は碌々眼も明かなかつたもんだかな」から言つたが、猶ほ深く赤兒に見入つて、「髮の濃い子ぢやな、お前さんに似たと見えて」
「さうね」
赤兒を抱いて、その小さな顏を胸に押當てゝ乳房を含ませると、お蔦はこの廣い世の中に始めてしつかりとある物を攫んだやうな氣がした。と、忽ちお蔦の心の周圍には、種々なことが颶風のやうに簇つて集つて來た。お蔦は大勢の男を相手にして心にもない暢氣なことを言つてゐる自分を見た。明るい灯の下で綺麗な着物を着て面白さうにはしやいで騷いでゐる自分を見た。酒、餉臺、狹い室、色彩の濃い色紙形の繪を張つた枕屏風、廊下から厠へ行くところにある手水鉢……から いふものが見えるかと思ふと、今度は姉の嫁いだ先の床屋の義兄の心配さうな顏、姉の焦々と落附かない顏、床屋の職人のいや

にじろじろと此方を見る顔、酒に酔つた父親の尖つた聲、さういふものが思ふまいとしても矢張離れずにお蔦の頭に絡み着いて來た。

ある狹斜の方へ行く大通に面した床屋の店、大きな鏡、それに映るいろいろな客の顔、その奥に六疊と四疊半の二間があつて、長火鉢はその六疊に置いてあつたが、その奥の薄暗い四疊半で、お蔦は日蔭者のやうにして四月五月を過した。お蔦にはお座敷に出る時分の美しさはもう見たくも見られなかつた。一日おきに結つた髮も滅多には結はず、顔の色もわるく、肌の皮膚も荒み果てゝゐた。「藝者をして、ゝそんな馬鹿な話があるもんかね。誰の子だかわからないなんて……。本當にあれのお人好しにも困るぢやないか。たとへその人の子だか何だかわからないからと言つて、旨くそれに押附けて了ふのが藝者の手ぢやないか」こんな風に言ふ姉の言葉がわるくお蔦の神經を刺戟した。「ぢや、その人に、電話をかけて御覧な」ある時には、姉からかう齒がゆいやうに言はれるので、近所の電話を借りて、それと思ふ人のゐる會社に電話をかけて見た。一度は其人が出て來て、「いづれ、近い中に行つて見るよ」などゝ言つてゐたが、それと知れてからは、もう何遍電話をかけても其人はそこへ出て來なかつた。しかし此方からもそれ以上厚かましく出て行く材料もお蔦にはなかつた。お蔦は其人には五六度しか逢つてゐなかつた。

抱へられた姐さんの家に行つて初めて其話をしたのは、秋風のそろそろ寒くなつて來る頃であつたが、姐さんも姐さんの父母も、始めはそれを信用せずに、旨いことを言つて借金を踏むつもりか何かのやうに思つて、「兎に角、私の方ぢやそれぢや困るんだから、お寶さへ積んで貰へば、それで好いんだから。

稼業なんだから……。それも、此方(こつち)でつけた旦那か何かなら、それは話は別だけれど」などと母親は言つた。姐さんは姐さんで『まア、お前さん、誰れだかわからないのかえ？　だから、姐さんが不斷から言つてるぢやないか。何でもお馴染が出來るやうにしなけりやいけないツて？　あれほど言つてゐたんだもの」かう言つて凝とお蔦の顏を見た。

何處に行つても立瀨がないやうな恥しい辛い月日をお蔦は送つた。父母は神田あたりで、しがない貧しい暮しをしてゐたが、そこに行けば父親は頭から怒鳴りつけるし、寄席(よせ)の方へ出てゐる兄の方へ行けば、「困つたもんだな。百二十兩、そんな金はとても出來るもんか』と言つて、ぷんぷんしてゐるし、義兄は義兄で、思ひやりが深いだけに何も口喧しくは言はないけれど、屈托さうに、腕組みなどをして深く考へ込んでゐた。田舍から出て來て、一昨年お蔦が其處に抱へられる時、義兄と兄と、この二人が保證人になつて、公正にまでしてあるので、向ふの出方に由つては、明日にも執達吏が來て、ありもしない床屋の家財を封印して行つて了ふかもわからなかつた。

お蔦が蒼白い顏をして寐たり起きたりしてゐる間、それに就いての話は一日として人々の間に繰返されぬことはなかつた。『でも、先での言ひやうにも人情がねえな。たとへ、向ふでつけた旦那でないにしても、一昨年から、ずつとかせがせて、不見轉をさんざさせて、それで今日(こんにち)使へないから、金を返せはちとひどすぎる。身二つになるまで待つのが人情だ」などとある人は店に來て言つた。で義兄と兄とは其事で抱主の方へ懸け合ひに行つたりした。ある日は、懸けのたまつてゐる呉服屋の番頭がやつて來て、店であぶなく見附からうとしてお蔦は慌てゝ奥に隱れた。

二

花の咲く時分、この田舍に來てお蔦は始めてほつと呼吸がつけたやうな氣がした。仕方がなければお蔦は床屋の奧の四疊半で身二つになるつもりで覺悟してゐたが、急に汽車で此處に來ることになつた。母親のかねて知つてゐる懇意な家で、田舍ではかなりに暮してゐる百姓だが、これからは養蠶で忙しいが、何も構はなくつても好ければといふ話であつた。で、去年まで亡くなつた爺さんの隱居所になつてゐたといふ離れの六疊の一間にお蔦は朝夕起臥した。

お蔦は滅多に外へは出なかつたけれど、それでも何うかすると、家から畠道を眞直に向ふの方へ行つて見ることもないではなかつた。野は靑々として、畠からは、雲雀が好い聲をして絕えず空に囀つてのぼつてゐた。畔道に繁つた朝の草の露、その向ふには、靑い眞菰や水草の生えた小川があつて、メダカや水馬が靜かに日の照る水の上を泳いでゐた。野には田を起す大きな鋤の齒が日に光つて、其處此處にせつせと働いてゐる百姓は、丸で操人形か何かのやうに見えた。

夜は蛙の聲が湧くやうにきこえた。

田舍の人達の生活は、お蔦の眼には不思議にめづらしく映つて見えた。自分の通つて來た都會の生活、明るい灯、表面は賑やかで明くつても、裏面は暗い辛い生活、さういふ生活をお蔦はをりをりこの田舍の暢氣な生活に比べて見た。白い手拭を被つて、大きなざるをかゝえて、桑の葉をせつせと摘んでゐる女達の姿は、お蔦のゐる室の緣側から常に見えた。お蔦は懷姙する前後に逢つた男をあれかこれかと考へたりして日を暮した。

電話をかけた會社の男、それにもさういふことが想像されたが、それよりも、もつと深く觸れて思ひ出されるのは、奥の待合で逢つた三十二三のおとなしい色の白い何處かの學校の先生であつた。その男には、お蔦は三度しか逢つてゐなかつた。お蔦はそれからそれへと想像した。一番後で逢つた夜は、その友達だといふ色の淺黄い長唄などの出來る客と一緒であつた。その夜は賑やかに騷いで、自分も三味線を彈いてうかれた。『さうだ。さうかも知れない。……しかしあの人には、奥さんも子供もあつた筈だ』かう思ふと、お蔦は辛いさびしい心持を體中に覺えた。

子供が產れる時分には、その男の影は一層濃く深くなつて行つてゐた。何うしても、それに違ひないやうに思はれることなどもあつた。『しかし、子供さへ生れて見れば、さういふことは皆なわかつて行くんだから……。』こんなことをもお蔦は考へた。鬚のある、やさしい眼をした、笑ふ時にちよつと癖のある表情をする顏、その顏をお蔦は幾晩も續けて夢に見た。

母親が來て、抱主の方の話が雜かしくつて、事に寄ると執達吏を向けられるかも知れないと知らせて行つてから、間もなくお蔦の子は生れた。もう其時分は、田舍では養蠶が始まつたので、母家の人達も元ほどちやほや構つて呉れる暇はなかつた。が、それでも產氣がついて呼びにやると、年を取つた田舍の產婆がやつて來て、『氣を落附けなければいけない』などと言つて親切に世話をして暮れた。苦しいいきみの疼痛、次第に募つて來る苦悶、總身にあふれ出して來る汗、それが夜の十時頃から明日の黎明まで續いた。

『男の兒、男の兒ですよ』

から産婆は聲を張上げて言つた。

夥しい疲勞の中でも、お蔦はその生れた兒の顏立を仔細に見ることを忘れなかつた。眉、額、輪廓、似てると思へば似てるが、似てゐないと思へば似てゐない。鼻などは確かにさうらしいとは思はれたが、

それが果してさうであるか否かは、もう今一度其男を眼のあたり見て、そしてよく比べて見なければはつきりしたことは言はれないやうな氣がした。お蔦は味氣ない辛い一種の悲哀を覺えた。

男の兒と言ふことも、頼りになつて嬉しいとは思ふが、母親や姉や兄などの期待は違つてゐることをすぐお蔦は思つた。「なアに、女の兒なら、貰手だッてあるし、人にやらずに育てたッて好いから」かういふ言葉の中には、もし女の兒であつたら、矢張、自分と同じやうな運命を持たなければならないといふことを意味してゐた。男だから、その心配はない。しかし、將來、自分は何うしてこの兒を育て丶行くだらう。自分の力では、育て丶行くことが出來るだらうか。かう思つたお蔦は子供を持つてゐる姐さん達のことをあれやこれやと繰返して見た。ある姐さんは大きな男の兒を中學校へ通はせて置いた。ある姐さんは、その兒をある家庭にやつたがために、今では親子の名乘も出來ないと言つて、「決して他所になぞやるもんぢやない。何んなに苦勞しても好いから、自分で育てるのに限りますよ」などと言つてゐた。それは、それに越したことはないのにきまつてゐる。しかし、そんなことが出來るだらうか、私の身で——身二つになりさへすれば、その子はやるなり呉れるなりして、再びもとの生活に戻つて、棲を取つたり三味線を彈いたりしなければならない身で、そんなことが出來るだらうか。かう思つてお蔦は溜息をついた。

しかし時には、その學校の先生とその男の兒とを一緒にして考へて、「私が——私が捗ぎさへすれば、さういふよだつて出來ないことはない。これから二三年辛棒する氣なら」こんなことをお蔦は思つた。しかしすぐその男に細君があり子供があるといふことが胸につかえて來た。「もう思ふまい、思ふまい、なるやうにしきやならないんだから」お蔦は行詰ると、いつもかう思つて、赤兒の方に脊を向けて寐た。

母家の方からは、男の兒が産れたと聞いて、主人だの上さんだの子供だのが代る代る見に來た。

「まア、可愛い子！」

「東京の人の子は、まつさか違ふはなア。髮の濃いこと、色の白いこと！」

「まア、あんなにして、若い母さんにくつついて乳を飮んでゐるがや」

などと人々は言つた。七歳位になる末の女の兒は、あとに子供がないので、めづらしがつて、度々やつて來て、好ましさうに、小さい床を覗いては見て行つた。

「大きくなつたら、負せてね、ね」

などと言つた。お蔦が睡眠から覺めると、その女の兒がいつか其處に來て、小さい床の傍に坐つてゐた。吃驚して、

「いぢつちや、いけないのよ」

「あ」

「まだ、小さいんだからね。眼もまだ見えないんだからね。大きくなつたらね、負ぶさせて上げるから

ね」

「あ、大きくなつたらね」

おとなしくしてはゐるけれど、ひよつとかして、目に指でも入れやしないか、顔に傷でもつけやしないかとお蔦には心配された。お蔦は起きて、抱いて、そして乳などを飲ませた。

「あ、乳を飲んでる！」

女の兒は莞爾しながら、その傍に寄つて、めづらしさうにしてそれを見てゐた。

三

ある日、赤兒は此方に顔を見せて、靜かに眠つてゐた。小さい呼吸をしてゐるのが刻むやうにはつきりと靜かな一間の中にきこえてゐた。

お蔦も其方を向いて寢てゐた。

外では、遠くで學校から歸つて來る子供達の聲が聞えた。近頃にめづらしいほど風のない穩かな日で、綠葉が窓を明るくするやうに青く鮮かに光つて輝いた。さつき緣側に出た時には、裏の桑畝に赤い襷を十文字に綾取つた若い娘や、白い手拭を頭の上に載せた上さんや、男や子供が混雜と一緒になつて、せつせと桑の葉を摘んでゐたが、その賑やかな忙しさうなさまをちよつと見て、それから室に戻つて、お蔦は一眠りした。

ふとお蔦は目覺めた。

見るともなく赤兒の方を見たお蔦は、默つて考へるやうな顔をした。此頃段々男の顔が赤兒の顔の中

にはつきりと現はれて來るやうなのを感じてゐたお蔦は、その瞬間に、夥しく似てゐる眼と鼻とを認めた。

「さうに違ひない」

かう思つてお蔦は猶じつとその小さい寐顔に見入つた。

それからそれへと種々なことは思ひ出されて來た。それにしても、男は何處にゐるのであらうか。何處に住んでゐるのであらうか。それはきけばわかる。あの友達と言ふのが、よく來る人だから、あの人から段々聞き正して見れば、わかる。あの姐さんに訊いて見てもわかる。しかし、家はそれほど有福であるとは何うしても思はれない。月給なんかでも、澤山に取つてゐる人ではないに相違ない。でも構はない。東京に歸れる身になつたら、何うしても一度逢つて其話をしなければならない。この兒を一生親無し子にして置くことなどは出來ない。と、つゞいて、電話をかけた會社の男のことが思ひ出された。矢張、それと聞いたら、向ふから遁げかくれて了ふかも知れなかつた。無心を言はれると思つて、此方の言ふことなどは本當にしないかもわからなかつた。そして、さういふ向ふの處置だつて、單に薄情だとは言ひ切つて了ふことの出來ないやうな處があつた。急に、お蔦は藝者稼業といふことを考へた。『誰がわるいんでもない。皆な私がわるいんだ』かうは思つたが、別に悲しいと言ふ氣も起らなければ、さういふ稼業はやめて了ふ氣にもなれなかつた。お蔦は唯すやすやと寐てゐる赤兒の顏にに見入つた。

あたりは依然として靜かであつた。枕元には、義兄の許からとゞけてよこした赤い白い飴だの、カルルス煎餅だのが置いてあつた。お蔦は起上つて、蒲團の上に座つて、鑵から煎餅の方を出して、一二

枚白い前歯に當てゝ食つたが、さつき婆やが持つて來て呉れた冷えた茶を一杯茶椀についで飮んで、今度は傍にある鏡を取つて、自分の顔を映して見た。

やつれた蒼白い顔と、取次のない寐衣姿と、眼の縁のわるく黒くなつたのとをお蔦は見た。無造作のに束ねた髮、肉のこけた痩せた頬——しかし身二つになつた今のお蔦には、以前のやうな暗い辛い苦勞や煩悶はいくらか輕くなつてゐた。お蔦は櫛で後れ毛を梳き上げた。

やがて、赤兒が眼を覺して泣き出したので、お蔦は立つて抱いて來て、それを半ひろげた白い肌へと押當てゝ乳をふくませた。かうしてゐる中にも男の顔は次第に歴々とその子の顔の中に現はれて來るのであつた。

四

母親はそれでも度々遣つて來て呉れた。種々な苦勞で娘の姿の著しく衰へて行つたことが母親にもよくわかつてゐるけれども、さりとて今度のことで娘の身の上に重つて行つた負擔の一伍十什を話さないわけには行かなかつた。義兄は抱主から迫られて、殆ど執達吏を向けられるばかりになつて、方々無理算段をして漸く金を借り集めた。姉はあるかないかの着物までも質に置いた。兄はある人から質のわるい金を工面した。「あまり心配させてはと思つて、詳しく話さなかつたけれど」かう前置して、母親は抱主の無慈悲であつたことなどを詳しく話した。

「少し肥立つたら、一日も早く稼ぐやうにして貰はなくつては！」

母親はかう言つて、今度出るところをあれかこれかとお蔦に相談した。母親の眼中には生れた兒のこ

となどは少しもなく、百日も經つたら、何處か好い貰手をさがしてそのまゝ親知らずでやつて了はうと思つてゐた。「その方にだツて、お前、一文もつけずに貰つて呉れるものなぞありやしないからね。そのお金だツて拵へなけりやならないんだからね」などと母親はお蔦に言つた。

半金持つて行つた時、抱主の方から平生着とちよツとした着更だけは持つて來たが、新たに稼業をしやうとするにも、あとをすつかり綺麗にして、お座敷着を持つて來なければ何うすることも出來なかつた。「さうかと言つて、執達吏まで向けて來るやうな抱主に此方から折れて行つたつてしやうがないからね。それは先では、肥立つたら、また來て貰へば好い位に思つてゐるんだけどもね。それぢや餘り蟲が好すぎるし、此方だツても詰らないからね」

漸く二七夜を濟ました頃から、辛い行先の生活のことは、またお蔦の胸に暗い影を投げて行つた。身二つになつた喜悦も、ほんに僅の間であつた。お蔦は乳を含ませながら、「お前さんなんか、生れて來なけりや好かつたのに……何故生れて來たんだえ？」ひとりかう言つて涙を流した。

種々に想像したことなどは、とても遂げ難い希望であつた。お蔦は生兒の父親のことに就いては、母親にも誰にも口に出しては言はなかつたけれど、折角確かりと攫んだ物をそのまゝ手離して了つて、再びもとの生活に入つて行くことの頼りなさを染々辛く感ぜずにはゐられなかつた。親と言はれ子と言はれて、樂しく暮して行く人達のことを思ふと、お蔦は體中が震へるやうな悲哀を覺えた。

しかし靜かな田舍は、何事もなくて一日一日と經つて行つた。養蠶は今が忙しい最中で、家の人達は夜も眠らずに桑の葉を切つたり蠶兒の生長を見たりした。母家の蠶室には、深更まで明るくランプの光

が輝いて見えた。

　時には水霜の下りるやうな寒い朝などもあつた。さういふ時には、人達は寒暖計を室内に置いて、火を盛に起して、室内の溫度の平均を取るやうにした。其處でも此處でも、養蠶の話で持ち切つてゐた。さつきの赤い花が庭石の間に燃えるやうに咲いてゐた。

　お蔦は丸で離れ島にでもゐるやうにして、忙しい世間とは全く離れて、寐たり起きたりして暮した。其頃では、婆やの手も煩はさずに、お蔦は赤兒のおしめを井戸端に持つて行つて洗つた。赤兒の啼聲も段々物々しくなつて、乳を吸ふ力も強くなつたが、物思をした故か、その頃からお蔦の乳は分量が段々少くなつて來てゐた。「乳が出ねえいと見えるね。ミルク罎でも買つて來てやらねえぢや、これぢや赤坊が可哀想だせ」婆やは、お蔦の乳を自分で絞つて見て、「これぢやとても足りつこはねえ。何うして、こんなに出なくなつたかなア。元はあんなにむせつ返るほど出たつけがな……。何か心配ごとでもしたけえ。產婦にや心配ごとは大毒だ。すぐ、乳へ來るからな」

　婆やは若い母親の慣れないのを氣の毒がつて、忙しい間をぬすんで、一里ほどある町へミルクの罐とミルクの罎とを買ひに行つてやつた。そして、歸つて來てから、ミルクの溶き方などを丁寧にお蔦に敎へた。

五

　一夜、母屋では、總領の嫁の二十五になる女と婆やと近所から手傳ひに來てゐる中年の男とが、丁度不寐番で、ランプをところところにつけて、頻りに蠶室の桑の加減を見てゐた。「婆や共方の方は好いか

え？　もうやらなくてはならない頃だらう」かう嫁は婆やに言つた。

明日の朝までの桑は、暗くならない中に摘んで來て、廣い臺所に一杯に積まれてあつた。座敷中に隙間なく並べた籠の中の蠶兒は、もう大きくなつて、その桑を食ふ音は、靜かな夜の空氣の中に音を立てゝ聞えてゐた。

不寐番だと言つても、連日連夜の勞働に勞れてゐるので、一時から先は、皆なして代り合つて寢ることにした。『三時になつたら、起して呉れや』中年の男は、かう言つてすぐ傍の蚊帳の中に入つて行つた。「婆や、ねるがいゝや』『まア、若お上さん、おやすみや。俺ら眠くねえから」かう互に讓つてゐたが、昨夜も遲くて起きてゐたので、『ぢや、ちよつくら寐るかな」かう言つて、婆やは自分の寐床に行つた。

とろとろしたと思ふと、女の泣聲が耳に入つて、婆やは驚いて飛び起きた。すぐ、蚊帳を出て行つて、

「何うしたや？」

「大變だよ、婆や。赤坊が死んだと」

かう嫁が言ふので、氣がついて見ると、其處に、蒼白い昂奮した顏をしたお蔦が跣足(はだし)で泣きながら立つてゐた。

「何うしてな？」

「今、目が覺めて見ると、冷めたくなつて……冷たく……」

泣聲に支へられて、お蔦の言葉は十分に聞き取れなかつた。

「お前さん、抱寐したんかや？」

「…………」

「困つたことが出來たな」かう言つたが、婆やと嫁とは急いでお蔦について、隱居所の方へと行つた。

「私が……私が……私が……」お蔦は泣き止まない。

隱居所の雨戸は一枚明けてあつて、其處から薄暗くランプのついてゐるのが見えた。婆やを一番先につゞいて嫁が入つて行つたが、欷歔げてゐるお蔦は、そのまゝ雨戸に顔を伏せて、中に入らうとはしなかつた。

婆やと嫁とは、中で、何か頻りに言つてゐたが、つゞいて、「これは、もう駄目だ。冷めたくなつてるア。」かういふ婆やの聲がきこえた。雨戸に顔を伏せたお蔦は、又一しきり聲を立てゝ泣き出した。

「乳伏せたんべ」

「さうかねえ、まア、可哀相に……」

「若い者はな。だから困るだ……」かう言つたが、婆やはお蔦の泣いてゐる傍に行つて、

「宵から抱寐したかんね」

「…………」

堪らないと言ふやうに、身も體も置きどころがないといふやうに、お蔦は唯泣いて欷歔げた。お蔦は宵の中は離して寢かして置いたが、夜中に一度起きて乳を呑ませて、この可愛い子にもやがて離れなければならないなどと思ひながら、しつかり胸に押當てゝ抱いて寐た。

「兎に角、お醫者を呼んで來なくつちやなんねえ」かう言ひながら婆やは母屋の方へ驅けて行つた。

しかし醫師は容易にやつて來なかつた。中年の男は二度も三度も町まで迎ひに行つた。漸くやつて來た時には、もう夜がほのかに明けかけて、綠葉の梢に白い霧がしつとりと重くかゝつてゐた。

其間お蔦は唯打伏して泣いてゐた。お蔦の眼は赤く腫れ上つて、寐衣の袖は涙にぬれそぼちてゐた。亂れた髮や扮裝（みなり）をお蔦は直さうともしなかつた。一時に興奮した悲哀は今は去つて、喪心したやうな心の狀態がそのあとを領した。

　醫師は二言三語聞いてから、

「フム、何うも仕方がありませんな。もう三時間、もつと以上も經つてゐるでせうから、手當てをして見ても駄目です。何うも過失（あやまち）をするから仕方がありません」

　かう言ひながら、お蔦が取亂したさまで其處に坐つてゐるのをじろじろと見て、

「この方（かた）ですな」

「え、若いもんだから……」

　かう傍から婆やが言つた。

「どうも、仕方がありません。若い中には、よくかう言ふ過失（あやまち）があるものですから、――此間も町で二つほどありました。……」卷煙草に火をつけて、「本當だと、やかましいんですけど……。なアに、別に何んといふことはないんだから、あとで、戶籍を書いて持たせておよこしなさい。診斷書は書いて上げますから」

「難有う御座りやす」
婆やはやつと安心したやうに頭を下げた。
醫師が歸つて行つてから、母屋の主人だの上さんだの總領の息子だのがやつて來て、型のやうな悔みの言葉を繰返してお蔦に言つた。お蔦はをりをり胸が迫つて來るやうにして袖を顔に押當てた。
陰では、人達は、「でも、まア、何うせ不運に生れた子なんだから、いつそかうなつた方が好かつたかも知れない」などと言つた。「矢張、藝者なんかしてた女は、しまりがないから、こんなことを仕出かすだ」自業自得だと言ふやうな言ひ方を中年の男はした。
電報で吃驚して飛んで來た母親の姿を見た時には、お蔦の涙は更に新しく白い頰を傳つて流れた。「母さんや兄さんや姉さんに種々心配をかけた揚句に、こんなになつたと思ふと……母さん、申譯がない」からお蔦は泣崩折れた。
「まア、まア、ね、あんな丈夫だつた兒が、こんなになつちやつたかねえ。……まア、可哀相に……」
母親は死んだ兒の顔にかけた布をまくつて見て、「何んなに苦勞したつて、よしんば人にやつたつて、生きてゐさへすれば、お前の子だつたのにねえ。殘念なことをしたねえ」かう言つた母親の眼からも涙が流れた。「母さん、もう……もう……」
お蔦はあとの言葉を言ふことが出來なかつた。
母親は母屋に行つて、いろいろ世話になつた禮を言つたり、夜中に人騷せをした詫びを述べたりした。
しかし母屋では、養蠶に忙殺されて、さうした小さい悲劇などは、すぐ念頭から去つて了つてゐるやうに

見えた。嫁も婆やも總領の息子も、朝の桑を摘みに畠の方へ揃つて出懸けるところであつた。主人は母親に型のやうな悔みの言葉を述べ終るとすぐ、『お寺の桑を買うやうに言つて來いや、高くつたつて仕方がねえ。食はせずには置けねえから。な、早く行つて來う』其處にゐた中年の男にかう吩咐けて立上つた。

次ぎの汽車で義兄もやつて來た。で、いろいろ相談の結果、東京に持つて行つても仕方がないから、手輕く田舍の寺で葬式をすますことにした。それでも母親は、可哀相だと言つて、一晩とめて通夜をしてやることにして、おゆづりを縫つたり、白い團子を買つて來て上げたりした。線香の烟の下で、寺からよこした若い僧は、一間時ほど讀經をして行つた。

お蔦はセルの着物を着て、腹合はせの帶をしめて、髮をぐるぐる卷にしてゐたが、それでも一度稼業をしたあかぬけのした姿は、何となく艶にあたりに見えた。お蔦は段々落附いて來てゐた。小さな遺骸を棺の中に入れる時には、あれも入れてやらう、これも入れてやらうと言つて、小さな枕や、赤い襁褓や、ミルクの罎などを取出した。薄い緣だと言ふことが染々と胸にくり返へされた。いろいろに想像した希望、東京に歸つたら是非一度逢つて其話をしやうと思つた男、その男にもう一生逢ふやうなこともないであらう。死んだ兒に緣の薄かつたのと同じやうに、矢張その男にも緣が薄かつた。かう思ふと長い間苦勞した心配や、苦痛や、さういふものはすつかり水の泡か何かのやうに溶けて消えてなくなつて了つてゐるのをお蔦は見た。『今度生れて來る時には、こんなところでなく好いところに生れてお出でよ』遺骸を棺を涙に入れながらかう母親の言つた時には、お蔦はまた涙を流した。

通夜の一夜は靜かに過ぎた。赤兒に添乳をしながら、毎晩聞いた蛙の聲は、矢張同じやうに綠の野か

ら聞えて來た。花と白く展げられた夜の野には、麥の穗が一面に見渡されて、螢が一つ二つ魂か何かのやうにふわふわと明滅して飛んで行つた。

お蔦はをりをり立つて棺の前の線香を新しくした。

義兄と母親との間には、お蔦の將來の話なども出てゐた。「でも、ね、今、嫁に行かれても困るよ。それやね、いくらも貰手はあるだらうけれども……。も少し一生懸命になつて稼いで貰はなくちや……。借金だつて、ちつとやそつとぢやないんだからね。此間、上總屋が來て、よし町の方か何かに好い家があるつて言つてゐたけれど」などと母親は話した。

翌朝は早く棺を寺の方へ持つて行つた。母親、義兄、お蔦、それに母屋から婆やと主婦とがついて行つた。杉の深く茂つたしんとした寺、花うつ木の赤く咲いた垣、小さな穴は野に添つたひろびろとしたところに堀られてあつた。朝の草の露、黄い名の知れない小さな花、讀經がすんで棺を下におろすと、人々が合掌して土塊を其上に落した。再び湧きかへつて來る悲哀に堪へないやうにお蔦は白い手巾を眼に當てゝゐた。



港の歌

長田幹彦

「ちよいと、旦那、旦那つてば。何にもそんなに澄ましていかなくたつていゝぢやないの。私、あんた知つてるわよ。あんた中島さんでせう。……」

ほの暗い細露路のなかゝらついと出て來た女は少し醉つたやうな聲で突如かう呼びかける。今月の家といふ料理屋から藝者に送り出されたばかりの村瀨は、その聲を聞くとふいに立止つた。醉つた眼を据ゑてみると、露路から出て來た女はどうみても藝者らしく、片手に撥を包んだ袱紗を持つて、片手でしどけなく座敷着の褄をとりながら、やがて角の煙草屋から射す店明りのなかへついと出て來た。大きな銀杏返しに結つて、派手な格子縞のお召しに、顏にも白粉をこつてりと塗つてはゐるが、年格好はいくら若くみても二十四五で、平顏に少し釣上つた眉のかゝりが恐ろしくばらがきらしい風である。

女は村瀨が立止まつたのを見ると、ふらふらしながら寄つて來て、

「嬉しいね、矢張り中島さん。あんた今迄何處で浮氣をしてたのよ。さては相手は菊ちやんだね。ほゝゝゝ。」

村瀨はさう馴々しくいはれても實はまるで見知らぬ妓なのである。顏にも見覺えがなければ、又聲にも聞き覺えがない。それもその筈、彼はその日の午後三時に函館の停車場へ下りて、手荷物を驛へ預け、港の町を少しの間ぶらついたあとで、そのまゝ通りすがりの月の家へ上つて、まるで見知りのない土地の藝者を三人ほど呼んだゞけで此の町には唯それだけの馴染みなのである。この函館へは今度で丁度四度目ではあるがいつも連絡船から汽車へ乘りつぐだけのことで、彼はまだ町の方角さへ皆目分らないのであつた。それにかう見知らぬ妓から聲をかけられて見るといかに人見知りをしない彼でも少しは變な氣がして、中島さんといふ似てもつかぬ名がひどく耳立つたのであつた。

村瀨が呆氣にとられたやうな顏をしてゐるのを見ると、女はくすくす笑ひ出して、

「あんた、もう私を忘れちまつたの？　頼もしくないねえ。私喜代治よ。ほらいつか開新樓で呼んで下すつたぢやないの。お互に東京のあぶれ者だつて仰有つたのを忘れて？」

村瀨には何はともあれかうした土地には珍らしいすつきりとしたその東京言葉が懷かしかつた。中島といふ男はどんな男とも知れないが、しかし自分をつかまへてその名を呼ぶからには同じ東京者で何處か似てゐるところがあるのであらう。こんな遠隔の地に來てゐながら、何か遊びの種にもと旅路の明け暮れをその日の生命に、物怯ぢもしずに漂泊して歩いてゐる彼は、ふと面白いものが飛び込んで來たと

思はずにはゐられなかつた。それまでもう四箇月ばかりの間、北海道の雪に埋もれた山河を先から先へと流れ歩いてゐた彼には唯その女の東京言葉を聞いただけでも、好奇心が頭を擡げずにはゐなかつた。で、村瀬は態とあやふやな顔つきをして、何も云はずに笑ひながらじつと妓の顔をみてゐた。

妓はもう中島と信じきつてゐるやうな調子で、

「まあ、あんた、何をぼんやりしてるのよ。これから何處かへ連ねてつて呉れない？　私今箱が開いちやつてもう後口がないんだもの。久しぶりで招んで頂戴よ。」と、云ひながら突如村瀬の外套の襟をつかまへて、首を傾げながら甘えるやうに彼の顔をみる。

村瀬はその時やつと口をきつて、

「何處へでもお伴しようぢやないか。」と、聲づくろひをしながら態と言葉少なに云ふ。

「お伴しようは嬉しいねえ。こんな賣れ殘りのばらがき喜代治を買つて出て下さるお志がうれしいわ。私ももう不見轉をかせぎませうよ。今も氣位ばかり高くつたつて駄目だつて散々怒鳴られて來たの。私も意氣地がなくなつちやつたねえ。」と、妓はげつぷをしながら投げ出すやうに云つたが、ふと見るとその眼にはどうしたものかうすく涙が滲んでゐる。

村瀬の好奇心はその涙で一層あほられた。

やがて妓は

「さ、ぢや行きませうよ。何處がいゝだらう、小野川がいゝか知ら、それとも松の家にしようかしら。」

と、自分のことのやうに考へてゐたが、やがて、「あの、我儘を云つて濟まないけど、今私、散々口惜し

い眼に逢つて來たんだから菊壽亭へ行つて呉れない？ 家は狹いけど、今夜は人身御供にあがつたと思つて辛抱なさいよ。」と、自棄に笑ひながら云つて、そのまゝそこらへ來て立つて見てゐる町の小供達を押しのけ、村瀬の腕を攫んで今しがた出て來た細露路のなかへずんずん引張つてゆく。

なかは二尺ぐらゐの溝板の通つた眞直な露路で、こゝいらの庇間はつい此の頃になつてやつと根雪が消えたと見え、兩側はべちやべちやに泥濘つてゐて、低く軒を連ねた家々の軒燈がその路の面の水溜りに小さくちろめいてゐる。村瀬は自分の氣持ちはよく承知してゐながら、それでも相手が見も知らぬ土地の見も知らぬ妓なので、心の何處かには狐につまゝれたやうな淡い不安がきざして來ないでもなかつた。彼は足許の危い妓の後姿をじつと見ながら溝板のうへをおづおづ歩いていつた。

とある小さな店屋の角を右へ曲ると、すぐそのとつつきの處に松の枝の伸し出た船板塀の家があつて、そこの二階からさす燈影がどうみても小料理屋らしかつた。入口の處までいくと果たしてそこには紅い瓦斯燈に菊壽亭と白ぬきの字で書いたのがほんのり横丁の闇を照らして、もう客の一組や二組は上げたと見え、臍盥も泥濘へいた〳〵しく踏散らされてゐる。

妓はがらりとそこの硝子戸を開けたが、なかでは婢達の聲か、

「被來い。」と、景氣よく迎へる。

と、今度はすぐ又別な聲が、

「おや、何んだね？ 喜代ちやんぢやないか。馬鹿にしてるよ。何んか忘れもんでもしたゞかね？」と、冷たい調子で云ふ。

喜代治は急にぴんしやんした聲になつて、

「憚さま。お客様ですよ。今そこんとこで私お馴染みの旦那に逢つちやつてね、一緒に來たの。お座敷明いてる?」

「ほいゝゝ。何を云つてるだね。お前さん隨分醉つてるんだね。お客樣ならお客樣でいゝからお上りつたら。」

妓はそれと一緒に又村瀨の外套の袂を摑んでぐつと硝子戸のなかへ引入れた。

上り端のところではもう一度、

「いらつしやい。」と、婢達の聲が聞える。

「さあ、どうぞ奥へ。」と、いふ聲に導かれて通つていつたのは二階座敷の六疊で、三方壁になつた恐ろしくがさつな座敷だつた。眞中には十燭の電燈が平笠の下に輝いて、その下の餉臺の面には汚點だけが浮いて見えるやうな氣がする。そして後からついて來た婢は押入れのなかゝら黃縞の木綿布團を出して餉臺の前へ敷いたが、村瀨は態とそれを厭つて、床柱のところへ行つてがくりと腰を下ろした。

やがて妓はつゞいて二階へ上つて來て、

「姐さん、あの見番へ通しといて下さいな。」と大聲で云ひながら、何やら自分でごとごと食べものを注文して、そのまゝ村瀨の傍へ來てくづをれるやうに橫坐りに坐りながら、

「あゝ、醉つた、醉つた。中島さん、勘辨して頂戴よ。私隨分醉つちやつたの、コップで飮んだんだもの。」と、云ふ。その頰には白粉の下から酒の醉ひが眼のまわりへ紅く浮き出てゐる。かうして明るみへ

出してみると、先刻往來でみたのとはまるで違つて、女い顔がひどく年を老つてみえた。
階下からはやがて一寸とした通しものに銚子を添へて持つて來た。口には苦い酒だつたが、村瀨はしかたがないので二三杯ぐつと飮んだ。
喜代治はその顔をじつと見てゐたが、何んと思つたか、
「まあ、中島さん、あんたお酒呑むの？　此間は奈良漬をたべても顔が赧くなるなんていつてゐた癖に、ぢやあん時は猫を被つてゐたんだわねえ。」と、云ふ。
村瀨はその時になつて初めて腹を抱へて笑ひながら、
「おい、お氣の毒だがお前は何か人違へをしてゐるんだぜ。俺りやそんな中島なんて男ぢやないさ。實は先刻からばらさうと思つてたんだが、まあ兎に角落ちつく處へいつてからにしようと思つてねえ。」と、一寸惡らしい口調で云ふ。
喜代治はそれを聞くと變に默り込んで、唯まじまじ村瀨の方をみてゐる。
村瀨はもう一度笑つて、
「どうだい、分つたかね。はゝゝ。その中島さんて人はどんな顔だか知らないが、まあこの俺に似てゐるんぢや餘り賴もしくないね。」と、云ひながらその時やつと外套をとつて、北海道の旅路で襟垢にまみれた縞大島の古綿入の着附を明るみへ出す。
喜代治は流石に吃驚したらしかつたが、急に敵意をもつたやうな顔になつて、いらいらしながら、突然

「そんなことを云つてゐて、お前さん、お金はもつてゐるんだらうねえ。」と、言葉を途絶らしながら確めるやうに云ふ。

村瀬はそれを冷やかに受けながら、飽くまで惡に、

「さあ、持つてる樣な、持つてねえやうな。はゝゝゝ。ひよつとしたらお前さんの名で借りてくかも知れないよ。尤も俺や旅の者だから此處の家で貸してくれないかも知れないけど、なにしろ俺やこの三時の汽車で函館へ着いたばかりなんだからねえ。」

喜代治は猶ほもきつと彼の方を凝視しながら、

「呆れた人だねえ。お前さんも隨分摺れつ辛らしだよ。」と、呟いたが、重ねて、「いゝ度胸だ、さすがの私も感心したわ。」と、云ふ。

「おうきにね。はゝゝ。とんでもねえものを摑んだねんさ。お氣の毒樣。」

喜代治は少時するとやつと眼を逸らして、今度は杯洗のなかゝら盃を抓みあげて手酌でがぶがぶ呑みながら、投げ出すやうな調子で、

「まあ、いゝや。どうせ私が惡いんだ。だけどいくら人達へとしたつてお前さんもまさか人情のない人ぢやなからうから兎に角どうでもなるわ。でもあんた東京の人なんだらう。」

「東京は東京だが、もう一昨年の春から出て一度も歸らねえから餘り大きな聲ぢや威張れないね。だがお前も矢張り東京なんだらう？」

喜代治は何故か打ちしほれたやうた聲で、唯ひとこと、

「え。……」と、答へる。
「東京は何處にゐたんだい？　新橋かね？」
「皮肉だねえあんたは。」と、彼女はぢろり村瀨の方を睨んで、「私や下谷にゐたのよ。」
「何時頃までゐたんだい？」
「去年の春まで。」
「ぢやまだ此地へ來てから一年にしきやならないんだね。下谷で何んて云つて出てゐたんだい？」
「ほゝゝ、笑談ぢやない、まるで戸籍調べみたいだよ。そんな根掘り葉掘り聞くなあ野暮らしいぢやないか。それよりもつとお飲みなさいよ。三味線もつて來ようか？」
「場末の都々逸なんか聞いたつて仕樣がねえさ。さつきお前は私も不見轉をかせぐゐつて云つたぢやねえか。はゝゝ。」
　喜代治はそれを云はれるといきなり村瀨の膝をぴちりと强く抓つて、
「此の人はッ。私とても敵はないわ。」と、色つぽい流眄を呉れる。
　村瀨は態と落着き拂つて、
「そりやお前、函館のぱらがきより筋がいゝさ。」と、云つて、にやにや笑つてゐたが、今度は急にしんみりした聲になつて、
「だが、お前東京へ歸り度かないかね。それとも矢張り中島さんのゐる函館の方がいゝのかい？」
　喜代治は貪つてゐた盃をつと置いて、村瀨の方へひと膝寄つて來ながら、

「ねえ、あんた。私ほんとに生命のあるうちに一度は東京へ歸り度いねえ。東京ほどいゝとこはないものねえ。」と、云つたが、思ひがけない時に急にしくしく歔欷しだして、「私これでも東京にお母さんがゐるのよ。」

「母は足腰立たずの病ひでか。」

「そんな茶化さないで聞いて下さいよう。私ほんとにお母さんにだけは逢ひ度いねえ。……」

「そんなに戀しいものを何んだつてこんな處まで流れて來たんだい。道樂でもしたんだらう?」

「そりや極つてるわ。」と、云つたが、それなり餉臺の緣へがくりと體を凭せかけて、「でももうこんな體になつちやつちや當分は歸れないねえ。」と、涙聲で呟く。

二人は何故かそれなり口を噤んでしまつた。戸外では春の初めに吹く空ッ風が時々電線を鳴らして、棧橋の方からは鈍い汽笛の聲がきれぎれに聞えて來る。じつとしてゐても異郷らしい空氣の肌觸りが感じられるやうで、口をきかずにゐると自然に氣が滅入つてくる。

村瀬はその時ふとした機會で逢つたこの喜代治といふ女のことをしみじみ考へてゐた。いづれ東京にゐても名の知れぬ藝者のひとりなのであつたらうが、何かの事情でこんな遠い處まで流れて來てゐるのが、彼には何となく可哀想に思へた。ばらがきだの、醉つぱらひだのと云つては、田舍へ來てゐる身の寂しさを酒に紛らかして、しかも漸次と浮ぶ瀬のない零落の深みへ我れから落ち込んでゆく女、彼の胸にはさうした種類の女の運命がくつきりと映つて來た。

彼はこの北海道へ渡つてから行く土地土地で幾人となくさうした運命を持つた女に出逢つてゐる。荒

蕩たる自然、人情の薄い人間の集團、それを背景にしてゐるだけに、彼の出逢つた女はいづれもいゝにつけ、惡いにつけ、濃い運命の色彩を以つてその半生の閲歴を塗られてゐた。彼の方もまた居馴染んだ故郷にゐるのとは違つて、さうした女に出逢ふ度に漸次とつきが荒くなつて、ともすると荒つぽい口をきいてその場限りの扱ひもして見度くなつて來る。それが又旅路にゐる彼には云ふに云はれぬ興味なのであつた。そしてぐつたりと餉臺に倚つてゐる喜代治の襟脚をみてゐるうちに、彼の心はその時も此の女に對してだん／＼荒んで行つた。

「おい、いやに鬱いぢやつたぢやないか。もうちつと飮めよ。」村瀨は少時すると女の顏ぐちのところへ盃を持つていつたが、女はそれを力なく受けて、

「私もうとても駄目だわ。」と、云つたかと思ふと、そのまゝぐたぐたと盃をもつたなり疊のうへゝ倒れてしまふ。

村瀨は默つて、裾からしどけなく零れる長襦袢の色をみてゐた。

少時たつと階下からは酌婦らしい白粉をこてこて塗つた女がこつそり上つて來て、紙襖を細めにあけてそこから間内の樣子を窺つてゐたが、やがてついと入つて來て、

「あらまあ、喜代ちやん、仕樣がないねえ、又醉ひ倒れちやつたんだよ。」と、云つて、喜代治の傍へいつて、「これ、喜代ちやん、喜代ちやん。しつかりおしつたら。仕樣がないねえ。」と、搖り起したが、喜代治は唯うんうん云ふばかりで更ちに正體がない。

村瀨は胸の中でさまざまな企らみを思ひ浮べながら、やがて何喰はぬ顏で、

「餘程飮んだと見えるねえ。いつにない醉ひかただ。」と、さも前から知つてゐるやうに云ふ。

婢はだらしのない笑顏になつて、

「ほゝゝゝ。そりや旦那の前ぢや謹んでゐるんでせう。此處いらへ來ちやもういつも醉つぱらつて、間にや往來へ打倒れて寐ちまつたりしますの。……」と、少しずうずうの訛りのある聲で云つたが、「さう云つちや惡いけど、こんな藝者でも面白がつて呼ぶお客がありますのねえ。貴方濱のお方と違ひますの。」

「さあ、何處に見える。何處でもお前のいふ處にして置かう。はゝゝ。」

「きつと濱ですわ。濱の方はよくこの妓をお招びなさるのね。」と、云つたが、急に聲をひそめて、「ねえ、旦那。この妓は旦那方の方では？」と、村瀨の顏を見る

村瀨は態と煙たさうな顏になつて、

「そんなことは聞かなくたつて分つてるぢやないか。今時その方がきかなくて稼業が出來るかい。藝だけで賣りますで、五百兩も、六百兩も貸して呉れるうちがありやいつだつていゝ妓を世話するよ。はゝゝ。」

「さうでせう。ぢや矢張りなんなんだねえ、私んとこなんかへ來ちや、いやに東京を鼻にかけて、大きなことばかし云つてるですよ。それでどんなもんです？」

「それを云つちや此の妓の身上にかゝはらあね。まあお客次第でね。」

婢は漸次と開けすけな調子になつて、

「いゝえさ、旦那はどうなんですつて何ふですよ。幾ら、二枚？　三枚？」

「まあ、そんなとこかね。」とは云つたが、村瀬はもし喜代治が聞いてゐたらと思ふと一寸氣がさした。しかし彼女はいつの間にか足を横つちよの方へ突きだしたなりで、かすかな鼾きをたてゝ前後も知らず寢入つてゐる。

婢は一度階下へ降りていつたが、二度目に上つて來た時には事を好むやうな顏をしながら、「旦那、あの御都合で。」と、云つて、どうかもしよければとあとは眼顏に云はせた。村瀬は思ふ壺にはまつたので、にやりにやり笑ひながら合點いてみせた。

喜代治はやがて前後不覺になつたその體を婢に抱きかゝへられて次の間の方へ連れられていつた。

村瀬が菊蔭亭を出たのはもう十時打つてからであつた。長居をしてもし喜代治の醉ひが醒めでもしてはと不安な氣がするので、彼は勘定もそこそこにして、大急ぎでその家を出てしまつたのであつた。それで露路からさつきの往來へ出ると、彼はもう何喰はぬ顏で、口笛などを吹いて歩いてゐた。彼の醉つた心には思はぬ拾ひものをしたぐらゐの心持ちしきや殘つてゐなかつた。

一度電車通りへ出て、そこから村瀬は何處へと云ふ當てもなく廣い通りを辨天崎の方へぶらぶら歩いていつた。何よりも先に彼の頭へ映るのはこれから先の夜をどうして過ごさうかと云ふ考へであつた。もう連絡船へ乘つてしまへばこの北海道の土も當分の見納めである。長い旅路でさすがに東京のことも

思出されるには出されるが、それにしてもまだ懐中に金の殘つてゐるうちは、どうかして見ず知らずの土地で何か面白い經驗に出逢はし度いやうな未練な氣がする。素直に宿屋をとらうか、それとも何處か又女のゐる家へいつて見ようか、いつも行く先々で考へる氣紛れな氣持が又湧いて來る。

吹く風は益々募つて、乾きゝつたやうなその脚は往來の面に薄白い砂塵をぼうつと舞ひたゝせてゆく。横丁へ來懸る度に、その突き當りのところには暗い海が見えて、思ひがけない家並のうへにスクウナアの帆檣がぬつと突き出てゐるやうなところもあつた。鈍い汽笛はしつきりなしに遠く近く聞えて、棧橋にともるアーク燈がイルミネーションのやうに見えたかと思ふと、又すぐに倉庫の陰へ消えていつたりした。

村瀬はその時ふと又喜代治のことを思ひ出した。海港の夜の寂しさがいつともなく彼女の身の上に引き較べられて、あんな罪な所業をして置きながら妙に可哀想な氣が頻りにして來る。と思ふと、餘り思ひがけない出逢が急に不思議に思へて、醉中の出來ごとながらその印象は深くふかく彼の心に烙きつけられたやうな氣になつて來る。「いくら人違へをしたつて、あんただつて人情のない人ぢやなからうから……」と云つた時の投げやりなその顏つきも思ひ出される。

そんなこんなを考へてゐると村瀬はいつもの癖で、丁度綿々と波に咽ぶ港の哀歌に耳を傾けてゐるやうな、何とも名狀することの出來ぬ感懷が起つて、眼のまへに倒れかゝるやうに聳えたつてゐる臥牛山の姿や、その頂に明滅する星影までがその夜の情趣を飾る道具立てのやうに見えて來た。何處か菊壽亭でない別な家へいつて、もう一度喜代治を呼んでやらうと思ひついたのはそれから間もなくであつた。

餘り當てずつぽうに歩いてゐたので、村瀬がさつきの町の方へ引返さうとする頃にはもう方角が更らに分らなくなつてゐた。賑やかな灯の影は漸次と薄くなつて、道はいつの間にかだらだら上りの坂路へかゝつてゆく。それでも店屋は同じやうに續いてゐるので、自分ではもとの町の方へ歸つてゆくやうな氣がして、彼は急足になりながら足に任せて歩いていつた。

とある大きな神社の前まで來かゝつた時、村瀬は少し疲れて來たので、兎に角俥を雇はうと思つた。そして立場を搜しながら、又何處とも知れない賑やかな町へ出ると、彼はその時、また彼の興味をそゝるものに出會はした。

その通りの中程のところに一軒の穢らしい寄席がある。表がゝりはまるで湯屋のやうで、それでも雨ざらしの色の褪めた幟が二三本立つてゐて、瓦斯の點つた表看板には「大阪女義太夫界の覇王竹本綱之助一座」といふ拙い字が黒々と書いてある。

村瀬はそれを見ると思はず悸乎としてその前へ足を留めた。大阪の太夫で竹本綱之助といへば彼がそれから二三年前に京阪地方を流寓してゐた時分に、京極の寄席で幾度となく顔を逢はせた女である。もう年も五十過ぎてゐて、大物を語るには聲の幅がなく、濕みが乏しかつたが、併し彼が始終出入りしてゐたその一座ではなくてならない女だつた。切りまへに彈き語りで「毛谷村」を出したり、その頃まだ十七八だつた娘の綱なにがしと云ふ子の絃をつとめたりしてゐたのを村瀬はよく覺えてゐる。

村瀬はその時分のことを思ひ出すと、何とも云へない懷かしさを覺えて、もう喜代治のこともなにも

打忘れて内から洩れて來る絃の音を聞きながらしばらくの間じつと看板を見てゐた。そこには綱昇、綱次など〻云ふ一門の名がずつと並んでゐて、綱之助は矢張り切りまへに「寺子屋」を出して、綱昇といふ眞打の「堀川」の絃を彈いてゐる。果たしてこの綱之助があの女であるとすれば、ひよつとかしたら綱昇が娘ではあるまいかとも思はれて、村瀨は何かしら入つて見度くて耐らなくなつて來た。

村瀨はやがてやつと腹を極めて、つかつかとその木戶へ入つていつた。煤けた洋燈をのせた小机の前に坐つて、大きな欠伸をしてゐた木戶番はそれをみると怪訝な顏をして、

「被來い。」と、云ふには云つたが「旦那、もう仲入りが濟んだですよ。」と、呟く。

村瀨は默つて十錢といふ木戶錢を拂つて、そのまゝ下足札を袂へ入れて奧へ入つていつた。

中はそれでも百ぐらゐ入りさうな小屋で、何處か矢張り寄席らしい形をそなへてゐる。蒼白い瓦斯は二つほどしか點けてなくて、その暗い光のなかには僅か七八人の聽客が寐惚けたやうな顏をして坐つてゐる。村瀨が入つてゆくと、そのなかの二三人はふと此方を振顧つたが、彼は態と薄暗い隅の方の柱の陰へ布團を敷かせた。

何かなしに胸を躍らせながら高座の方を見上げると、彼はその時二度吃驚した。豫期したとほりそこに上つてゐるのはあの綱之助で、綱昇といふのは紛ふ方もない娘の綱なにがしであつた。語りもの〻「堀川」はもう傳兵衛の出もついて、綱之助の彈く絃は靜かに咽ぶやうな音をたて〻ゐる。村瀨はこの思ひ懸けもない出會の歡びが胸一杯に込みあげて來た。そして態と向ふから眼につかぬやうに柱の陰へ隱れて、じつと高座の方を瞶めてゐた。

そこだけは明るい電燈の光に照らされた高座の綱之助はあの時分よりもひどく老けてゐた。髮の毛も何處となく薄くなつて、體は相變らず肥つてゐたが、打見た姿は妙に腑がぬけたやうに影が薄かつた。そして何處を見るでもなくうつとり宙にさまよはせてゐるその眼の下には見覺えのある疣が浮いて見える。

娘の綱昇もあの時分とはまるで見違へるほど變つてゐた。京極に出てゐる時分には色光澤の惡い、髮の毛の紅いひよひよしたやうな娘だつたが、それが今はもう立派な女に成人して、態と娘らしく桃割れに結つてゐるのが、却つて肥つた頰に似つかず、ぬけるほど白粉を塗つたその顏は美しくはなかつたが、それでも可愛氣のある女になつてゐた。頭を振る度に簪の白い花が艶めかしく搖れて、一寸下を向くと紅い唇が男の眼につく色つぽさを見せてゐる。そして村瀨の知つてゐる時分にはまだ金切り聲できいきいしてゐたのが、低く沈む呂の聲も出るやうになつて、その姿の變つたごとく藝もどうやら眞打として聞かれるやうになつてゐた。「そりや聞えませぬ、……」の佐和利になると、さすが上方で母親や師匠の手鹽にかゝつて育つただけに語呂が極めて綺麗だつた。

村瀨は親子二人の顏をじつと見ながら一心になつて聞き惚れてゐたが、彼の胸にはこんなところで思ひがけもなく出逢ふ運命の不思議さが頻りに胸の中を去來してゐた。思ひがけないと云へばこれほど思ひがけない出會は又とあるまい。向ふが藝人なら旅へ出るのも決して不思議はなかつたが、もし今夜あんな喜代治のやうな女に逢ひもせず、又町をぶらつきもしなければ、村瀨はさつき月の家で段取りをつけたやうに何處か廓かなにかへ行つて、同じ町で綱昇が「堀川」を語つてゐるのもつゆ知らずに、惡酒の

醉ひにひと夜を明かしたかも知れぬ。ふと喜代治のことを思ひ出してまたあとへ引返す氣になつて、道に迷つたればこそ彼はこの寄席の前へ出たのである。廻はり合はせといふことに對しては一種の迷信に等しい考へをもつてゐる彼は、もう京極にゐる時分から將來に一度何處か遠い國里で綱之助達に出逢ふやうな氣がしてゐたやうに思はれて、懷かしさは先々と募つていつた。

「大事のだいじの良人の難儀、妻が知らいでなんとせう。いのちの際に振り捨てゝえ……」甲に冴える咽はいつか村瀨の眼の前に遠い京極の寄席のさまを思ひ浮べさせて、此處までも聞えてくる出船の汽笛が妙に彼を涙ぐましい氣持ちの方へ引込んでゆくと、やがて猿廻しの唄はくつて、寂しい絃の音を名殘りに簾はきりきりと落ちてしまつた。

客はそれと一緒に寒さうに肩を縮めて、空咳きをしたり、懷手をしたりしてひとりひとり立つてゆく、七八人の頭數なので下足場ではこつそりとも物音がしない。

村瀨はやがて耐らなくなつてつかつかと高座の方へ歩いていつた。簾の陰からのぞくとなかでは綱之助が三味線の絃をゆるめながら中腰になつて綱昇とふたりで何かごとごと小聲で話をしてゐたが、村瀨は我れにもなく簾をかゝげて、

「綱之助さん。」と、聲をかけながら、その下から笑顏でそつと見上げた。

綱之助はそれを聞くと吃驚したやうに此方を見て、しばらくの間は見覺えがないやうにまじまじ彼の顏を見詰めてゐたが、默つてゐても可けないと思つたかして、大阪訛りの言葉で

「誰方はんです？」と、聲をかける。

その時傍に立つてゐて綱昇は頓狂な聲を出して、

「お母はん、それ京極の松谷はんとこの、……」と、村瀬が寝泊りしてゐた三味彈きの家の名を云ふと、その突差、綱之助は悸乎としたやうに眼を大きく睜つて、

「ほう、村瀬はん、まあま、あんたはんだしたかいな。」と、云つたが、その顔は見る見る人の好さゝうな笑顔になつていく。

村瀬は顔だけ簾のなかへ突入れて、

「分つたかね、はゝゝゝ。餘り思ひがけないんで吃驚したらう。」と、これも笑ひながら云つたが、綱之助はそれを云はせも果てず、

「ほんまに村瀬はんでしたえなあ。まあどないにしたちうのやろ、ほんまにお珍らしい。」と云つたが、「なあ、あんたはん、まあ、それよりも一寸樂屋へ寄つとくれやす。そこの縁先の木戸をおあけやすとすぐ樂屋だすよつて。」と云つて、彼女はそわそわしながら高座を下りてゆく。

村瀬もいそいそしながら云はれた通り便所へ通ふ縁先へ出て、そこの突き當りにある板戸を開けてなかへ入つていつた。すぐとつゝきは薄暗い物置きのやうな板敷で、そこから高座の方へ上る疊敷へ出るとそこには肩衣を引きそばめながら綱之助と綱昇が立つてゐて、

「ほんまに珍らしいごつちや。」と、云ひながら兩方から袂をとらんばかりにしながら裏の樂屋へ引張つて行く。

樂屋は十疊ばかりの天井のない穢い部屋で、眞中に木箱のやうな大きな火鉢がたつたひとつ据ゑてあ

るつきりで、他には何ひとつ眼にたつものもない。窓がとつてないので、天井の棟梁のところには硝子のはまつた明取りがあつて、この前には浪花節がかゝつてゐたと見え、そこらの壁には桃中軒浪子などとかいた紅いビラが張つてある。そして薄暗い電燈の影には十四ばかりの見習ひの娘らしいのがたつたひとりでしよんぼりしてゐるきりで、他に藝人の殘つてゐる樣子もなかつた。

綱之助はそこにある古毛布をとつて火鉢の前へ敷きながら、

「さあ、まあ、坐つとくれやす。」と、云つて、自分も坐つて、大方灰ばかりになつた炭火をかき立てながら肩衣の脚を前袴からきゆッとぬいて後へはねて、

「ほんまにお珍らしい。」と又繰り返して、その時になつて初めて辭儀をしながら、

「ほんまにあんたはんも御機嫌ようて。」と、挨拶した。

綱昇も火鉢の端へ來て、母親と同じように肩衣をとつて、

「長いことゝしたえなあ。」と、さも懷かしさうに頭を下げる。

村瀨はそれに受け答へをして、

「ほんとに妙な處で逢ふねえ、お前さん逹はいつ此方へ？」

綱之助はそれを抑へて、

「まあ、あんたはん、何からお話してえゝやら、それよりもあんたはんはなんで此樣なところへ來とゐやすの。私それが怪體で叶はんわ。」

「はゝゝゝ。私か、私は旅烏だから何處へでもいくさ。もうこの四箇月ばかりの間北海道をあつちこつ

ち歩いてゐるのさ。」

「ま、さうだつか。なんでもあれから後はあんたはんもえらうようおなりやしたんやてなあ、私京へいく度にお噂を聞いてましたえ。ほて、此方へはなんぞ御用でもあつてだつか？。」

「いや、例によつて金儲けの口を捜しに來たのさ。はゝゝゝ。」

「ほゝゝ。なんで又。てんごう云ふてだんなあ。」と、云つたが、綱之助はやがて妙に沈んだ顔になりながら、

「私らも實は昨年の夏から此方へ來てまんね。あんたはんも知つとゐやすやろ、あの團治はんな、あの人の口入れでこつちやの仕打へかゝりましたけど、それが惡いわるい奴でな、もう何處へいたかて先々でトヤをしてまんね、私も、年甲斐もないそんなもんの口車に乘せられて旅へ出たんが口惜しうおつけど實は今度娘を眞打の看板にせう思ふて、それには纏つた金も入りますよつて、その工面に釣られて出て來ましたが、ほんまにかうなつては何もかもわやどす。」と、悄れ返つた聲で云ふ。

　寄席へ入つた時から村瀬は何かしらそんな氣がしてゐたが、それを聞くと急に眞顔になつて、

「おやお前さん達もずつと奥の方へ行つたのかね？」

「さうだす。小樽から札幌へいて、旭川を打つて釧路までもいきました。そのうちに一座のもんのなかでも逃げてしまうた奴は出來る、馴れん寒さで病人になるもんも出來る。私も長いことこのお稼業をしてまつけど、今度のやうなえらい目に逢ふたんはほんまに初めてだつせ。」

「そりや氣の毒だねえ。そして大阪へいつ引上げるんだね？」

「とても、とても、あんたはん、そんな段ならよろしけど、こないにしてゐればほんまに私らまで身賣りせんならんことになりまつせ。この土地へもう二月ほどゐまつけど、今夜のやうなお客さんで、借金はふえる、もうどだいてんとあかんのだす。私なり、娘なりどつちやなとひとり今のうちに大阪へ歸ることが出來れば、又何とかなりますのやけど、……」と、云ひかけて綱之助はふつと涙ぐんで來た。

綱昇もその話でひどくしよげて、火箸で子供らしく炭火をせゝりながら首垂れてゐる。

村瀨はその時何とはなし藝人といふものゝ憐れさをしみじみ覺えてゐた。この北海道へ渡つたものは大方御難を食ふと噂にも聞いてゐたものを、この綱之助達は何故うつかり惡い仕打ちの口車なぞへ乘せられて、苦勞をしにやつて來たのだらう。綱之助の心では娘を眞打にしたさに、その金を儲けるつもりでうかと旅へ出たのだらうがその心根を思ふとさすがに村瀨も身につまされて來た。そして蓬々と吹き荒ぶ風の合間に聞えてくる汽笛の音を聞いてゐると又港の哀歌を聞くやうな果敢ない悲しみが湧いて來る。

そんな話をしてゐるうちに木戸のものは樂屋をしめに來た。それを見ると綱之助はおどおどしたやうにそのむくつけな男に世辭を云つて、

「今ぢつきに開けますさかい。」などゝ云ひ譯がましいことを云ふ。

村瀨も坐つてゐるにもゐられなくなつて、

「ぢやとにかく又逢はう。」と、云つてふいと立ちあがつた。

と、綱之助はこれも立ち上つて、

「まあ、お待ちやすな。そこまで一緒に出ましほ。」と、そゝくさ着換へをして襟のかゝつた褞袍のやうな着物一枚になりながら見習ひの小娘をせきたてゝ肩衣などを包ませた。

「ほんまに恥かし風どすなあ、彼方から持つて來たものは皆ないやうになつてしまうたんだつせ。」と、云ひながら銘仙の垢じみた着物を着てゐる綱昇の方を振りかへりながら綱之助はやがて先へ立つた。綱昇は白い花の簪を大事さうにぬいて、箱へ入れながらあとからしほしほついていつた。

木戸の下駄をやつと樂屋口へ廻して貰つてそこから外へ出ると、ぎらぎらと物凄いほど星のきらめく空からは春とはいひながら更けるにつれて氷のやうな寒氣が吹く風と一緒にさつと迫つて來る。四人は吹きあげる砂塵に顔を伏せながら、思はず

「お、寒む。」と、息をひいたが、風が吹きすぎてしまうと綱之助はつと村瀨の方へ寄つて來て、

「どうもほんまに怪體な話ばかり聞かせまして濟んまへんなあ。あんたはんお宿は何處だす？」

「私か、私はなにしろ今日此處へ着いたばかりで、まだ宿もなにもとつてないのだ。」

「そやけどどうせ今夜は此方へお泊りやすのやろ？」

「無論泊るさ。何處かいゝ宿屋を搜したいが、何處いらがいゝだらう。まるで案内を知らないんだから、當てがつかないでねえ。」村瀨は今の綱之助のはなしですつかり氣を腐らして今夜は何處か久しぶりで靜かな宿屋へでもいつてこの憐れな親娘としんみり話でもして夜を明かしたいやうな下心で云つた。

と、綱之助は一寸考へて、

「どうせお泊りやすのやつたら、まだ電車もありますさかい湯の川の溫泉へいてお泊りやすな、あこや

つたらえゝ宿屋もありますし、此處では一の遊びどころどすさかいな。」と云ふ。

村瀨は札幌にゐた時分よく湯の川の話を聞かせられてゐたので、ふつとそこへいつてみる氣になつた。で、それとなしに綱之助を誘ふと、彼女は

「おうきに。」と、云つて云ひ憎さうにしてゐたが、やがて綱昇の方を向いて、

「な、お糸、あんた連れつてお貰ひな。」と云ひながら、「村瀨はん。私をつれつとくれやすよりもどうぞ娘を連つとくれやす。これも偶にはお座敷がないとな。」と、侘びしさうな聲で云ふ。お前さんも是非一緒に來ないかと云ふと彼女はうすく笑つて、

「私のやうな年寄りはいかんとおきまへう。こんなせうむない娘ではお氣に入りまへんやろけど、助けると思ふて連つとくれやす。それに私は一座の者もゐますさかい、……」

村瀨は綱昇ひとりではいかにも底が讀まれるので厭だつたが、そのうちに現在親の口からそんなことまで云はなければならないほど窮迫した彼等の境遇が憐れになつて來て、兎に角自分で出來るだけのことをしてやればいゝと云ふ氣で、娘だけを連れて湯の川へ行くことにした。そして彼は懷中のなかで財布を搜つて、そのなかゝら二圓ばかりの金を出してそつとそれを綱之助の手へ渡しながら、

「こりや樂屋へ御祝儀だぜ。」と、小聲で耳打ちした。

綱之助は義理も張りもなくなつたやうにそれをちよつと額のところへ持つていつて、

「おうきに。ほんならこれで皆になんぞ溫いもんでも買ふて振舞ひますわ。」と、云つたが、村瀨にはそれがどうしても涙を含んで聞かれた。彼もそれと一緒に涙ぐんでゐた。

間もなく電車通りへ出ると、綱之助の一座の泊つてゐる八百屋の前も通り越して、彼女はその足で停留場まで送つて來た。そして電車を待つ間も、綱之助はせめて少しでも美しく見せようとするのか綱弁に着をさしていけの、着物の前裾が下つてゐるのと頻りに世話を燒いてゐたが、電車に乘る時も彼女は後から娘の羽織の襟を直してやつたりして、

「おやいといでやす。歸りにはどうぞたんとお土産を。」などゝ强いて地聲で笑談を云つたりした。そして二人が電車に乘つてしまうのを見ると、やがてそのあとを見送りみおくり吹きつける風のなかを裾を抑へながら打ちのめされたやうな恰好をして宿の方へ歸つていつた。

その電車は湯の川ゆきの終電車だつた。乘客は割合ひに込んでゐて、なかには藝者づれの醉つた客などもゐた。

村瀨には耳新らしい停留場の名は漸次と後になつて、電車は暗い空の星影だけを車窓に映して湯の川の温泉の方へ眞驀に駛つてゆく。綱弁は初めのうちは恥かしさうに首垂れてゐたが、漸次と馴れて來て、「私、湯の川へいくの初めてだつせ。お母はんも一緒に來たらえゝのになあ。」などと他處行きをするのが嬉れしさうに微笑んで見せたりした。

村瀨にはそれがひどくいぢらしかつた。

湯の川へ着くと電車は宿屋のすぐ前のところで止つた。

もう四邊はしんと更け渡つてゐて、暗い夜の空を吹きどよもしてゆく風の音が物凄い。何方へいつていゝか方角さへまるで分らないので、村瀬はもう一度引返して電車の車掌に宿屋への道を尋ね、とある一軒の西洋づくりの旅館の前へ立つた。

もう玄關の戸を閉めてゐたのをやつと起きて貰つて、二階座敷へ案内されると、戸は閉めてゐながらなかの浴場の方では醉つた男の笑ひ聲や女達の嘩ぐ聲が聞えてゐた。そしてその家は座敷まで西洋風の腰羽目がしてあつて、打見たところどうしても病院といふ造りだつた。

村瀬は婢が敷いた座布團へ坐ると、

「こりやまるで病院だね。」などゝ輕い笑談口をきいてゐたが、綱昇の姿が餘り汚いので、ゴケでも引張つて來たと思つたかして、婢達が頻りにじろじろその姿を見るのを、彼は態とさりげない風に裝ほひながら綱昇のことを

「糸子さん。」などゝ呼んだりした。

綱昇はさう云はれる度に顏を赧くしてゐた。

薄濁りのした地下の浴場でひと風呂浴びて出て來ると、彼は喉が渇いて耐らないので先づ果物と麥酒を命じた。そして寢る支度をさせたあとで、彼は硝子窓に吹きつける風の音を聞きながら綱昇を相手に二本の麥酒を倒した。

「どうだ、綱昇さん、旅で面白かつたり、苦勞したりした話でも聞かせないか。」と、村瀬がそれとなく話を引出さうとすると、綱昇はたつた一杯の麥酒で紅くなりながら、

「私、なんもお話しするやうなことておまへんわ。ほんまにえらい目に逢ひましたさかいなあ。」と、しみじみ耐らなかつたやうに云つて、

「私は若うおますさかい、宜しいけど、お母はんがほんまに氣の毒でなあ。」

綱昇はそれから北海道の旅路の話をぼつぼつしだした。丁度彼等の一座が歩いた道筋を村瀬も四五箇月ほど遲れて通つてゐるので話は自づと調子が合つて、綱昇はいろんなきつから何も彼もすつかり話してしまつた。旭川で食べるものがなくなつて危く藝妓に賣られやうとしたこと、札幌で一座の吉昇が男をつくつて逃げたこと、それから小樽で破戸漢に暴れ込まれて袋叩きにされ、降る雪のなかを足袋裸足で逃げたことなぞ話は先から先へ廣がつていつた。

村瀬はちびちび麥酒をのみながらしんみりした眼色をして聞いてゐたが、綱昇が自分の言葉の哀れさに引込まれてふと口を噤んでしまうのを見ると、痰のからむやうな聲で、

「どうだ、大阪の方へ歸り度いか。」と云つた。

綱昇は涙ぐんだ眼をあげて、

「歸り度いのは云はんかて分つとおまつけど、なんぼ歸り度うてももうこないになつてしまうては駄目だつせなあ。今度こそほんまに函館で藝妓はんにならんなりまへんやろ。ほてお母はんだけなと大阪へ歸してあげたら、又彼地でなんとなと都合して、私を迎ひに來とくれやすことも出來まつしやろけど……」

村瀬はその言葉で更らに身につまされて、ふと又喜代治のことを思ひ出しながら、

「そりや歸り度けりや私だつてどうにかしてもやらうけど、もう大分な借金なんだらうなあ。」

「さあ、私、お母はんがなんでもしとくれやすさかい、よう知りまへんけど、なんでも六百何圓とかあるさうにおまつせ。そんなお金を私らの腕でどうして返せまつかいな。」

「六百圓。ふむ、苦しいねえ。」

「苦しいどころやおまへん。そやけどあつちやへ歸る旅費さへ出來ればそれはどうでもなりますのやろえ。つまり云ふたら夜逃げをしてもしまうのだつせなあ。」

「そんなことが出來るのかね？」

「出來るさうにおまつせ。」とは云つたが、綱昇は稍不安になつたかして、「そやけどそれをしたかて警察へつかまへられるちうやうなことおまへんのやろ。」

村瀬はその間の事情がまるで分り兼ねるので、どう返事することも出來なかつた。唯無上にこの親娘を助けて大阪へ歸してやり度い氣ばかりして、

「大阪へ歸つたら何をする」などゝ取留めもないことを聞いたりしたが、綱昇はもうすつかり村瀬に賴りきつてゐるやうな調子で、

「私、久しぶりで樂天地やら、蘆邊倶樂部やら見度うおます。」と、子供のやうなことを云つたりした。

湯の川の夜は吹く風のどよみと一緒に深沈と更けていつた。

翌朝、旅疲れで十時過ぎまでぐつすり寢て、ふと眼を覺ますと綱昇はいつのまにか身じまいもすまし

て、火鉢の傍へ小さくなつて新聞を讀んでゐた。
「もう起きてゐるのかい？」と臥床の中から聲をかけると、綱昇は明るい朝の光に恥かしさうに眼を逸しながら、
「へえ……」と、素直に答へる。
村瀬ももぞもぞ伸びをしながらやつと起きて來た。
その朝はいかにも北國の春らしい氣持ちのする朝であつた。硝子窓から見える空は飽くまで高く晴れ渡つて、ほの白い靄氣のやうなものがその眞紫をぼんやり燻ぶしてゐる。もう五月だと云ふのに丘陵の上に枝をさしかはす雜木はぼうつと若芽の色に烟つて、そのなかに眞白な櫻がちらほらと南の方の枝から綻びそめてゐる。そして街道には石が白く乾いて、青々と芽ぐんだ柔らかな牧草のうへを强い强い空ッ風が砂塵と一緒に颯々と吹き過ぎてゆく。
村瀬は明るい、豪壯なその光景を見てゐるうちに昨夜までの心持ちがさらりと消えて、今朝はまるで生れ變つたやうに明るい心持ちになつてゐるのを覺えた。そしてじつと振顧つてみると、月の家のことも、喜代治のことも、つい鼻の先にゐる綱昇のこともう遠い昔の出來事のやうに興味がなくなつて、彼はその時になつていつぞは見ようと思つてゐたこの湯の川の奥のトラピストの尼院のことがふと心に浮んで來た。札幌で聞いたその寺院に關する話が絕えてはつゞく丘陵の景色から次々と浮き上つて來て、彼は何となく心が躍つて耐らなくなつて來た。
朝飯をすますと、村瀬は先づ何よりも先にこの綱昇を返してしまはうと思つた。兎に角昨夜ひと夜同

じ旅寐の夢を結びながら彼はその朝なんだか、かうして二人對向ひに坐つてゐるのが厭だつた。それをするには戸外の光が餘りに明る過ぎて、今にも騷々しいほど飛雀が囀りだしさうな綠の色が彼の眼を他へ惹いてゆくやうに思はれた。決して薄情な心からではない、兎に角彼は朝になつても矢張りこの綱之助親子をどうにかして出來ることなら大阪へ歸してやらうと思ふほどの親切はあつたのだが、唯かうして女と對向ひに坐つてゐるのが厭なのであつた。雀糞のある綱昇の娘々した頰を見てゐると彼は又喜代次の醉ひ倒れた姿が眼に映つて來たりする。彼は耐らなくなつて、綱昇にひと足先へ歸つて呉れるやうに賴んだ。

綱昇は村瀨の心がさう變つてゐようとは知らないので、なることなら半日でも一日でも遊んでゐたさうな氣振りを見せてゐたが、村瀨が土產がわりにと云つて紙へ包んだ金を出すのを見ると、强つてとも云ひ兼ね、私のことも忘れないでね、と云ひたげに殘惜しさうな顏をしながら座敷を立つていつた。

村瀨は階子段の口まで送つていつて、

「ぢや、お母さんに宜しく。とにかく私は夕方函館へ歸るから、そしたらすぐに寄席へいくからね。昨夜云つたこともよく考へて置いてお呉れよ。」と、それでも色氣を見せながら云つた。

「へ、おうきに。ほんまに寄席へ寄つとくれやす、待つてますさかい。」と、綱昇はにこにこ笑ひながら降りていつた。

座敷へ歸つてみると、すぐ下の街道を綱昇は吹く風に紅い蹴出しをちろちろと吹きめくられながら電車の停留場の方へ步いてゆく。大きな桃割がふつとこつちを振仰いだかと思ふと、又風が來て鬢の毛を

さつとその顔をもつれさせる。彼女はやがてそこに待つてゐる電車に乗つたが、間もなくその車は舞ひ立つ砂塵と一緒に函館の方へ向つて駛り去つてしまつた。

村瀨はそゝくさ支度をして婢を呼んで湯の川のトラピストの尼院へ行く道筋を聞いたりした。札幌の道廳の官吏をしてゐる知人から貰つて來た紹介狀をその時初めて紙入れのなかゝら取出してみると、それは湯の川の村役場宛てになつてゐる。道廳の封筒にはその男の官等まで書いてあつて、みるから嚴めしいものであつた。

とても步いてはいけないと云ふので、村瀨は仕方がなしに馬を賴んだ。そしてその支度がとゝのふ前に、彼は兎に角村役場へ行つて前後の打合はせをして置く必要があるので宿からは二丁もない街道に沿つた平家建の粗末な役場へ來てみると折よく書記がゐて快よく彼を受けつけて吳れた。

書記の云ふところではトラピストの尼院を見ることは中々容易なことではないらしかつた。尤も札幌にゐる時からその話を聞いてゐたので、彼は態々知人に賴んで紹介狀を書いて貰つて來たのだが、その嚴格な天使園の門は官憲の紹介ぐらゐでは中々開きさうもなかつた。去年も內務部長が巡視の折、職權を以つて彼一人だけが漸く內部を見た位で、あとはもう絕對に男禁制とされてゐるといふ。

それを聞くと村瀨は甚だしい失望を覺えたが、秘密になつてゐて近づき得ないとなると猶更見度く、彼は根堀り葉堀り先を煩がらせるほど尼院のことを聞いた。

書記もさすがにその熱心に動かされたと見え、やがて

「ぢやかうしたらいゝでせう。今日は家畜の檢査でこの村の警官が修道院へいつてるですから、それを

見附けだしてお賴みなすつたらいゝでせう。天使園へいつてお聞きなさりやすぐ分ります。と、云ふ。

村瀨はその言葉で稍力を得て、禮もそこそこにとにかく街道へ出て來た。その門口のところへはもう支度の出來た一頭の馬が來て待つてゐたので、彼はそれへ乘つてすぐさまトラピストの尼院の方へ向つた。見れると否とに拘らず彼は外觀だけなりと見やうと思つて慌たゞしい心持になつてゐたのであつた。

道は畑と丘陵の間をうねうねと迂曲しながら漸次とテエブルランドのやうな地形の方へ入つてゆく。一戶一戶づゝとびとびに績いた人家はこれでも人が住んでゐるのかと疑はれるやうな寂しい色に包まれて、それとはうらはらに四邊の綠は天地を燃しつくすやうに生々と萠えたつてゐる。吹く風がごうつとどよみを打つて來る度に、村瀨の乘つた馬は颯々と鬣をなびかせて、勇ましく顏を振りあげながら風に向つて嘶く。西洋鞍のうへに毛布が敷いてあるので、馬に馴れない彼はともするとと桃尻になつて、はらはらしながら逸り立つ馬を制することにばかり氣をとられてゐた。

とある川の岸へ出ると彼はふと自分の行くての高いテエブルランドの上に宏壯な煉瓦づくりの大建築が明るい日光に照らされながら魏然として聳え立つてゐるのを見た。ゴシック風の二層樓で、どうみても寺院らしいその塔頂には金色の十字架がぎらぎら輝いてゐる。

釜のやうな帽子を被つた年老つた馬追ひはその建物を指さして、

「あれが天使園でがす。」と、云ふ。

村瀨はまどろんでゐるやうな蒼空と、燃えたつ綠を背景にしたその建物を見ると、何とも云へないゝ氣持ちになつた。それはまるで西洋から渡つて來た三色版の風景畫をみてゐるやうな趣で、淸く澄ん

だ川の水と云ひ、深く切れこんでゆく地隙の姿といひ、どうみても日本の景色ではないやうに思はれた。今朝綱昇の寢顏をみた時の不愉快の心持ちはさらりと消えて、彼は思はず新らしい空氣を胸一杯に吸ひ込んだ。

馬はどうしたものかそこに架つた小橋は渡らずに、いきなり小石の多い河原へ下りて、獨りでざぶざぶ河を渡つてゆく。膝節までぐらゐの深さなので、白い水沫は矢を射るやうにさつと四邊へ飛び散つていつたが、村瀨にはそんなことまでがひどく嬉れしかつた。

河を渡つてしまうと今度は街道から細徑へ入つて、漸次と落葉松の林のなかを上へ上へと上つてゆく。そこらの傾斜地は見渡すかぎり芽をふいたばかりの落葉松に掩はれてゐて、暖い五月は小さな枝々にまで明るい微笑をみせ、柔らかな葉影を透してくる日光は體の髓までその綠色を流し込むかと思はれる。あんまりその色が美しいので、村瀨は馬上からふつと手を延ばしてその小枝を折りとつてみたが、それにはまるで絹絲でつくつたやうな若芽の毬が零れさうについてゐた。そしてその林が薄くなると又道は平になつたが、そこらはもうテエブルランドの上になつてゐて修道尼達の手で耕される燕麥の畑が毛氈を敷いたやうに青々と傾斜のまゝに波うつてゐる。村瀨はまるで別な世界へ入つて來たことをしみじみ感じたのであつた。

丁度その林がつきるところに白いペンキ塗りの門が立つてゐる。そこから左へ入ると同じく白いペンキ塗りの二階家が續いてゐたが、馬子はそれが舊の天使園だと敎へて吳れた。そこで馬を下りて、牧場のやうな木柵へ馬を繫ぐと、馬子はやがて村瀨を新建ちの寺院の方へ案內していつた。

道は又急な登りになつて、その片側には卯の花のやうな眞白な花が一面に咲き零れてゐる。そしてやつと寺院の前のところまで登つてゆくと、その前庭はだらだらのぼりの傾斜のまゝ芝生になつてゐて、そこでは鳶色の皿帽を被つた脊のひよろ長い歐羅巴人と、碁盤縞の大柄な作業服を着た日本人の老婆とが物音もない眞晝の靜けさのなかで默つて花を植ゑつけてゐる。紫や黄のパンジイなどが柔い芝のうへに束にして置いてあつた。そして彼等がそのそばを通つていつても見返りもしない。

村瀨はそこで馬子を歸してやがて石階をのぼつて大きなゴシック風の玄關の前へ立つた。何だか異様な氣がしてそこの扉をノックするのが氣味が惡かつたが、やつと腹をすゑてこつこつと二聲ほど叩くと、少時たつて大戶はぎいつと左右に開かれて、なかゝら褐色の外套のやうな僧服をつけた日本人の修道士が出て來た。髮は蓬々と額口まで垂れて、恐ろしくゆがんだ口のまわりには髯がむさくろしく生へてゐる。彼は叮嚀に一禮すると、いかにも恭謙な口調で來意を訊ねた。

村瀨はそこの神父ロベール氏に宛てたもう一通の紹介狀を出して、どうか寺をみせて吳れと賴んだ。と、その修道士は又叮寧に頭を下げて、

「どうぞ暫らくお待ち下さい。」と、云つて、足音を寺內の天井に谺させながら奥へ入つていつた。

二度目に出て來た時も同じやうに禮をして、村瀨の顏をあからめもせずにじつと瞻りながら、

「どうかお通り下さい。」と、云ふ。

村瀨は斷はられるかと思つてびくびくしてゐたのが、案外な返事を聞いたのでいそいそしながら上へ上つた。そして案內されるまゝに入口のすぐ横手にある大きな應接室のやうな處へ入つて、そこの椅子

へ腰をかけた。室の周圍には小卓や飾棚があるきりで、壁にかけた石版畫なども簡素を極めたものだつた。

間もなく室の外で人の足音が聞えたかと思ふとやがて入口とは別な方の扉があいて、そこからはもう六十の坂を越えた老神父が福々しい赭ら顔に滿面笑みを含みながら入つて來た。眞白なネルのやうなむくむくした僧服を着て、毛で出來た靴を穿つてゐる。

村瀨は自分の想像してゐたとほりの人格の高さうな神父が出て來たので、ひどく嬉しくなりながら慌てゝ立つて、丁寧に一禮した。そして向ふが口をきらないので、ひよつとしたら英語か佛蘭西語でゞも話さなければならないのかと思ひながら、それとなく頭の中で適當な言葉を探してゐると、やがて神父は如何にも流暢な日本語で、

「貴方、天使園をみに來ましたか？」と、云つて、又笑ひながら先刻出した紹介狀をついと卓子のうへへのせる。

そこへ先刻取次ぎに出て來た修道士が入つて來て、丁度通辯でもするやうな言葉つきで村瀨にいろいろなことを訊ねた。どういふ目的で此處へ來たかとか、或は又トラピストの宗義を知つてゐるかと云ふやうなことを聞いた。

村瀨は極めて無邪氣に信仰といふものからみた世界で一番嚴格な宗派の本山を見に來たのだと答へた。と、その修道士は棚からいろいろな日本語で書かれた小册子を卸して來て、彼にトラピストの宗義を說きだした。

修道士の云ふところでは一度この天使園へ入つたものはもう絶對に男を見ることを許されない。それと同時に尼にされたそのうら若い處女は全く無言の生活に入つて、一週に二度の斷食をして、一生を悉く神に捧げてしまふのである。そして全然外部の世界と絶緣されたこの自然の一角で、神の王國の建設するために態と磽确の地を拓き、それを耕して自ら衣食しなければならない。或時は牛小舍の汗穢に塗れ、或時は畑の土に伏して、無言のまゝ孜々として働かなければならないのである。

修道士がそれを說いてしまうと、神父はやがて起ち上つて、

「尼さんのゐるところは見ることゝ出來ませんが、……」と、云つて、先づ村瀨を案内して彼の居室へ連れていつた。そこには天井に屆くほどの高い本棚に神學の書類やら哲學の書類がぎつしり詰まつてゐて、そのほかには粗末な木製の卓子と椅子と寢臺があるばかりである。神父は本棚のなかゝら二冊の本をだして來て村瀨に示したが、それはいづれも羅典語が書いてあつた、彼には何の本だかも分らなかつた。

神父はそれから地下の牛酪の工場や、厨房や、箱をつくる工場や、さう云つた天使園の生活に關する方面の部屋々々をすつかり案内してくれた。村瀨には牛酪の工房へ入つた時そこで出來る極めて贅澤なバタを取寄せてゐる人名のなかに風月堂と黑田淸輝氏の名が眼についた。いづれ修道尼のひとりが書いたのであらう、小學生のやうなたどたどしい文字でその名が木札に書いて張つてあるのを見ると變な氣がした。

神父はやがて彼を禮拜堂へ導いていつた。そこは東京あたりでも見るやうな舊敎の祭壇のつくりで、圓天井のステインドグラスから射すほの明るい光のなかには樣々の祈禱臺がぼんやり見えてゐる。祭壇

の正面には等身大の何とも云へない美しい彩色をした處女テレジヤの像が飾つてあつて、天を仰いだその横顔には蠟のやうに柔らかく、胸で結んだ手の形と云ひ、腰の工合と云ひ、童貞の純潔さをそのまゝ象徴したものゝやうに見えた。

神父は羅典語で書かれた大きなバイブルをぱたりと開けて、そのなかの二三齣を口吟んだかと思ふと、やがて祭壇の前へいつて膝まづいて長いこと祈禱をあげてゐた。そしてそれが終ると又先刻の笑顏になつて、村瀬にいろいろなことを語つて聞かせた。

村瀬はその時ぼんやりテレジヤの像にみとれてゐた。はじめのうちは

「この神像は何んで出來てゐますか？」などゝ云つて、神父が、

「エナメルです。」と苦々しく答へたりするのを態と追窮したりしてゐたが、そのうちに漸次とその像の純潔さに引き入れられて、唯默つてうつとりとその横顔をみてゐた。

彼の心には昨夜の喜代治や綱昇の振舞ひがまざまざと映つて來る。あれが現實の女かと思ふと、その淡い反感が却つてテレジヤの存在を憧憬させるやうな氣持ちを起させたが、しばらくたつうちに今來がけに見て來た落葉松の林の美しさや、春日の明るさなどが手傳つて、その憧憬は彼の胸に不思議な鄕國の姿を思ひ浮べさせた。何處かで頌榮樂のやうな空想的な音樂が空耳に響いてくる。

彼は思はず

「童貞の純潔さ。」と、口馴れない佛蘭西語で云ひながら、あのテレジヤの唇に接吻したらと胸を躍かしたりした。

神父には小聲で呟いたその言葉が分つたかして、さも我が意を得たやうに微笑んでゐた。
禮拜堂のすぐ隣りは説教堂だつた。そこが又極めて不思議な構造になつてゐた。説教壇は壁に向つて置かれてゐて、その壁に穿たれた窓から隣りの室へ聲が通るやうになつてゐる。たとへ神父でも男となると姿を見せることが出來ないので、その窓には嚴重な鐵の格子が打つてあつて、その間には黑い布が張りつめてある。村瀨はそれをみると浮世の事物に對してはまるで盲者と同じやうな修道尼の生活がその窓ひとつによつて象徵されてゐるやうに思はれた。
そこの壁には丁度廻燈籠のやうな圓筒形の棚が半面だけ壁の面に突き出てゐるので、村瀨はそれを訝しがつて訊くと、神父はその棚へ手をかけてぐるぐる廻してみせた。それは隣りの室にゐる修道尼へ日用品を供給する唯一の口で、出す人も受取る人もその姿をみないやうに態々こんな構造になつてゐるのであつた。
村瀨は稍呆れて薄笑ひをしてゐると、神父は今度は窓の傍へ彼を連れていつて空の一方を指しながら、
「尼さん達はあすこにゐます。」と、云つた。
とみるとそこには高い高い煉瓦塀で劃りがしてあつて、その上に尼の住む別棟の建物が屋根だけ見えてゐる。
「私でもあすこへ行くことはとても出來ません。」神父は首を振りながら云つて、そこに住む修道尼院の院主たる尼さんとも電話で話をするだけだと說明して聞かせた。

村瀬はそれを見ると世の中にこんな生活があるかとつく〴〵感心して、世界で一番嚴格な宗教だと云ふと、神父はにこ〳〵笑ひながら頭を振つて、

「いゝえ、それ違ひます。トラピストの信仰は唯生活の形式です。この天使園にゐる修道尼は自分といふものを少しも抑へることありません。皆神樣のお膝の下で喜んでその日の勞働をしてゐます。心の一から云ふと世界で一番自由な宗派です。」と云ふ。

村瀬にはその言葉がひどく暗示的に聞えたが、その時ふと耳をたてるとその煉瓦塀の向ふでは白晝の靜けさのなかで飛雀が長閑に高鳴きをしてゐる。

ひとわたり見終ると又先刻の應接室へ歸つて來て、そこで神父と對向ひに坐りながらさま〴〵の話を聞いた。そこへ先刻村役場で聞いた警察官やら牧夫やらが家畜の檢査を了へてどや〳〵と入つて來たので、寺内の靜寂はしばしの間散々に破られた。

村瀬は餘程それをしほに歸らうかと思つたが、何となく去るに忍びないやうな氣がしたので一時間ばかり待つて檢査の人達が歸つてしまうと、又神父と對坐した。

神父はこの天使園へ入つて生活の激變のために遁走する尼の話をしだして、二度までは歸ることを許すが三度目にはもう斷じて天使園の門をくゝらせないと云つた。そして丁度高野の苅萱道心のやうな話に似た話を聞かせて呉れたが、それは村瀬にも身にしみて聞かれた。そして西班牙にあるといふ大本山の寫眞を見せてくれたり、殉教者の話をしてくれたりしてゐるうちに、ふと扉があくとそこからは先刻の修道士が自分で作つたらしい晩餐を運んで來た。

も

村瀨は吃驚して起ち上つたが、神父はそれを抑へて是非食べていけといふ。卓子のうへにはやがてパンと、今畑から掘つて來たばかりといふやうな馬鈴薯のフライ、小牛の煮たの、さういつた料理が簡素な皿に盛られて並べられた。いづれも頗る味がよくて村瀨はすゝめられるまゝに少しづゝフォークを取り上げて食べてゐたが、そのうちに神父はなんと思つたか寺で出來るオプスと云ふ麥酒とブランデイとを棚から下ろして來て彼にすゝめた。

村瀨にはこの不思議な晩餐が後まで忘れられなかつた。ふと窓から見るともうそろ〳〵日が暮れかゝつて來たので村瀨は神父に厚く禮をいつて立ち上つた。その最後の光が今落葉松の林に掩はれた傾斜地の起伏を何とも云へない美しい色に染めてゐる。風も今はすつかり吹き落ちて、天地の間を包む平安な眞紅な盃のやうな落日は太平洋の彼方に沈みかゝつて、遠くの空を飛んでゆく鳥の姿もシベリヤの曠野へ歸濛氣は北國の春の黃昏を何處か大陸らしく見せて、つてゆくのでないかと思はれる。

神父は思はず、

「おゝ、美しい落日。」と、母なる國の言葉で呟いたが、村瀨はその時、敎のためにこんな遠い異國へ渡つてから十六年にもなるといふこの神父の寂しい生涯を思ひ、それからまた天使園に封じられてゐる內地から來たうら若い二十幾人の修道尼のうへを思つた。その修道尼も多くは東京の天主敎會から選拔されて來ると聞かされてゐたので、彼はまだ學校へ通つてゐる時分、よく天主敎會へ日曜の祈禱をしにゆく下髮の美しい娘に出逢つたことなどを思ひ起して、さうした修道尼達が今あの窓からこの落日の美しさ

そ眺めながらどんな思ひに落ちてゐるであらうなどゝ思ひやられて、そゞろに涙ぐましい心持になつた。一生無言で、男をみぬ生活、そんな生活が若い女に望まれるだらうかと彼はしみ〴〵考へずにはゐられなかつた。

玄關のところで神父と修道士に別れを告げて天使園を出ると、落葉松の林にはもう宵闇が淡く罩めて草いきれがむんむとするほどそこらに湧きたつてゐた。

村瀬は夕陽に彩られる尖塔のうへの十字架を見返りながら人ッ子ひとり通らぬ街道をとぼとぼ歩いていつた。

一度湯の川の宿へ歸つて、そこを引拂つて電車で函館へ歸つて來たのはもう夜に入つてからであつた。

降るやうな星明りに透してみえる臥牛山の姿や、町の燈影は薄寒く凍てついて、その晩は風が吹止んだので眼に映るものはすべて冬の夜の感じを持つてゐた。

村瀬は昨夜のところで電車を降りるとしばらくの間町をぶらつきながら扨てどうしようかと思ひあぐねた。寄席へいくと堅い約束はしたものゝ、なんだかその時の氣持ちでは綱之助や綱昇と逢ふのか厭でならなかつたが、外に夜を過すいゝ思案も浮ばないので、彼は一度公園から谷地頭の方まで行つてみたあとで又昨夜の寄席の前へ立つた。

その晩も不入りだと見えて、表がゝりには幟だけがはたはたと寂しく搖れてゐる。村瀬は耐らなく寂しい心持ちになりながら兎に角木戸を拂つて入ると、彼がいの一番だと見えて、昨夜の木戸番の親爺は「被來い。」と、云ひながら天照大神の札をくれた。そして奥へ向つて、

「おい、お客様だぜ。」と、云ふと、茶場からは若い衆が出て來て、布團を敷くよりも何よりもまだ燈さへついてゐない席へマッチを摺りながら瓦斯をともして歩く。

村瀬はこそりとも三味線の音がしないので少時たつと不思議になつて、便所へ通ふ樣な風をして、そつと樂屋を覗き込んでみた。と、そこの薄闇のなかには綱之助も、綱昇も、それから一座の藝人達と見えていづれも見すぼらしい姿をした女達が五人ばかりごちやごちや固まつて火鉢の傍へ坐つてゐる。何ごとが起つてゐるのか彼等は平常の饒舌にも似合はずふつつりと口を噤んで、さも腑がぬけたやうに肩で息をしながら悄れかへつてゐる。

ふと聞耳をたてると、高座の陰になつてゐて見えないが、なんでもそこには二三人の男がゐるらしく、小聲ではあるが、強い喧嘩腰な聲で何やら頻りにくどくど云ひ合ひをしてゐる。どうみてもそれは借金の催促らしく聞えた。

少時の間そこに立ち竦んで聞いてゐるうちに綱昇は何かのきつかけに村瀬の姿を見つけ出したと見えて、やがていそいそしながら立つて來た。そして高座の陰でそれとなく樂屋の樣子を窺つてゐたが我慢が出來ないやうについゝ彼の方へ走り寄つて來て、いきなり彼を觀客席の方へ引張つて來ながら。

「さきほどは。」と、挨拶するが早いか、「なあ、村瀬はん、えらいことになりましたの。今席亭はんやら、

太夫元はんやらが來て、私らこれからきつい目に逢はんならんのだつせ。」と、云つたが、その時には涙がひかつてゐる。

村瀬はさすがに氣にかゝるので、

「どうしたんな？」と、息をつめて聞いた。

「あの、今夜の入りがおまへんよつて、もう席を明け渡して呉れ云はゝるのだつせ。ほてな、今夜のうちにお金を揃へて返さんなら、私らの躰を賣つても取つて見せる云ふて、きつうきつうほたえてゐるだつせ。私もうどないにせう。」綱昇はさう云ひながらしくしく泣き出してしまつた。

村瀬はどうするとも出來ないので、蒼白い瓦斯の光のなかに浮いて見える綱昇の襟脚のところをじつと見ながら默つてゐた。

と、今度は樂屋口の方から

「お糸、糸やん。」と、云ふ綱之助の聲がして、やがてそこからは綱之助が精も根もつき果てたやうな顔をしながらつい出て來たが、そこに村瀬が立つてゐるのを見るとこれもひどく嬉しさうな顔をしながら、

「お、お歸り。」と、挨拶して、「あの丁度えゝ時に歸つとくれやした。あんたはんを使ふては濟んまへんけど、どうぞ私らを助けると思ふて、力をかしとくんなはんか。」と、云ひながら彼女はいきなり村瀬の耳へ口を寄せて、「あの今席の惡が來て私らをゆすつて叶ひまへんさかい、どうぞあんたはん濟んまへんけど、お座敷や云ふて娘を出しますさかい、とにかくこのお糸を何處ぞへ連れつておくれやすな、ほて、

私にもお座敷をかけるやうにして、あとで樂屋へあんたはんのおいでやした先からちよつと報らしとくれやす。ほたら私もすぐにぬけていきますさかい。いづれ詳しいことは逢ふて話しますわ。」と、云つたかと思ふと、やがて彼女は綱昇を連れてもう一度樂屋の方へ入つていつてしまつた。

樂屋ではひとしきり火のつくやうな論判が初まつたが、その聲が少し低くゝなるとやがてそこからは綱昇がしくしく泣きながら出て來た。そして早く早くと急き立てるので、村瀬は何が何だか分らなくなつて、そのまゝ大急ぎで寄席を出てしまつた。

電車通りへ出ると綱昇は急に村瀬の手を握つて、

「なあ、村瀬はん、どうぞ一生の頼みだすよつて、さつきお母はんが云はゝつたやうにしとくれやす。さうせんとお母はんがきつい目に逢はゝりますさかい、……」と、泣き聲を立てゝ云ふ。

村瀬は何が起つてゐるのだかさつぱり分らなかつたが、泣き聲をたてるので仕樣がなくなつて、兎に角そこから四五丁ばかりも離れた町にあるとある穢い牛肉屋へ入つた。そしてそこの二階座敷の狹い間があいてゐたので、ひとまづそこへ腰を落ちつけた。

綱昇は坐がきまるとすぐに

「ほんなら此處からや云ふて、お母はんにさう云ふてもよろしいなあ。」と、云つて、そはそは立つていつたが、やがて歸つて來て、

「今この家の若い人に寄席へいてもらひました。」と、云つて漸う餉臺の前へ坐つた。その樣子はもう母親のことが氣になつて氣にならないといふ風だつた。

ぐつぐつ煮える肉鍋を前に置いてちびちび飲んでゐると、半時ばかりたつて、廊下の方で、
「お連れさま。」と、云ふ聲がしたが、それと一緒に綱之助が、
「はゝあ、えらいこつちや。」と、云ひながら息せき飛び込んで來た。と、みると彼女の蟀谷のところが紅く膨れあがつてゐる。
綱昇は何よりも先にそれを見咎めて、
「ま、お母はん、そこはどうしたんえ？」と、訊いたが、綱之助は急に涙ぐんで、痛さうにそこを押へながら、慄へ聲で、
「きついめに打たれた。」と答へる。
漸次と事情を聞いてみると、その晩の出來事はかうであつた。席亭の弟といふのが此の邊きつての博徒で、それがもう綱之助の一座が此の土地へ來てすぐから綱昇に思ひを寄せてゐて、彼女も涙ながらに身を任せたことも二度や三度ではなかつたが、それが今ではもう意地になつて、一座が明日のことにも困るやうな窮境に落ちてゐるのを幸ひに綱昇を喰ひものにしようとかゝつてゐるのであつた。なにかといふと追錢のことを云ひだしては無理をとほす。もし云ふなりになつてゐないと、綱之助が書いた證文を楯に警察へ突き出すと嚇す。
丁度そのさなかに昨夜ひと晩綱昇が宿をあけたので、それが端なくもその席亭の弟の嫉妬の的になつて、今夜の難題となつたのであつた。そして綱昇が坐をぬいたのを知ると彼等の仲間は綱之助を踏んだり蹴たりした揚句連れ出した男を捕へて打つの撲るのと云つて今しがた村瀬達のあとを追つて寄席を出

たといふ。

村瀬はその話をきくと相手が博徒と聞いたゞけでも餘り快い氣持ちはしなかつた。で、綱之助に此處の家を知つてゐるだらうかと訊くと、彼女はあやふやな聲で、

「さあ、多分分らしまへんやろとは思ひまつけど、……」と云つて、「ほんまにこないなことにならうとは思はなんださかい、あんたはんにまできつい御迷惑をかけまして……」

綱昇は袖で顏を掩つて聲をたてゝ泣いてゐた。

村瀬はどうにも仕樣がないので、ひとつには自分の身にふりかゝる後難を恐れながら、

「兎に角、そんな人間がゐちやうかうかしてゐられないが、一體お前さん達はどうするつもりなんだい？」と、訊いてみた。

と、綱之助は悄れきつた聲で、

「どうて別に仕樣もおへんなあ。もうどないにしたかてえらい目に逢はんならんのだすよつて、一座のものは可哀さうにおまつけど、私ら生命が惜しおすよつて、親娘ふたりで逃げてしまうより外はありまへんやろ。」と、涙を拭きながら云つたが、その裏にはどうかなることならこのまゝ二人を連れて逃げて呉れと云ふ哀願の意味が含まれてゐた。

と、そこへ店口の方から二三人の人聲がかすかと聞えて來た。それを聞くと綱之助はさつと眼の色を變へて、

「ほッ來やはつた。」と、云ふ。

村瀬は悸平として起ち上りながら、何の考へもなく財布のなかゝら五圓紙幣を一枚とりだして、

「これで勘定を、……。」と、云つたか思ふと、すぐに又、「兎に角私は明日の十一時の汽車でたつから、もしなんだつたら棧橋へ來て呉れよ、……」と云つたつきり、廊下とは反對の方の障子をあけて縁先へ出た。そして

「ちよつと待つて、……」と、云つて網昇が追ひすがるのを、

「明日棧橋で、……」と云ひながら振切つてそこから便所へ通ふ暗い階段を下りてしまつた。

表階段の方ではどうせ此處邊も荒らして歩く連中と見え、女達の空世辭に導かれながらその二三人の連れは二階座敷の方へ上つてゆく。それと引違へに村瀬は店口へ出て、そゝくさ下足をとつて、怪訝な顔をしてゐる下足番に突當つたりしながら慌てゝ戸外へ飛び出してしまつた。

何處をどう歩いたかまるで分らない。しばらくの間急足に歩いてゐるうちにふと氣づくと彼はいつの間にか見覺えのある停車場の前へ來てゐた。ひよつとかしてその博徒の連中が追驅けてゞも來やしないかと思つて彼は足音がする度に幾度か後を振顧つたりした。そしてこれからどうしようと思ふと、彼はそこからなら月の家へいく道の當てはつくので、もう一度あそこへでもいつて喜代治でもよんで氣を紛らかさうかとも思つたが、さすがに不安な氣がしてそれをする元氣もないやうに思へた。

空に明滅するの星の色をみると、村瀬の胸には旅へ出てゐるのだといふ寂しい思ひがその時はじめて痛切に湧き起つて來た。

彼はそれから一時間ばかりたつと、驛に預けて置いた荷物を赤帽にとらせて、逃げるやうに棧橋を渡

つて、そこへ來て横づけになつてゐる連絡船へ乘つてしまつた。そして船に乘ると又一層臆病になつて、すぐさま一等の寢臺をとらせ、鞄のなかゝらウヰスヰの壜を取り出してぐつと一呷り呷つたあとで、そのまゝ着換へもせずに厚い毛布のなかへ藻繰り込んでしまつた。

十一時になると連絡船は錨を卷いて、出帆の用意をしだした。

村瀨は舷側にどよめく鐵鎖の音でふと現から醒めて、やがてもじもじしながら甲板へ出ていつた。その時にはもう船は棧橋から四五十間も離れてゐて、方向を轉換すると同時に今にも沖へ向つて馳り出さうとしてゐるところであつた。

アーク燈の點つた棧橋を見ると、村瀨は今にも綱昇が白い脛もあらはに着物の裾を踏みしだきながらそこへ立現れて、

「村瀨はあん、村瀨はあん。……」と、呼びさうな氣がしたが、それも一片の妄想に過ぎなくて、そこには巡査や、鐵道員や、郵便局員などが角燈をちろちろさせながら突立つてゐるきりだつた。

船は漸次と速力を增してゆく。

函館の町は海上から見るともうその時は數限りもない燈影の群れになつて、海岸から臥牛山の中腹までまるで光の斷層をつくつてゐるやうに幾筋となくその縞が點々と描き出されてゐる。內港へ來て繫つてゐる帆船の檣はいづれも眞蒼な碇泊燈を螢のやうに明滅せて、漸次と遠のいてゆく光の底からは胸を

絞るやうな悲しみが湧き上つて來る。

暗い山影、暗い海、そしてそのなかに心細げに浮き上つてゐる町の燈影もそのうちにひとつひとつ消え去つて、何處からともなく、追分節の綿々たる悲調が餘韻を長くながくひきながら聞えて來るやうな氣がする。

村瀨はその時心の底から喜代治を思ひ、綱昇を思ひ、綱之助を思つてゐた。明日の十一時と約束をしたからには、今頃あの綱之助はその果敢ない光明のために、どんなにかこのひと夜が明けるのを待ち焦れてゐることであらう。今自分が暗い海を渡つて内地の方へ歸つて行くとはつゆ知らずに、綱昇は明日の日を待ちながらどんなに切ない思ひで恐ろしい博徒達の苛責を耐え忍んでゐることであらう。そして一度逢つて、もう永久に逢ふことのない喜代治はと思ふと、村瀨の眼にはふと譯の分らぬ淚が流れ落ちて來た。

函館の町はいつの間にかもう岬角の彼方に隱れ去つてしまつた。眼界は唯みる爛干たる星影と、舷に碎ける眞白な波浪の水沫ばかりになつてしまつた。その時、村瀨は頭上に輝く紫色の星の光のなかにその日の晝間トラピストの修道尼院で見たあの處女テレジヤの美しい姿が幻になつて浮んで來るのをまざ〳〵と見た。

東京へ歸つてから後も村瀨は綱之助や綱昇のことを思ひ出すと心から可哀想になつて、どうかして大

阪へ歸してやり度さに二度ばかり手紙で樣子を問いてやつたが、その手紙はいつも方々の附箋がついて空しく戻つて來た。そしてその後は杳として消息も知れなかつたが、今頃はあの憐れな親娘の者は何處の世界を漂泊してゐることであらう、村瀨はそれを思ふといつでも港の哀歌を思ひ出さずにはゐられないのであつた。(をはり)

中央公論大賣捌所

○定價 金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅 は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替 にて御送金の場合は指定を本鄉區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一振替貯金 口座は東京三十四番なり

一郵券代用 必ず一割增の事

一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

　一金一圓迄 金六錢（集金委託料及送料共）
　一金五圓迄 金七錢

一受領證請求 は必ず返信料を要す

大正五年五月廿八日印刷納本
大正五年六月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 高木西三

發行所 東京市本鄉區駒込西片町十番地 中央公論社
電話(長)下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6.80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可